明治卅三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）
明治四十五年一月廿三日印刷納本
（毎月一回廿三日印刷納本）

二月一日發行

女學世界

第十二巻
第三號



博文館


平尾賛平
東京 大阪
クレームレート
クレームレート

女學世界第十二巻第三號二月號目次

美人中の美人
化粧界の白眉
たる
大學白粉と
大學化粧水とを用ひて
益々其美を發揮せんとす



女(いの一)

○造花材料營業目錄御入用の方は左下方の切取に郵券二錢を添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

造花材料書籍

科目

造花器具及材料。造花及半製品。摘細工材料。袋物材料。刺繍材料。造果材料。瓶細工材料。

實用造花自在　正價一圓廿錢　郵税八錢

實用造花圖譜　正價一圓　郵税六錢

造花自在は造花の秘術を説き盡す造花術秘密の鍵にして造花圖譜は七十一花種の瓣、葉、蕚等の切形に一々鮮麗なる石版數度刷の着色を施したるを以て斯技に就事する者必携の好著なり

○書籍内容見本御入用の方は左下方の切取に郵券二錢を相添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

東京九段坂　吉住商店

特長電話番町二〇五六番

振替東京六六七九番

切取り線

二月號

中村高等女學校長　戸野みちゑ女史

元華族女學校講師　近藤正一君　共著

實用女子作文全書

女子をして容易に文章を起稿し且つ作文に嫺熟せしめん爲に編述せるものにして文の組立方、修辭着想等作文上の大法は勿論記事、紀行、日記、叙情、弔祭、祝辭、書簡等諸種の文章には一々文例を擧げて其作法を懇切に記述し又作文の資料として美辭、類句、用語等を四季若くは題目に分つて列記し更に進で家庭に必要なる公用文の認め方をも示し苟も女子に必要なる文章上のことは之を盡したれば女子座右の寶典として女學生は勿論家庭に於て一日も缺くべからざる必要の書籍なり

和裝菊判美本

紙數四百五十餘頁

正價六十五錢

郵税十錢

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇

女(いの二)

「ヤー日本へ來て驚いたのは洋食の進歩ですな從て洋食器具の總てが完全に揃ふて居るにも驚きました——

——貴方様もこちらへ入らつしやいまして是れから世帶をお持ちになるには直様器具類が必要でせうが日本での輸入元祖が銀座の松喜屋で、どんな種類でも一切揃つて不自由する様な事は決してありません殊に品が好くつて價も驚く程安う御座い升」



西洋食器具食卓用品銀器陶器硝子器直輸入御小賣商

松喜屋商店

東京市京橋區銀座壹丁目六番地
電話新橋二〇九番(電略マツキ)
振替貯金口座東京一二九一〇番

裝飾兼用(又多數御求めの御方様には特に割引可致候)
金廿貳圓、金貳拾圓、金拾六圓



石油煖爐(カタログ御入用の御方様には御申越次第贈呈可致候)

女(いの三)



女（いの四）

姉妹



山本升雲筆

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより(隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進)して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て(有効簡便に使用する適當の婦人藥)なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を遂するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮内膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は(直に輕快全癒する驚くべき卓効)ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚ほ梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

定價

八球入五拾錢
拾八球入壹圓〇〇
四拾球入二圓〇〇
特製百拾個入五圓
〇内地遞送無料

東京市本郷區湯島天神町一丁目五十三番地

唯一丸發行所　中西葆光堂藥局

振替貯金東京口座 千五百番）電話 下谷五四七番）

◎全國至る所の有名なる藥店にて販賣す

女(ろの 一)

千代田香油

（嬉しいこと）

美ちやんの‥赤い毛も
花ちやんの‥縮れ毛も
芳ちやんの‥脱毛も頭垢も
皆美しくなりました、
之れ全く千代田香油の
賜と喜んで居ります。

定價
七十銭
三十五銭
二十五銭
十、七銭



英國製スワン石鹸日本一手發賣元

本舗 東京日本橋區 馬喰町四丁目 山岸三之助

振替口座東京二〇五〇〇番　電話浪花三九七三番

英國製 スワン浮石鹸

如何に寒さが
烈しくも決し
て肌の荒るゝ
ことなく少な
く使ふて泡立
ちの心地よさ
偽物ありスワ
ン鳥に御注意
を希ふ

家庭用

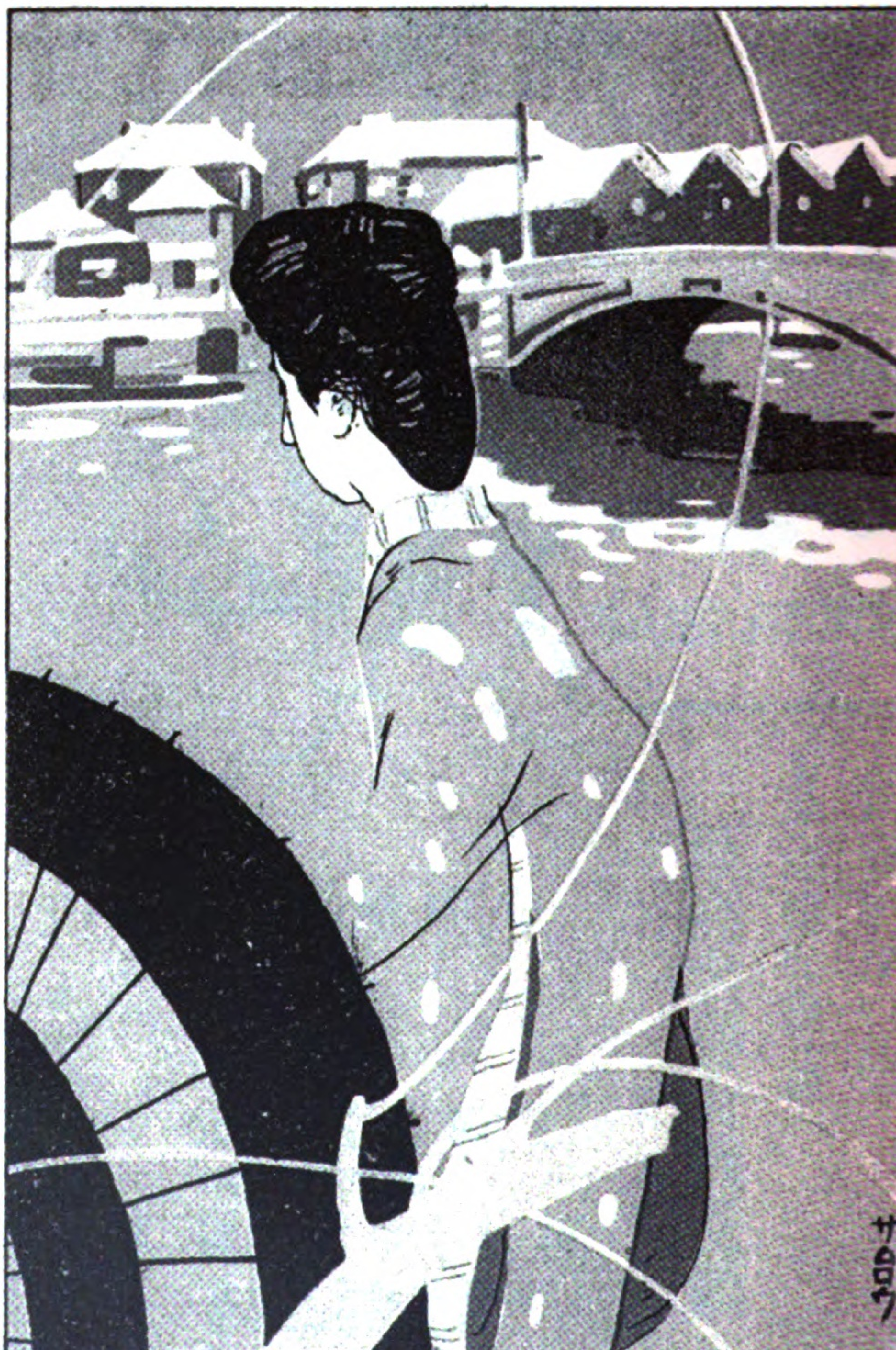


千代田香油本舗
山岸三之助

價安くて泡立ちよく高評なり

女（ろの四）

雪晴れ



太田三郎筆



日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領

宮内省御用達

醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番
振替口座五〇二一一番

女(はの一)

は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢出し生毛に關する諸説を參考し有力薬を配合したる世界無比の學理的最良薬なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣薬品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸、昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、まゆげ、ひげ、其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めナケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合薬價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●●

・取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ・醫師は癩病者を診察せば届出る規則なれど薬劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール 一ヶ月分 貳圓
複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

らい病

此らい病薬は有名なる癩病治療薬を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力薬なれば一度其効験の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣薬に非す

三河國碧海郡刈谷町
振替口座東京貳參壹壹
電話 刈谷參拾貳番
本舗 醫科大學卒業薬劑士 從七位勲六等 中島亀之丞鑑製

見よ● 月經なき女子● 病める婦人

△勿驚……薬力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主薬は最新唯一の通經薬にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良薬なり二三月の月經閉止り月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞賛良薬

改良 女月丸

薬價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

肥滿病新薬

（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見薬にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顔赤●にきび●ふき出物多き人等輕症一二劑如何程の悪性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て美顔窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸嬢姉の福音



薬價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓半 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

女（はの二）

羽仁もと子主筆

婦人之友

二月號（一日發行）一冊十八錢（郵稅一錢五厘）半年分前金郵稅共一圓八錢 一年分前金郵稅共二圓十錢

◎**幸福論**……羽仁もと子

神を無視する人、人を無視する人

◎**美貌と運命**……文學博士 三宅雪嶺

▲美人は何故に薄命なるか▲美貌の要素▲美貌の勢力▲英國皇太后と女優サラベルナル▲絶世の美人とは如何なるものか▲ゼヨセフキンとナポレオン三世の皇后ユーゼニー▲美貌の濫用▲下田歌子と美貌

◎**中流の生活問題**……

▲中等社會の教育は如何にすべきか▲娘一人を嫁けるに何程の費用を要するか▲如何にして衣服費を節減すべきか▲十年前の物價と今日の物價比較表▲最經濟的なる交際法

◎**下婢の躾け方**（二）仲働と御飯焚きの雇入れ方……加藤常子

◎**子供の頭をよくする育て方**……羽仁もと子

◎**死に臨んで我子に遺したる若き母親の手紙**

◎**忠婢の誠心、主人の放蕩を感化したる話**

東京市小石川雑司ヶ谷町 婦人之友社 電話番町三六九八 振替東京壹壹六〇〇

女（は の三）


二月一日より
雛人形陳列會
開催
(イ) 二十金白金 色繪 日の出に梅 金十三圓
(ロ) 二十二金 らん菊彫刻 金十二圓
東京京橋 南傳馬町
大西白牡丹
電話京橋三十番三十一番
振替口座東京九二九三番
(ト) 九金女夫形 人造ダイヤ及 眞珠入 金三圓五十錢
(チ) 九金製 人造眞珠入 金三圓
(ハ) 二十二金 眞珠入 竹の圖 金九圓二十錢
(ニ) 二十金白金 色繪 かむろ菊 金九圓
(リ) 九金製 人造ダイヤ 二個入 金三圓八十錢
(ヌ) 九金製 人造ダイヤ 九個入 金四圓五十錢
(ホ) 二十二金 ルビー入 枝櫻 金十二圓
(ヘ) 十八金青金 色繪 立田川の圖 金七圓五十錢
(ル) 九金女夫櫻 人造ダイヤ及 ルビー入 金四圓
(ヲ) 九金製 人造ダイヤ入 金二圓八十錢
營業案内は御申越次第送呈

女(はの圖)

花とつゝじ



御婦人の寶

寒中御婦人方の最大必要品は安全帶です

ナゼなれば皆様が最も危險を感ぜらる丶今日此頃の月經時に下らぬ物を御使用になり升と腰冷えの爲め子宮をお傷めになる事がマ、あり升、然るに安全帶と安全衣を御使用になれば第一に腰部を暖めて冷える事がありませぬ故極めて衛生的で前陳の如き危險の憂もなく又心地よき事此上もありませぬ、(御使用者より禮狀山の如し)



本舖　安全堂
東京市下谷區池之端七軒町四十二番地

關西一手販賣　洋々堂分堂
大阪西區阿波座上通一ノ二三角

定價
(安全帶……●甲一筋壹圓貳拾錢、●乙八拾錢、並五拾錢　一筋ニテ四五年使用出來升
安全衣は一打入一箱金四拾錢
小包料一組(帶、衣共)金十二錢、一組を増す毎に二錢を増す

天下一品にきび取藥



本液はニキビ吹出物ソバカスに向つて防腐させ殺菌させ收斂させ且つ脂肪を溶解さすれば一二日にして皮膚と藥液とを調和ならしめ三四日目より漸次藥力を現し七日乃至十二日にて跡形なく全くキレー艶美白色と成る事確實なり試み玉へ

▲試用廿錢▲卅五錢▲送料各六錢
▲壹圓▲貳圓▲送各八錢　郵券一割増

日本橋區新和泉町六番地
(振替九八二二番)
長江校商店

醫學士古川榮校閲、藥學得業士金澤巖著

肺病の强敵

本書は著者自ら肺結核に苦しみ百方療養の結果全快したる實驗に基き最新の學理を參照し完全なる自宅療法を詳記したる物郵劵二錢封入申込者に無代送本すべし

●東京市下谷區上根岸町　衛生書院●

▽博文館圖書陳列所 館内にあり▽

女(にの二)

婦人画報

二月一日發行　二月卷　一冊廿五錢　郵税二錢五厘　三冊八十錢　六冊一圓五十三錢　十二冊三圓二十九錢四

讀物

◉新らしき婦人……浮田博士
◉家庭を快樂ならしめよ……添田博士
◉婦人の服裝……幸田露伴　田代博士　吉田熊次　梶田半古
◉男と女とどちらが偉いか……榊博士
◉現代婦人の心……下田次郎
◉育兒衞生二月の卷……加藤博士
◉花嫁の家政のとりかた……高島平三郎
◉こつくりさんとフランセット……久保良英

▼誤られた私の境遇……江木榮子
◉お產の難易と心掛……岩崎產婆
▼最經濟的な生活法……井上秀子
◉古今名媛逸話……いれ子
▼皇后陛下の御歌
◉梨本宮妃殿下の御事……黃雲女
▼母親の顧問
◉古今の女歌人……佐々木博士
▼春の衣裝……なんな
◉この頃のお惣菜……吉村里子
▼子供のしだばき……吉田しづ

附錄 おとづれ

高村眞夫氏筆油繪

畫報

▼東伏見宮妃殿下御台臨
▼二十年前の各宮殿下
▼名流婦人の新年會
▼山階宮安子女王殿下
▼寄宿舍にかへりて
▼諸婦人會の新年會
▼名流婦人の機織り

◉半田松堂氏と婦人の日常
◉諸名家の令孃かゞみ
◉女學校の始業式
◉光榮ある百五歲の老媼
◉中山彩畝女史と其書
◉婦人の氷すべり
◉新年のまないた開き
◉花の如き新嫁花婿
◉奥平伯と杉浦氏の家庭
◉馬屋原氏の夫人と庭園
◉婦人の武術◉若夫人鑑
◉愛らしき令孃の稚子姿

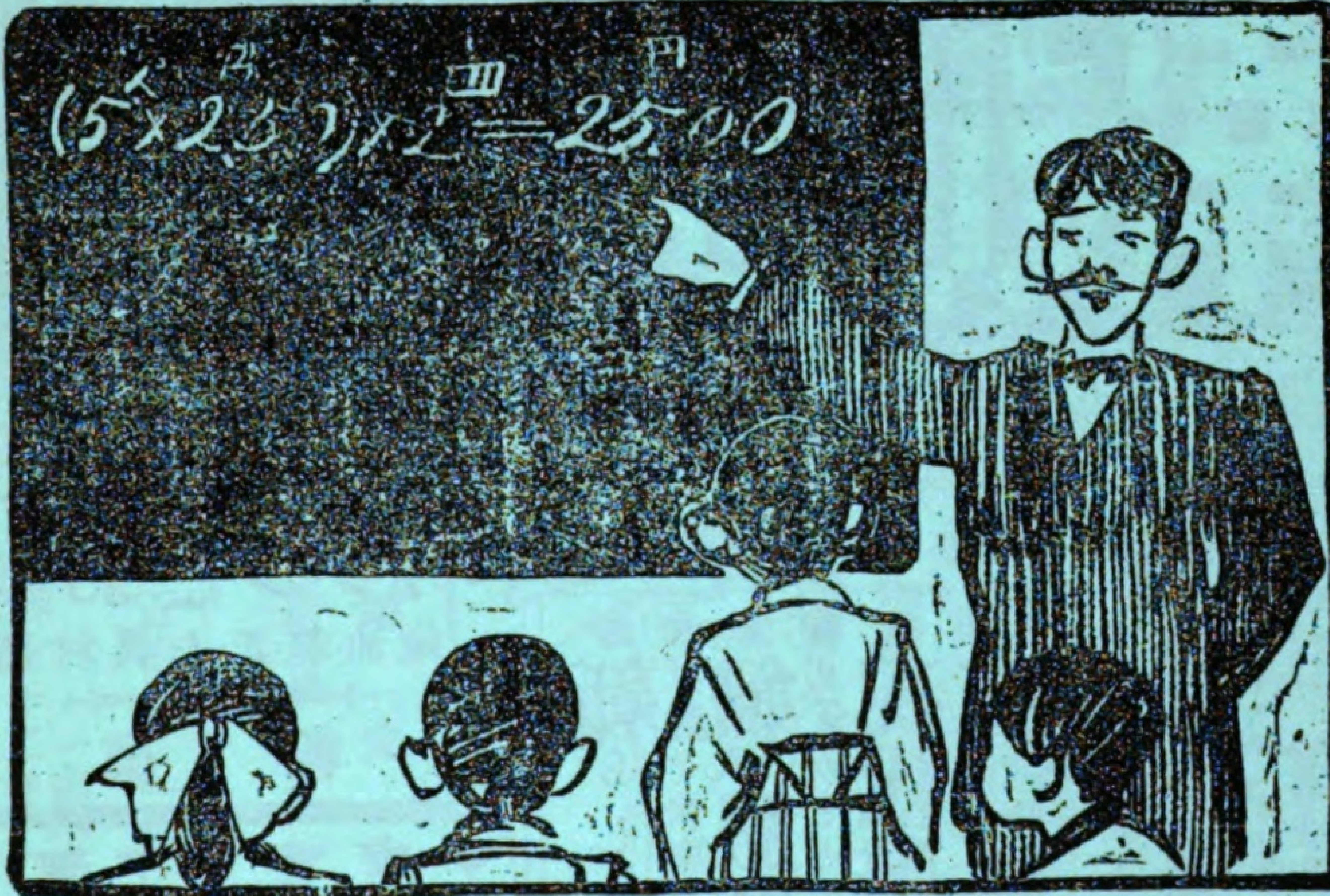
臨時増刊 新家庭號

一月十五日　價卅二錢　郵税三錢

花の如き寫眞百有餘 記事いづれも新家庭の重要適當のもの眞に花嫁及び令嬢の好伴侶

東京麹町區飯田町四町四ノ四　東京社　振替東京壹壹八壹八　（全國書店に販賣す）

女(二の三)



珍案算術問題

●家族五人あり芝居に行くに一人二圓五十錢宛を要す一ヶ月二回行くには何圓を要するか

答二十五圓

サア此二十五圓あれば銀座一丁目の日本蓄音器商會で美麗なる蓄音器が一臺買へる、芝居は二度限りだが此方は永久に樂しまれる

下の切取線より切つて銀座の本店又は全國百有餘の支店、出張所代理店に目錄を請求せられよ無代進呈す

ニツポノホン　二十五圓以上
ユーホン　三十圓
ニツポノラ　六十圓
新音譜種々あり一枚一圓以上

切取り線

目錄進呈券
（女學世界扱）

くちなしの實



武田壽筆

春の雪



本多穆堂筆

最見易き琴の譜本

井上胡蝶著

生田流 箏曲新譜

三版卷一定價壹圓參拾錢送料六錢 卷貳卷三定價各金壹圓拾錢宛送料各金六錢 代金引換各金拾六錢增

曲譜目次

卷壹（四季の花 門松 鶴の聲 黑髮 六段 亂 八段 金剛 石 夕顏 新高砂 越後獅子 千鳥 茶音度 春の曲 小督の曲）

卷貳（春日影 朝外出 六段 前歌 難波獅子 末の契 松竹梅 殘月 秋風 八重衣 飛燕の曲）

卷三（松盡 萬歲 八千代獅子 雪 九段 巖上の松 新雪 月花 凱旋喇叭の曲 四季の詠め 夏の曲 秋の曲）

生田流 山田流 新譜 箏曲之栞 第一輯

定價金壹圓送料六錢 代金引換十六錢增

曲譜（松ことぶき 春雨 六段 七草 瀧盡し 御製の曲 水は器 千鳥 菊水 那須野 御國の譽 外練習用四曲）

山田流譜本

江の島	定價三十五錢
櫻狩	同四十錢
住吉	同三十五錢
那須野	同四十錢
菊水	同三十錢

送料各貳錢宛何れも說明附の頗る美本にして誰にても彈じ得らるべき新譜なり他の曲譜も每月續々出版すべし

本書の特色と購求者の便利

一 以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他彈琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一 此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあればり音符を知らぬ人も之に依りて彈奏を試みる事を得べく自然の間に完全なる樂則を覺え給ふに至るべし

一 本書の購求者は曲中の不詳は勿論假令以上四冊の內一冊丈け求められたる人も他の三冊にある曲譜の不詳又は忘れられたる個所は委しく照會あれば敎授すべし但し返信料の外無料とす

苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて歎かせ給ふことと勿れ本書は是等の人々に多大の滿足を與へ得べしと信ずればなり

發行所 福岡縣福岡市外馬出 電車通一一〇三番地 箏曲通信敎授所

次（ほの一）

●學生の福音!!!

●本會の新式記憶術は心理應用精妙無限の新案にして、一度び本術を習得すれば數十百個の事物にても單に一回の見聞を以て直ちに之を記憶し得るが故に、本術を應用する學生諸氏は何程困難なる諳記問題にても默讀一過直ちに且つ永久に之を記憶するを得べし

本術の三大特色（何人にても容易に習得するを得ること／練習を要せずして直ちに用ひ得ること／實地に應用して偉効を奏し得べきこと）

●本術を應用する人は車中途上の何れを問はず零細の時間を利用して有用なる事項を記憶し學科及業務の上に偉大なる利益を收むるを得べし

●本會の講義錄は何人にも理解し得らるゝ樣懇切平易なる言文一致體を以て記述し、一月二回以上の發行にて僅に二週間を以て卒業充分に應用するを得せしむ（但し講習を急がるゝ方には特別速成の方法あり）

新式記憶術

●速成通信敎授　●會費金壹圓貳拾錢

敎授概目（▲從來の記憶術▲現今の記憶術▲新式記憶術の原理▲原則的記憶術▲例外的記憶術▲數學、外國語、法律、地理、歷史及び其他の諸學科に對する各特種記憶術▲各種業務用記憶術▲娛樂的記憶術▲其他數十項）

●詳細說明書は揭載雜誌名記入の上申込あれば無料進呈す

大阪市南區周防町
御堂筋南へ入

大阪記憶學會

●成功の捷經!!!

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒症　りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町
廿八淺草橋通
瓦町停留場横

中央醫院

諸病　ぢ　梅毒　横根　下疳　全身梅毒等　りん病　消渇

子宮病　血の道　月やくとまりたる病　子なき婦人

生殖器諸病　神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等　生殖器病　萎縮　遺精　早漏　夢精　發育不充分症等

わきが　色の黒き人　にきび　ふきでもの

そばかす　あれ性　皮膚諸疾患　いんきん　たむし蟲等

▲病狀記し郵券四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區
瓦町廿八番地
淺草橋通瓦町
電車停留場横

中央藥院

二月の卷發行

定價　一冊二十八錢郵税二錢五厘　六冊前金郵税共壹圓七拾錢

新婦人

忘れられぬ男　忘れられぬ女

笹川臨風　柳川春葉　靑柳有美　廣津柳浪　初瀬浪子　森眞知女史　上山浦路子　小島文子

兒玉花外　泉鏡花　後藤宙外　森田草平　長谷川時雨　尾島菊子　森律子

繪畫及寫眞版

飛び梅 あるじなしとも春なはすれず…………川村清雄筆

九州第一梅 今夜君の爲に開く…………石川寅治筆

美人駿馬に伴ふ 人は絶代の名媛馬は天下の驥足……コロタイプ實寫眞

有栖川宮妃殿下　**桂公爵**令嗣夫人●戸澤子爵令嬢●佐々木博士令嬢●加藤博士令姪●吉田廣藏氏令嬢●伊勢眞弓たづ子嬢　松本工學士夫人　**壺屋**藤田敬美氏夫人●名古屋三輪丸子嬢●井内泰子嬢●奥田謙二氏夫人●河野きく子嬢●貝塚八重子嬢●松田代議士夫人●高木文學士夫人●上山浦路●横濱高野眞三氏夫人●横濱山田梅子嬢　**松井すま**嬢●夢野千草嬢●眞砂座新女優花村三枝子嬢●甲府武井しょ子嬢●横濱齋藤龍子嬢外百餘

結婚と肉體の詮議（林田書記官長）樂しき新婚旅行（三輪田學士）ロンドンの娘子軍（内崎文學士）箏曲を習ふ人に（今井慶松）狸の趣味（尾崎恒子）煩悶と運命と慰安（石橋臥波）徳川時代の女傑（岡部精一）其他數項

悼られたる姉の日記…………故一葉女史令妹　樋口邦子

卷末附錄　家庭日誌　二月分

温度、晴雨、献立表來客簿九星舊曆添

見本　郵劵卅錢

賣捌所は全國著名の書林雜誌店

女（ほの三）

發行所　東京市本郷區龍岡町　振替東京三〇五八番　聚精堂　電話下谷四〇七九番　電話下谷一六七二番

日英大博覽會
北米アラスカユーコン太平洋博覽會
ノ何レヨリモ最高ノ名譽大賞ヲ受領シテ

世界的ニ其良品ナルヲ實證セラレタル

山葉ピアノ



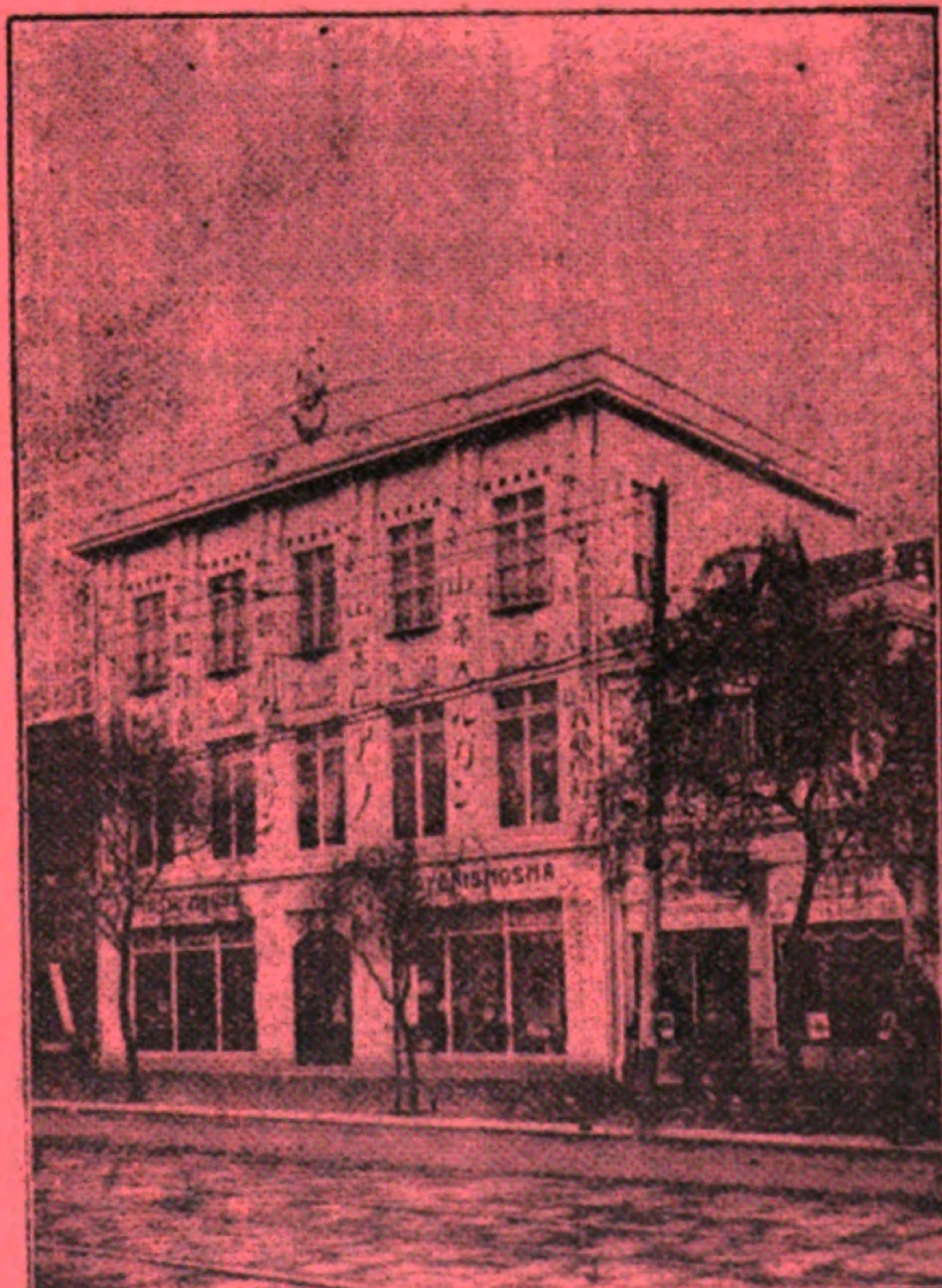
最近左記ノ大使館並ニ公使館ヨリ御買上ゲノ光榮ヲ得タリ

英國大使館　米國大使館
獨國大使館　露國大使館
佛國大使館　澳國大使館
伊國大使館　智利公使館

以テ如何ニ其優良ナルカヲ知ルニ足ラン幸ニ高顧ノ榮ヲ賜へ

▼月賦、賃貸便法ノ設ケアリ▲

▼目錄、月賦賃貸規定ハ御申越次第贈呈ス▲



山葉ピアノ
山葉オルガン
鈴木ヴアイオリン
其他西洋樂器
和洋音樂書

東部一手販賣所

東京市京橋區竹川町十四番地
日本樂器製造株式會社東京支店

共益商社

電話特長新橋三三二〇番
振替貯金東京一二〇七〇番

女(ほの四)

名流婦人



伯爵小笠原長幹氏夫人貞子、(伯爵阿部正桓氏令嬢)

名流婦人



溝口伯爵令嗣夫人　須美子（伯爵徳川達孝氏令嬢）


高等
都の花石鹸
祈誓
舶來石鹸に優る十倍の効驗ある
高等都の花石鹸
を常用することを八百萬神に祈誓する者也
芳香の高雅にして品質の純良なるは紳士淑女の愛用と名譽の金牌とに依り知らる
▲全國到る處の化粧品雜貨店に販賣せり

女(への二)

新婦人叢書

新刊 第三篇

名媛日記

大平野虹氏著

袖珍型クロース表紙
定價金四拾錢
郵稅四錢

本書は我國古今婦人の內心を描寫したるものなり先づ我國女流の文華爛熟たる平安朝時代より筆を起して現代に及べる名媛淑女が思想と生活を在りの儘に描きたる日記を著者獨特の見識によりて蒐集せし者なり思想の響生活の影一度本書を誦すれば我國古今婦人の性格は躍如として目のあたり其等人物に接するの思ひあらしむ

既刊 第一篇

日本美人傳

長谷川時雨女史著

袖珍型クロース表紙
定價金四拾錢
郵稅四錢

既刊 第二篇

現代男性觀

小島文子女史著

袖珍型クロース表紙
定價金四拾錢
郵稅四錢

近刊

- 四篇 日本美男傳 田村とし子女史著
- 五篇 日本烈女傳 尾島きく子女史著
- 六篇 閨秀作家文粹 佐藤紫仙氏著
- 七篇 文章の栞 岡田八千代女史著
- 八篇 日本艷女傳 兒玉花外氏著
- 九篇 育兒の話 醫學士唐澤光德氏著
- 十篇 現代女性觀 藤野花子女史著

新婦人叢書體裁 クロース表紙箔捺●袖珍型● 用紙白菱●二百餘頁●筐入

女(への三)

發行所 振替東京三〇五八 東京市本郷龍岡町 電話下谷四〇七九番 電話下谷一六七二番 聚精堂

鈴菜



右圖は海軍大尉松平胖氏 松平頼壽伯令弟、夫人俊子（鍋島直大侯令孃）、左は海軍中主計法學士伊東太郎氏 子爵伊東巳代治氏令息 夫人ちか子 西川忠亮氏令孃）。

新粧の佳人



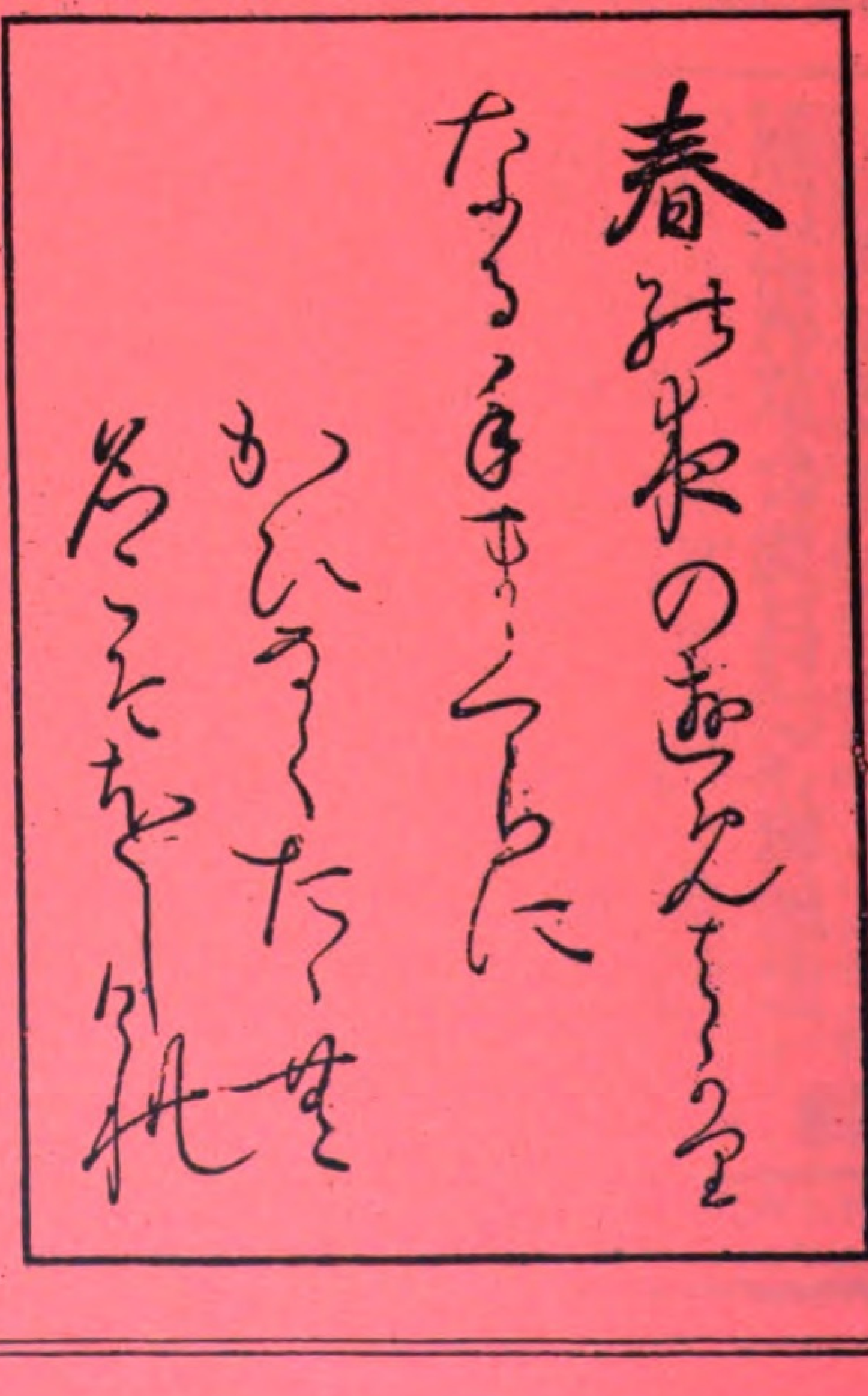
甲府富豪若尾氏令息誠之助氏新夫人百合子 宮下眼科醫院長宮下千里氏令孃）

惡筆を苦になさる方の氣が知れぬ

どんな容貌の美しい方でも文字の拙きことは一生の恥として非常に苦になさるやうですがそれは現今の御婦人としては御無理の無いことですけれどその道に就かれずして御苦勞なさると云ふことは御無理です、ゆえにそんな下らぬ御心配などして居られる暇には何人様も驚かれるやうなお上手になられる方法があります、それは今月で滿五週年で五拾有餘萬の卒業生を出だされたと云ふ特許速成習字通信敎授の會であります、お手本は有名な小野鵞堂先生です、物は試めしに先づどんな方法か見本を御覧なさい、

東京本郷區森川町帝國大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」を出せば直に無代にて送ります、

同會の電話は下谷三二一〇番と三〇一一番です、



福岡縣會員小田安江孃 孃は入會前は非常な惡筆な方であつたが僅々二ヶ月間練習にて斯くの如く上達されたのである

習えば直に上達することを！

（その一）

二月一日發行
第十八卷第三號

文藝倶樂部

●菊判本文紙數三百二十頁●原色寫眞版一枚

●寫眞版 光澤紙刷八頁普通四枚 二色刷光澤紙‥‥二頁 ●木版摺錦繪一枚

正價一冊金廿五錢　郵稅一冊二錢五厘

大發展の内容を見られよ！

一瞬も其の向上を停止せざる本誌の二月號は益々大發展を實現せんと卷頭小說に後藤宙外氏作三島の會見と第二に生田蝶介氏作睡蓮の二傑作を揭ぐるの外二月の帝劇に上場する日の出及び喜劇陽氣の女房とを收む前者は佐藤紅綠氏の作後者は松居松葉氏の作、讀者は居ながら帝國座を觀るの感あらん尚新講談は艶っぽく淸草舍英昌氏に囑して龜屋忠兵衞を活躍せしむ所謂梅忠の實錄は、是れに依るの外なからん活社會演藝界、長廣告花柳界の各欄全本誌の實價を示さん不相變賣切れぬ内御愛看を祈る

發行所　東京日本橋本町三丁目　博文館

(その二)

女(との三)



女(との四)

花薔薇



紳商瀧澤吉三郎氏令孃與志子（麹町富士見町）

清香





ソマトーゼ

ソマトーゼを召上れ！弱いお子樣！弱い母樣！病氣の人も、病後の人も

- ソマトーゼは食慾と消化を進め
- 清く健やかなる血液と神經を作り
- 體格を强壯にし、元氣を旺盛にする
- 比類なき滋養品なり
- 全國の藥舖にて販賣す。

理想的肺結核新藥

グアヤコーゼ

グアヤコーゼは肺結核唯一の治療藥として公認せられたるグアヤコールの最も無毒なる化合物（硫基グアヤコール石灰）を卓越なる滋養品として夙ねく醫學界より賞讃せらるゝソマトーゼに配分したるものなれば、食慾と消化とを催進し清鮮なる血液を作り咳嗽を鎭め、咯痰を容易にし、盜汗を防止すべきを以つて肺結核の症狀を速かに回善すべし、

一回四乃至五瓦　一日三回食後服用

一瓶百瓦入として發賣す。（說明書進呈）

發賣元　橫濱市山下町百八十三番　神戶市明石町四十七番

フリードリツヒ、バイエル合名會社

女（ちの一し）

女(ちの二)

梅さく頃に生れいでし

少女画報

第一年第二號　定價十五錢郵税一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

口繪

▼第二號の畫を御覧下さい美しく
▼面白くきれいに立派に出來ました……
▼寫眞の數四十餘◎女王殿下御染筆並に
▼御眞影を◎初◎女學校生活◎少女の遊
▼學校の前◎子守◎禮法◎いたちごっこに
◎ピアノ◎女學生の雪こり
▼午前と◎習字のお稽古◎
午後◎あみ物お稽古◎懸賞は「妙な寫眞」

「梅が香」　井川洗厓氏筆◎

「雪の兎」　渡邊與平氏筆◎

◎ぶつぶつ蟲……倉橋惣三
◎小説 養女……尾島菊子
◎文子さんのお洗濯……手塚かね
◎小説 みしめ繩……三宅花圃
◎田植歌に殘る哀な姉妹……遠山稚子
◎小説 花堀り……三津木春影
◎かくれんぼ……松山茶一
◎私の女學校生活……仙子
◎縫ひ直しの御衣を召たる兩殿下

▼繪ばなし……與平
▼鳥の先祖……村松元雄
▼一口ばなし……
▼頓智問答……
▼新案鼠の面
▼思て居る數の當てかた
▼面白い砂の國……しげ子
▼お壽司の會
▼節分草の鉢植……
▼文學遊戯いろいろ……
▼少女時代の春日局
▼懸賞當選者發表……
▼女學校參觀

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八

女(ちの三)



世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能きい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビソバカス、吹出物を全治し夏は日にやけず冬はあれを防ぐ

◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

實に其効能は多方面にして貴きこと黄金にも優る價値あり

定價 一瓶三十錢
郵券代用一割增
遞送料無料
但滿鮮は送料弐五錢

發賣元
東京日本橋横山町一丁目
近江屋
天野源七
電浪花八六三番
振替五九三三番

宮內省御用達

醸造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

天下一品

最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

女(ちの四)

梅日和



右圖實業家福島浪藏氏令孃松子、左圖實業家久米民之助氏令孃萬千代子 法學士五島慶太氏の新夫人）

友のむつみ



女一代の衛生

久我侯爵‖伊東元帥‖東久世伯爵題字‖產科婦人科專門醫學士佐藤得齋先生述

處女の煩悶

年頃になつても月經の來潮せぬ時、又は有ても經血の量が不規則で一定せず、或は來潮期が齟齬したり或は月經時に痛を感ずる樣な事があつた場合には如何に處置す可きものか

新婦の恐怖

新婚前後に於て最も罹り易き病氣の、原因及徵候は如何なるものか、若し醫療を乞ふ事の出來ぬ場合は手前療治で治す方法が有らうか、又良人に淋疾あれば何うして豫防するか

主婦の悲嘆

夫婦共丈夫で居て結婚後幾年經ても妊娠せぬ婦人、只一回妊娠して途中流產し其後妊娠しない婦人、又幾回も妊娠するが何時も流產する婦人は何うすれば滿足に子寶を得られるか

婦人病者の心得

無代進呈

實驗報告書添附

申込所‖東京市京橋區新榮町‖笹岡省三

ハガキにて申込あれば直ちに送本致します

妊婦の心配

妊娠に惡阻は附き物の如く誤解して打捨ておく爲めに、早產流產死產等の不幸を招き甚だしきは命迄も失ふ婦人が尠くないが、其原因は如何なるもので何んな手當が必要か

病婦の苦痛

永年子宮病血の道で醫者通ひ病院歩きこの藥あの妙藥と頭から浴びる程飲んでも一向効なく年中蒼白い顏して、ブラ〱不愉快な月日を送つて居る婦人は何うすれば治るか

老女の誤解

月經閉止期前後に時々出血したり下物が有たり、足腰が冷へ、又は浮腫などの出來る樣な事が有ても老人だから子宮病ではあるまいなど〻平氣で居る婦人は何う云ふ危險が伴ふか

女(りの一)

雛祭りの時近し

―初雛の家庭へ御贈品を忘れ給ふな―

二月二日より

◉雛人形御道具陳列會開催

例年よりも一入品數を増加し都て正札附にて販賣仕り御買上品は迅速丁寧に御屆け申上候

●

東京日本橋

白木屋呉服店

女學世界

第十二巻

第三號

紀元節號



常識教育　新鶉衣

曙内侍

表情論

喜怒哀樂を色に出さずとは、能く色に出で易き俗人ばらの性を鍛へんとて、賢こき人の老婆心より出でし言葉なるに、親の心をば子知らずして、たゞこれを理窟の算盤に掛くれば、嬉しくとも喜ぶべからず、腹立しくとも怒るべからず。毎時も見合ひの時の如くに、衣紋をつくりてつんと濟さねばならず。斯くては人生の趣味、果して何處にかある。そも彼の惠比須三郎は、鯛を釣りあげて笑へばこそ最とも福々しけれ。そも彼の閻魔大王は笏を握りて嗔ればこそ自から威嚴も備はれ。さるを閻魔も嗔らず、惠比須も笑はずに居れば、皆な是れ知らぬ顏の石佛と同じく、己が頭を、蜻蛉の宿に貸すの他なからん。されば一歩を退きて、私かに言外の

意を探るに、唯だ利益にならぬ表情は努めて避けよ、利益になる表情は大に發揮せよとのことなりけらし。凡そこの表情の要義は、まづ眼に物を言はするに始まり、頬にも唇頭にも、肩にも胸にも、己が情を表はして、我が意に他を從はしむるを專一とするは、今更諄諄と說くまでもなけれど、彼の孔子も恐れし駟も及ばぬ舌とは事違で、言質を取らるゝ憂ひもなければ、證據を握らるゝ恥辱もなく、忽ち出でゝは、忽ち退き、宛ら露に宿せる稲妻の如く、消ゆれば跡に何の影も止めぬこそ、實にその長所とや云はん、妙趣とや叫ばん。



梅が香の匂はざりせばぬば玉の闇の春をば誰かしらまし　（春樹）

雪達磨辭

汝が祖師は面壁九年の行を積みしに、汝は一朝にして忽焉として成る。いかに巧遲は拙速に如かずとの諺あればとて、なんぞ餘りに甚しきやと詰れば、雪達磨炭團の眼を怒らせて答へて曰く、夫れ德の高きは年月の長短に依るべからず。天才は多く學ばざれども能く新機軸を出し、椋欒子は一生磨くとも終に椋欒子なり。我が祖師は九年の間食はず飲まずの座禪を組みて、足を失ひ手を落したれど、たゞ不倒翁に七轉八起の處世法を敎へたる他、更に何の手柄もなし、眼のみ徒らに剜きたりとて、手足なければ、盜人の用心にもならず、緋の法衣に大僧正を氣取れども、赤毛布姿と見られては、今は貧乏車夫にも無き圖なり。それに比ぶれば、我れにこそ樣々なる新敎訓は含むなれ。そも我れの成長する時、その心の堅からざるものは、中途にして自から潰ゆ、是れ

意志の鍛錬を教ふるものならずや。人は轉ぶ度に損をなせども、我れは轉ぶに從ひて益々增大す。是れ尊氏家康が逃げつゝ天下を取りし秘法ならずや。我れは一見雪のみにて成り潔癖は塵芥をも厭ふやうなれど、土塊の卑しきをも、砂礫の頑固なるをも容れたればこそ、斯くは我が肥滿せしなれ。その度量の宏きこと、清濁併呑の槪あらずや、我れは是れ現代人なり。豈に祖師の如く迂愚にして、木兎の輩と列を同じうせんやと言ひ畢りて、呵々大笑せり。然るを雪も何時しか降りやみければ、

○○○

其後は渠の氣焰更に揚らず、やうやく日蔭に幾日をつくねんと佇みしが、童部等が惡戯の下駄に蹴散らされ、棒ちぎれの槍に胴腹を抉られ、今は炭團の眼も口も落ちて、ある甲斐もなき醜き姿に變りしが、果ては其處に在るも邪魔なりと、大溝の中へ轉落され、終に跡形もなく消え失せけり。



匂ふ香のなからましかは梅の花夜は心に掛らさらまし　（直好）

角帽箴

昔は冠に依つてその人の位階を定めしが、今は帽子を以學生の所屬をわかつ。是れ皆なその上に立てる者の、下を導く手段なるべし。まづ小學校の生徒には、萬事おとなしく圓く進めよかしと、獨逸帽

の圓きを撰びけるが、中學より高等學校に進むに從ひ生意氣は世話に砕けて、あまり圓轉滑脱の才を揮ふもいさゝか男子の意氣を失ふ憂ひあらんと、此に於てか始めて角形を撰びしなるべし。されど圭角あまりに鋭くしては、また些か人に厭はるゝ節もあらんかと故らに角を撫でたりしこそ、まことに用意周到の老婆心とは云ふべけれ、然るからに一度この帽を取りて冠れば日ごろの男振更に十段を倍して、威風凜々、威儀堂々、胸に萬卷のノートを藏し、希望は徽章と共に輝くも目出度し、若し夫れこの帽を戴きて天下の大道を濶歩すれば、端なく式部の



青柳のかたよる方やかをるらん吹としもなき庭の下風　（枝直）

眼を聳たしめ、交番に友人の家を尋ぬれば、巡査も恭しく敬手を擧ぐ。かしこの珈琲店へ入りてボーイに鞠躬如たらしむるも、この牛肉店に登りて女中の媚を受くるも、皆な角帽の德にあらずや。さるを世に冥加を知らぬ輩は、これを唯だ好きことに思ひなして、戀に借金の山を築き、酒に不義理の淵を穿ち、あたら角帽の方正なるべき品行を、はんぺんの柔かきに持崩すこと、かへす〲も口惜しき限りなれ。あなかしこ、感ずるまゝに是れが箴をつくる。

慰老孃文

人生五十年の算盤玉には、十五歳の花嫁も相應しかるべく、二十歳の母も珍しからねど、それは白歯に鐵漿を染めて、眉を落せし昔のことなり。今は百二十五歳を人間一生の壽命と定めければ、三十振袖、四十島田の比喩も、あながち人の笑ふべきにあらず。且つは青春の時代に於ては、人の心も花染の袖のやゝもすれば、移ろひやすけれど、その程少し過ぎぬれば、心も顔色も落着きて整ひ、却々に他を魅するに便り好からん。世に傑婦と歌はれしクレオパトラも則天武后も、縱横の辣腕を振ひしは實に此の年歯なりけり。されば君も、心を津の國の長柄の橋にたぐへて、古りゆく身をもゆめ急ぎたまはず、心しづかに良縁を待ち給ひねとこそ。



思はすも友に會ひたり心さすしなりは同じ梅の下かけ　（千浪）

火燵辨

など三馬は、浮世床浮世風呂を書きて、火燵の世界は忘れたりけん。屋外には雪いと降りしきる夜ごろ、一家團欒に興じあへるは、彼の夕すずみの縁にも勝りて樂しかるべけれど、待つ身につらき夜半の置火燵には、天井の鼠にさへ腹立しかるべし。さて例の借金除に、下婢には近縣旅行の旨を含ませ置き、大晦日の切所を難なく越ゆるは、誠やこの物のお蔭なりけり。殊に歌よみ、俳諧師は、脇息几案の定まれる調度をさけて、火燵に凭りて思案すること、なか〳〵に名吟秀歌をも得べけめ。まづ櫓の格子に確平と取りつき、頬を蒲團に押當て假睡

めば、胸より下かけてほかり〳〵と柔かなる溫味の心地よきに、夢は箱　にや遊ばん、熱海にや彷徨はん。更に仰臥さまに枕をすけて、頤の湯まで蒲團引被ぎなば、忽ち己が姿さへ東山に似て、吐く息に春の霞をたなびかすも、居ながら名所を眺むる趣ありて可笑し。

されど血氣盛んの若者には、この物一切禁物なり。一度この物に親めば鴉片の醉心地、五體の筋肉もそゞろに融解くるやうに覺えぬれば、如何なる勤勉家も俄かに物臭になり、一尺隔れたる處の物も、手を伸すが臆劫になりて、たとひ大君の召しますをも、李白が盃放すに難く、蒲輪安車の迎へは來るとも、いかでこの安樂世界を去らるべきぞ。果ては下腹のあたり怪しく脹れ來て、是非なく起つべき要の起るとは云へ、なほ眼をつぶり、息を



今年又しなりもかへすみへろかな馴しか梅も懷敷しく〳〵して　(千涙)

耐ふるは、衞生のために此上なき害ならん、莫逆、わかき男女の差向ひには、火燵の山に話の花を咲かせ、悋氣の撥炭に裾を燒かるゝ折もあるべく、若し夫れ炭團一つと侮りて、夜半に足踏みのばして蹴覆しもせば寢耳に水ならぬ焦熱地獄の驚きに變じ、我家を烏有に歸せしむるのみかは、七生までも他人の恨みを買ひて子々孫々、世に浮ぶ時は無からむ。

燒芋頌

おなじ畑に育ちながら、里芋はきぬかつぎに花嫁の扮裝いみじくはあれど、未だ容易に人に愛せられず、長芋はお平にのつぺりしたる男振を見すれど、却々に旨味なしと人に斥けらる。然るを燒芋ばかりは、その形いと美はしからぬに、ひとり天下の人氣を負ひしこそ、扨ても不思議のことなりかし。今具さにその譯を

述べん。先づ　の物の祖先を洗へば、昔は熊襲が住みける西國の產れなり。牛得の醜男子なるに、鴨川の水にも洗はず、花紅葉のお供にも疎かりければ、風流心と云ふ事さら／＼なし。たとひ己れは薩摩守の子孫なりとも思ふめれど、彼の行暮れてと歌ひし平家の公達には似つくべくもあらで、あはれ木の下蔭に宿借る乞食に賞でらるゝこそ本意なる業なれ。さるを一歲、大飢饉のありける砌、常には大牢八珍と矜りし輩も、眞成の際には皆な言ひ甲斐なく姿を隱せしに、この物ばかりは、日來は身をも飾らね、名をも求めね、何處までも賴母しげなる狀の仄見えければ、計らずも昆陽が知遇を得て、江戸表に召出されしこそ、やがて出世の蔓の延びはじめなりけれ。今は燒芋とし云へば、普天の下、率土の濱、皆なその名を知らざるものなく、たま／＼書生の爲めに新聞紙に包まれて、懷中に押込まるゝ難はありとも、姫君が玉の唇頭に觸るゝ果報には、何人か之を羨まざらん。然るからに、時雨そぼ降る夕まぐれにも、はるか〇燒の行燈を望めば、まづ懷しの情胸に滿ちぬべく秋風うらめづらしく吹きかへす頃ほひ、床店に新芋の現はるゝを見れば、別れし人に逢ひぬる心地やすらん あゝ燒芋なるか／＼。その德は自力に備はり、落閥



淺みどり春の空より降雪は花ちるさとの心地こそすれ（伊勢）

などの他力に依らぬこそ、めでたけれ。

ハンカチーフ說

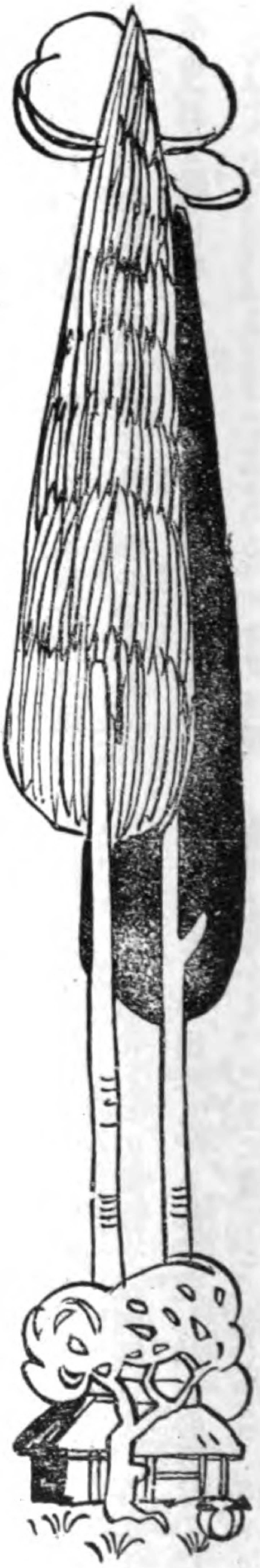
手拭は汗を拭へども、物を包むに足らず。風呂敷は物を包めども、汗は拭ふべからず。各々その勤めの異なるは、文明の器の餘儀なきところならんも、ハンカチーフばかり其用ひろきものはあらじかし。まづ夏の日中に人を訪なへるに、一刻も手より放しがたきは云ふまでもなく、思はぬ買物に風呂敷なき折にも、この物あらば取りあへず用は便ずべし。凡そ女の、人と對座して談話するに、煙草は生意氣に見ゆれば燻すこともならず、さればとて相手の顏を見詰むるも無禮なればこれかくしにハンカチーフを弄ぐるぞ、手持無沙汰は免るゝなるべく、別きて戀人などに言葉掛けられ頓には返事の出でぬ折柄、口にくはへて俯向ける風情こそ、たとしへなく艶に奥床しけれ。むかし佐用姫は夫に別れし時、領巾を振りて名殘を惜みしが、今は遠き旅路の人を送るに、互ひにハンカチーフをば振るぞかし。彼の手品師が兩手の指先にて、確乎と改めますと一振り振りたる後、忽然として洋盃の現はれ出づるは元より種や仕掛ありなんと思へば、さして興は催さゞれ、カルタ會などの罷みたる後に、不圖口紅のつきける絹ハンカチーフを拾ひなば、若き人達は如何ばかり胸も轟ろに嬉しう思ふらんを。さりながら白粉こてと塗りくりたる怪しき女の、頸に手帕を卷きたるは、瘰癧の痕をば隱したるかとうたてく、男やもめの十日二十日感冒引きつゞきたるが絶えず水洟を拭むとて、色さへ鼠色に濡れそぼちたるを、袂より出しては入れ入れては出すこそ、いみじう理もなく汚穢しけれ。

趣味の人、樂天の人、超脫の人



巴里のパンジオン

下田次郎



△素人下宿

自分が海外留學を終へて歸朝したのは、つひこの間のやうであるが考へて見れば、はや十年許になる。留學三年の間には、方々に轉學し、又諸國をも旅行したから、隨分珍らしい事をも見聞し怖い事にも出遇つた。しかし十年の歳月は、それらの記憶を朧ろならしめて、多くは、たゞその輪廓のみを留め、中には、たまに當時の日記を見て、こんな事もあつたかと、漸く思ひ出すやうな事もある。

その中で、今日まで、いまだに忘れず、忘れないのみならず、尚昨日あつた事のやうに、印象の深く、鮮かに殘つて居ることが一つある。それは、巴里のパンジオンに於ける出來事である。

十ヶ月ほど居た獨逸のライプチヒから、巴里に轉學して、ホテル、スーフローといふ宿屋兼下宿屋に落ちついたのは、明治三十四年七月の五日であつた。巴里を東西に横斷せるセーヌ河の南方に當つて、巍然とし

て聳峙てる宏壯なる一つの殿堂がある。パンテオンといふ。佛國の偉人の墓を安置せる所で、その正面の欄間には『其價値を認むる祖國が、偉人のために之を建つ』といふ意味の銘が横に長く記してあり、内に這入つて見ると、カロロ大帝即位式、ジャンヌ、ダーク一代記などの壁畫が、三方の壁一面に名手に由つて、描かれて居る。ホテル、スーフローは、その殿堂から半町もない小い横町に在るので、前から日本學生の定宿のやうになつて居て、自分の行つた時には、數人の日本學生が滯留して居た。それで知らぬ巴里に來ても、賑かでもあり心強くもあつた。殊に都合のよいことは、宿の主婦さんが、アルサス出のものであることである。アルサスは、



梅かをる霞の奥をとめ行けば猶このもとは遙けかり兇　（千　陸）

誰も知る如く、以前は佛國の一州であつたが、千八百七十年の戰敗の結果、獨逸に取られたので、その地の者は大抵今は獨逸語と佛蘭西語が出來る。獨逸から來たての自分は、この主婦さんをつかまへて、分らぬことは獨逸語で聞き〳〵、佛蘭西語の練習をしたのである。

兎に角外國に行つて何をするにも、先立つものは、金と言葉であるが、金は三ヶ月毎に、文部省から公使館に送られるのを受取るだけの事で、大方無くなつた頃には、又來て居るといふ通知が必ずあつて、有り難く頂戴し、絶對にパンの問題とは無關係で、呑氣千萬に暮らすことが出來る。それで差し詰め必要なのは、言葉であるから、巴里に着くと、直ぐから、種々なる機

會を利用して、佛蘭西語の練習をした。就中最も必要なのが、それを聞くことと話すことである。そして、ホテルの主婦さんは、屢〻その機會を與へる一人である

△通俗大學の繁昌

巴里には、ユニベルシテ、ポピユレール、即ち通俗大學といふのが盛に行はれて、市中に數十ケ所の會場があつて、夏季には、一週三度、冬季には毎夜講話がある。そのプログラムは、一ケ月分のが、前月の末に印刷されて、會員に配布される。それに由つて、各〻思ひ〳〵の晩に聽きに行くのである。會員には、一ケ月五十サンチーム、即ち日本の二十錢出せば、誰でもなれるのである。會員は、實に樣々で、男もあり、女もあるは無論のこと、學者、教育家、法律家、醫者、實業家、學生、俳優、小賣商人、勞働者等、ありとあらゆる位置、職業の人がある。そして會員又は會員外の人々が、種々の題目に就て、毎夜二三人位づゝ講話するのである。大學教授の講話もあれば、美術家の批評談もあり、ユーゴーなどの文を朗讀することもあり、海外を旅行して取つて來た寫眞を、幻燈にして話す婦人もあるといふ工合で、實に面白い、多方面な、しかも打ち融けた會である。自分は、市民の樣子を見るため、特には佛語の耳慣しのために、ホテルより程遠からぬリユー　ムーフターといふ雜貨の辻店の出る、小い通りにある通俗大學に、會員となつ



椿の花今はゆめにもかたらなん心を染て年ぞへにける　（有　功）

て、足繁く通ふた。これが佛語練習の第二の方便であつた。

△パンジオンの光景

ホテルには、同じく敎育學研究のため留學の井口君といふのが、先に來て居た。井口君とは、留學前よりの友で、既に巴里通でもあつたから、萬事につけて、便宜を與へられた或る時井口君の話に、君は語學の練習をするといふが、幸ひ、僕はこの近所のパンジオンに夕飯を食ひに行くから、君も一緒に行かぬかとの事であつた。それは可からうといふので、ホテルで夕飯を食べて居たのを止めて、そのパンジオンに、毎夕、食事をしに行くことになつた。

パンジオンといふのは、先づ素人下宿とでも云ふべきもので、學生、勤め人、などに間貸しをしたり、これらの人々及び外來の客に、食卓を共にして、食事—主もに夕食—をさす內をいふのである。巴里には、一家を持たない者や學生などが、非常に多いから、このパンジオンが、到る處にあるのである。巴里は、世界の巴里で、世界各國人が多數住んで居る。殊にパンテオン附近は、カルチエー、ラタン（羅甸區）といつて、大學始め、學校の所在地であるから　外國の學生も甚だ



もろともに老にけらしな昔わが野邊よりひきしにはの姫松　（安房）

多いのである。それでパンジオンの食卓を圍む者は、世界人種の寄り集りといふてよいものである。

自分等の通ふたパンジオンは、パンテオンを左の横に見て、男子の高等師範學校のあるリユー、チエルムといふ町を通つて、横町に出ると中程の左側にある。リユー、デ、フイヤンチーヌの九番といふのである。門を這入ると、中が石のタ、キのコートで、それを突き當たると、石段があつて、戸口になる。構はず開けると、すぐ梯子段がある。二十段以上もある折れ曲つた梯子段を昇ると、二階になる。同じ作りの梯子段をまた昇ると、三階になる。又昇り昇つて、息をはづませ脚の筋肉を筋張らせて、百數十の階段を昇り切ると、五階に達するので、我等の行くべきパンジオンは、そこにあつたのである。



吳竹は千世のもと末みどりにて枝さへ葉さへ變らざりけり　（景樹）



△初めて主婦に逢ふ

八月二十七日の夕、井口君に連れられて、始めてこのパンジオンに行つて見た。五階に昇つて、眞中のドーアを開けて這入つて見ると、十三疊位の應接室兼食堂があつて、中央には長方形の

大きなテーブルが、廣く場所を占めて居る。程なく主婦が出て來た。井口君が、これは私の友達で、モッシユー、シモダといふものですが、今晩から、食事に來ますから、宜しくと紹介すると、よく入らつしやいましたといふやうなことを言つて、握手し、それから、一つの椅子を當てがはれて、食卓に着いた。座には、來つけの客と見える人々が、數人はや來て居る。それらの人人にも、一々紹介され、ソップから始まつて、食事に取りかゝる。井口君は、皆なじみであるから、話しながら、食べて居る。外の人々も　口が食物で占領されて居ない限りは、皆〻んに喋舌つて居る。自分は、唯默つて、食べながら之を聞いて居るのである。佛蘭西語練習の第三の方便は、かくして得られたのである。



幾千代をしめたる宿ぞかげ高きのき端の松をわが友にして（弘訓）

食事が濟むと、また一しきり話がはづむ。それから歸りたい者は歸り、用のないものは、隣室に行つて、何時までも話すのである。隣室は、八疊位で、物がゴテ〱置いてあつて、食堂よりも狹いが、話すには、工合がよい。一方の壁には、竪ピアノが一臺据ゑてある。他の壁に沿ふては、ソファが長まつて居て、數脚の椅子がそこらに置いてある。それへ思ひ〱に陣取つて、話し出す。多くは學生の、夜は用なしであるから、話し出して、油が乗ると、何時までも居る。主婦は、食事中最もよく話すのは勿論、食後の談話にも、屢〻加はつて、誰れを捉へても、議論に花を咲かすの

毎號添附　形紙附錄あり

恰好のよい巾着形數種

見落しなく御購求あれ

二月號　婦女界

一冊金十五錢　郵税一錢五厘
六冊金九十錢
十二冊一圓七十五錢

東京神田　同文館

▲現代の女子は如何に修養すべきか　文學博士 井上哲次郎

▲賢母と愚母……宮田脩

▲達筆になつた余の經驗…横井博士

▲國語界の三偉人と其母…佐々木博士

▲現今の婦人問題…吉田熊次

▲家庭と俗曲の趣味…佐々醒雪

▼獨身論　東北大學總長 澤柳政太郎

▲棚橋絢子刀自…記者

▲處女の衛生…大瀬學士

▲小兒の呼吸病　豊福學士

●余の見たる獨逸家庭の臺所……保科文學士

●人の氣づかぬ料理上の手加減……琢間つね子

▲小説 雛鷄　大倉桃郎

▲小説 春の海　神崎恒子

▲支那の花嫁　花婿

▲悲歌一曲　千萬樹

▲婦人と織物の智識…伊達道太郎

▲零下二十度の寒さ…安藤蘆沼

▲衣服の縞柄と色合…婦人記者

▲子供洋服用の前掛…松浦峰子

▲英詩「雪」……若月學士

▲文藝其月々　沼波學士

▲日常の作法　笹木幸子

▲昔の女學生　本多さだ

▲二月の料理　白露

▲家庭の實驗……

女(お)の一

能筆は萬代までの模範

關根正直先生校閲 小野鵞堂先生編書
女子消息 文かきぶり（習字兼用）全一冊
木版刷大和綴 半紙九十三枚
定價金四拾五錢 郵税六錢

小野鵞堂先生編書
高等女子 文かきぶり 全一冊
木版刷大和綴 半紙八十四枚
定價金四拾五錢 郵税四錢

小野鵞堂先生編書
手紙之文（習字兼用）全一冊
木版刷大和綴 半紙八十五枚
定價金四拾五錢 郵税四錢

小野鵞堂先生編書
女子はがき用文（習字兼用）全一冊
木版刷大和綴 半紙七十九枚
定價金四拾五錢 郵税四錢

小野鵞堂先生編書
新案はがき用文（習字兼用）全一冊
木版刷大和綴 半紙八十四枚
定價金四拾五錢 郵税四錢

小野鵞堂先生編書
日用文字（習字兼用）全一冊
木版刷大和綴 半紙九十一枚
定價金四拾五錢 郵税六錢

小野鵞堂先生編書
習字兼用 日用文 全一冊
木版刷大和綴 半紙五十五枚
定價金參拾五錢 郵税四錢

池邊義象先生著 小野鵞堂先生書
新撰女子用文 全二冊
木版刷大和綴 半紙二六二枚
定價各金六拾錢 郵税各六錢

發兌元 東京本町 博文館 振替東京二四〇番 ● 東京市京橋南傳馬町 吉

大阪小笠原病院長 實驗 皮膚病專門新劑

皮膚石鹼

久しく小笠原病院に於て患者に投與せられし者にして巧妙なる藥劑の配伍により眞に色を白くしキメを細かにし輕き皮膚病を治せしめ其他各種の病毒を豫防消毒するの力強大に而かも香氣馥郁且價格低廉なるが故に今や衞生と經濟上不可缺物として各家庭に常備せらるゝの光榮を有するに至れり由來藥石鹼は常用せらるべき者にして發病後慌てゝ用ゆるが如きは愚の極なりと知らるべし

定價 一個五錢送費二錢 半打廿八錢送費四錢 壹打五十錢送費八錢

艶美羔

にきび蛀にざくろ鼻の特效劑なり由來此種の藥劑は汗牛充棟啻ならずと雖も眞にニキビを治せしむる效力ある者は本劑を措て他にあらざる事は愛用者諸氏の熟知せらるゝ所なるべし

定價 小八錢 中十五錢 大廿八錢 送費各二錢

皮膚軟羔

いんきんたむし、くさ、がんがさ、なまづ、ひぜん、かゆがり、ひげくさ、肛門の痒み、たい毒、しもやけ等凡て痒みある皮膚病の特效劑にして奏効神の如しとの讃評は過言に非ず加之しゆます痛まず內攻せず蓋し天下の皮膚病藥の上乘なる者也

定價 小五錢 中十錢 大二十錢 送費各二錢

美膚練

わきがの防臭に用ひて奏效顯著なり其他しらくも、はたけ等には一二回にして奏効確實ひゞ、あかぎれ、顏手足のあれ等に用ひて卓効を現はす事世上に有り觸れたるアレシラズの比に非ず敢て試用を祈る

高等香油 エンゼル香油 毛髮を黑く艶かにしてフケぬけ毛等を防ぐ偉効ある逸品なり

定價 十五錢送費六錢 廿五錢送費八錢 四十五錢送費八錢

本舖 大阪市東區本町一丁目 回天堂　東京小石川武島町廿一 回天堂出張店

●各地藥店にあり品切の節は本舖又は出張店へ御注文あれ

圖書目錄

御入用の方は往復ハガキにて申越次第進呈す

東京本町 博文館

隆鼻術（はなたかくするほう）

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

●ね小便袋

本品は最新式にして洗濯の世話なく蒲團衣裳を汚さず立すわり自由



特別ゴム製

●子を持つ親病人ある家には必要●

大人用 壹圓八十錢
小兒用 壹圓十錢
乳兒用 八十五錢
男女の別あり御注意…

●大勉強送附料弊店負擔す●合羽製あり御注意あれ

大賣販元 大阪南區順慶町一丁目 振替大阪一二六〇七番 ゴム 文賞堂部

女(めの五)

女(ぬの六)



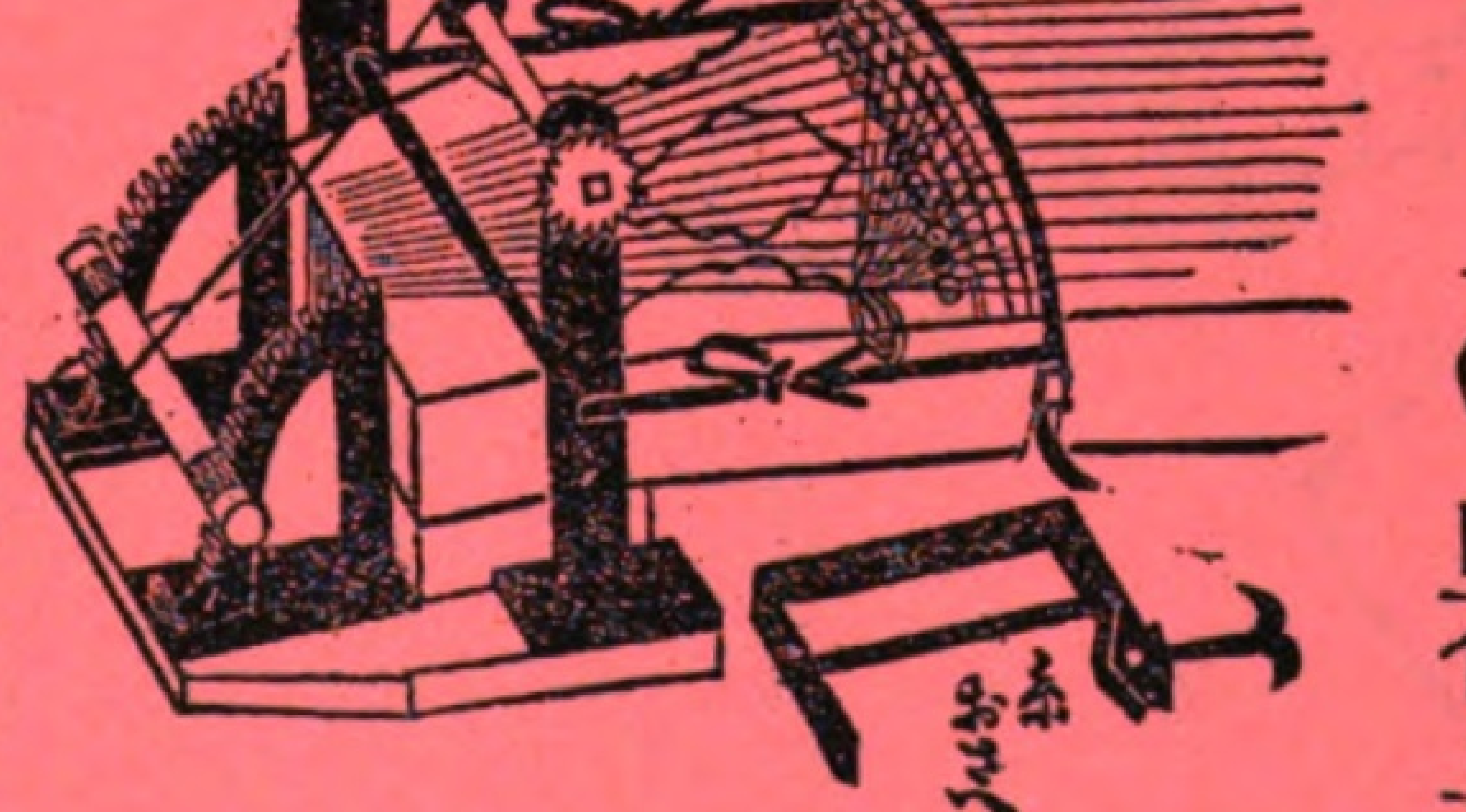
化粧界の大革命！
婦人界の大福音！
優等くせ直し
のびる
粉製の癖直し
此癖直し「のびる」は能くちゞれ毛を直し雪毛を除き惡臭を去り艶を善くし寄生病毒を防ぎ然も衛生上害なし殊に用法の頗る簡便なる粉を湯中に入れて直に使用し得るは本劑の獨特、斯界に新レコードを作れるもの、眞に天下無二の毛髪劑なり
發賣元 東京日本橋通三丁目 大阪屋川上化粧品部 電話本局一九二一番 振替一六四一四番
女(ぬの七)



素人にも扱へる簡便なる琴しめ器械

特許出願中

從來琴糸をしめるには非常の熟練を要し一々黒人に依頼せざるを得ず本器械はこの煩を救はんと多年苦心の結果發明せしものにてどんな素人方でもお女中方でも最も樂に取扱へるものにて家庭の必要品也今回三千臺を限り特價にて二月廿九日迄發賣す御申込の順にて發送す



特價 甲種 八圓 乙種 四圓
丙種 貳圓 送料各廿五錢

特價〆切後三月一日より左記定價に復す

定價 甲種 拾圓 乙種 五圓
丙種 貳圓五拾錢 送料各廿五錢

發明人 千葉縣千葉町蓮池 高里う

女(ぬの八)

である。從つて、佛語の耳慣しには、甚だ都合が好かつたのである。

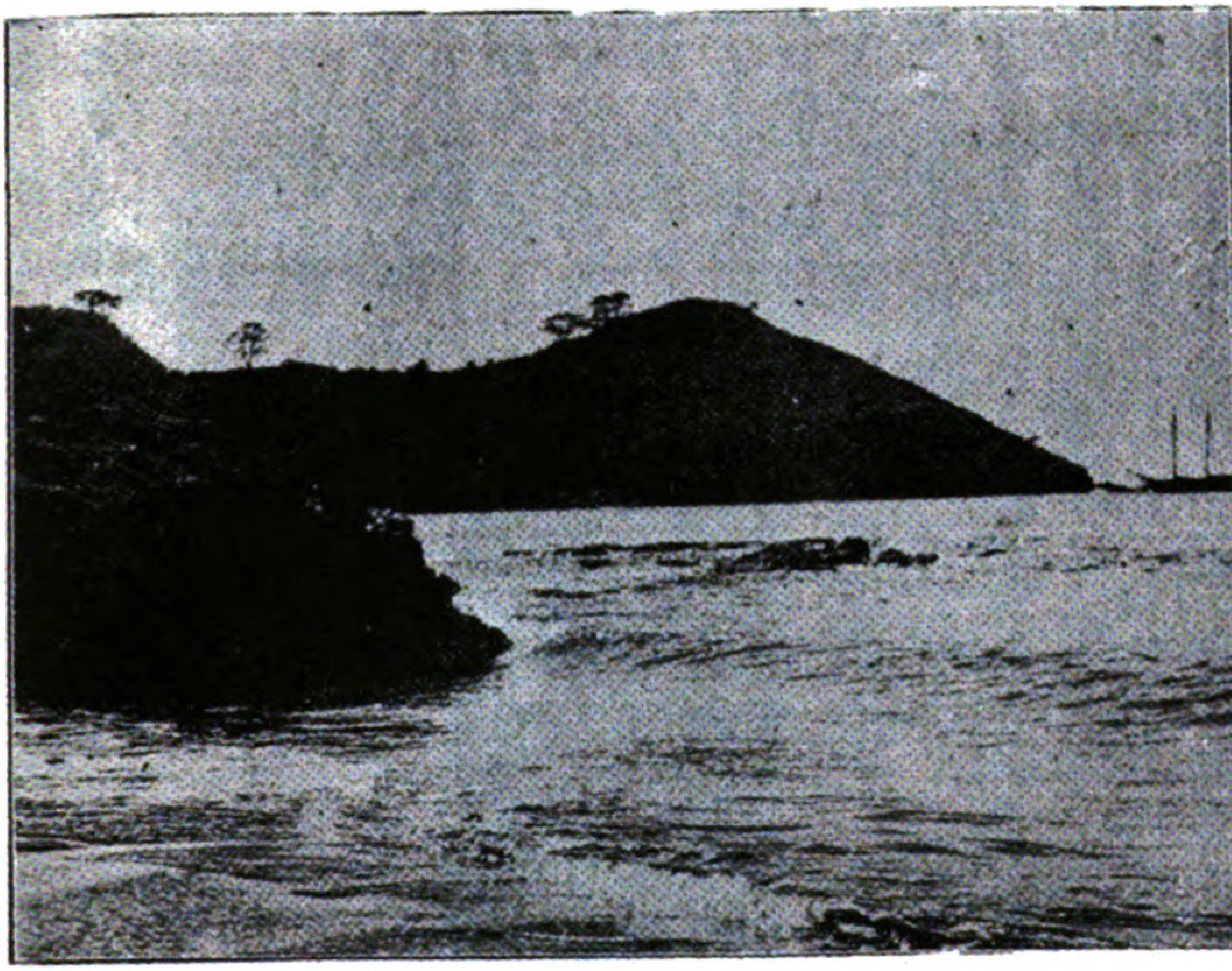
△毛色の變つた性格

しかし此主婦を、唯日本にありふれた素人下宿のおかみさんのやうに思ふと、見當が違ふ。主婦は、面長の、白人としては色の黑い確かに鼻筋の通つたそして肝癪の强さうな、勝氣の婦人である。年は五十恰好で、中肉中脊の頑丈な身體をして居る。その勝氣なのは、餘程以前に夫を失つて、女の身一つで、子供を養ひつゝ、冷酷な世間と對陣對戰せねばならなかつた必然の結果でもあらうが、第一その性質の然らしむる所である。しかし勝氣の中にも、眼には一種のやさしい、溫かさうな情の籠つて居るのが見られる。これだけの事ならば、日本にも隨分ありさうな婦人であるが、この婦人には、まだ他に毛色の變つた特色があつて、佛蘭西の婦人、殊には巴里の婦人なればこそと思はしめるのである。主婦をマダム、ルノーといふ



常磐なる松の緑も春來れば今ひとしほの色まさりけり　古榮

マダム、ルノーは、唯勝氣なばかりでなく、一定の主義をもつて居る。前にも言つたやうに、巴里は世界の巴里で、唯佛國の巴里でない。從つて、種々なる思想が、こゝに胚胎し、傳播せられ、又その或ものは、始めてこゝに實行せられるのである。マダム、ルノーの主義は、社會に存する貴賤貧富の區別を廢し、誰も平等に教育を受け、平等に樂しみ、商人なる取次の手を經ずに、生活日用の品を、何人も無代價で得られるやうにし、戰爭を全廢し、人類相愛護して、生活

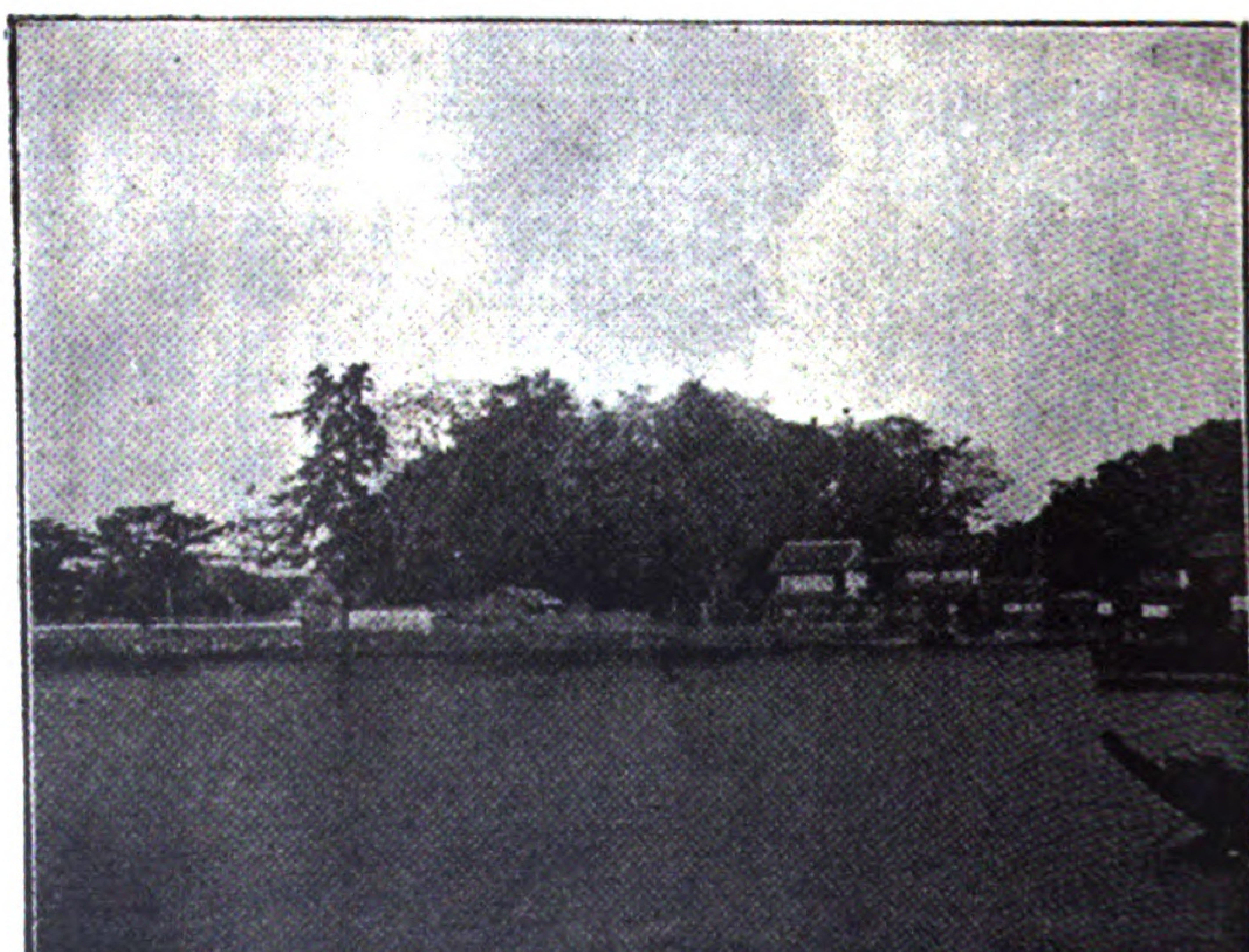


はるの海の沖つ遠山霞む日は心もなぎぬ汐路はるかに　（契沖）

すべしといふのである。一口にいへば、世界主義、人道主義で、共產主義のところもある。そして食事の時でも、食後でも、機會さへあれば、熱心にその主義を主張する。しかし、自分は、その主義の洗禮を受くべく、パンジオンに日參するのではない。每夕定期に來る胃の腑の訴へに滿足を與へ、佛蘭西語の耳慣しさへ出來ればよいのである。しかし、マダム・ルノーの熱心は、驚くべきもので、少しでも反對があると、その相手を捕へて、盛んに議論をする。ソップの冷える位のことは、無論頓着しない。食物を頰張ることゝ、議論することゝは、兩立できないもので、一方を成立たすためには、一方を止めねばならぬ。このダイレンマに懸つた時、その何れを取るかといへば、マダム・ルノーは、食ふ事を止めて、議論を取る。乃ちビステキの切つたのを、フォークに刺して、口に入れかゝつて居ても、食事の客に意見の反對を見出せば、フォークを下に置いて、一矢酬いずには居れぬのである。

△佛蘭西語は主婦のお陰

自分は、食べつゝこれを聞いて居る。食べながら、佛蘭西語の耳慣しが出來る。一擧兩得とは、この事で、この位都合のよい事はない。佛蘭西人の熱し易き性質は、最もよくこの婦人に代表されて居るので、獅子は、兎を搏つにも、全力を以てするが如く、一寸の反駁にも、火のやうになつて議論する。段々熱して來ると、聲は高くなり、調子は早くなつて、食卓を打ちつゝ、のべつ幕なしに論じかける。さうすると、巴里に來たての自分には、サッパリ分らなくなる。しかし佛語の耳慣しのつもりで、一生懸命に聞いて居る。後には追々分り出して、自分からも、ちよい／＼口を挿むやうになる。さうすると、今度は當の敵が、モッシユー、シモダとなつて、例の調子で、襲撃して來る。廻らぬ舌で、こちらもやる。辭舌滔々と遣り返へされるのは、向ふも議論するに便利であらうが、猫が時々ちよつかいするやうに、



旅衣あかつき寒き袖の上に梅が香ながらやどる月かな　（敦子）

片言交りで、反對されるのは、餘程勝手が惡いと見えて、ぢれつたさうに、そして成るべく言ふ事を分らすやうに話してくれる。しかし不相變の高聲で、早口である。自分は、一心に聞いて居る。他の客との議論も聞いて居る。自分が後になつて、どうなりかうなり、佛語の話が分り、用を足すだけに言へるやうになつたのも、前に述べた第一第二の方便の外主として、このパンジオン、殊にはマダム、ルノーのお蔭である。



ゆたかなる霞の衣たつ春に人のすがたも習はましかは　（千浪）

△熱心な女權論者

マダム、ルノーは又女權論者である。女子の權利を主張し、その社會的位置を高め、その幸福を增進することを努めて居る。それで常に諸種の集會に出席して、自己の主張を演説する。又自分が主筆兼發行人で、薄くはあるが、月刊の雜誌—體裁からいへば、寧ろ新聞—を出して、集會や、人込みの所に出かけて、それを配布する。それが爲には、自己の安樂愉快を犧牲に供し、他人の堪ふべからざることをも敢行する。或る時數年遇はぬ自分の子が、南亞弗利加トランスバールの戰爭に參加するため、出發するから、巴里の或る停車場で何日何時に面會したいと言つて寄越したことがある。大抵の母ならば生別又死別ともならぬに限らぬことであるから、何は置いても、子に面會すべく、行

くのであるが、マダム、ルノーは行かなんだ其晩は、何處とかに集會があつて、自分が演說することになつて居るから、その方に行くといつて、微笑して居た。一寸日本人には理解できない心理狀態であるが、兎に角自己の主義に忠實なることは、それでも分る。全く男勝りの婦人である。

落伍者の慈母

・マダム、ルノーは斯樣に熱心に自說の主張と、防護とに努めるが、それが唯言論の上のみでなく、自分の力で出來るだけの事は、實行して居る。女子が男子と結婚したために、自己の姓を變じて、男子の姓を名乘るべき理由はないといふので、夫の姓は、バチユエルであるが、生家の姓を名乘つて、ルノーで通して居る。又種々の事情で、生活の落伍者、敗北者となつた婦人が、手頼つて來ると、家が然程裕でない、寧ろ貧しい方であるにも拘はらず、自分の困ることが分つて居ても、それを內に引取つて世話をする。それであるから種々の婦人が來て マダムの懷に投ずるのである。或る時は、女優の落魄したのが來て居た四十近くで、生活の嵐に揉まれた跡を、顏に殘して居るが、昔を忍ばしむる美人の相貌は尚殘つて居る。何時も憂鬱で、人を怨むやうな顏付をして、滅多に口を利かない、人が笑つても笑はず、始終何か考へて居るやうである。さうかといふと又時には、急にはしやいで、機嫌が好く、食後次の室で、歌を謠ひ踊り出すこともある。斯る時には、一同の者は、思ひ



かをりこん梅なき里に住人や嵐を花にいとひそめけん　（泉樹）

設けぬ事業を、耳目に與へるものとして、皆話をやめて、靜粛にそれを見守る。其歌の節廻しの巧みで、聲の美しいこと、其踊る身のこなし、手振り足の運びの妙なること、流石は昔取つた杵柄と、一座唯感嘆の外はない。それが彼の女の心やりであつて、十分謠うて踊つて、氣が濟むと、また元の憂鬱な婦人に歸つて、ミスアンスロピックな目をして、ジロ〳〵人を見て居る。憐れなる敗殘の女優よ　其美貌其技能を以てして如何なる小說的經路を踏み來りたれば、今日の此有樣に到れる。その心には何ものを懷き、如何なる傷を宿せる。女優は、數ケ月の後、忽然去て行く所を知らない。何處かに希望の光を見付けたか、それとも一層の悲境に沈んで居るか、絕えて其消息に接しなかつた。

△敬服すべき婦人

マダム、ルノーは、斯樣に憐れなる婦人を引き取つて、世話をするのみでない。外に在る憐れなる者をも助けようといふので、方々から色々の物を貰ふて來て、それを彼等に與へるのである。それで、我々にも、蝙蝠傘の古いのでもよい、シヤツの破れたのでもよい、何んでもよいから、入らぬものがあつたら、持つて來て下さい、遣りますからと、よく頼んで居た。こんな精神の婦人だから、金錢には極めて淡泊で、パンジオンに、客が一ケ月に何度食べに來たかも、よく覺えてゐない。分らぬ時には、いゝ加減置いて下さいといつて、笑つて居る。それで自身は、甚だ見すぼらしい風をして居る。そしてその風で、何處へでも出掛ける自分の雜誌を配るときには新聞賣りとも見え、集會の世話をするときには、女小使とも見え、手籠を提げて食品の買出しに出るときには、下女とも見えるが、一向頓着しないのである。こんな工合で、マダム、ルノーは、その主義に於ては我々から見ると、隨分突飛な所もあるが、人道のため、婦人の爲めに盡す、精神と、その實行の勇氣とには、感ずるの外はない。一種の女丈夫といつてよからう。マダムルノーは、自分が歐米で出遇つた婦人中の人物の一人である。

春愁の雨孕む風や梅柳



(英吉利の小兒)　(佛蘭西の小兒)　(獨逸の小兒)



子を持つ親の心得

▽此頃の樣に寒ければ小兒は兎角むづかるし手足には凍傷が出來、皮膚の弱い小兒は風邪を引く、是等の事は小兒自ら注意するの能力がないから、よく保護してやらねばならぬ。

▽併し溫かにして置いてやれば風邪は引くまいなどいふ素人考へから厚着をさせる母親があるが是は甚だ衛生を過つたものである、勿論暑くなく寒くなくして置けば申分はないのだが、却々さうは手が屆かぬから何れかと云へば壯健な小兒なら、少し寒い位にして、皮膚を鍛へさせた方がよい、是も素人では反て風邪を引かせたりするやうな事があるから、一番よいのは常に寒暖を加減してやる事である。

▽小兒のある家では夜中に起きるから燈火をつけ放しにして置くが、冬は室内を密閉して置くから燈火の炭酸瓦斯が充滿する、此害は大人には大したことは無くとも小兒には大なる害があるから、燈火は點け放しにせず、必ず消して寢ることゝして、用事の出來た度に點けるやうにするがよい。

▽子供を肌に負つたり、又はねんねこの中に負つたりする親があるが是れは餘程考へなければならぬ、負つて居る間は脊の暖氣と親の着物とで子供は暖かでせうが、下されると俄に寒くなるから風邪を引く故に是非負はねばならなかつたら薄着にして負ひ、下したならば平生のやうに着

(伊太利の小兒)　(墺太利の小兒)　(亞米利加の小兒)



各國の子供

物を着せるがよい。

▽母や姉が子供の爲めに 朝起きた時や新たに襯衣などを着換へさす時又、甚しいのは風呂から出た時などに着物が冷めたからうといふので炬燵や火鉢の火の上に着物を翳して溫めてやる事は、隨分何處の家庭でもよくやる事であるが之れは宜しくない、實は其の肌の冷つとする樣なのを着せるのが、衛生に叶ふばかりでなく、其の愛兒の身に取つても、反つて溫かく感ずるのである。

▽人の全身を包んで居る皮は、恰も網の樣になつて居るが、冷つとする一刹那に、其の網の目がキッと引きしまるから、身體の内部にある溫まりが、外へ出る事が出來なくなり、又、其れと反對に急に溫めますと、網の目がゆるんで大きくなり、隨つて體内の溫さが多く外へ出るから其當座は溫かい樣でも、直ぐに寒くなつて來る、お湯に入つた後でよく湯冷がして、風を引く抔と云ふのは、これと同じ理合である。

▽皮膚は、大事にすればする程習慣がついて弱くなつて來るから着物ばかりでなく、毎朝顏を洗ふにも、可愛相だからと云つて無暗に子供に湯を取つてやるのは、甚だ宜しくない、冷水でドシ〳〵洗はせ、着物も焙らずにズン〳〵着せる樣にして、飽迄も丈夫な皮膚に鍛へあげればならぬ。



母の會と工業の學校

婦人記者

冬枯のひと日明治母の會は高等工業の實習教室參觀を企て、會員一同が同校の應接室へ集まりました。說明はかねて教授のお方に願つて置きましたので、先づ三階の圖案室へ導びかれました。

▲美術工藝の本元

工藝の參謀本部とも申すべき圖案室で



は織物、陶器漆器、廣告看板、表紙等の圖案を生徒が新意匠を凝してセッセと描いて居ましたが、昨年入學した生徒の一組が立派な圖案をかいて居るのに驚きました。中學卒業程度の技術は知れたものでありますのに、專門とは云へ僅か半年やそこらで、かうも進步するのでせうかと教授の方法について質問しますに「別に一定の方法もないが、唯始めに寫生した水仙なりバラなりを丸や四角の圍みの內へ模樣風にはめこみ、それから花瓶とか盆とか固定した物に相當する圖案を作らせる、生徒は互に見合ふたり、古今の參考書譜を見たりするのが進步の助けになると見えます」と答へられる。成程書棚の中にあらゆる書帖が備へられてありました。生徒はニカワを粉畫具にまぜ、硝子板の上でドロ〳〵に練り、百花爛熳

の彩色を施こして居ました。隣室に一部の生徒が美術學校式に塑像を木炭で寫生して居る。平面でない品物の圖案を作るには是非この寫生をやつて凹凸の蔭日向を合點し、濃淡の工夫を考へなければならぬと、敎授は語られました。

▲臭くて熱い製革室

次に入つたのは、ムーッと臭い製革室で、イルカ、羊、小牛、大蜥蜴の染皮や、鰐魚、大蛇の皮が綺麗に並んで居ました。名を聞いてさへ薄氣味のわるい動物も、かうなつたところは、觸つて見たいほど美しい。併しこれまでにする手數は大したもので、毛皮獸のむき皮は、凡そ一週間ほど石灰汁へ漬けて、毛を剃り落すのださうです。丁度仕事着の生徒が小牛の皮を漬槽の中から板の上へ引あげ、細い



棒で毛ぞりをやつて居ましたが、まるで良い剃刀で月代をそるやうにスルスルとそれるのでした。そして剃りあげた皮は、フスマの煮汁へつけて、しみこんだ石灰をおとすのですがこの學校では、鳥や犬の糞を用ゐそのバクテリアの作用で石灰分をとかし去るとのことで、參觀人はこゝへ來ると鼻を掩ふのださうです。石灰氣のぬけた皮は太皷と稱へる器械にいれ、重クロムサン加里と、鹽酸を入れ、小牛の皮位のものなら、三時間位器械をまはし、皮が黄色となつた時、今度は次亞硫酸曹達と鹽酸の液をいれ、又三時間廻轉すると、白いなめし皮となり、これを染めて實用品を作るのださうです、が器機を運轉する蒸氣の熱で、夏は室内が百度にもなるとのこと、こんな勞力を費っ見しますと、ガマ口一つ、手提一つも

おろそかに思へませんネと會員は語りあひました。

▲漆器製造の手數

次に漆工室へはいつて、研出し、平蒔畫、高蒔畫の順序だの蒔畫顏料の說明なぞを伺がひ尙雜貨品には金銀粉の代りに、アルミニユーム粉を巧みに代用することも、銅製や、唐金製のやうに見える藏前ぬりの方法もざつと伺がひました。何にいたせ一寸したお盆でも、九度も漆ぬりの手數がかゝるのですから、實に粗末には出來ぬと思ひました。

▲紡績と力織の工場

織物工場は一番さう〳〵しいところですが、婦人連は一番興味のあるところでせう。紡績工場には、自動給毛機、紡毛機械、精紡機、撚合機なぞがズラリと並んで、ガランドン〳〵と運轉して居る。力織工場でも木綿、毛織、絹布、綜絖リボン、天鵞絨、絨毯などの織機がズラリと並んで見る〳〵内にルーラにまかれてゆく。農夫の仕事を考がへますと一粒のお米もすてられぬやうに、こゝへ來て見ると、柄がわるいの何のと文句が言へなくなります。



▲更紗小紋染室

捺染實驗場には普通の更紗屋式の型紙で小紋細工を實習して居る生徒がありますし、自働型染の器械も盛んに運轉して居ました。これは型をほつたローラに糊をつけ、廻轉の度に布を觸れさせる趣向で、取扱ひ三人で一時間に二千反の小紋や中形が出來るのださうですから、この

器械さへあれば手細工の必要はないと思はれますが、ロール一本が六十圓もする上に、一本のローラで何千反も同じ柄を拵へると、新形と思つて着た婦人もザラに人が着て居るのは壓氣がさすと云つた工合で、矢張樣々なローラを用ゐなければならず、左すればローラ代に追はれて、つまり手製の直段より高くなるので、場合により手細工の方が經濟に上るのださうでございます。

▲水絞りの大瓶

染物實驗場で珍らしいと思つたのは、布や糸をしぼる器械でした、これは大きいかめで、洗ひ上げたぬれ布や、ぬれ切を入れて、蒸氣の力でぐる／＼とまはすと、水分がすつかり分離して、またゝく内にカラ／＼に絞り上るのです。浸染室



で生徒が二十人許り染料の入つたコップの中へ小切を浸し硝子箸で引揚ては加減を見て居ました。友染の染料は凡そ五千種もあるさうでございます。

この他陶器を燒くところや、天然色寫眞の撮影室を見ましたが、時間が迫つたので、鐵工、木工、金屬細工なぞは後日にゆづり、教室の外へ出ますと紅、紫を刷いた夕雲が隅田の川面と堀割の水に反射して一しほの眺めがございました。實驗教室の必要品を積んだ船はこの堀割へ横づけになるのださうでございます。

風俗十二ヶ月



月ヶ二十俗風




二月
日 月 火 水 木 金 土
1 2 3
4 5 6 7 8 9 10
11 12 13 14 15 16 17
18 19 20 21 22 23 24
25 26 27 28 29
二月十一日
紀元節
如月は青陽の春の初め、色香めでたき梅がえの、かつまきそめて諸人の心や春に成ぬらん、春なれや〳〵、遊び戯れ舞ひ謡ふ啼く鶯の春の曲、
實にや昔の春ならぬこの世の氣色詠めなん
衣はる人に雨降る二月かな



歐洲に於ける最新教育法

新式屋外學校

近頃外國の書籍や雑誌に、戸外學校の記事を往々見受けますが、此の學校は、數年前、獨逸に於て初めて試みられた新しい教育法であります。今左に其の大要を譯して見ませう。

劣等兒の取扱法

過去十五年間に於て、獨逸では、種々なる方法を用ゐて、學校衛生に緻密な調査を行つた。特に劣等兒に對しては、非常に注意を加へた。千九百〇四年に、シヤロツテンブルグで、多數の劣等兒が、普通の學校から特殊な學級に編入されやうとする時に、其の身體検査を行つたところ、その兒童の多數が悉く貧血若くは種々の病疾に侵されて居ることを發見した。そこで敎師と校醫は一致協力して、之れが救濟を講ずると共に、劣等病兒の敎育法を考へた。そして校醫は空氣の爽かな、地の清き場所で、衛生的食物と適宜の運動を與へ、嚴しき監督の下に、空氣療養を、行はしめよといひ、敎師は正規の課業を變更して、授業時間を短縮し、一人の敎師が、二十五人以上の生徒を受持つことなく、授業を爲すに當つては、成る可く、自然を利用する事を努めよといひ、茲に初めて、新しい方法の學

校が計畫され、ベルリンの郊外の、シャロッテンブルグに、最初の野外治療學校を設けたのである。

半分の勉强で十分の成績

此の學校は、生徒を敎育すると同時に、身體を療養せしめようとするのが目的であつた。即ち此の學校は身體虛弱な兒童をして、學課に後れしめず、而かも健康を回復せしめんとする一擧兩得の考から起つたのである。從つて、精神上に缺陷あるが爲に、特別の敎育を施さねばならぬ、彼の白痴や低能兒の敎育とは異つて居つた。

其の成績を見るに、此處で養育された生徒は、非常に健康を回復し、體量や體力に急速な增加をきたしたばかりでなく、危險な病疾に侵されて居つた兒童ですつかり平癒したものも少くなかつた。而かも、其の効力は單に、身體上にのみ止らず、智力の點に於ても驚くべき好果を見た。つまり此の學校の生徒は、其の同輩が正規の學校に居つて修むる時間の半分にも足らぬ勉强を以つて其の學力は、普通學校の生徒に比較して後れを取らぬのみか、寧ろ拔んじた成績を得たのである。

戸外學校は敎育に於ける一の革新である。近頃是れ程、社會の注意を喚起したものはない。其の成績の良い事が世間に發表せられたところが、効果の著しいのに驚いて、此の種の學校が獨逸の都市到る處に起つた。

盛んなる此の趨勢は、三年を經ずして英國に波及し千九百〇七年に、英國最初の屋外學校がロンドンに設けられた。その第一期の成績は、三年以前に獨逸で發表されたものと同様に良好であつた。此の成功は英國に於ても、大いに社會の注目を惹起し、大英國の都市到る所に之れが建築の計畫を見るに至つた。

壁のない吹通しの校舍

米國に於ても、亦、千九百〇八年に、ロード、アイランドのプロビデンス市の近傍に、最初の屋外學校が

建てられた。尤も是れより先き千九百〇四年に、ポートリコの、サン、ジユアン市に同じ學校が設置されたが、此れは、全く試驗的のもので、建物も百人ばかりを收容し得る位に過ぎなかつた。

プロビデンスの學校は、床と屋根のみがあつて、壁のない、全くの打通しのものである たゞ雨の降り込むのと、日光の強く直射するのを防く爲に、ウエニシヤ式の日覆丈けは備へ付けてある。しかし此の學校は、病質の兒童の爲に計畫されたものではなく、日光や外氣が、薄弱な人、又病身者に有効であるなら、健全な普通兒にも同様に効能があるにちがひないと謂ふので實行されたのである。而して其の結果は、やはり宜しかつた。そして兒童も亦、室內教授よりも戶外教授を喜ぶので、更に一ツの屋外教場を增設したやうな盛況であつた。



海上學校

千九百〇八年七月には、ボストン戶外學校が設立せられ、同年一月に、紐育にては、渡船の廢船を利用して、此の上で新式の學校を開始した

翌年の夏には、シカゴにも出來續いて諸々に此の種の學校が設けられた。

屋外學校は、最早過去の試驗時代を通り越して、今や動かす可からざる敎育上の既定の問題となつた。

またボストンに於ては、將來新に建築する學校は必ず一の屋外敎場を附設すべき決議をなし、紐育に於ても是と同じく戶外敎室に使用する目的を以つて現に二十個の敎室を改築した。

最近の二大發見は、實に兒童の價値及び屋外生活の効能に存すると云はれて居る。兎も角、數年間に於て此の二點が、世間の大なる注意を喚起したとは疑ふべからざる事實である。

シヤロツテンブルグに於ける景況

前に述べたシヤロツテンブルグに於ける景況を述べて見ると、郊外の大松林の中に、ごく質素な木造の校舍を建てゝ學校を開いたが、初めは九十五名の生徒を入學せしめ、後に百二十八人となり、遂には二百五十人に增加した。是等の兒童は、貧血、肺、心臟、及び腺病の輕症な者が多く、重症の患者や、傳染的の病者は一切入れない。

出校の時間は午前八時前で、生徒が學校に着くと、一同に、スープ、バタ、パンの類を與へ、八時に課業を始める。授業時間は三十分で、後、五分間休憩し、二課目以上を續けて敎ゆるやうなことはしない。そして十時になると、一二杯のミルクに、パンが出る。それが濟むと、生徒は遊戲をしたり、體操をしたり、中には手仕事をする者もあれば、讀書にふける兒童もある。午餐は十二時半で、スープや野菜の外に、三オンスの肉を饗する。午餐後二時間が休息、即ち睡眠時間で、此の爲に毛布や折椅子が用意してある。此間兒童は絕對的に靜肅を守らねばならぬ。三時に猶一回授業があつて、四時に又々ミルク、パン、ジヤミ等を食し殘餘の時間は隨意に費す。六時四十五分には最終の食事を供し、それが終ると兒童は徒步や電車で各〻歸途

に就く。

貧窮な兒童の電車賃は、大方市費に依るが、中には電氣軌道會社が、特別に賃錢を免除することもある。食事の費用は、資力のない者に對しては、市が之を負擔する。

校醫の仕事

校醫は、戸外學校に入校すべき生徒の、檢査選擇を始めとし、兒童の肺、心臟、皮膚、筋肉の發達等、一般に關し、常に注意を怠らない。そして二週間毎に、體重や身長を調査し、特に閉校の際は、嚴密に體格檢査を行ひ、入校當時の狀況と比較する。此の外尙兒童一般の衣服の調節、病兒の日々の擧動、貧血又は神經質者の溫浴、腺病兒に對する礦泉浴の注意等を充分に指揮監督する。

沐浴の効力

沐浴は課目中の主なるもので、一週に二三回、礦泉浴、或は灌水浴に沐せしむる規定である。

最初の學年は三ヶ月間開かれた。すると數週の後、兒童の狀態は著しく變化して、食慾は進み、注意力は深くなり、氣質は一般に活潑になつた。

體重の增加は一學年の間に、平均每週半ポンドで、其の多數は、三ヶ月の間に八ポンド、若くは十ポンド中には十八ポンドも增加した者があつた。是等の生徒が、其の學校を終り、都市にある所屬の學校に復校した後、各學校の報告書を見るに、彼等は以前の學級に歸へり、正規の學課を修むるに少しも差支へ無いのみならず、學課の進步は以前よりは、ずつと良好に向ひ、且つ德育上の進步、所作の變化など注目すべき點があるといふことである。これは騷々しき都會生活を離れ、野外生活の衞生的境遇に移つた當然の結果である。是れと同時に兒童は、學校と謂ふ一家族の一人であると謂ふ觀念を養ひ、而して社會生活に於ては、他人を尊敬し、他人を助けねばならぬといふことを訓練されたといふことである。

私の勉學時代

矢島楫子

△珍らしい太政官日誌

私は今年八十二歳になりますが、私共の若い頃には、現今の樣に敎育機關は備つては居りませんし、殊に私の國は九州の片田舍でしたから、女が學問などする人は極く少なうございました。敎へる所も寺子屋が一村に一二ヶ所あるのみで、學科と云つても僅に女大學や今川の素讀位のものですから、新智識の得られやう筈もなく、まづ假名がよめ假名が綴れるのが關の山であつたのです。そんな處で少し物を習つて、明治四年、私が三十八歳の年に、私は一家擧つて東京に出て參りました。新聞と云ふものゝ行はれたのはこの年からで、その頃は、今の讀賣新聞の先祖でせうが、凡そ半紙一枚位の大きさのを讀んで賣つて居ました。それには太政官日誌と申すものなども載つて居ましたが、當時の人々の眼には實に珍らしいものゝ一つでした。今一つ日々新聞と云ふのもあつて、人々は何れも新聞と云ふものは重寶な物だと云つて歡迎して讀んで居ました。

△時々兄に笑はる

併し其頃は私はその新聞さへ滿足には讀めませんでした。そこで兄の隙を捉へては、「今私が新聞を讀むから聞いて下さい」と言つて、兄の前で讀んでは聞いて貰つて、笑止しい所は正したり敎はつたりして居ました。このやうにして新聞を讀むと、その讀み方がをかしいといふので、傍に聞いて居る兄がこらへ切れずに失笑す事が度々でした。その中に漸々文字も覺え、世間の事柄も少しづゝ分るやうになりかけました。その翌年に小學校令が布かれて初めて小學校が出來たのですが、私はその時どうかして小學校の敎師をして見たいと考へました。それは、家に兄の子が四五人も居つて、何れも小學校に通ひましたが、學校では日々進歩

した教育を授けるのに、家庭では母なり伯母なりが丸つきり無教育で學校の樣子などは少しも知らないと云ふのでは、折角の教育もそれ丈の効果がありません、所謂一方は温め一方は冷やすと云ふやり方では、中に立つた子供が一番困るのです、この學校の教育を充分効果あらしめるには、如何しても家庭の人が新らしい教育の有樣を知らなければならない、と云ふのが動機でした。

△四十になつて初めて學ぶ

そこで、東京府の學務課へ參つて、「私のやうな者でも教師になれますか」と尋ねますと、學務課では、如何かして人々を呼び出し度いと種々考へて居るのに、應ずる人が少なくつて困り切つて居ると云ふ際でしたから、これは年をとつて居ながら特志の者だ、是非盡力して貰ひたいと云ふやうなわけで、双方の希望が合して、私は直ぐそれから講習所へ一年程通ひました。

かうして居るうちに、文明の教育はかやうなものかと少しづゝ分つて來まして、初めて身體を壯健に保たねばならぬ事に氣がつきました、私が今日に至るまで大した病氣もせずに過ごして來たのは、偏へにこの時かう云ふ考を持つて攝生に注意した賜であると思ひますその後私は日本橋小學校に奉職するやうになつて、幼い人々を教へる間に一生懸命學問を勵みましたが、年をとつても志さへあれば學ばれると云ふ信念は益々確かになりました。

早くから志はありながら、その機會が得られないで、四十になつて初めて學ぶ事が出來たのであります。學問は決して或る時期に或る程度迄學べばそれで學び終つたと云ふものではありません。何處迄行つても限りのないものですから、私は生きて居る中は學ばねばならぬと云ふ覺悟で、只今でも隙さへあれば何くれとなく學んで居ります。



乙女ごゝろ

磯千鳥

○

正月の二日は夢の樣に過ぎた。不景氣とは言ふ物の流石に春めいた世間の模樣、美しい着物を着て居られるのも今日一日と何處の女の子も、羽根の影が夕暮の空に見えずなる迄、今日一日の樂を追羽子に名殘惜しく思つた——

其三日の夕暮である。冬の日がどつぷりと暮れて、通の瓦斯の火が青くつく頃、お葉は近所の八百屋で買つた芹を一束提げて悄然と歩いて行く。幾度か水をくぐつた瓦斯織の羽織に添物にでも呉れ相な紐を結んで肩掛もかけずに軒の下を歩いて行く後姿は、派出やかな周圍に比べて誰が眼にも異樣に映つたでせう。けれどもお葉には我身態の見窄らしいのを恥ぢる心は毛頭ない。若し誰かゞ、それを笑つたら「あの秩布縞のがあるのですけど、今年は縫つて頂けなんだのです」と必と平氣で答へたに違ひない。

眞個の處、お葉には美しい春着よりも樂い追羽子よりも…お葉はまた羽子板の押繪を氣にする十四になつた許なんです…それよりも餘計に心にかゝる物がある。と言ふのは去年の秋から寢ても寤めても苦になつて居るお母樣の病氣の事なんで、初は唯腎臟と許り思つて居たのが段々心臟迄惡くなつて『お母さん。此頃お肥りなすつたわ』と喜んで居たのは實は其爲に軀が腫れて居たのだと知れた。

お葉には便にする父親もない。世話になる親類もない――親類はあつても此方の不幸な時には怖い物の樣にして寄り觸りせぬ。死んだお父樣の扶助料で二人が糊口を凌ぐには差支は無いとしても、此物價の高い世の中で病人の滋養分迄には如何して手が廻らう！知合の人達は種々に親切に、やれ白南天の實を煎じて飲めの、鯉を水煮にして辰の日に食べると好いとか言つて呉れるが何れもとんと利目がない『お母さんは何時癒るんでせう』と平常のお醫者樣に此前お藥禮を持つて行つた時一生懸命の思をして訊いたら



『そんなに焦つても仕方がない。隨分長びく病氣だからな』と冷な答であつたそして言足して『藥も藥だが滋養分が第一だ。軀を働かさずに飲める丈牛乳を上げるが良い…』

その滋養に心配が無い位なら誰が氣を揉まう！あゝそれさへ出來たら此妾の軀なんかどうなつたつて…

こんな事を考へながらお葉はとある裏通の我家の戸口に立つた。細目に開けた戸の隙から漏れる火は二分心をお母さんが點したのらしい。色々な道具を置いて

ある狭い庭を勝手元迄行くと買つて來た物を置いて、もう今晩は用も濟んだと濡れた手を拭き〳〵、母の寢て居る間に行つて、火鉢の前に蹲つて寒む相に埋火を掻き起す。此家は亦町の賑さと引變へて死んだ様な靜さである。時々青い火を出して客を滿載して行く電車や、晝の様な瓦斯の光を浴びて賑な方へ賑な方へと足を向ける群衆を今見て來た許のお葉の眼には息が詰る程陰氣に見えた。

「寒むかつたらう」と母は影暗い洋燈の方へ櫛卷の顔を向ける、かと思ふと急に思ひ出した様に「今、村山様からお使が見えたよ。歌留多に入來いと言つて‥‥」

お葉は「さう？」と言つた切り相變らず小さい火鉢に掩ひかゝる様にして火を吹いて居る

「私に心配は入らないから行つてお出で。滅多に無い事なんだから」お葉は母が病氣になつて以來こんな思遣の深い言葉をきくと妙に胸が一杯になる様に覺える達者な間こそ由ない氣儘も言つたが‥‥

「ほんとに私の事は關はないよ。可哀想に、私が病氣ばつかりにお正月と云つても春着一つ出來ず、何處へ遊びに行くでもなし‥‥お母さんは心から濟まないと思つてるよ‥‥」

お葉はもう堪らなくなつた「もうそんな話は言はないで頂戴」と衝と眞暗な表の間へ行つて有合した机に顔をあてゝ心行く許り泣いた。泣いて、泣いて‥‥最初の内こそ母の優しい言葉に泣いたのが段々考は變つて行つて、終には何が悲しいとはなしに涙が出て來る——

外には何時か月の光がさして居る。屋敷町に近い此邊は正月の宵とは言へ人通もない。黑く見える向の椋の木は凩が當る毎にピユーツと、身に沁む様な音を立てる

「お葉。そんな暗がりで何をおしだね」と奥の間から母の聲がする。「お葉！」と再び呼ばれるので其方へ行くと母はお葉の涙の痕のある顔には氣の附かぬ振をして、種々な世間話や、自分の病氣も年が變つてから氣の故かよくなつた様に思ふ事、此様子なら松の内に目

出度床を上げる事の出來ぬとも限らぬと何時になく元氣よく話したそれかあらぬか此二三日はお目の張も出來た樣…と思ふとお葉の心は何時の間にか明るい方へ引入れられる。

「だからさ」と母は言ひ足して「今夜だつて機嫌よく歌留多遊に行つてお吳れの方がお母さんは嬉しいのだけど……」

とこんな話をして居る時門口へ幾人もの足音がして「御免なさい」「お葉さん！」と口々に呼ぶ聲がする。待ち兼ねての先方からのお使と見える。

「歌留多しませう」と一人が小聲で言ふと何が可笑しいのか急にどつと笑聲が起る。お葉の小さい胸は思はず躍つた。

「ほんとに上つても良いの？」

「あゝ良いとも」母は、快く言つた。

かうなると今迄の悲しい思は何處へやら急に輝き立つて「何故そんなに周章てるの」と母に窘められるのも嬉しく、肩掛の無い事等は關はゝこそ「それでは…」といそ〳〵と暗い家を出た。招かれた家と言ふのは同じ町内にある實業家で、毎年三ケ日には歌留多遊があるのに、必と



胸に釘

極度の悲みや憂ひがありました時に、よく人が胸に釘を打たれるやうだとか、胸に針を刺されるやうだとか云ふ形容をいたしますそれに反してうれしい時や安心をしたときには、心がのび〳〵すると云ふやうなことを申しますが、この感覺は、只神經の作用であらうかそれとも何か理由があるのであらうかと云ひますに斯樣な心の激變は、直に運動神經の中樞に影響しまして、血管の收縮を起すのださうです、或は又心臟の筋肉に通ふ血液が妨げられて、一種の痛みを覺えるので、斯うなつて來ますと、腦の作用と心臟の作用とは、相互に原因結果を爲して悪くなるのであります從つて又喜ばしいときには心ののび〳〵するのは血管が膨脹するのであると云ふことです

お葉も招かれるのであつた。無論お葉の家とは身分も違ひ、それに先方のお孃樣が女學校へ入られてからは逢ふ事も稀であつたが、何を云ふにも人數の欲しい遊事故、まあ〳〵お葉さんでもと言ふので毎年呼ばれるのであつた。然しそれがお葉には此上もなく嬉しい。あゝ去年だつた、たつた一枚人のを拔いた、あの鵲の――の札は今年もとれるか知らん。と思ふと何だが耳の傍で鵲の……鵲の……と誰かゞ言つてる樣な心地がする――

『お葉ちやん何考へてるの』と不意に肩を叩かれたのは先方のお孃樣だつた。

下女を交へた一行は遠い〳〵向の瓦斯燈を目標に暗い人通の無い往來を急いだ。

皆樣に尾いてお座敷に通ると此處は亦晝の樣な明るさ床の間に松竹梅を置いた十疊の間には美はしい絨氈を布いて處々に置いた桐の大火鉢には暖か相な炭火が燃えてゐる。暫くすると追々人が集つて來たがお葉の樣な容裝をして居る人は一人もない。どの令孃もどの令孃も今日を晴れと幅廣のリボンをかけてお召と言へば何れも名を知らぬ華美やかな物ばかり。水色の被布に燃える樣な緋の紐、薄紫の裾模樣、疊を掃くかと思はれる程長い袖。ふとの機に得ならぬ香の漂ふて來るのは是がホワイトローズと云ふ物か、お葉は餘りの美しさに隅の方に小さくなつて唯もう、、、うつとりと眺め入る許である。宵の內は小さいお客樣の爲に皆一座になつて他愛もない婆握みや坊主めくりに時を過したがお葉にはこんな簡單な事が反て面白かつた、少し込入つた事になると分らないんだから……軈て一方では歌かるたが始る。お葉も其仲間に混つたが華やかにくづした札の字のどうして人並にとれやう。源平に分れた時『お葉ちやん』は何方についても附錄同樣に取扱はれて一枚か二枚の札を渡して貰ふに過ぎぬ、それが一生懸命で顏をほてらせて守つて居るに關らずお向から拔かれるに決つてるので、勝負が危くなると『お葉ちやんは向のを攻めとくれ』と味方の強い人が持つて行つてしまふ。軈て洋燈の火が人いきれで曇つて、誰の

顏を眞赤に上氣せて見えた頃、仲休みのお鮓やお蜜柑が出る。『こんな事に暇をとるのは惜しいわ』と早く箸を置いた女の方から不平が出た。すると飄輕な此家の書生が一寸待つたと頓狂な聲を出して、急に小聲になつて『もう一つお代を……』とお皿を出す。その樣子が可笑しいので誰しも噴飯してしまふ。――

お葉は、樂しんで來た歌留多もちつとも面白くない。かう皆の人が美しい態をして何の苦もなさ相にして居る樣子を見れば見る程、自分は何だか陰氣な心持になる。それに先刻から頭が痛くて仕方が無いので、新しい勝負が初つても一人火鉢の側に居て他の人が笑ひ犇く樣を眺めた。



『お葉ちやん。妙に鬱いでるぢやないか』と優しく言つて側に坐つたのは此處の奥樣である、頭が痛くつてと言ふと『さう。ぢやお葉ちやんと二人で此處から皆の勝負をするのを見てゝやりませう。幾ら其方が面白いか……』とそれからお母さんの病氣の事なんか尋ねて、未だ治りませんといふとそれはお困りねえと美しいお額に皺をお寄せなすつた。かと思ふと急に用事が出來たのか『まあ此お菓子なりとお喰り』と鉢を此方へ押遣つて置いて奥の方へと入來る。

お葉は所在なげに火鉢の前に坐つて火箸で灰の上にくる〳〵と渦卷を書きながら、あゝこんな事なら來る

のではなかつた、此處で妾達が陽氣で笑つてる間にお母さんはあの陰氣な奥の間で泣いて居られるのではないか。今頃はどんなに心細いだらう。何にも買つて上げる事は出來ぬが、せめて看病丈なりと滿足にするのであつた……と思ふと見詰めて居た炭火が朦朧となつて熱い涙はポタリと灰の上に音もなく吸取られた。あお家が戀しい、家が戀しい。一層の事歸らうか、と見廻しても挨拶をする人もない、此勝負が濟む迄とそつと障子を開けて縁側に出た。

お葉は今晩初て富の羨さを知つた、無論それは我身に美しい物を纒ひたいと言ふ様な羨さでは無い、若しあの人達の紅差指に輝く指環一つでも良い、我物と名のつく身分だつたら、可哀想なお母様に牛乳療法とかもして上げる事も出來たらうにとそれが何より情ない、若しお伽話にでもある様に誰かゞそつとそのお金を懐へ入れて與れたら……

お葉は思はず身慄した

寒い筈だ、美しいお庭には氷の様な月が照つて居る障子は赤い火影の映つてゐるお座敷では勝負の眞最中と見えてそのどよめきが手にとる様に聞える。家内中の人は皆なお座敷に集つてゐられると見えて他の居間には人の氣合もない、唯憚りの傍の部屋に燈火がさして居るのでお葉は物好半分そつと硝子越に中を覗くと御主人の書齋と見えて青絹の机掛の上に空氣ランプが細目について居る。見た事も無い金字の入つた書物やら蒔繪の硯箱、澤々した花毛氈の上に置かれた桐の火鉢には人待顔に櫻炭がいかつてゐる、ふと眼に入つたのは火鉢の横に落ちて居る錢入、それが如何にもう要らなくなつて打棄てゝある様に落ちてゐるではないか。

お葉は彈ちかれた様に後すざりをした

途端に其部屋の中でヂリ〳〵と怪しい音がして置時計が涼しい音で鳴り初める……一つ二つ三つ四つ……九つ打つとひたと止つて後は元の靜さに歸る、お母さん、お母さん、——お葉は何かなしに森で追ひ詰められた鹿の様な心持になつた。もう勝負が終るかも知れ

ない、勝負が終つたら此處へ來る人があるかも知れぬ——今、今、今と云ふ小さい手が後から押してる樣な氣がする。それに今迄氣が附かなんだ硝子障子が恰度我軀を入れる程開いてゐるではないか！

お葉は魔物に手でも引かれてる樣にそつと部屋の中へ入つた……

…………　＊　＊　＊　＊　＊

其後お葉の家では無事な日が續いた。

母の病氣は良くもならねば惡くもならぬ、お葉は是迄の樣に朝早く、隙間の多い雨戸から蒼白い日影がすうとさし込む頃、漸く溫くなつた寢床を出て、凍り附いた井戸繩を手繰り上げて米を洗いだ。そして溫い物が出來るとそれを盆に載せて母の處へ持つて行く

「ほんとに濟まないねえ、こんな事迄お前にさせて……」窶れた母が何時も斯う言ふのがお葉には此上もなく辛い。今迄なら「まあお母さん何搆う物ですか」と泣きた氣持の內にも何處となく嬉しがつたのが其事あつて以來、此言葉を聞くと何故か腸を抉られる樣な心地がする。お葉は何もかも打あけてゐる母に今は秘密を持つ身となつた、恕して下さいお母さん、今迄優しい子、優しい子と言はれて居る妾はあう正直な子ではないのです。限ある暮向だもの玉子一つ餘分に買つても其お錢の出處をどうして知られずに濟まう。一層すつくり打開けて終はうか、それ丈は如



▲獨逸の不自然結婚▼

最近獨逸統計年報を見ると、千九百九年には、男子六十歳以上にして、十六乃至十八歳の少女と結婚せし者二人、六十歳以上の男子にして十九歳の少女と結婚せしもの三人、二十歳の少女と結婚せしもの五人、二十一歳の少女と婚せしもの八人、二十二歳十二人、二十三歳十九人、二十四歳十九人、二十五歳十九人あり女子の老年にして、若き男子と結婚せるものは、其數少けれども、皆無にはあらず六十歳及び六十歳以上の婦人にして二十四歳の男子と結婚せしもの二人、二十六歳の男子と婚せしもの三人二十七歳以上三十一歳の男子と婚せしもの四人卅二歳の男子と婚せしもの四名あるといふことです

何しても出來ない。あゝかの夜の物はあれ切り手も觸れずに納戸の奥に藏つてあるのだが……これが夢であつたら。お葉は幾度も幾度もさう祈つて見た。こんな悶えが心にあると幾らそれを隱さうとしても自然素振に現れるので、吩咐けられた用事をうつかり忘れたり暇さへあれば呆然考へ込む。それに此半月餘りの間に眼に見えての痩せ方、理は知らぬながらに母は痛々しく思ふに

お葉は元々餘り悧巧な性ではない上に、何方かと云へば思切の惡い詰らぬ事に胸を痛める子である。毎晩枕に就くと晝間抑へて居た心配事が一時に出て來て寢返りしても寢返りしても附纏ふ、偶ゞうと〳〵とすると何とも言へぬ恐ろしい夢を見てゐる、

……何だか後の方から黑い影が追つて來る。それと一緒に右からも左からも何者かゞ捕まへに來る、逃げても逃げても……焦れば焦る程足は自由にならず、舌はこはばつて助を呼ぶ聲も出ぬ……

『お葉。お葉！』あゝもう捕へられる——

『お葉!!!』愕として眼を開くと自分の腕を押へて居るのは母である、病氣の母が半身をにちらせて自分を搖り起してるのであつた——

『お葉、何をそんなに吃驚するの』

『はい』お葉はキヨロ〳〵と周圍を眺めてゐる

『何を魘はれてるの』と母は勞はる樣にいふ

『はい』お葉は體中冷汗でびつしよりになつてゐる。よく〳〵見ると六疊の薄暗い間には豆ランプが點いてゐる

『妙な子だね、よく魘はれる……』と母は獨語きながら枯木の樣な衰へた體を再び横にする。こんな晩も屢屢であつた——

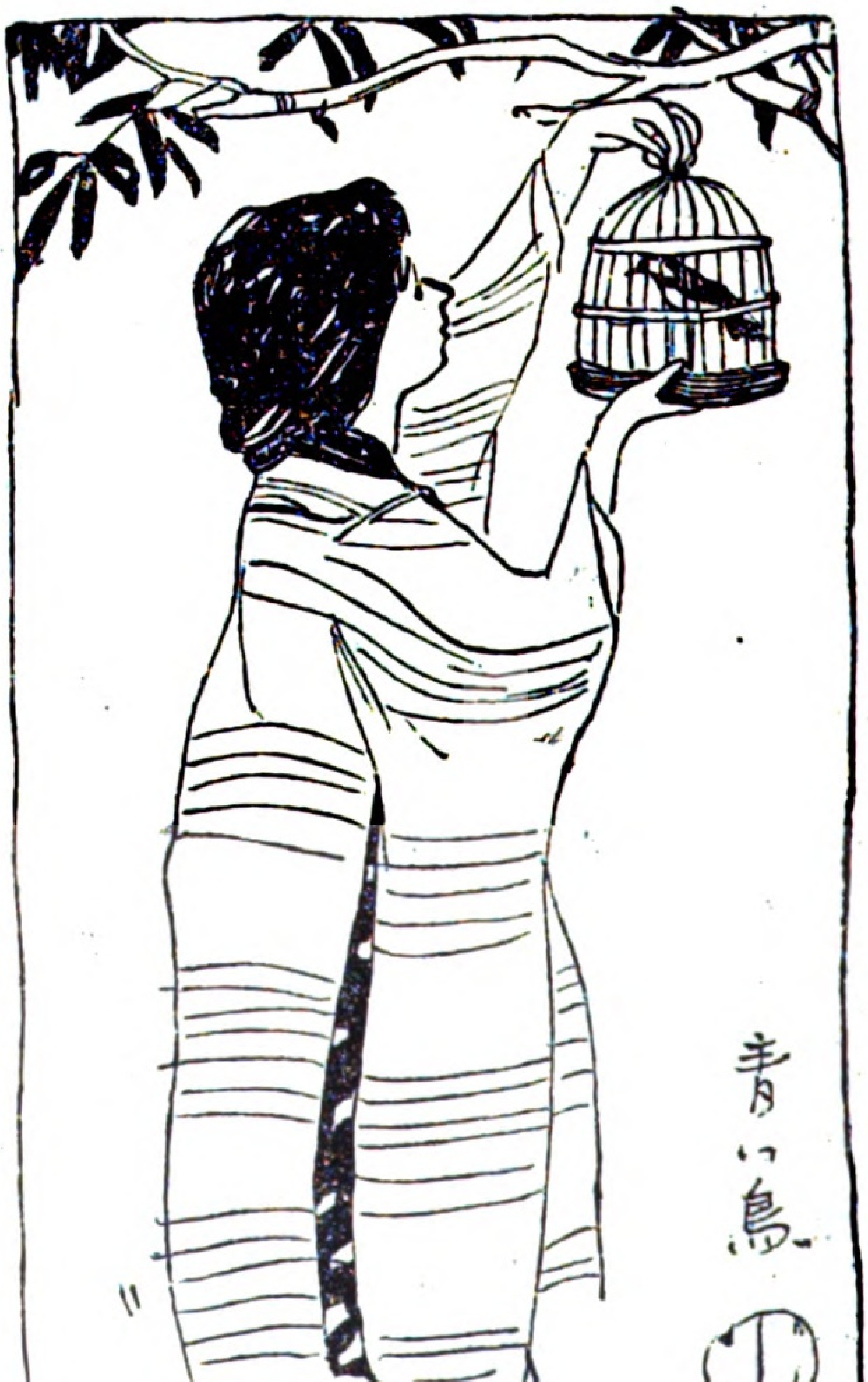
○

斯うやつて陰氣な其年の冬も過ぎて堅く結んだ梅の蕾が少し和ぐ頃となつた。雪解の町は一面の泥濘になつて其處へ日が當ると眼が痛い程ギラ〳〵と光る。

其朝の十時頃屋敷町の村山家の玄關を下女が拭き掃除をしてゐると二ケ月前に紛失した主人の錢入が落ち

て居た。どうしてそれが失くなつたのか又どうして其處へ出て來たのか誰も想像がつかぬ

不思議はそれに止らぬ、お葉の家では諸道具を置いた儘急に母娘の姿が見えなくなつた。あんな病氣で居て、と近所の人は誰しも怪んだが十日程すると親類の者と云ふのが、古道具屋と一緒に來て殘つてる道具を賣拂ふ樣子、餘りの怪しさに物好きな隣のお上さんがそれとなく尋ねると二人は田舍へ參りましたと許り……そして其話を更に聞傳へて近所の人が怖々覗きに行つた時分にはもう古道具屋の車の影も見えなんだ。



軈て町内では誰言ふとなく氣味の惡い取沙汰がせられた。病氣の母親は病を苦にしてお葉を連れて身を投げたのだと。そしてお葉の空家では毎晩十二時過ぎになると異しい泣き聲がすると。

それからあらぬかお葉の家は其後永らく住む人が無い偶ゝ他國から來た人が知らずに入つても廿日と經たぬ内に出て終ふのは事實である。然し幾ら新聞を探しても身を投げた親子の記事の見當らなんだ事も同じ樣に事實であつた。

さうすると矢張りお葉親子は田舍へ行つたのかも知れない、誰も其消息を知る人のない程遠い遠い田舍へと………



繪もの語 常陸帶

太田三郎

かたゞ鮒

近江の國は雁の音のうら淋しい片田の里に、一人の男がありました。琵琶湖の鮒を京に鬻いで、其日々々を貧しく生きて居りましたが、或る時それを内裏へ持つて參りました折、丁度其時簾の隙からちらと洩れ零れた、いまで川の局といふ上臈の姿を、世にも美くしと見恍けて、烈しい戀に陷りました。

併しそれは、宛で雲に梯です。琵琶湖の渚の鮒賣の手は、如何に悶へても到底雲井に近い際に達すべきやうがありません。——尤も男もそれを知らぬではありませんでした。が、さうかと云つて燃えに燃える胸の炎を如何する事も出來ないのです。せめて、せめては斯うした此思ひだけなりと其人に知らせたい。戀の奴は或る日堪へ兼て、一尾の鮒を手に内裏へ赴きました。而して

「下賤の身の洵に畏れ多ふはございますが、此魚をいまで川の君樣へ參らせたいと思ひます。」

と兼て見知つた女房に頼み入れました。

かくて其夕、憐れな戀の川魚は其人の膳に上せられました。局は素よりさうした事など知らう筈もなく、何の氣無しに箸を付けますと、腹に何かしら書いた物があります。で、訝つて眞白い指に取り上げて見ましたが、忽ちはつと顏に紅して、輝く瞳を脂に滲んだ其一字々々に深く注ぎました。其處に揉まれ〳〵た紙の上に、拙ない筆の運びながら然も奔放な熱情の搖ぎが炎となつて充ち溢つて居るのでありました。

鳥は樹に魚は水に、女は情の下に住む。優しい局は深く其文に動かされて、戀に輝く雲の地位と咲く花の權勢とを捨てました。而して熱情の男と蘆の葉そよぐ浦國に、貧しい併し樂しい生を送つたとか云ひます。美くしく又慕はしい女の心ではありませんか。



鴛鴦

尾張の下之鄕といふ處は、昔伊勢路から木曾路に移る中道に沿つて居りましたので、其頃は日に夜に、慌しい驛鈴の響きが絶えなかつたものであります。

或る時の事。此地を過ぎた伊勢伊賀の領主、村中のとある橋に駒を留めて、少時白楊戰ぐ河畔の眺めに耽つて居りましたが、不圖川面に戯れ遊ぶ鴛鴦の群れを見て、引絞る白弓の弦音高く、一羽の雄を射留めました。而して早速それを其日の宿、小牧の旅宿に調じさせて杯を擧げました。

すると、其夜も更けて領主の枕元に來た美くしい女があります。女はさめ〴〵と泣き乍ら、相愛の夫を奪はれた恨みを掻口說き〴〵、軈て傍に落ち散る件の雄の首を颯と取り上げました。と見たのは夢、程なくほの〴〵と夜は明け放れて、渠は其儘關東へ下りました。

其翌年、歸國に際して領主は再び此橋を渡りました。と、川は又澤山の鴛鴦です。白弓は又絞られました。



射られたのは雌でしたが、見るとこは如何に、其柔かい翼の下に、古い雄鳥の首を固く抱き締めて、傷手の苦痛に悶へながら然も猶それを放さないで居るのでありました。

領主は感激の餘、直に其處に一寺を營んで白弓山鴛鴦寺と名附け、其憫しい水禽の心を慰めました。後、寺は絶えましたが、橋は今に殘つて白弓橋と呼ばれて居ります。

男心女心

佐伯といふ人がありました。所領の事で一族と訴訟して、郷國豊前から遙々首都に上つて來て居りました。ところが事件は容易に落着しません。する中に渠は不圖ある美くしい女に云ひ寄つて、わりない仲となりました。併しそれはたゞ長い〳〵一筋道のつれ〴〵に、つひ摘んでみた路傍の花です。軈て下つた裁決が自己に有利な結末を見せますと、男は直に美くしい花を一擲して、慌しう郷里に歸つて了ひました。

可哀想に女は、捨てられたとは夢にも知らず、別れ際の約束を固く信じて、程なく必ず迎への使に接する事と、堪へ難い悲しさの中にも、唯それのみを心遣りに淋しい生活を續けて居りました。が、一度履き捨てられた旅の草鞋は、恐らく再び其主に會ふの期はありますまい。一年待つても二年待つても、將た三年待つても、憧れ侘びる其音信は杳としてありません。慘めな双の袂は日に〳〵濡れ勝るのみでありました。終に

或る時堪へかねて、丁度偶〻筑紫へ下る行脚の僧のあるのを幸ひ、日頃の想ひをこまぐ〜と文にして托しました。

幾月かの後、僧は幾山川を遍廻り遍廻つた末、漸く佐伯の館に到りました。が、折柄男は鷹野に出でゝ家に居ませんでした。文は其妻の手に渡りました。と、別後の情の逢瀬なさに滲む女文字、妻は思はず其眼を光らせました。けれど女を知る者は女です。續々として盡きぬ文の長い恨みは、年月久しい夫の上京に我身も嘗て味つた思ひ、其苦しかつた辛らかつた記憶を思ひ起しては、そゞろに文の主がいとほしくなつて、終に優しくも、如何にもして其願ひを叶へさせやうと思ひきはめました。で、或る日彼女は夫に向つて、

「私の妹が都に在り佗びて此地へ下りたいと云ひこしました。何卒迎への使をお願ひ致したうございます。」

と乞ひました。事の實を云はなかつたのは、それと有りの儘を知らせて、若し我に憚かられでもしてはとの





杞憂からです。願ひは直ちに聽かれて使は京へ上りました。

軈て女は着きました。妻は取り敢へず之を一間に招じ入れて會ひますと、こはそも、輝くばかりの艶やかさです。彼女は同性にして猶思はず我を忘れて見恍けずには居られませんでした。が、それに就けても思ひ回せば、冷やかなのは男の心、恁うした美くしい人をさへ其儘に打捨てゝ顧みぬ夫の、況して薫りも淡い我事などは、あの長い〳〵在京中つひに一度思ひ出す事もなかつたであらう。かへす〴〵も頼まれぬのは男心。然もさうした頼まれぬ心をなほ盤石と頼んで年月を經た女の身の、今にして知る其淺間しさ果敢なさ、覺めた心はぶる〳〵と孤獨の感に戰いて、如何にしてももうじつとしては居られなくなりました。終に彼女は心に堅く或る事を決して席を立ちました。而して夫にはさり氣なく妹の到着と僞つて其室へ赴かした後、黑漆の丈なす髮をぷつりと切つて、窃に薄情の人の家を脱け出ました。

間も無く侍女がそれと知つて、佐伯の館は上を下へ煮え返る騷ぎとなりました。すると都の女も事の次第を精しく聞いて在るにあられぬ思ひ、これ亦無殘にも髮切り捨てゝ、引止むる隙も無く一散に戸外へ奔り出でました。

後には取殘されて男一人。極度の驚愕に今は唯茫然として了つて、土のやうな顔にはいつそもう何の表情もありませんでした。――折柄たそがれ時の沈默は冷たく重く慘めな四圍に襲ひ寄つて、切られたる黑髮と

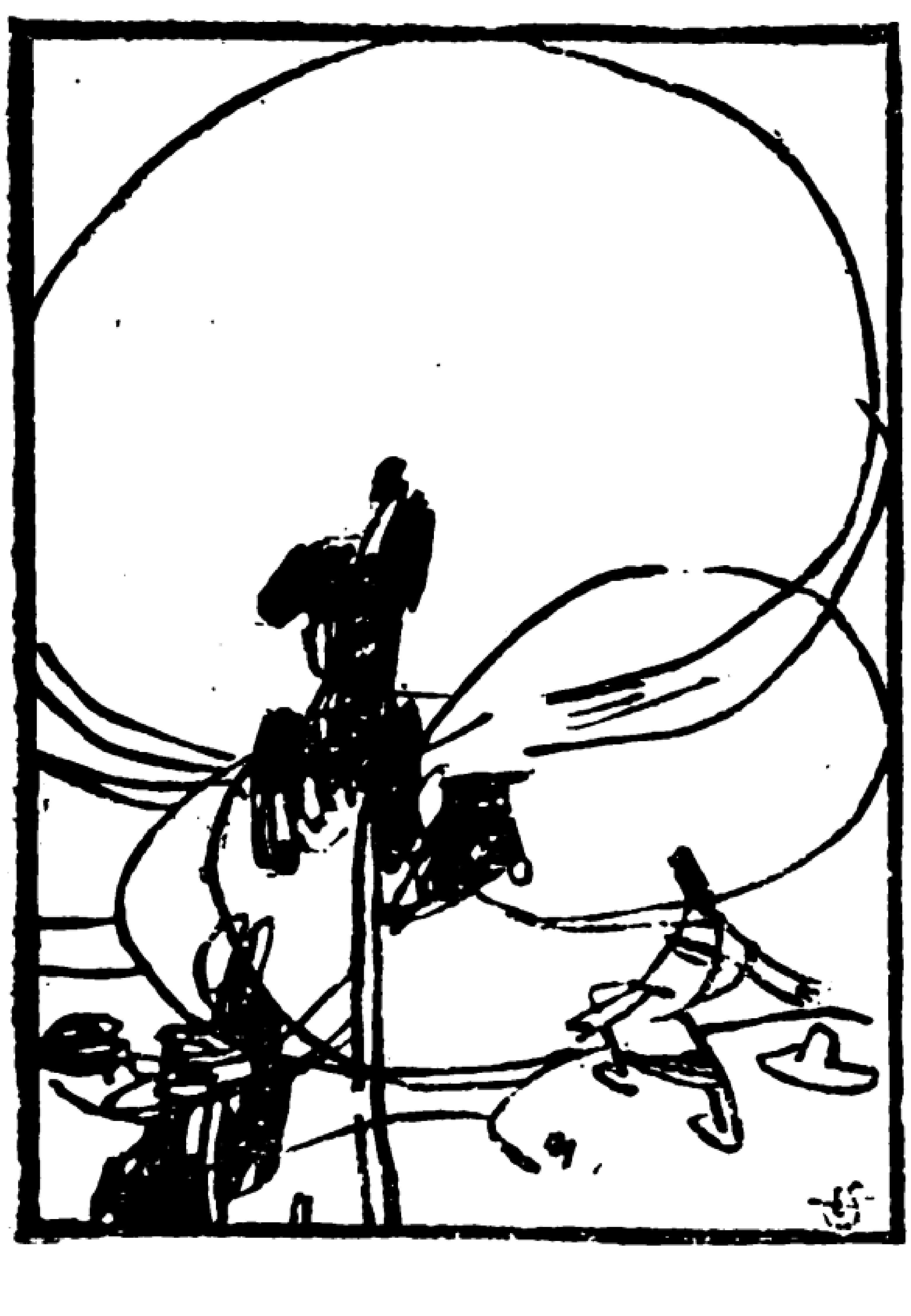
黒髪の其細い毛の一筋々々に、音も無く滲み入るのでありました。

官女塚

何時頃の事か、九重の雲深く宮仕へする者の中に、靜といふ女がありました。よろづに物の懐しい少女心に、其頃繁く禁闕に上下する淡路の小聖と云ふ男を戀ひ初めて、其小さい胸を湧き返る春の潮のやうに躍らせました。處が男は頑なにも其匂やかな心を汲みません。百千に寄する花鳥のたよりに返しもせず、そつと物蔭に引かるゝ袖も、唯膠なく打拂つてのみ過ぎました。果には其艶かしい迫害に堪へ兼て、何處へか姿を匿して了ひました。女はもう身も世もあらず悶へましたが、不圖、其人は和泉國犬鳴山に在ると洩れ聞いて矢も楯も堪らず、終に遙々と其邊へ下りました。

戀の少女は斯くて纖弱い足は崎嶇たる巖徑を彼方此方に迷ひながら、其山深く分け入りました。と、果して道の行手にちらと憧れの影、嬉しやと許り唯一走に駈け寄らうとしますと、折柄生憎湧き上る一團の白雲は濛々と四邊を罩めて、瞬く隙に咫尺も分らずなりました。程なく雲は散りましたけれど、もう其時は懐しい影も形もありませんでした。而して探しても探しても再び其姿は得られませんでした。女は終に、絶望の體を路傍の巖に凭せた儘、冷たくなつて了ひました。

今此山に殘る官女塚、四邊に雲が有ると必ず雨ると云ふ其塚は、乃ち此薄倖の佳人を葬つた處なのであります。



鹿の聲

昔、大和の或る所に年若い夫婦がありました。濃やかな交情に幸多い日を送つて居りましたが、花から花に飛び交ふ小鳥の、移り易いのは男心、夫はふと一度程近い色里に足を入れてから、脂粉の女の濃艶な笑の味に身も魂も溶かし果てゝ、終には我家へ其淫らな女を引入れました。

惨めなは妻です。一重の壁の彼方に添ひ馴れた夫と仇し女との喃々の私語を耳にしながら、身は空しく孤枕を擁して、肌寒い曉方の胸を我とわが手に抱き締める遣瀬なさ、消えがての燈火は隙洩る風に瞬いて、亂れる髪はぶる／＼と、冷たい壁に其瞋恚の慄へを映すのでありました。

と、或る夜、其夜も亦憫れな女は、空閨に一人泣いて居りますと、折柄鹿の聲音が、秋の夜更けの寂寥の中に、うら悲しう響き渡りました。すると壁の彼方に聲して、今の鹿をどう聞いたかと夫の問ひ、妻は直に

われもしか鳴きてぞ人に戀ひられし今こそ他所に
聲をのみ聞け

と許りかつぱと泣き沈みました。と、遽然隔ての襖が颯と開いて、慌しう馳け入る夫はひしと其妻の手を握りました。男の眼には悔恨の涙、女の眼には歡喜の涙、斯くて二人は又もとのやうな夫婦となりました。



紅蒲團被つて寝るや春の風邪　　禾む

花子の一家族



料理食品文盲手引（三）

小泉迂外

△戀のお料理

西洋では毎年二月十四日をヴアレンタイン、デーと申して、戀愛に因んだ一式の宴席を開く習慣がございます。丁度此日の晩餐には柔しい白鳩や、美しいリボンなどで食卓を賑かに致して、面白く、愉快に遊び暮します。

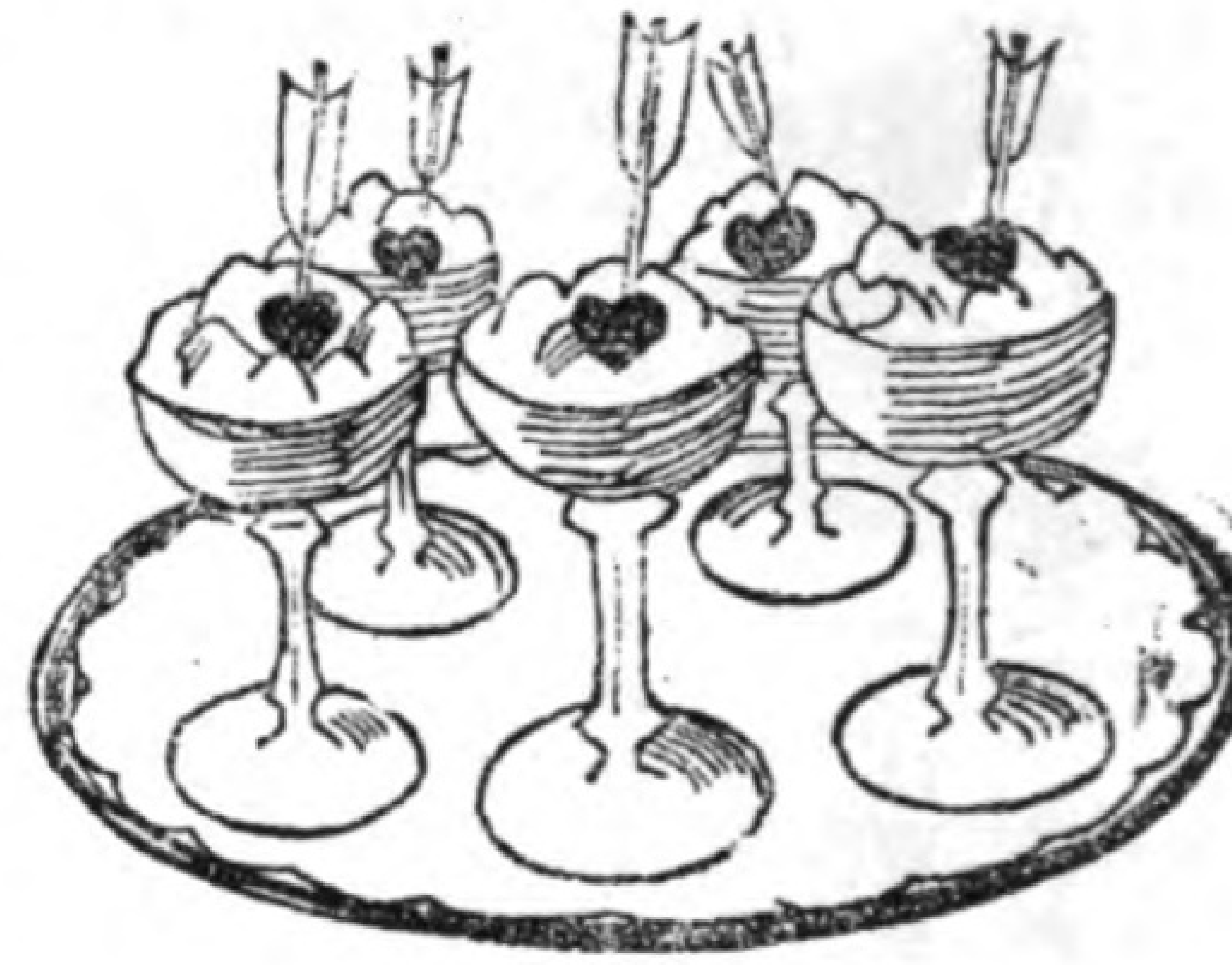
それで其夜の料理にも一種のヴアレンタイン料理と云ふ特別の献立がございまして、一例を申しますれば、俗にキユピツドカツプなど〻名づけまして、酒杯に草苺と巴旦杏のアイスクリムを盛つて、それにハート形の櫻の實と、鉛でこしらへました投箭などを飾ります。

此キユピツトは御承知でもございませうが戀といふのに因んで添へますので、キユピツドカツプに限らず全ての皿にもハート形と投箭は澤山にあしらはれて居ります。

前年筆者の友人が物數寄に此のヴアレンタインデーを開きまして、西洋の風を見せると申すので、招かれて御馳走になりましたが、たゞ見る食堂の天井からは羽を擴げた白鳩を釣りまして、其足には白や石竹色の狹いリボンを長々とつなぎ合せ、食卓には折から相應しい生花が乏しいので、石竹色の薔薇の造花でございましたが、一見して其飾付けの淸洒して居るので、思はず、戀は神聖なりと云ふ感じを繰返しました。

其時の料理は一々覺えませんでしたが、萵苣の葉を添へた小海老や、うみざり蟹の蒸したのや、日本で申す胡瓜揉みのやうな極く淡白な、イキな物許りで、サンドウイツチはハート形に截られて、二斤宛つ石竹色の狹いリボンで繫いでありましたが、いかにも趣味がございました。

在來の雛祭、七夕の星祭と申す純日本の戀のお料理に對し、一種ぐらゐは西洋の戀もお加へあそばしたら



キユーピツトカツプ

面白い御庖丁もなるべき事と、敢てお侑め致します。

△蒲鉾と竹輪

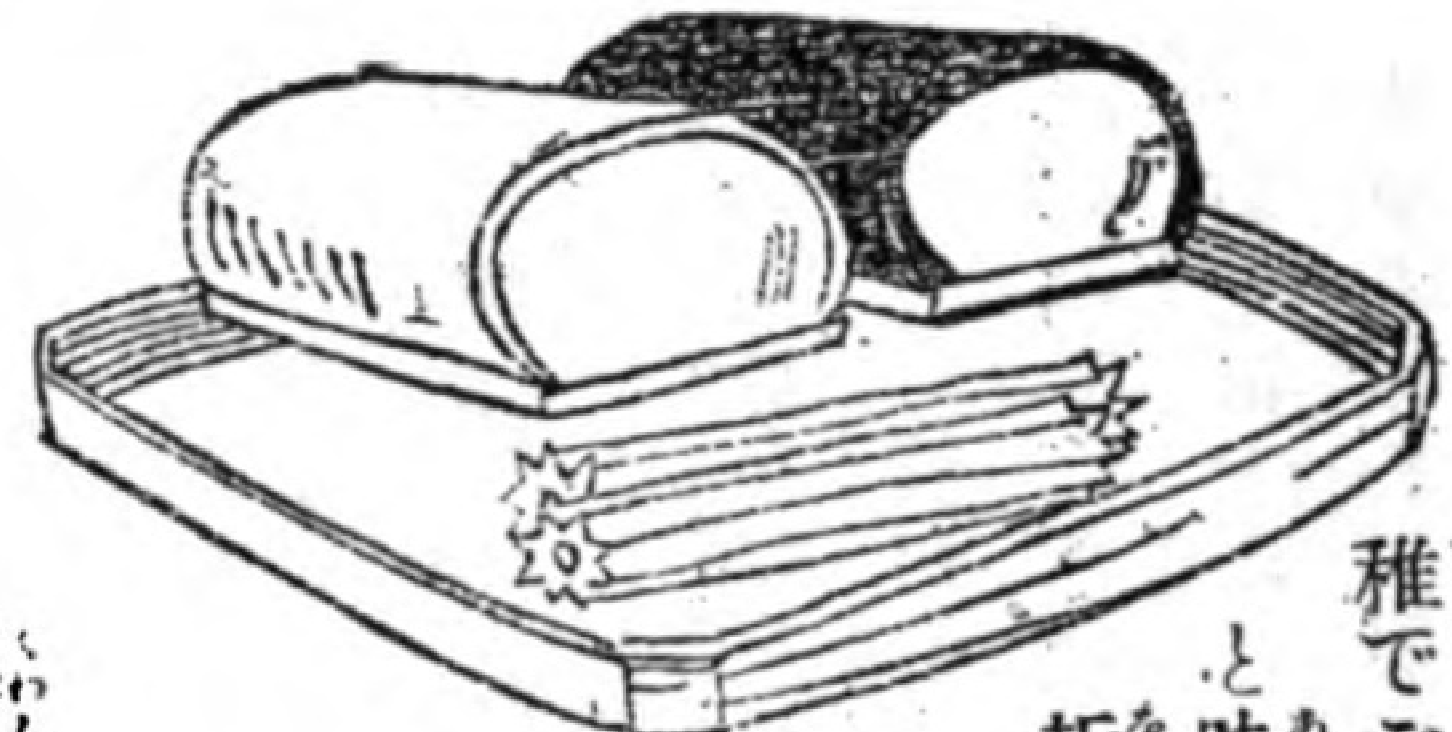
現今一般に蒲鉾と稱へますのは、板の上に魚の摺身を乘せて、ふくらかに蒸したものを指すのでございますが、どうもちと名稱が相應しくないので、よく〳〵詮索致しますと、古への蒲鉾と稱へましたのは現今のでは無く、現今で申す竹輪といふのが其の原體でございました。竹輪は御承知でもありませうが竹に魚の摺身を卷き付け、蒸し又は燒き目を付けますので、其の形狀が恰も蒲の穗に似て居る處で蒲鉾とつけられたのでございます。それがいつの頃か變つて名實伴はぬ奇觀を現はしたのです。

先輩の話に、邏羅では現時盛んに此の蒲鉾の竹輪をつくられて居るとの事でございます。思ふに暹羅と我國とは古へから交通が開かれまして、元和時代は一層親しくあつたので、或は彼地から其の製法を傳へられたのではないかとも考へられます。殊に當時の開港場たる和泉の岸和田、攝津の兵庫等が、蒲鉾の名產地であるより推してもさうかとも思はれます。

一體此蒲鉾といふものは日本料理、殊に儀式張つた献立中には是非つきもので、維新前には割烹店などでも隨分其製法を嚴ましく吟味致したものでございますが、其つくり方がちよつと手數のかゝりますので、現今では一般に割烹屋自身ではつくらず、魚河岸の專門に商ふ店から取寄せてお茶を濁ごして置きます。

しかし此魚河岸製の蒲鉾は滋味くはございますが小田原や靜岡に比較べまして、製法が幼





稚でございますので、宵越しになりますと味が變る事があります。よく土産の折詰を翌朝開いて、蒲鉾がベタ／＼致したり、汗をかいたり致すのは全く品も粗いのにもよりますが、製法が不完全な爲めでございます。

△南蠻菓子

菓子といふ名は、極く大昔に榧の實や、梧桐の實、栗、桃などの凡て木の實を食用としたところから稱へたのでありますが、鎌倉時代に支那から渡來した禪宗の和尚さんが點心から脫化して蒸菓子の法を傳へたので、其れから、羊羹とか或は饅頭とかゞ現はれたのです。

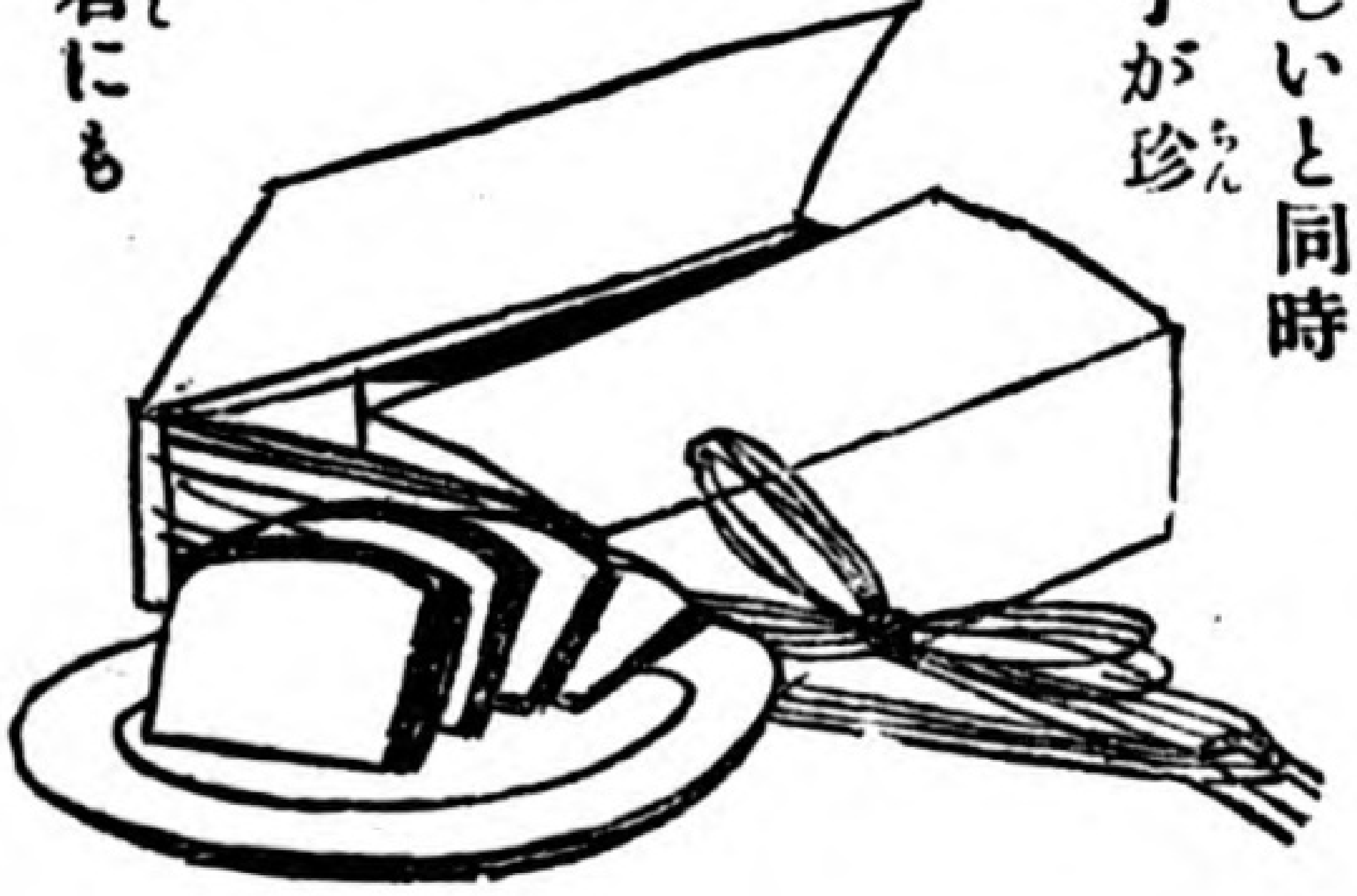
南蠻菓子といふのは慶長、元和の頃、即ち外國貿易が盛んに行はれた際、初めて輸入された西洋菓子で、金米糖、アルヘイ糖、カステラ、カルメラ、ボール、ハルテイ等が當時『南蠻菓子』として持囃されたのでございます。

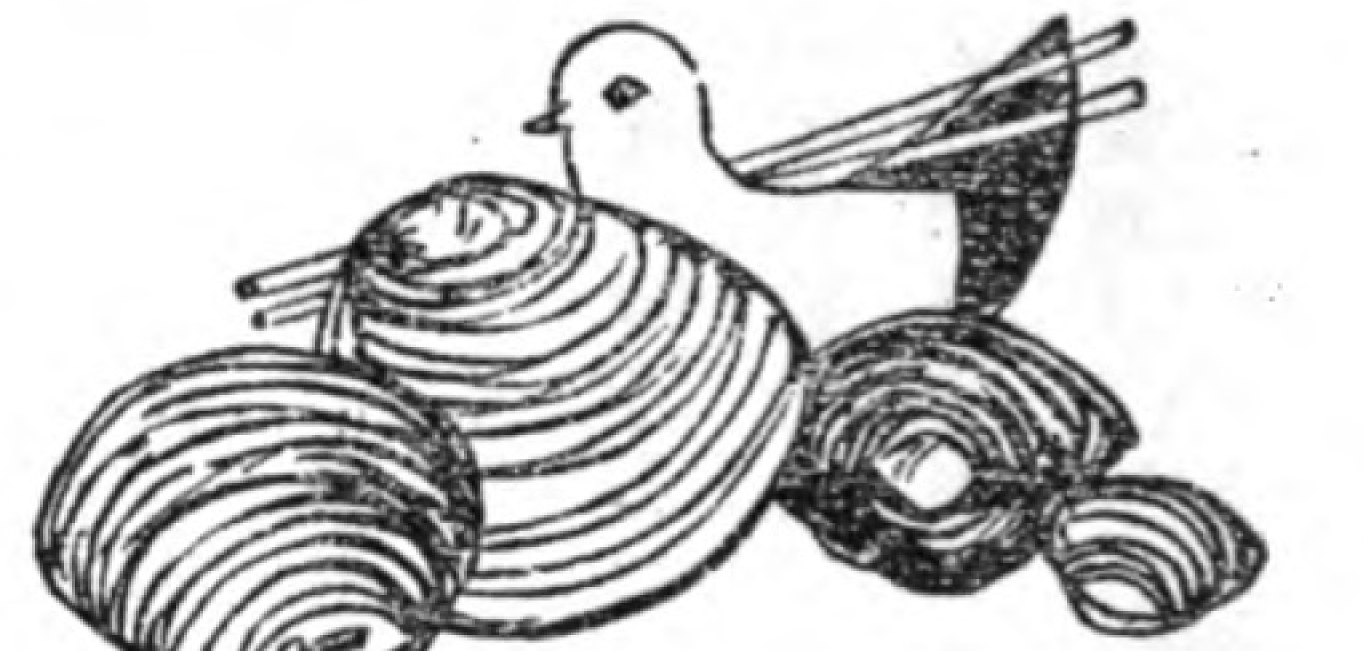
嬉遊笑覽に『南蠻菓子はぼうるの類なるべし、萬治年間振賣の物の内にあり』と出て居ります處を見れば、其時代には、もはや江戸市中を賣り歩いたものと見えます。元祿七年に出版されました『七車』といふ俳諧の書に、

　忘れては精進落るカステイラ　　介我

といふ付句がございますが、元祿時代に巧みに外來語を材料としたのは頗る珍らしいと同時に、いかに舶來物の南蠻菓子が珍重されたかゞ解ります。

一體此のカステイラは西班牙の地名Castillaに起原して、例のCasteel. Broodの略語だとも申し、又は葡萄牙語のKastellaとも申されますが、どちらが正確だか筆者にも





ちよつと解りかねます。

昔は長崎が所謂南蠻菓子の本場で味も濃厚くございましたが、風月堂がカステラを作るやうになつて、すつかり日本向きに直し、淡褐色の輕淡を主として、種々苦心の結果完全なものを製へ上げたので、彼のベルツ博士は製造後一日を隔いて少し乾燥したものが消化し易といはれたさうです。

△茶の湯の菓子

嬉遊笑覽に『茶の湯の口取に煉羊羹、うば玉などは紅粉や志津磨始て製す、寛政の頃よりなり』としありますので、其以前は何を口取に致したかと、其道の人に伺ひますと、德川の初期には大名などの茶の湯には搔餅位を用ゐたとか申されます。

して見ますると昔は極く質素であつたと思はれます。徒然草に『最明寺入道鶴が岡社參の次に足利左馬入道の許へ先使をつかはし立いられたりけるにあるじまうけられたりけるやう一獻にうちあわひ二獻にえひ三獻にかひもちひにてやみぬ』とある處を見れば、昔は搔餅を酒席の客に侑めたとも見えます。

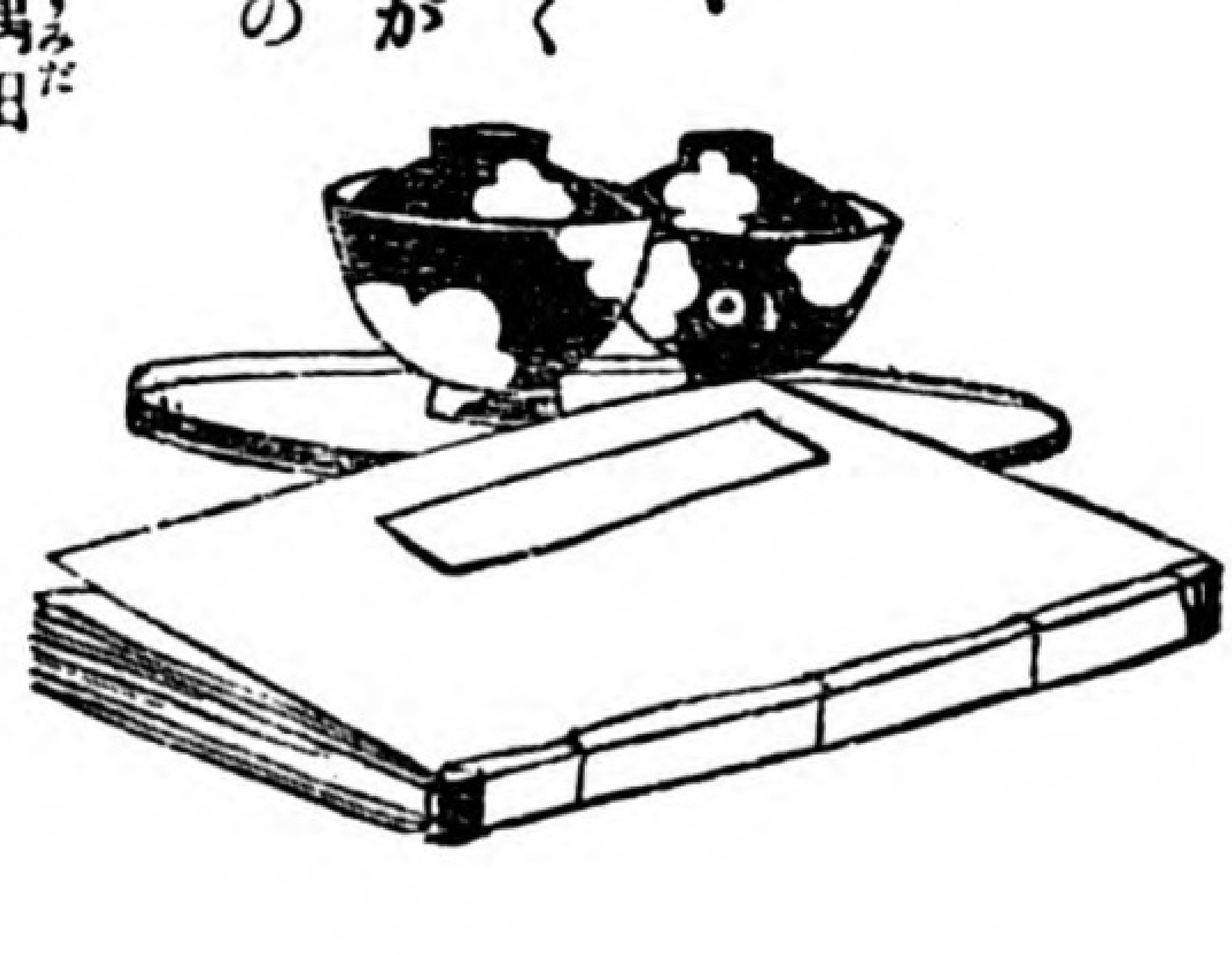
京都の料理屋で現今でも通しにかきもちを出す家がございますが、京都のことですから、やはり茶から來た風習でございませうか。

△業平蜆

蜆掘る淺草川や春寒し

とは、先輩知十氏が舊作で、二月時分の春寒の氣分が、よく蜆掘の情景と相俟つて、さすがに江戸趣味の先覺者は巧いものだと、いつも推服致します。

御案內でもありませうが、隅田川は古來から蜆が名物で、其地の料理



屋で出す蜆汁は一種特別の味がございます。それは隅田川で採り立ての業平蜆を用ゐるからと申すのは無論でございますが、邊鄙の土地ですから植半に致せ、八百松(水神)に致せ、又は入金に致せ周圍の風物、光景が、此の素朴で、俳趣味のある蜆汁としつくり調和致すので、やかましく申すと、味覺以外に視覺と聽覺と滋味さを助けるのでございませう。若し此の蜆汁が都鳥の影も浮ばぬ新橋、乃至日本橋邊の、隣座敷には三味線、太鼓が聞ゆるといふ料理屋でしたら、決して滋味しいと申す程にはまゐりませんのは受合でございます。

此の蜆汁とお芋と燒鳥は昔も今も隅田川の名物として向島に於ける料理茶屋の大なる誇りでございませう。

△氣轉料理法



西鶴一代男所載

日本へ初めてアイスクリームの製り方が輸入された時、ある老人が一口啜つて、ア、痛い菓子だ！と匙を投り出したといふ滑稽は一つ噺に殘つて居りますが、之れは又其れに似て却て非なる夫人の頓智料理の御話でございます。

恰も目下のやうな餘寒の烈しい頃でございます。筆者の懇意な友人でございますが或夜、非常に大醉して、遲く歸宅致しましたが、生醉何とやら申しまして此男の通癖はいくら醉つて歸りましても必ず又飲み直さなければ納らぬといふのでございますので、夫人は胸を痛め乍らも早速に酒を侑めましたところ、何しろ深夜の事で、これと申す肴もなく、且つは大醉致して居るので何をがなと案じました末、ハタと膝を打つて、早速の吸物をつくり、侑めました處、主人は渇を覺ゆる時でございましたので、急いで之を吸ひますと、冷かで甘味があり、中の種を嚙みますると齒も浮く許りの冷さ

で、いかにも醉後の口に適ひ、珍らしく夫人の手際を賞賛致して、さて此生體は何ぞと訊ねましたところ、夫人の曰くに、もはや滋味しき料理は外にて充分召上つていらつしたので、何を差上げてもお氣に入りは致すまいとぞんじました處、幸ひ軒先きの氷柱が目に入りましたので、其れを砂糖水にし差上げました。と振つた答辯。

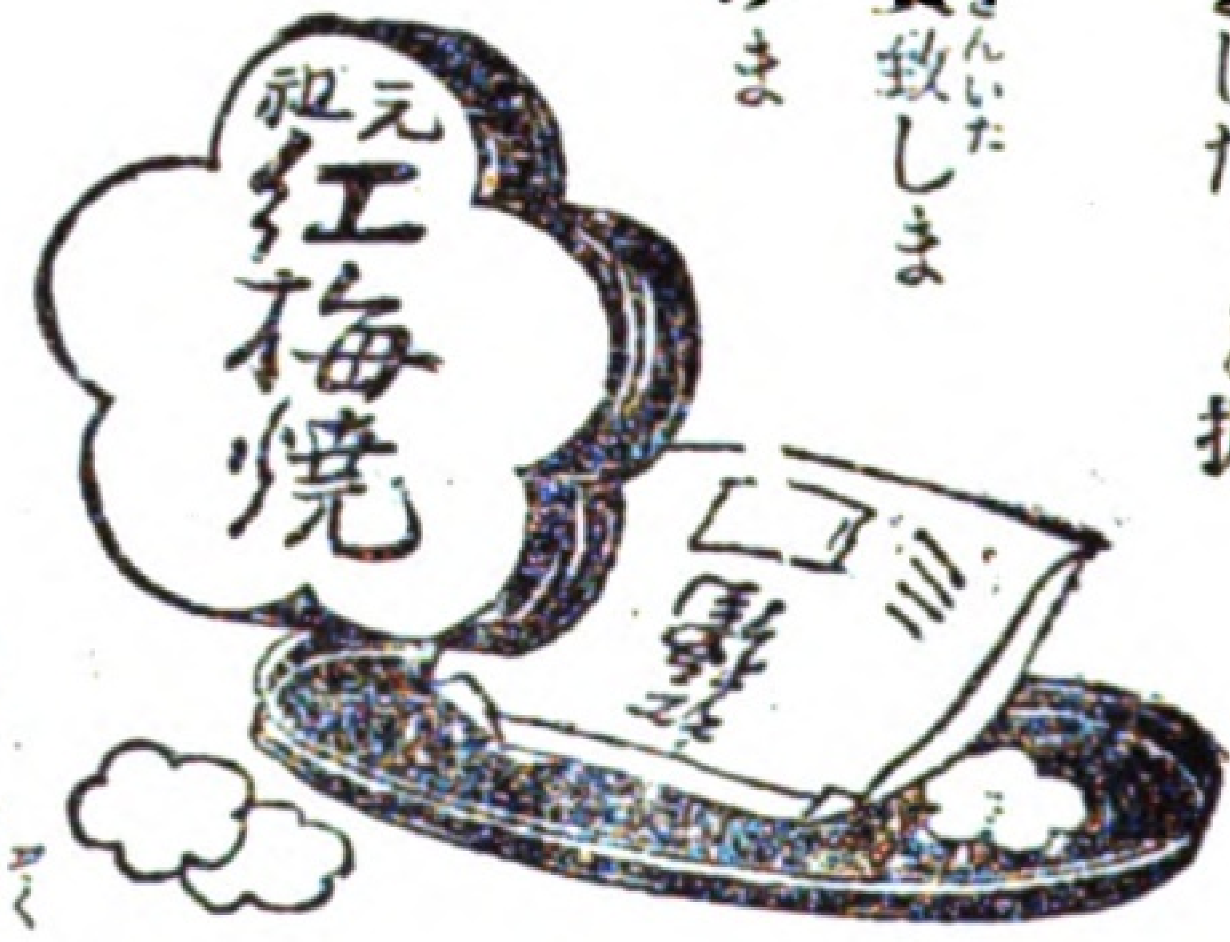
其後親しく其夫人に會つて御手際を賞賛致しましたところ、ナニ彼れは古い料理本で讀みましたのを應用致しましたゞけとの御謙遜は、何んと奥床しいではございませんか。

△饂　飩

元祿の其角といふ人の句に、

うどん屋へ行く念佛なり夜の雪

といふのがございます。雪空に途をゆく者が、ア、寒い〳〵南無阿彌陀佛〳〵と、覺えず口の中で念佛を唱へ顫えながら饂飩屋の暖簾をくゞるといふ情景が、僅に十七字の裡に描きだされてゐます。



現今では饂飩屋といふのが尠うございますが、極くの昔は蕎麥屋といふものが無く、皆饂飩屋で傍ら蕎麥を賣つたので、今と反對でございました。

坪井博士の『看板考』といふ書によりますと、昔の饂飩屋の看板には必ず櫛形に切りさいた紙をつけまして恰も刷毛のやうなものを軒に釣るし出したやうでございますが却々趣味がございます。現今でも御油、赤坂邊では此の看板を用ゐて居るといふ事です。

それから『西鶴の一代男』の挿畫にいも川うどんなどゝいふ看板が見えますが、之れは參州芋川は饂飩が名物である處から寫しましたので、俗に現今ヒモカハ饂飩と稱へますのは、此芋川を誤つて傳へられたので、種彥の『柳亭筆記』に『ひら饂飩を今紐革といひ賣るは惡し、地名の芋川を訛しなり、其形の似たるをいはゞ革紐とこそいはめ、紐革といふべきいはれなし』と、例の考證を謂はれて居ります。

丸輪の中に三の字を染めた暖簾をかけます、俗に丸三うどんといふ店は、今でもよく場末や新開地に見受けますが、此の營業主は大概三河出身の人で、即ち郷國の名物を侑めますので、斯やうな看板を掲げるのでございます。

△十三番目

西洋人と會食致す際に、極く内輪の懇意な方は此の限りではありませんが、二十人なり三十人なりが公の食卓を一緒に致します時には、其十三番目の席は皿を俯向けに致して空席となし、又日本風の料理でも御馳走致します時は、座布團をはねのけて、空席と致し置くものだと、さる西洋通から御話を伺ひました。

と申すのは、一體外國人は大概キリスト敎の信者でございますから、十三番目の席は非常に忌み嫌ふのでございます、その譯は、御承知でもありませうが、キリストが十字架に上らんと致す前宵に、ヨハネを初め十二人の弟子晩餐會を開きましたところ、折ふし十三番の席はキリストでありましたので、さてこそ斯樣な御幣を擔ぐ次第でございます。

△紅梅燒

どなたも御存じの淺草名物紅梅燒は、現今では仲見世に本家を初めとして四五軒看板を出して居りますが、そも〳〵の元祖は、弘化二三年（今を距る六十七八年前の頃、田原町（淺草）の出はづれ、即ち廣小路の入口の右側にさゝやかな假店をしつらへ、梅花の形を取りました看板を出して夫婦で此紅梅燒を燒き出したのでございます。

ところが當時店先で燒き乍ら、熱いのを賣るといふのが人氣に投じまして、非常に評判なところから、此眞似をして各所で是を賣やうになつたのでございます。

元來此紅梅燒は香餅と稱へまして、うどん粉に砂糖を交へ、炒さんしよを細く致して混せたので、香餅と紅梅と音の似通ふ處から、江戸一流の訛と洒落を聞かして紅梅燒とされてしまつたのでございます。

さま〴〵の女の上

尾崎恒子



○

自働車に、馬車にお俥に、都大路の風を切つていらつしやる森律子さん、お綺緻のお美しいのと、お如才のないのとが、時代の人のお氣に入つて、あらゆる方面の人達から歡迎されていらつしやる律子さん、あの方などは、ちよとお見受け致した處では、なんのお泣き遊ばすやうな事などは、夢にもないやうでいらつしやいますけれど、人は見かけによらぬもの、あの律子さんでも、やはり人知れず悲しい涙に、樂屋の袖をおぬらしなさることもあるとか聞きました。去年、校友會で、鈴木とかいふ舊友に逢つて「鈴木さん、女優なんて淋しいものよ、昔しは律ちやん〳〵と仰しやつてあんなに仲よく遊んで下さつた三條さんも、今ではもう赤の他人同樣、殊にお附きの方なんどは、そりやアひどいのよ、此の間、舞臺から三條さんのお顏を見ましたので、おなつかしく、思はず、につこり致しましたら、お附きの方はね、こはい顏をして私をにらめて直ぐと三條さんのお手をとつて席を立つておしまひな

さいましたの、私、口惜しかつたわ、世間では、まだ私達をそんなに、いやしいものと思つてゐるのでせうか、私は樂屋へ入ると、もう〳〵堪まらなくなつて、ひとりで泣いてしまひましたの」と、律子さんは、昔しの友の前に、心の悲しみを、お訴へになつたさうでございます。

新時代の新藝術家、帝劇の呼物となつて世間に幅を利かしていらつしやる律子さんでも、さうした情のためには、お優しい、お可愛らしい無垢なお孃さんでいらつしやいます。

○

親しんで見ればなんでもない、普通の人でも遠くからは不思議に見える人が多いものでございます。私の存じてゐる高村清子(變名)さんも、その一人で……

目黒に近い上大崎に、表門は大抵閉ざしたなりになつてゐる別莊風の家がございます。時には二弦琴の音が洩れ聞ゆることもあるが、それもほんの一年に二度か三度位なもので何時もひつそりとしてゐます。家の主は皺くちやの御隠居様かと思ふ方もありませうが裏の畑道に、地味な束髪に小紋の羽織、護謨草履を引つかけて、散歩してゐる姿を見れば、中肉中脊のおとなしやかな、上品な中年増の美人なので、附近の者は、皆な不審の眉をひそめてゐるのでございます。そは高村清子さんなのです。

つと見ると、清子さんは上品な、おとなしやかな風ですが、那處か、ちよと仇ッぽい容子が見えますので或は藝妓上りのかこひ者だらうといひ、未亡人だらうともいひ、又或人は女學生出の高等○○だらうなどゝ餘計な評判を立てゝゐる人もありますが、清子さんはさうした人ではない。といつて、清浄無垢な淑女でもないのです、清子さんに内所に、清子さんの總人を描いて見ませう。

「今では伊太利に居らつしやる、お兄さんから、月々の仕送りを受けて、何不自由なく暮してゐますが、五六年前までの清子さんは、それは〳〵小說のやうな日暮しをしてゐたのです。清子さんは仙臺の舊士族の末

娘で、十六の春、姉さんが縁付いてゐる家を便つて上京、紫紺の袴に、リボンをかけて、一ッ橋の某女學校に通ふ身となつたのです、ところが其の年の五月の末、清子さんは、いつものやうに、學校から歸つて來ますと、御主人夫婦は不在、家には下女と書生、それと義兄の弟で法律學校に通つて居る朝雄(變名)といふ男だけだつたのです。清子さんは二階の部屋に入り袴をぬいでゐますと、清ちやん、今日は姉さんも兄さんもお留守だよ、と其處に入つて來ましたのは法學生の朝雄さん、無邪氣な清子さんは、さうですつてね、姉さんがいらつしやらないと淋しいわね、と袴をたゝんでゐますと朝雄はいきなり傍へ寄つて來て……………………十六歳の少女、何も知らない清子さんは、たゞ怖ろしさに泣き入つてしまつたのです。法學生さんは、清ちやん勘忍して頂戴、と泣いてゐる清子さんにあやまつたさうですが、後の祭でした。



其後は別に何事もなかつたのですが、丁度學校が夏季休みになる頃から、清子さんは、胃病のやうな、脚氣のやうな、變な病氣になつたので、急いで戀しいお母アさんのゐる仙臺へ歸省したさうです、身體はますます惡く、醫師に診て貰ふと、妊娠だと云はれたので清子さんよりもお母ア樣の驚きは一通りでなかつた。何も知らない清子さんは、只だ泣くばかりでしたが、やつと五月の事を思出し、それをお母アさんに明かすと、お母アさんは泣いて口惜しがつたさうです。

十七の二月には、清子さんはもう人の母となつたのです、女心は斯うしたものか、人の母となつて見ると夜毎日毎に戀しくなるのは、その子供の父親で、清子さんもツヒ數日前まで、泣いて口惜しがつてゐた朝雄を今度は自分の方から戀するやうになつたのださうです。そして無分別にも或夜こつそりと、乳呑兒を抱いて、家をぬけ出で惡い戀しい東京の朝雄の許へたづねて來た。清子さんの運命は此時から不思議の淵に入つたのです。

自分から郷里をぬけ出で、男を慕つて來た清子さんは今更再び家へも歸られず、一週間ばかりは、朝雄の下宿に同棲した。その中に清子さんの手にはめてゐた純金の指輪を賣つて呉竹の根岸の裏通りに親子三人で小さな哀れな家を持ちましたが、清子さんは新世帶を持つた初めの日は、今まで知らない嬉しいやうな、嬉しくないやうな氣がしたとやら、日の重なる次第に清子さんの持物はなくなり遂に一斤のパンで親子三人は一日の饑をしのいだ事もあるやうに爲つた。その年の十二月、赤兒は急病で死んでしまひました。

何んと云ふ男でせう？その後の朝雄は、清子さんの血を絞つて、自分一人は溫かいお酒を飲んでゐましたが清子さんは、此の惡くい、否、可愛ゆい朝雄のためには、如何なる犧牲を拂つても惜しまざるやうになつたのは不思議でございます。遂に、ある老人の妾とまでなされてしまひました。朝雄さんは、そのお金を懷ろにした儘、何處へか姿を隱して仕舞ひました。それから清子さんは種々の男に貞操を賣つたのです。此

の事は郷里のお母アさんは知らず、伊太利に渡つてゐる兄さんも固より知つてゐるわけはありません。やはり純潔な少女、無邪氣なる妹と思つてゐたものださうです。

その中に三年は夢のやうにすぎて、丁度彌生の春、伊太利にゐた二番目の兄さんは久し振りで歸朝した。純潔な少女と思つてゐた妹の此の爲體を聞いて、慟哭して悲しみました。四方八方に手を廻はして、清子さんを救ひ出しました。そして親からも親類からも世間からも見すてられた清子さんを此の上大崎の閑靜な高臺に安全に住はしたのです。



清子さんの兄さんは、どうかして妹を眞面目な清淨な女にしたいと、いろ〳〵骨を折つていらつしやるのです。内外に交際の廣い人の妹さんですから、縁談は雨のやうに降つて來ます。或は百圓取の銀行員、或は何省勤務の法學士など、それは〳〵舊の清子さんにしても、不似合とも思はれるやうな良縁があつたのです。恰かも此時那邊をどう探がして來たものか清子さんを惡魔の淵に

陥れた朝雄は、ひよつこり、清子さんの前に現はれて來た。今では立派な辯護士となつてゐるのです。鬼の如き朝雄は佛顔して昔日にかへつてくれと迫つたさうです。

心の弱いやさしい清子さんは、喜んで、それでは改めて正妻にしてと應じますと、それは出來ない、最う僕には妻も子もあるから出來ないと拒んださうです。清子さんは、泣いて無情を訴へますと、「貴樣には一生良人を持たせない」と凄い科白を並べて歸つたさうです。最う一度繰り返します。此の朝雄は某地方で有名な辯護士さんなのです。

此の朝雄は、なんといふ男でせう、何處までも清子さんを苦しめるのでせう？　それよりも解せないのは、清子さんの胸の中です。清子さんは、そんな、鬼のやうな男を今でもなほ、戀してゐるのです。木枯しの風に寢つかれぬ夜半など何時もあの根岸の侘住居の嬉しかつた昔日を思出し、泣いて昔しの朝雄を戀しがつてゐるのです。

○

ずつとむかし十年前の話說。私の家の前は、某侯爵家の古風なお邸。朽ちかけた御門につゞく練塀の上には樫の老樹が枝を並らべて、薄暗らい片側町の往來を一層さびしくしてゐます。

侯爵樣は先年おかくれ遊ばし、まだ三十路のお美しい御未亡人と、おわすれがたみのお姫樣お一と方、それに前々殿樣の御愛妾お二た方、今ではお上通りの御隱居樣で、お年も七十近く、お二た方とも、もう尼樣姿になつていらしつて、お名さへ秋芳樣、貞秋樣と申し上げていらつしやいます。それから故侯爵樣の御令妹で、千代姫樣とて御病身故に生れて四十年來お屋敷の御門の外へは、一歩もお出まし遊ばしたこともないといふお可愛相な、お美しいお姫樣。百萬石の御殿奥深く、あの有名な中納言樣のお孫姫樣、御丈夫でさへいらつしやいますならば、宮樣へでも、おこし入れ遊ばされるお身の上を、おいたわしいかな、この御病氣故にと、お育て申あげた老女は、朝夕袖を絞つていら

つしやいますとか……
お世とりのお姫樣は、お鼻の高い、お目の長い、人形も及ばぬお色白の、美くしい姫樣。ブランコがお上手で、そしてお繪がお好き、唱歌もお好き、いつもお庭で、お女中相手に愛らしいお聲でうたつていらつしやいます。お髪は稚兒輪に紫のお召物、御通學にはお氣に入りの「初」といふお女中がお供をしていつもお俥。
お天氣の良い夕暮などには、姫樣はよく御近所へ御運動にお出遊ばします。御左右に、二人のお女中が赤いほうづき提灯にあかりをつけて、それに縞の袴の御家來がお附き申て或時は不忍池のあたりまでお出ましになります。日曜日の朝は大抵御佛參。その時は、定まつてお馬車お若い御母堂樣と御同乘の事もあり、又老女や、「初」とお合のりの事もあり、何かお面白さうにおはなし遊ばしながらいらつしやる事もおありでございます。



これは丁度十年前の事でした、古風なお邸も今はすつかり改築されて、古い欅の御門の柱は花崗石に代り、暗い樫の木は、切り倒され、地味な御玄關前、又はお馬廻しの植込みは、跡もなく、すべてハイカラ風になりました西洋館のお車寄の左右には四季の千草は美くしく。赤

い提灯とお嬉しさうに御散歩を遊ばした姫様は、去年恩賜の軍刀に名譽の青年士官、陸軍歩兵中尉侯爵様の令夫人、今年お五つの若殿様のお母君様でいらつしやいます。御發明で御交際お上手で、御同族中の御評判もよく、邸内でもお情け深いお優しい御夫人様とお末の末のものまでが皆な敬慕していらつしやいます。

それにつけても、おいたはしいのは、御病身の千代姫様で、夜會に自働車走らす此頃を昔しの儘に、お邸の奥深く狂つた玉琴、千代紙や畫はがきなどを無上の友と、彩なき月日を送つていらつしやるのでございます。

○

私は祖母と二人で銚子の曉鷄館に泊つた晩でございました、枕に近い濤の音高く、日頃不眠症の私は、一層寢つかれず、夜の一時頃、一人汐湯に入り何の氣なしに鏡の前に立ちますと、氷のやうに澄んだ鏡の面に冷然と、浮き出たやうな自分の裸體の半身像……を見た時私は我れ知らず恐ろしくなり、後をも見ずに座敷に歸りました。夜の鏡は、ほんに物凄いものでございます。

○

代々、畫家の家に生れた歌川若菜さん、お幼い時からお畫がお好きで、お父様の畫室を一寸も離れた事なく、女子美術學校では、あの有名な川鍋曉翠先生のお筆を學び、又寺崎廣業先生の御門に入り、今では閨秀畫家として、御渡英なさつていらつしやいます。

歌川さんは、お話上手な方で、時には、お柄にもない大袈裟な、ヒマラヤ山を丸飲みにしたやうな突飛な事も仰つしやいますが、それが却つて面白い、派出な御氣性を現らはして、お可愛らしいお方でいらつしやいます、四十五年の櫻の咲く頃には、かねて相愛の方と御結婚あそばすとかで、正月頃から、そろ／＼そのお仕度遊ばしていらつしやいました。私はその時は何をお祝ひ申ませう、ブローチ、花束、否、あなたは大きなものがお好きだから、中央金庫にお熨斗をつけてお上げ申ませう、などゝ或る先生の畫き初めの夜、互

ひに笑つて、お別れ致しました。それぎりお目にかゝりませんでゐました。眼先きに女史渡英の新聞記事を見たのです。次いで帝國ホテルで送別會があるとて、若菜さんの周圍は騷ぎました。若菜さんは、此の四月には御新婚あそばす筈であるのに如何に藝術のためとは言へ、お許婚の旦那様を棄て、おひとり御渡英遊ばすとは、まアどうした事。一度おたづねしてみやうかしら、と思つてゐました中に歌川さんは鳥の立つやうな騷ぎで、その月の廿日頃には、最う故國をあとに、全くお一人で、日本を立つておしまひなさいました。



その後、私へは、そよとのお便りもございませんが、某先生のお宅で、歌川さんは、四五年は彼の地でお暮し、立派な女にならなければ、日本へは歸らないといつて、いらしつた、と伺がひました時、私の胸には、悲しい〳〵詩や歌や繪が畫かれて、そのお言葉の裏面に描かれた悲劇が目に見えて、歌川さんの御渡英遊ばした理由も、すつかり讀まれたやうに覺えました。若菜さんの、その時

のお心持ちは、どんなでしたらう、溫かいお附様にも分れ、師にも分れ、友にも分れて、獨り異郷にさすらひ、せめては藝術に、お胸にきざまれた心の疵を自ら慰めて、淋しい女の一生を送らうと、御決心遊ばしたまでのお胸の中は、どんなでいらつしやいましたらう、と思ふとお可愛相で〳〵お氣の毒で…私は若菜さんの御成功を、朝夕、かげながら心に祈つてゐます。

男の方は如何かは知りませぬが、一と度、戀を失つた女は、大抵昔しの人が忘られず、一生淋しく暮らすものでございます。

婦人と子供の樂園

歐羅巴では、日本は小兒の樂園だといふ。けれども實際は小兒は哀れなもので、家の中に小兒の室といふものがあるではなし、家から出て見たところで小兒の遊園地があるではない。仕方がないから往來で遊ぶと電車に轢殺されるといふ有様である。却つて巴里などへ行つて見ると、巴里こそ小兒の樂園であるといふやうな感が起る。これは倫敦へ行つても起らない。たゞ巴里へ來て暫らく居て見ると始めて起るのである。それは倫敦でもその外の歐羅巴の都でも、小兒大供の遊び場處に事缺かぬ設備はちやんと出來てる。出來ては居るが巴里ほどに小兒に利用されて居ない。巴里へ行つて見ると、小兒が嬉々として到るところの公園地で遊んで居る樣が目につく。われ〳〵日本人に目につく許りでなく、英吉利人も亞米利加人も、小兒を遊ばして喜びながら見て居るのが巴里人の特色だと評して居る。一面からいふと佛蘭西人は大きくなつた小兒で、年は取つていつ迄も小兒の心を失はない、小兒と大供と一緒になつて、無邪氣に遊んでる樣は、餘所の見る目も羨ましい。

歐羅巴の都人士の中で、一番よく小兒を了解してるのは巴里人で、小兒は彼等の心の喜びである、只巴里人の弊は小兒を飾り過るにある。小兒を玩弄物にして居るのだと云はれても仕方がないほどに飾り立る。よくカニーシとか、ブルドツグとかルールーとかいふ小さなたちの犬をいろ〳〵に飾り立て、寶石まで附けて連れて歩くのが、上流婦人のみえになつて居るが、小兒をやはりこのブルドツグ扱ひにして居るのではないかとさへ思はれる事が無いでもない。十三四以上の娘になると、日本と違つて、ずつと質素な服裝になるが、小さな娘の兒になると、われ勝と飾り立るので、なか〳〵物入が少くない。

併しかういふ風に飾り立られた巴里の小兒等が公園に遊んで居る有樣は實に何とも云へぬほど綺麗で、小兒好の人などだと、一日小兒等の遊ぶのを見て居ても決して飽ない。巴里婦人の服裝の粹で綺麗な事は伯林や倫敦を見て來た人のいつも驚くところだが、驚くのは婦人の服裝ばかりではない、小兒等の服裝も全く同じである。獨逸や英吉利の小兒を見て巴里の小兒を見ると、田舍の小兒と都の小兒ほどの相違がある。それほどに巴里の子は綺麗で可愛らしい。



諸國名婦傳

黒頭巾

第一、賴山陽と諸名婦

其一

◉吾輩、嘗て、京都に往き、東山に、賴山陽一家の墳墓を展して、感慨に打たれし事あり。山陽一家、夫妻、諸兒孫の墓碑、墓田を同じくす、また文壇の一佳事、既に、人をして自から低頭、香華を捧げしむるに足る。就中、山陽妻小石氏の墓碑に、其の貞節を官より旌表されし事を錄するもの、一種の異彩、人目を惹く。

◉山陽は、家庭の主人として、頗る細心の處あり。生前、豫め身後の計を爲し、彼の妻兒をして活計に苦しまざるだけの遺産を留與したり。此の如きは、彼の平生に照して、寧ろ、世人の意外に感ぜし點なるべし。

◉蓋し、此の如き世帶の不自由無き家庭に在りて、未亡人が、貞節を以て表彰さるゝ如きは、世間稀有の事たらずんばあらず。

◉山陽の嗣子、支峰、詩も文も出來、書も亦た乃父に酷似し、父業を繼ぎて經史を講じ、山紫水明樓を維持

す。維新の初、召されて大學に出仕す。唯だ、乃父の光焔無しと雖も、僅かに家聲を耻かしめず。

◉支峰の弟三樹に至つては、乃父の學問無しと雖も、才藻、氣焔或は其の上に出で、書も亦た乃父よりも氣韻の流動するあり。

◉名家、二代相繼承することも容易ならず、三代家聲を揚ぐるに至つては、世間稀觀の事に屬す。山陽の父、春水よりすれば支峰、三樹は其の孫に當る。

◉頼家三代繁榮の本を考ふるときは、則ち山陽妻小石氏の墓碑に向つて、其の婦德を稱讃せずんばあらず。

◉春水の妻、山陽の母、梅颸女史は、また儒林の名婦なり。梅颸女史の日記、其の才藻を、併せ見る可し。

◉梅颸は、飯岡氏、名は靜、二十歳の時、山陽を生む。女史の妹、名は直、梅月と號す。尾藤二洲の妻也。此の姉妹は、共に當代の儒宗に嫁して、ともに內助の功あり。然れども、此の姉妹の性格は、必ずしも相酷似せざりしが如し。

◉春水と、二洲とは、一は嚴格、一は瀟洒。一は道學先生にして、一は通儒の風あり。此の姉妹も共に、其の夫君の人格に感化せられしにや。

◉山陽は少時、江戸に出で、二洲の家に寄寓したり。彼は、叔母婿より、經史の學識を啓發されしと共に、叔母の世話になりし事も少しとせず。二洲は寛政三博士の中にても、道學趣味の、最も少き人にて、才識も最も秀で、俗氣を脫し、人格の高かりし人也。

◉山陽は、梅颸を母とし、梅月を叔母とし、此の姉妹の家庭敎育を受けたる人也。此の姉妹と、小石氏との三人者は、頼家三代の聲名を發揮せしめたる原動力なりといふべし。

◉祇園の夜櫻を賞する人は多けれども、其の、直ぐ山上の、頼家の墓域を弔ふ人は少し。吾輩の往きしとき、歳晩、雪交りの寒雨に、落葉地に貼して、殊に蕭寂の感を深くせり。而して、小石氏の墓碑に對し其の淑德の傳ふ可きもの多かるべきを思ひ、敬意を表して去れり。

其二



◉山陽の詩、才媛に關するもの少しと爲さず。十二媛絶句あり、紫式部、淸少納言、祇王、佛、常磐、鞆繪、千手、靜、尼將軍、梶原婦、勾當內侍、楠母を詠ず。彼の古美人の月旦と、彼の女性觀とを見るべきもの也。

◉山陽は、紫式部には、御堂關白が『望月の、つ、ねに圓滿なりと思へる身にも、彼女を得る能はざりしは萬事に、一事を缺くものなりといひ、淸少納言には、其の能く白樂天を諳記するを稱揚し、才媛の中の李義山ともいふべきほどの、隨筆、評論の才ありと賞讃せり。

◉彼は、巴を詠じては、粟津の一戰、垓下の項羽に勝るところありといひ、千手の情のやさしきを稱へては、可憐胡蝶眞情種、一觸春風戀牡丹。といひ、靜御前には、賴朝の雄風に、草木悉く靡くに、唯だ、此の柔荑一草の撓め得ざるものありしを言ひて、其の貞烈を揚ぐ。

◉彼は、女性の才情を喜ぶと共に、つねに、力を極めて、其の勇氣と貞烈とを賞讃するを怠らず、彼の詩に入るもの、非常の才女に非ずんば、則ち稀世の烈女也。

其三

◉山陽の詩に、東海餛女、九歲にして、筆蹟に妙に、遂に入洛して、光格天皇の御前に、揮毫し、

菊花紋章御盃を賜はりし事を記するの詩あり。其の父の依囑に應ずるなり。

◉鯤女は、山陽遺稿に東海女史と記す　越後の人也。東海女史は其の號也、最も草書を得意とす。其の遺墨、なほ往々、北越に存す。

◉鯤女、稻葉氏。岩船郡小邊里村の人。父は行衞、醫師也。六歳ごろより書を能くし、其の父、携へて江戸に出で、名を著はし、後ち、また父に隨つて上洛せるなり。

◉山陽は鯤女の光榮を記するの詩五篇あり、其の中に、宮女如レ堵擁ニ練裙一、爭觀玉腕揮ニ千軍一。簾前落レ墨龍顏笑、五色雲間別起レ雲、又たいふ、纖々五指走ニ秋蛇一、賞賜磁杯玉絕レ瑕、天澤和レ霜堪ニ潤筆一。中揷十六瓣黄花。此の少女の揮毫を見んとて、宮女の君前に集り玉へる光華の情景と、恩賜の御盃の菊花章と、ともに、此の詩に依つて、此の少女を萬古に傳ふるに足る。而して、女史の筆力、また尋常閨秀の才筆の比に非ざるを見る可きものあり。

◉聞く、維新前、西鄕隆盛、越後を遊歴して、村上藩に來り、藩士本間石塢の家に泊す。石塢、家藏の書畫を出して示すに、隆盛敢て留目せず。ひとり鯤女の書をば繰返し見て、頗る之を愛するものゝ如し。石塢乃ち其の一幅を割愛して隆盛に贈るといふ。

◉吾輩、未だ鯤女の事蹟を詳かにせず、彼女が、何歳ごろまで生きて揮毫を續けしやを知らず。然れども、山陽に賞められ、南洲に好かれし彼女の筆蹟には、必らずや彼女の人格の美の表現せるものあるならんと思ふ。

其　四

◉山陽遺稿に、玉蘊女史の鏡に題するの詩あり。女史は畫を以て著はれ、今も、備前より備後までの地方には其の筆蹟の存するもの少からず。

◉玉蘊は、山陽の少壯時、彼と相愛の人たり。彼女は、山陽に追隨し、其の才名も亦た山陽に依て知らる。

◉此の二人者の關係は一時、文壇の話柄たり。吾輩曾て、岡山に於て、學者の一束を見る。其の中に、彼女

の性行を記するものあり。彼女は、後ちに、山陽を忘れて、伊勢の少壯俳人を慕ひ・終に、去つて商賈の婦と爲り、畫筆を拾つ。才女なれども氣魄無し。其の書中に、彼女を評して『文壇の歌妓』といへり。

◉詩人梁川星巖が、常磐御前、雪中に、牛若丸等諸兒を携ふるの圖に題するの詩、世上に傳唱す。他年鐵枴峰頭險、叱咤三軍是此聲は則ち是也。而して此の圖、玉蘊女史の描くところといふ。



其五

◉山陽は二十歳の二月十五日に、廣島の藩士御園氏の女を娶る。名は淳、十四五歳。何故にや、琴瑟和合せず。彼遂に家を捨てゝ脫奔す。

◉此間の情實、森田思軒の『賴山陽と其時代』に、詳かにせずと云ひ、近ごろ、木崎好尚の『家庭の賴山陽』には、稍ゝ之を研究したるも、尚ほ其の眞事實を得るに至らず。

◉山陽の少年時は、才氣横溢して、其の性行頗る無檢束なり。此の如きは、天才肌の文人に有り勝ちの事にして、中年以後の山陽とは全然別人たるかの感あり。

◉或はいふ、廣島地方。今に至つて早婚の弊風あり、まだ少女の香の失せやらぬ容顏に、重々しく丸髷を戴けるもの多し。山陽の初婚の失敗は、其の父母が、強ひて彼をして早婚せしめたるもの也と。

●或はいふ、山陽は、新婦御園氏の、家格を、鼻にかけたるが、癪に障はる事あれども、父母の授けたる妻、如何とも爲し難く、遊蕩に托して、其の意中を暗示す。然れども、又た遂に之を離縁す可らざるの事情あり、彼の直情徑行なる、遂に自から脱奔の已む無きに至れるもの也と。

●吾輩は寧ろ後説を取るべしと爲す。舊藩に在りては、男子の二十歳、女子の十四五歳。必ずしも早婚として驚く可きに非らず。然れども、山陽の出奔は、尙ほ、他の事情あるべしと想ふ。

●山陽と玉蘊と相識りしは、粗ぼ此の頃よりの事ならん。然れども、彼も、遂に、彼女を以て其の好逑と認むるに至らざりしなり。

其六

●山陽の詩中に、極めて其の才情を賞揚するは、細香女史なり。將レ遊二嵐山一細香至といふ詩に、將欲レ看レ花君恰來、相携明日即佳期。滿懷喜氣眠難レ著、起見春星帶レ屋垂といふもの、如何に、彼が、女史の知己なるかを見るべし。女史は文壇に馳聘し、詩書畫三絶なり。

●細香の文苑に在るは、一家を爲し、其の態度、殆んど男子に擬す。諸名家と詩酒徵逐し、其の行動も、男子に位して忌避するところ無し。山陽及び武元登庵に隨つて、嵐山に遊び、共に旗亭に宿する等の事あり。山陽の詩に、「山色稍暝花尙明、綺羅分レ路各歸レ城、詩人故擬落二人後一、呼レ燭溪亭聽二水聲一」

●細香女史、江馬蘭齋の第二女。名は多保、故にまた裊々と書す。字は綠玉、初め箕山と號し、後ち細香と改む。天明七年、大垣城下の藤江町に生る。彼女は、少女たりし時、父に請ひて終生を文藝に委せんことを誓ひ、文久元年九月四日、七十五歲にして歿するに至るまで、其の長き生涯を、處女を以て畢りたり。

●小原鐵心は近世、大垣の人物、而して重大事の起る毎に、必らず女史の意見を聞きしといへば、女史の人格も、想見するに足るべし。

●女史は風貌淸秀、外面如菩薩にして、內面は鬚眉男兒の意氣あり。其の一たび決定するところは頑として

操守す。西濃人物誌に、山陽、彼女の才を愛し、婚を求めしも、女史、獨身生活の初志を貫くを期して之を拒絶し、乃ち、贄を執りて彼に師事す。山陽も亦た其の志操の高きを敬し、心を傾けて之を敎ふと記す。

◉女史は、美濃の詩運に關係すること少からず。梁川星巖等と白鷗社を結び、また別に、咬菜社を起して、其の社長たり。詩集を湘夢遺稿といふ、山陽在世のとき、其の刊行を勸めし者あれども、謙遜して之を固辭す。

◉細香の父、蘭齋、蘭醫の一大家也。而して彼が、前野蘭化先生に入門せしは四十七歳の時に在り。平生、精力過絕、砣砣として書を讀む。つねに、家人に語りて、吾若し病みて、飲食を廢すとも廢れず、讀書を廢せば危からんと言ふ。斯の父にして、此の女ありと謂ふべし。



◉蘭化先生、吾が近世、文運開發の一大恩人也。其の初めて蘭書を見るの時、即ち四十七。他日、蘭齋入門の時、其の年、また先生と符合す、先生、之を以て蘭齋を奬勵し、且ついふ、唯だ勉强以て進め、年の早晩を問ふこと勿れ。

◉此の師弟は、互に堂を築くとき、之を敬愛して、情誼藹如たり。先生

蘭齋に計る。彼も亦た餘資無し。乃ち其の秘藏の二十一史を賣りて二十四金を得、悉く先生に奉ず。先生深く蘭齋を德とす。而して蘭齋の成業も亦た全く先生の薫陶に由る。

◉細香、其の父の實話を錄して、蘭化先生傳を作る、すべて漢文七百餘言。先生の傳記中、殊に趣味あるものたり。

◉山陽が初婚の妻は、藩醫の女たり。後妻小石氏、小石元瑞の義妹、元瑞は京都に於ける蘭醫の大家也。而して彼が、婚を求めし細香女史も亦た蘭醫の大家の女也。彼が、妻の、皆、醫家に因緣あるも、亦た一奇緣にあらずとせんや。

◉大槻磐溪、細香女史を記して、其の人、柔順和易、而して其の文筆、淸秀奇拔、殆んど丈夫を壓倒すといふ。蓋し彼女は、山陽を中心とする、文壇の名婦の、最も異彩ある者ならずんばあらず。

其　七

◉當時、九州の文運頗る振ふ。其の木鐸は龜井南溟也。南溟の子昭陽に女少琴あり、南溟の門人原古處に女采蘋あり。采蘋の事は、吾輩、彼女の日記に依つて、別に傳を立つべし。

◉少琴女史は才名一時に噪ぐ、詩畫双絕也。然れども欲レ知二花興味一、三更踏レ月來の詩、女史の名を傷くること甚だし。彼の詩、女史の名に假托するもの、實に、彼女の作にあらず。此の如き奇寃名婦を誤ること深し辨せざる可らず。

◉文政元年、山陽西遊して九州に至り、昭陽を龜井塾に訪ひ、臂を執て共に文を論ず。此の時、少琴も亦た山陽に識らる。

◉龜井塾は、南溟歿後、また當年の氣燄無し。昭陽は九州の文宗たるを失はずと雖も、聲名、海内を壓するに足らず、其の人、また才華煥發の風無く、山陽の敏捷なるに若かず。唯だ、其の子、蓬軒と少琴との才華、頻りに家聲を揚ぐるあり。

◉昭陽の妻は如何の人なりしか。吾輩、未だ其の詳を聞くを得ず。然れども、蓬軒は、十五六歲の時、文

章、乃父を凌駕す。其の筆墨また渾厚、大家の風度あり。名は雛臀。惜むべし、二十餘にして早折す。

●此の兄妹の二奇兒を敎養せし母は、恐らくは、才華の人なりしならん。昭陽は文章も頗る遲筆。此の二兒は、恐らくは、其の母に似たりしなるべし。



●少琴、墨竹を描く、山陽、詩を題して其の敏捷を賞し、乃父の文章の苦澁するには似ず、と揶揄す。其の詩に「纖指尖邊龍影横、胸中有レ竹一揮成、匠心何似爺文苦、萬葉千枝逐次生」。山陽が少琴を「お父さんよりは才子々々」と煽だてたる口觸を聞くの感無くんばあらず。

其八

●山陽を以て蘇東坡に比するは、生前、既に定評あり。而して、彼の周圍に、名婦の多きことも亦た東坡と相似たり。

●彼は、家庭に名婦あり、知人門人に名婦あり。當代、藝苑の名婦の大半は、殆んど、彼を樞星として之を景仰するが如し。

●彼は才人也。能く女性を應對し、暇語し、或は之を敎育し、其の才華を啓發するを得る。然れども、當時の敎育、彼の家は、則ち學校たり、家庭たり。其の女流と交際し得たるは、彼が母と妻との補助に依ること少しとせざる可き也。

●梅颸の日記を見れば、彼女が、其の兒の婦と共に山陽の文酒の宴に徴逐して、歌を詠じ、畫を描き、詩趣、

酒趣を鼓吹したるを見る可き也。

●山陽の訪客に、夫妻連れの客多かりしも、其の家庭に、夫婦の接伴者あればなるべし。山陽も亦た、屢、母、妻を伴ひて、知友門人等を遊歴し、ともに、詩歌を賦し、畫など描きたり。

●彼、嘗て、内藤子謙に招かれしとき、席畫を作り彼は石を、妻は蘭を描き、詩を題して客に贈る。其の詩に『荊釵藜杖接二淸歡一、夫作二崢嶸一妻作レ蘭、渠被儂頑誰冒愛、一家風味輿レ君看』

●彼の知友門人、彼を招くときまた屢、併せて彼の妻を招きたり。山陽の書柬、つねに其の妻の事を言ふ。

●彼が西遊の時、既に四十歳。龜井に在りしとき、領巾麾山に遠からず、乃ち佐用媛の故事を想て、憶家の詩あり、其の結尾に『遙憶香閨燈下夢、先レ吾飛過振鰭山』と、振鰭山はヒレフル山也。知らず、彼の妻は、何等の歌を以て、此の鍾情の句に相酬ひし乎。

其九

●梅颸の日記、加茂季鷹を招くの條に、山陽の歌あり。『季鷹へ申遣はす、我やどは、川の西なる村柳、とめて尋ねん、君をこそ待て』。二三日して季鷹、倭子、相伴ふて來りしとき、母子ともに歌あり。

●平野花見の條には『平野の花見に行く、かごなり。つれ、大倉(笠山)夫婦、小石、大含(雲華師)細香、甥(?)江戸の大槻平次郎(磐溪)同行の坊主等也、何とやらいふ本屋も行く。磐溪の紀行に徴すれば、是日同游十八人、右の外に、杏坪も、秋巖も春琴も、袖蘭女史もあり。山陽は勿論の事也。

●梅颸は、上方にては、大阪の中井積善、履軒を初め、春水の交友多く、彼女の歌仲間も有り、山陽が續いて、藝苑に雄視したりしを以て、彼女は東遊は、三十一歳のとき、春水と、新夫婦相携へて旅行せしより四十年目なりしとはいへども、京阪、到處に、知己ありて彼女を慰めたるなり。

●梅颸の日記を見れば、當代の名流の姓氏を記すること頗る多し。初めて山陽を訪ふ者と雖も、多くは彼女

に謁したる可く、相見ざりし者も、彼女は、山陽より、其の事を聞きたるべし。

◉彼女は、多少、酒をも好みしなるべし。或は、山陽が、其の寂寞を慰めんが爲に、杯を勸めしかとも思はる。日記に、晩酌のとき、山陽は腹合惡しとて飮まず。此方家内ばかり飮むと見ゆ。勿論、然まで深く飮みし事も聞かず、久く詩酒の場に徴逐したれば、自然、少々は飮むやうにもなりしなるべし。



◉梅颸の第四次の東遊のとき、山陽、恰も、五十歳。母に侍して重陽の小宴を山紫水明樓に開く。此の日、壁上に、春水書の菊花幅を掲ぐ。山陽の詩に依れば、十六年前、廣島に歸省のとき、春水の描いて與へしものといふ。

◉梅颸の西歸のとき、山陽に送レ母路上短歌あり、東風迎レ母來、北風送レ母還、來時芳菲路、忽爲霜雪寒、聞鷄即裹レ足、侍輿足槃跚、不言兒足疲、唯計母輿安、獻母一杯兒亦飮、初陽滿店霜巳乾。五十兒有七十母、此福人間得應難、南去北來人如レ織、誰人加我兒母歡。母子相攜へて、母は、輿に乘り、兒は、或は乘り、或は步しつゝ、處々、茶店、風景を賞し、一杯を傾けて、詩あり、歌あるの光景、此の詩と、梅颸の日記と相待ちて、吾等の眼前に在り。

其十

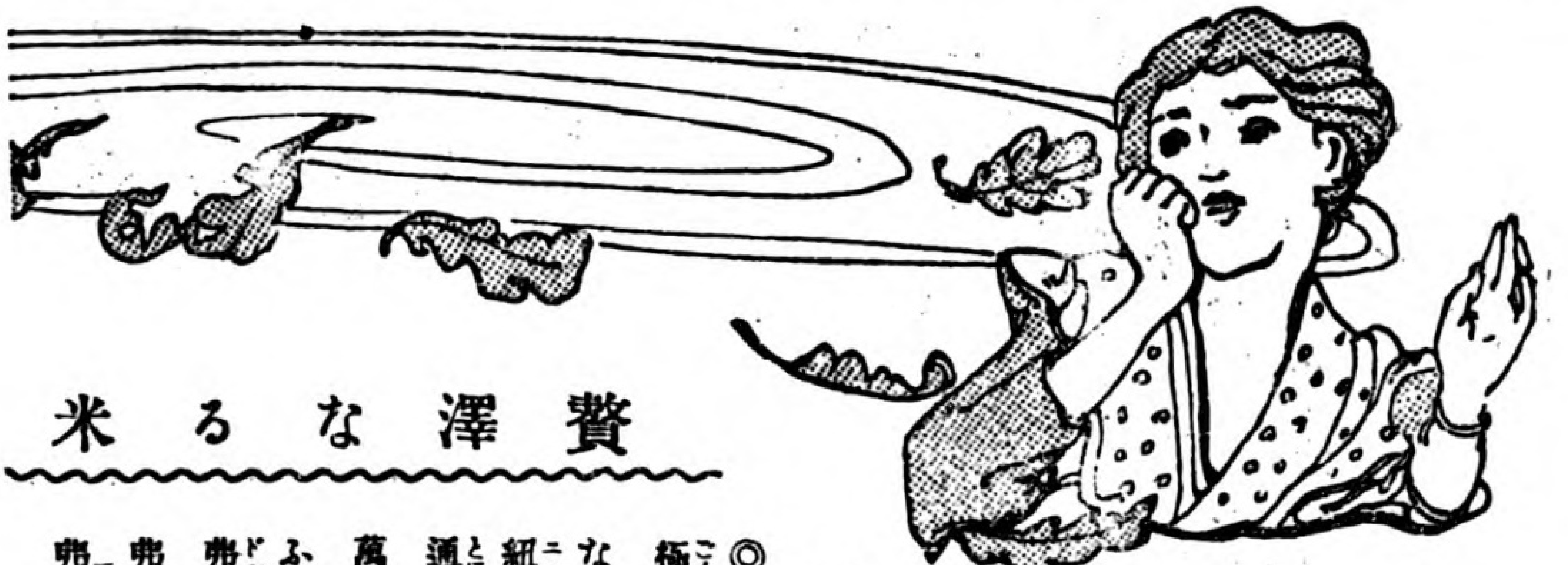
◉山陽は平曲を好みたり。梅颸の日記に、彼が、新曲

出來たりとて、習ひに行きし事など記す。
◉好客の集ひて、酒間、興高ければ、彼は平曲を語りたり、梅颸も梨枝も此の席に在り、梨枝は山陽の妻なり。
◉彼の母、妻ともに、音曲の嗜好あり。主客、語らせも語りもしたり、太平記の新曲出來たりとて、母兒相携へて聽きに行くなど、日記にも見ゆ。
◉山陽は、活花の趣味深く、花の吟味は、却々に凝りたるものらし。御馳走は、文人の事なれば、殊に、儉約人なれば、然までの事無く、唯だ、雅味を選びたるは、流石は、通人なればなるべし。されど彼は、酒は劍菱といひて、つねに贅を言ふ。
◉彼が四十九歳の時、水西莊に一室を新築して、山紫水明處といへり。築室の詩三首あり。「欲向東南贅一室」の句あり。此の室こそは、彼が、得意の亭にして佳客、佳會、必らず此の亭に延く。
◉山紫水明處、落成の翌年、則ち、四たび梅颸を京都に迎ふ。梅颸も、山紫水明處にて、名流女秀才、相交りて佳會を樂しみたる也。
◉山陽は、庭園の趣味は、雜木を雜栽するを樂しみたり。植木屋流の、造り庭は好まざりし。活花ならば、彼の、模樣のやうな遠州流などを嫌ひて、古流、寧ろ投げ込みを愛したる也。
◉彼の園中には、梅、竹、柳など其の他の雜木を栽ゑ、活花には、殊に梅花と水仙花とを愛したり。吾が著述は、多くは、梅花水仙の時節に成就すと言ひたり。
◉彼は、すべて自然の儘を樂みて、彫琢、修飾を嫌ひたり。其情、其話、これ吾が家の家法也と言へり。それにて萬事、想見するに足るべし。
◉此の如き安易なる家法なればこそ、女性と雖も、其の間に、長く立入り易かりしなるべし。況して、家に、梅颸あり、梨枝あり、叔母にも梅月あり。自から、女秀才を引くの力ありしぢや。
◉梅颸は、女博士らしき女なりし乎。梁川紅蘭は、裁縫等一切の女工に精しかりしと云へど、梅颸の日記には多く女工の事を言はず、歌、文學の事は多しわざと

女工の事を書かぬにや。
◉山陽が、彼女を『御隱居様』扱ひをなして、唯だ、一意、面白らく文雅を樂ましめしならんといふ者もあれども、昔の婦人にして、女工に遠ざかりて居るものにあらざるべし。



◉梅颸の日記に、來客の事を記して、はなし、或は學談と記し、或は雜話と記し、また俗話といふ、彼女は、女博士らしく話すことを好む人にして、嫁の、梨枝は、彼女よりは、女らしく優さしかりしなるべしと思ふ。
◉梅颸の日記に、山陽の揮毫の時には、彼女は必らず出でゝ見る。無事の日、大閤記を讀み暮らしゝ事もあり、寂びしくて歌仲間を招く事あり。或一日は唯だ何事も無く、池の蓮花、咲初むとばかり記せるもあり、流石に女なり。
◉梅颸は、其の夫の春水の生時にも、つねに、文酒の宴に侍し、揮毫の場を手傳ひなどせしなる可く、其の子の山陽の時代となりては、女博士の幅も利きしなるべく、山陽を訪ひ來る女秀才は、皆、彼女をば先生々々といつて、敬ひしなるべし。
◉吾輩は、山陽の家庭を想像するときは、此の大家を環りて、名士と女秀才の雅びやかに集まれる光景、眼中に浮ぶ。



贅澤なる米

◎米國製鐵家チャーレス、シュワブ夫人が過般來巴里に於て交際社會の或る貴婦人に向ひ『貴婦は夏分使用の金剛石を冬は如何なさるか』と尋ねた、ところが巴里は世界流行の中心、贅澤の本場ながら、根が遣り繰のことで、巴里婦人は何氣なく、夏冬の區別はありませんと答へたるに、シュワブ婦人は巴里婦人の吝ツ垂さ加減に一驚を喫したと云ふことである。

◎巴里の婦人は隨分豪奢を極めるも、極上飛切り取つて置きの金剛石指環などは二つと所持するものは少いが、紐育では金に飽かせて裝飾物を幾通りも調へて、之が爲めに一ヶ年十五萬弗を投ずる貴婦人が百名もあると云ふが、其内譯をして見ると夜會服四萬弗接待服二萬五千弗、短上衣一萬二千弗常衣一萬五千弗、靴及び上靴五千弗手袋三千弗、帽子七千弗と云つた割合であるが、それ〴〵特別の嗜好があつて、或婦人は好みの手巾を手に入れんとて、米國中の商店を獵り廻つたが思はしきものが無いと云ふので、わざ〳〵歐洲に赴き、巴里でも獲ず、維世納で漸く發見して一打三百法にて十二打買取つた。

◎又或る婦人が絹の靴足袋に特別の好みありて代價は幾許にてもお構ひなしとの條件で、巴里の製造所に注文したが、極上々特別の製造にて一足四十法と云ふに今少し高價のものが欲しいとの所望であつたが、製造場ではこれ以上のものは製り難しとのこと故、止むを得ず其品を用ゐたと云ふ。

◎他の寶石以外に、金剛石の如き幾百萬弗のものを所持し、リネンの卓布一枚に二千弗を投じ、ロースの花一打に百五十弗、太古の森林から掘り來つた遊園の樹木一本に二萬弗を投ずるのはおろか、朝風呂に三鞭又は牛乳を用ゆるものが多々あるといふにいたつては驚かざるを得ぬ。

◎又紐育の金滿家連には、近來邸に大寺院の如く、途方もなき大風琴を備へ附ける風が流行し、甲家が五百管のものを注文したといへば乙家は千管のものを新調するといふ風に、互に金に飽かせて大風琴を買入れる、この風琴道樂の起りは、モンタナ州出身の前元老院議員クラーク氏が紐育第五街の屋敷に實價二十四萬圓の大風琴を据ゑ付けたるを筆頭として、銀行家ボーン氏はオークデールの自邸に二十萬圓のものを備へ付けた、最も粗末なのはピアポント、モルガン翁



國の流行

のクリーン・シーキ邸に据ゑたる風琴であるが、之にても四萬圓を投じ、其他石油王ロックフエラー鐵道王バンターピルト、鋼鐵王カーネギー、資本家チヨーテ、ベルモント、タイフラニーの諸家にも劣りなく、風琴製造者は殊の外繁忙を極め居る。

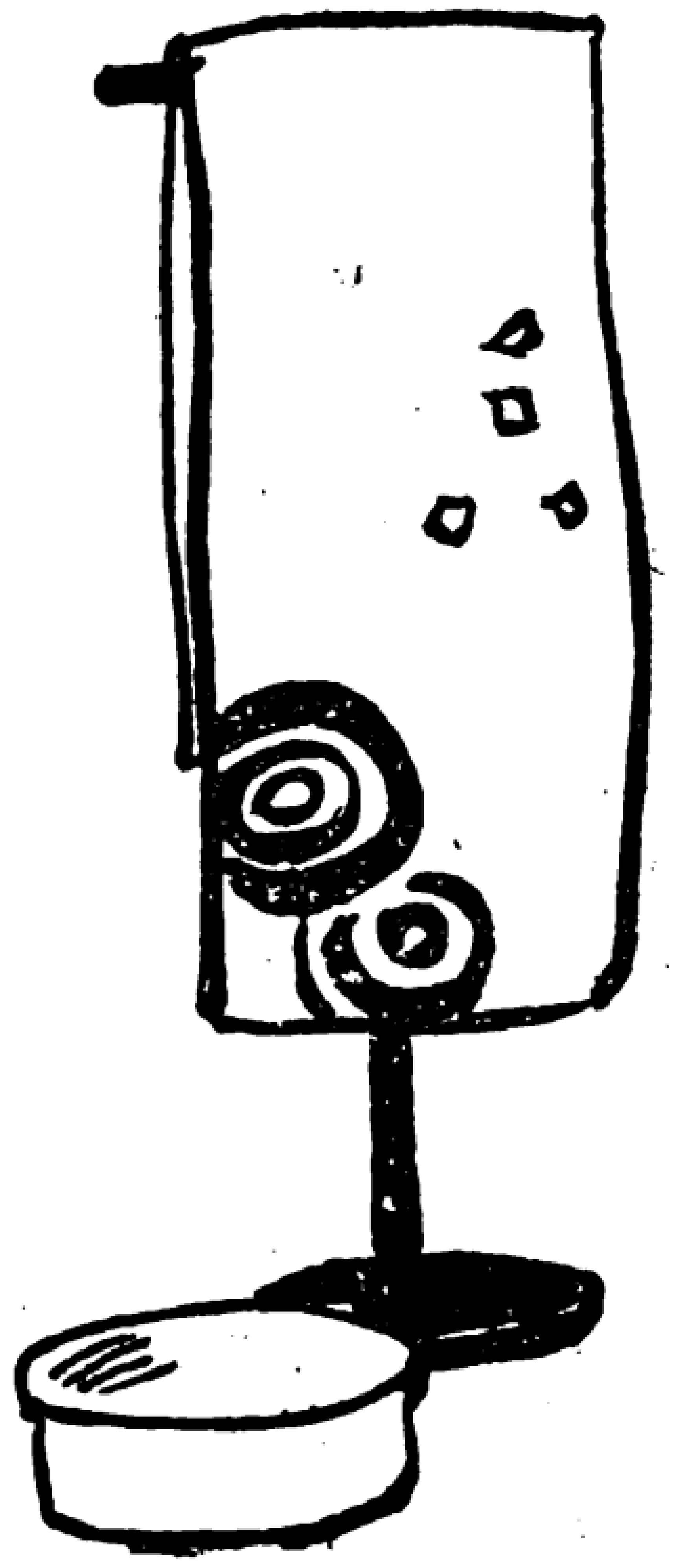
◎其風琴は館内作り附けにて種々の巧妙なる仕掛がある例へばロックフエラー家の風琴は、館の何の部分からでも之を奏し得ると云つた風であるが但之を奏するには餘程の熟練を要する所で普通音樂家では覺東なきより各富豪ともそれぞれ特別の音樂家が抱へてある中に就きカーネギー家の樂人ゲールは此道の名人にて紐育第五街の自邸にて翁が毎朝服を着ける時之を奏する斯る富豪の大風琴は目下紐育のみにて二百臺以上あつて其數は日々増加し早晩三百臺に達すべしとのことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◎一個の一錢貨と、二個の五厘貨は、價に於て相違ないが、二個の方は何樣輕い樣で人を侮蔑した樣な感がある、

◎五厘の橋貨に困つて三里の廻り道をした事がある、二錢銅で一錢五厘の買物をして、ツリが無いと云はれ「構はん」と威張つた事がある、

◎才造は鎭守の森の社前で、合財嚢をぶちまけた、一厘錢は用捨なく蟻の塔を崩した、コロ〱と轉ろげて釣鐘花を揺ぶつたのは五厘銅であつた、



自然を尙ぶ生活

三宅花園

野の花の亂れ咲いた風情

何事によらず餘り取り繕うた、殊更らしいのは好みません。成るべく自然の儘に任せた姿が心に適ひます。

私は花卉が好きで、暇あれば庭へ出て土いぢりを致します。と云つて仰山な園藝などと云ふ程の事ではありません。唯だ少しばかりの花壇をいぢつて居るに過ぎないのですが、それでも疊一疊敷ばかりのと三尺四方のと二つの溫室も拵へました。小さい方へは此の秋も大分ヒヤシンスなどを圍ひました。溫室と申しましても極不完全な粗末なもので、僅かに雪や霜を防ぐに足る丈けなのです。

花の中では何が好きだと云ふやうな選り好みがあるのではありません。どんなつまらぬ草花でも、花さへ咲けば可いと云ふ方針で、いろ〳〵な種を、其處邊ぢうへ蒔くのです。而して彼方に豆の花が咲いて居るかと思へば、此方には野菊が匂ふと云ふ風に、極自然のまゝ取繕はぬ眺めを喜びます。一株千輪咲きの菊とか枝を撓めたり曲折せたりした鉢植の花卉とかはどうしたものか心に適ひません。何等の窮屈らしい姿も見せず、亂れ咲いた風情を愛づるのです。

何物にも拘泥しない自然の姿、之れが最も私の心に適つたものであります。

自然の性を損ねぬ躾方

子供は三四人育てましたが、矢張り此の心持を以て

取扱ひました。世間には随分ガミ〳〵と八ケ間敷く云つて子供を躾ける方もあるやうですが、私は出來る丈け放任して置きました。各〻の生れついた通りに生立たせ度い、憖かな干渉をして自然の性を損ねまいと云ふのが私の心持なのです。『此處までおいで、』と親が先に立つて子供を導くと云ふやうな育て方は固く禁じて居ます。唯だ子供等が自づと向いて進む方へと行かせて置くのです。然し大體の方針としては、氣の短かくないやうに忍耐心を養成する事と、浮つかないやうにユッタリと落着いた心を持つ事とは、



始終申し聞かせました。

其の外は、成るべく自然の儘にして、たとへば野の花の取繕はず亂れ咲く風情を見やうと思ふのです。從つて子供の極幼少い頃にも其子守女は歳の行かないのを選ぶ必要があります。年齢とつた女は、どうかすると子供を自分の鑄型に箝める惧があるのです私の宅では子守女は皆な長く居て呉れましたので、前後三十年間許りの間に三人しか使役ひませんでした。若いのは十四

歳の時に來て十年間勤め、歳とつたのは十三年間居り其の從妹と云ふのが十年間居りました。幸ひに何れも成績が宜しくて子供の性を損ふやうな風は見えませんでしたが、安全なのは若い女を使つて之れを其の家の主婦が監督するに越した事はありません。

土曜日は私の道樂日

毎土曜日は私の道樂日とでも云ふべき日でありまして、此の日には二十人許の方がお集りになります。而して私は皆樣のお持寄りになる習字とか作文とか和歌とかを拜見するのです。此の日はもうスッカリ家庭と云ふものから出て若いお方と一緒に樂しく暮らすのですが、此の折とても皆樣をば己が向き〳〵に任せて其の發達を助けるので、決して一筋道に彼樣の此樣のと八ヶ間敷く



云ふ事は致しません。

此の土曜日の會は私がまだ三宅の家へ參りませぬ以前から開いて、今に續けて居るので、會員は全國にあります。遠い所では支那、臺灣朝鮮などにもあります。その人々が今度『花蔭會』と云ふのを設け、廣く會員の草稿を集めて送る事になりました此の花蔭會と云ふ名は、宅の庭に八重櫻があつて春になると美しく咲き出ますので、會員の皆樣が今は互に遠く離れて相逢ふ機會もないまゝに、昔集つて樂しく交はつた所をせめてもの思出の種にと命名

されたのだらうと思ひます。

小島文學士夫人正壽子樣、伊藤文學士夫人つる子樣藤田醫學士夫人八重子樣、三角法學士夫人みの子樣などは、花陰會の錚々たる方です。中には隨分お年齢寄の方もありますが、今現に宅へ來られるのは學習院に通ふ方などが多く、大概若い方であります。而して皆落着いた、おとなしい、極しつかりした方ばかりですハイカラ風ではなく、皆昔風でおいでゝす。

今は社會の凡ての方面が過渡期で、新舊兩時代のものが雜然と並び存する時でありますから、ハイカラ風も昔風も一槪に何れを是とし何れを非とする譯には行きませんが、所謂ハイカラ風の餘りに浮足で落着きのないのは如何かと思ひます。ハイカラならばハイカラで差支へないから、も少しユッタリとした處があり、大體の目標を定めて進むやうにならなくては不可ないと思ひます。

過渡期に於いては、社會狀態や人の思想は混沌としてゐるのが自然でせうから、憖ひに人爲的の小細工や拘束を加へず、自然の本流に任せておいて、多少の手加減を加へるに止め度いものです。

自然を尙ぶ趣味の一致

取繕はぬ自然の姿を喜ぶ事は、主人も私に讓りませぬ。世間の事でも家庭の事でも、學問藝術に就ても思想問題に關しても、主人は何事に限らず拘束のないなだらかな事が好きです。此の自然を尙ぶ趣味傾向は主人と私とよく一致して居ります。尙ほ二人共動物が非常に好きで、家には犬も居れば猫も居り、又小鳥も飼つて居ます。一時は犬と猫が二疋宛居た事があります一疋の犬は獨逸產のものでハッピーと名乘り、六七年間可愛がりましたが、他所の犬に咬み殺されて了ひましたので、今はサイと呼ぶ滿洲犬が一疋居る丈けです猫は初め夫婦連れでしたが、先年夫に死なれて、今では後家猫が殘つて居ます。之等の者に對しても、別に種類を選ぶとか、姿を吟味すると云ふやうな事はありません。どう云ふ種類でも、又どう云ふ姿でも構ひま

せん。どんな犬でも猫でも可愛いのです。自然を尙ぶ傾向は斯う云ふ點にも現はれて居ります。

昨年の七月、奈良へ遊びに行きまして、春日山で鹿を見た時は、日頃動物好きの私は、何時迄も〳〵立とまつて、悠々と遊ぶ鹿の群を見て居ました。主人は早く彼方へ行かうと度々促き立てましたけれども、却々鹿の傍を離れる事が出來ませんでした。今更らの如く自分の動物好きな事を覺りました。其折作つた歌があります。

○七月十四日春日山にて　花園

月待ちと人には云はめ餌をやれば
馴れ寄る鹿にのこる心を





友のゆくゑ

わかば

春に先だつ南窓の梅花、一輪二輪咲きそめて、お日和のよい日は何となく氣もちものんびりとする。昨夜綿入れておいた羽織の衿つけながら、これが出來上つた、お晝から信子さんの處へ遊びに行かうか、などと考へながら、日をくつて見れば、さう／＼今日は約束しておいた日だ。

同窓會でもないが、同じ頃鴨河の學舍に學んだものが、打よつて舊交を暖めやうとの催しである。

大急ぎで羽織仕上げておいて、會場と定めた信子さんのお宅に上がる。玄關に女下駄二三足。上田さん、山村さん、花田さん、もう見えて居た。民子さんはまだですのと噂して居る處へ、玄關の格子がまたチリンとなつて、其人らしい聲。御主人に代つて私が出て見ると、ねんねこ袢纏で子供負ふた女の後姿。おやと思ひながら側へよつて見ると、やつぱり民子さんだ。

『入らつしやい。おまちして居ましたよ。』

『おや、もう入らつしてたの。まあ、わたしのこの風。甘い恰好でせう。これが一番呑氣だからこの頃はいつでもこれですの。』

唐ちりめんのしごきする／＼と解かれる後にまはつてわたしは赤ちやんをだきとる。はりきれさうにふとつた双の頬に、林檎のやうに赤くなつて、白い額に長くひいた眉の下に、靜かに眼をふさいですや／＼と。

『マア可愛いゝ赤ちやんねー。お寐つていらつしてよ』

ソッと頬づりしやうとして、子供なれぬ私は目を覺まさせてしまつた。ワッとなき出すと、ぬいだ山繭紬

の袢纏を袖疊にして押片附、自分の身なりつくらふ間もなく抱きとつて乳を啣ませる。幼兒はぢきにこ〳〵として母親の顔を見上げる眼もとは民子様にそつくり何て可愛いゝのだらう。

其の昔在學時代『着物なんかいくらよくしたつて、縮緬より上はないからつまらないわ。私卒業したら、時計と、指輪と、帶止をかつて頂く』と、豪語した贅澤屋の民子さんが、自ら子供おぶつて同窓會に出られるやうな母親となられるのも、この赤ちやんあればこそとうなづかれる。

御主人が御病氣で出られぬとお斷りのあつた春山さんをのぞいて會するもの六人。みんなもう家もち、子もち、花やかなピヤノの音に合せてダンスするのを懷かしき思出の夢に見る時代も過ぎ去つてしまつたので子供の教育法、女中の選擇法、さては襁褓の仕立方古足袋の利用法などゝいふ吝な方面にまでお互の經驗談がもち出される。文學すきの春山さんが見えないので、文學論も出なければ、婦人解放、生の意義などゝいふむつかしい話題にも今日は花がさかぬ。話頭はとう〳〵經濟談におちた。

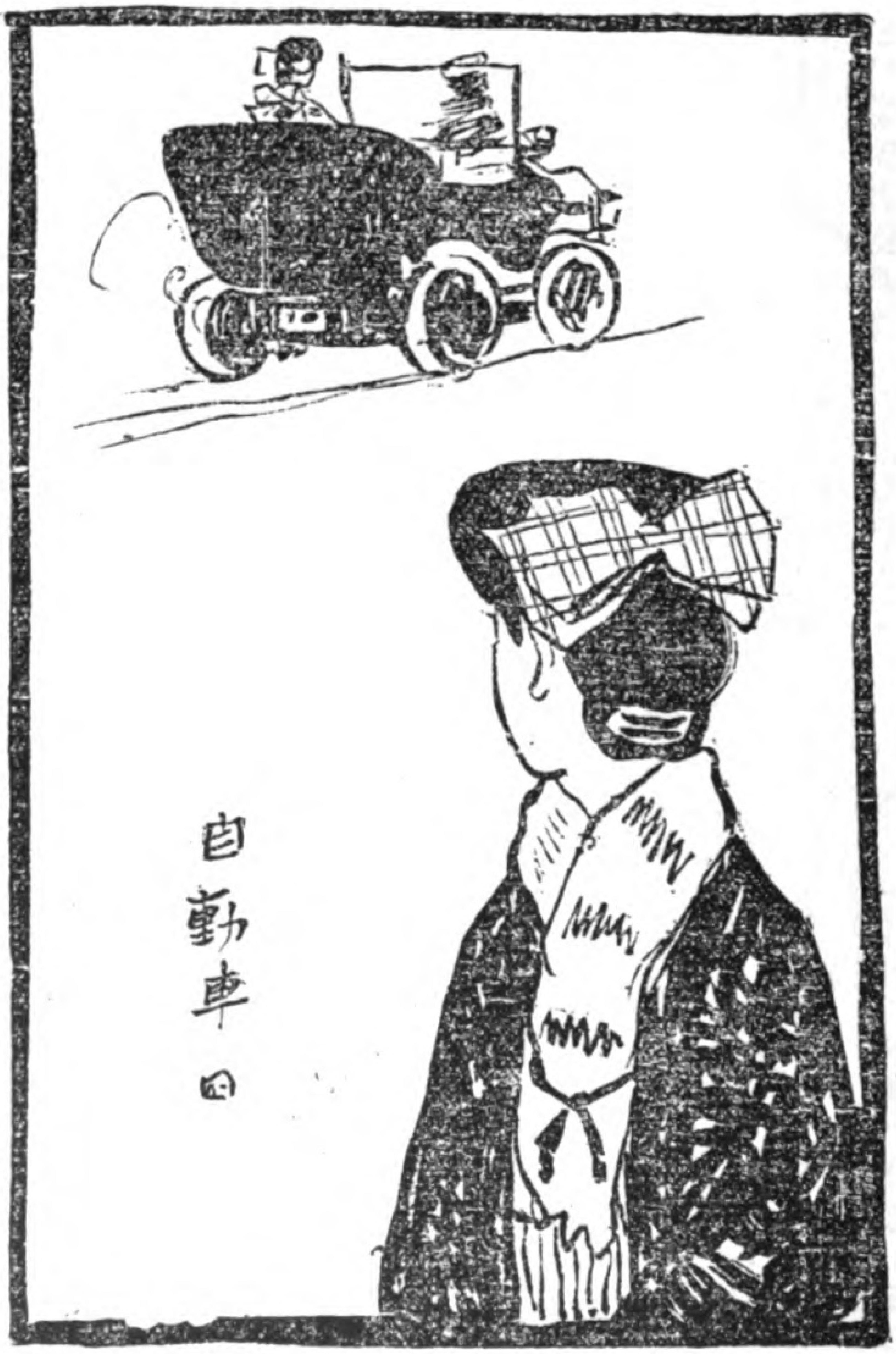
『以前にはね、大尉位で女中二人使つて子供に縮緬の着物きせて遊んで居た奥さんもあつたさうですけれど、私なんか小女一人使つて、紡績絣きて働て居ても手一ぱいですもの。いつになつたら老後の用意なんか出來るのだらう』とは、少佐の夫人の信子さん。

『少し位ためておいたつて、臨時の事が起れば、ケロッと消えてしまひますもの、切つまつた月給取が澤山の貯蓄なんかとても出來ませんわ。私ね、子供抱へて良人にでも逝かれたら、どうするだらうと思ひますよ。』と判事夫人の澄子さんが相づちをうつ。

『自活の力のないものが、無財産の人に嫁ぐなんて、冒險、冒險』とたれかゞまぜつかへす。

『ホヽ、さういつたらやもめばかり出來るでせうけれどお互にこれで相當の教育もうけた方なのだがもう糠味噌臭くなつてしまつて、小學校の先生も出來ないでせうね。』

『ぢやあお芋屋かおそば屋でもしませうか。』
『それには資本が入りますよ、あの朝早くおきて、人の通らない前に紙屑拾つて歩く人があるでせう。』
『ホヽヽヽ、まさかそれまででしなくとも。』
『ホヽヽヽ』
あまり極端までいつたので笑ひ紛れてしまつた。
姑持の花田さんが歸りをいそいでたゝれるとあとの人々もみんな歸仕度をする。良人が獨逸留學の不在中を、兩親の許で過す身はいそいで歸る必要もないので、私は殘つて後片附を手傳ふ。お茶盃、お菓子器、おすし鉢、臺所へ下げて、座ぶとん重ねて、女中にさつとはいてもらつて、會費の勘定すますと、もう火點す頃。それでは、とお暇しやうとすると、滿洲守備として御良人が出張中のお留守を、される信子さんは、淋しいからとていろ〳〵と引とめられるので、とう〳〵十時まで居てお茶の間で話をする



『もう十年の餘になりますのね學校に居た間は同じ部屋に居て同じ御飯頂いた人もどんなにかいろ〳〵にかはつてゐるでせう。

「榮達の地位に得意で居る方もあれば、落魄して世をはかなく暮してる方もありませうよ。
「あの二年上級に松井さんといふ方があつたでせう。」
「私どもの入舍した時の室長さん？」
「さうですよあの方はどうなすつたでせう。同窓會の雜誌にも住所不明とばかりさつぱり消息がわかりませんのねー。私ねお別れしたあと一度の手紙も頂かないけれどなんだか忘れられぬ方ですわ。
「一種かはつた特色のある方でしたからねー。」
　私はだまつて火鉢の灰かきならしながら十年前の松井さんの面かげを想ひ浮べた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

　色の白いきめの細かい、口もとのしまつた、髮の毛の薄い、淋しい顏で伏目勝ちにおつともの見据ゑる癖のある眼は深き思慮と、深き悲哀の潜んで居るやうで馴れにくゝ近づきにくゝ見えたが、事にあたつてにッこりと微笑を洩される時は、無邪氣な可愛らしい眼にかはつてなつかしい色が浮んでくる。やさしい深切な室長さんで、體は人並はづれて弱く、少し運動がすぎればすぐ蒼白い顏をポッと赤くして机によりかゝつて額おさへて動悸を靜めて居られたが、それでも日常の部屋掃除や廊下の當番、炭とりランプみがきなどゝいふ雜用には年下の人を使つて自分で手を束ねて居るといふやうな事なく、まづ自らさきに立つて働き、美くしいカードや小ぎれや私どもの羨ましがるものは惜げもなく年下の人に與へて人のよろこぶ顏を見て滿足して居られる。
　十七にしてはふけた方なので、其の時十四の私にはもうちやんと出來上つた立派な人だと思ふて居た。三十近くなつての今日から思ひかへして見てもその時分から、年にはませてほゞ人格の定まつたおちついた人であつたと思はれる。
　京都の女學校へ來られる前、東京で米國人のたてた學校に居られたので英語は級中の隨一、讀方や會話はいつも滿點であつた。裁縫をのぞく他の學科はすべてよい成績で、國語作文に長じ、和歌も詠まれた。い

つか私のすきな古歌だとてかいて示されたのは紫式部の「わりなしや人こそ人と云はずとも」の歌でさながら松井さんの意志の強い性格をあらはして居る。手蹟もしつかりして立派なものであつた。が、學校の成績はいつも五六七位の間であつた。それは學力が劣つて居たのではなく、數學でも理科でも先生の口眞似を丸呑に諳誦して答案に排列してくる人達の流儀をまねなかつた爲でせう。

同級生のなかにはあまり親しい人もなかつたので人によつては「あんな不平家は大きらひ。轉校してきて前の學校をほめて當校を悪くいふ位なら此所にこなければよい」と陰口する人もあつた。始めからの同級生でなく四年にもなつて、他から轉校してきたといふ事も他の生徒と相容れぬ一原因であつたらうが、昔風の家庭に育つて保守的な校風のもとに養はれ、自分の學校を日本一と信じて滿足してしほらしくすなほに師の命に從ふのを美德とした他の人々の眼から見ると東京の宗教學校で泰西の新らしい思想を呼吸してきて學校をも教師をも批評の眼で見る松井さんの態度は意地わるくにくらしく見えたのでせう。



同級の人達のなかでは人望はなかつたが、反對に、私ども下級のものは松井さんになづき、かつ尊敬してゐた體が弱いのでよく病床の人となられる、看護は私ども年下のものがした。氷嚢を額において横臥して居られた其の姿は今もあり〳〵と見える。

鴨河の柳にかゝる新月のかげほのかに寮舍のまどをてらして、初秋の風肌つめたきある宵であつた。病室に寝て居られた松井さんを私はのぶ子さんと二人で見舞つて庭からとつてきた白萩一枝枕もとの花瓶にさし氷嚢をとりかへて上げやうとすると

「ありがたうもう澤山ですの、今夜は淋しいばんね」

といつて折から運動場から聞こえる

　すみ行く水に秋はきたれ、月かげおちて鈴蟲なく。
　思へば似たり故郷の空、あゝ我が父母いかにおはす。

の歌をじつときいて居られたが静かに横むきになつて

「あなたがたはお幸福ね」、私は父もありません母もありません、捨子ですよ」と語り出された。

私と信子さんは驚の眼をみはる。

私を拾ひ上げた老父母は私を可愛がつて育てゝくれましたが今母とよんでゐる人は其の縁者で老父母の死後のこつた財産と私とを引きとつて世話した人ですの着物でも學資でも充分に送つてかうして勉强させてくれますけれどどういふ氣もちで居るのですか正しい家業の人ではありませんから眞實私を愛して居るかどうかも疑はしうございますの、私には神よりほかに心からたよる處はありません悲しい時苦しい時神は我れに我が堪へ能ふものを與へられると思つてどんな場合にも辛抱してきました。此の學校の方はみなさんキリスト教嫌ひですけれど私はどうしても神を信ぜずには居られません。

かたり來つて松井さんは默して長いため息をつかれた。私と信子さんとは涙ぐんで病める人を見まもつた

明る年の春優等生の一人として松井さんは卒業せられたれど郷里には歸られず、東山の麓にお寺の部屋をかりて勉强するとてしばらく自炊生活して居られたが

それも半年ばかりで通天の紅葉色まだ淺き秋の半ばしぐれふる日に東京へ行くとて七條ステーションからただ一人東行の汽車にのられた。私は車窓はるかに其のかげのうすくなるまで見送つた以來杳として音づれに接しない。

* * * *

「わたしねこの間松井さんの夢を見ましたの。」

のぶ子さんが沈默を破つて話し出される。

「まあさうどんな。」

「あのね妾がどこかの女學校へ參觀にゆくと黑い袴はいた女敎師が出てきて案内してくれますの導かれて行きながらふと見るとそれが松井さんでさうして盲目でした。」

「まあそんな夢。どこかで女敎師でもしてゐらつしやるかも知れませんわね。幸福に家庭の人となつて赤んぼ抱いてる方になつて居やうとは想像が出來ませんもの。」

「私はね、あゝいふ體の弱い心の清い方は永くこの世に存在をゆるされないのぢやあないかと思ひますの。」

「もう天國の方でせうかねー。」

二人はまた默してちやとふけゆくランプのかげに忘れがたき人の行方を想ふた。

* * * *

兒童研究に就て有名な高島平三郎氏は、兒童の玩具を調査し、得意の心理學上から分類されました、其大要は左の如くでありますが、之を以て見ると無心に興へて居る玩具も兒童の成長發育に關すること極めて大なるものであつて、また如何なる關係を兒童に及すかを知り得ませう

玩具の分類

一、感覺	觸覺	おしやぶり護謨磁器の人形の類
	視覺	風車、風船、鼓の類
	聽覺	がらく、笛太鼓喇叭の類
	筋覺	鈕玉、毬、諸翫人形の類
二、智力	好奇心	捲め繪、重れ卵、祕密箱の類
	記憶	積木、繪合、組立人形の類
	想像	あれ樣、面の類
	推理	起上り坊師、與次郎兵衞及び器械仕掛の人形其他
三、情感	同情	人形、あれ樣、お雛の類
	美情	錦繪、千代紙、風琴の類
四、意思	注意	羽子、射的の類
	消極的意思(忍耐)	根較べ、鈕玉類
	積極的意思(實行、勇氣)	子供の持ち扱ふ殆ど凡ての玩具

若し親たる者是等のことを心に止めて、玩具を與ふることに注意したならば、過ぎて居る性癖も壓へ得樣、又足らざる性質も養ふて行くことが出來ませう、新奇であればの玩具だから何でもよいと、手當りまかせに購ひ與へるのは注意すべきことであるといふことも判りませう

支那の新婦人

河岡潮風

革命の花秋瑾

道臺職の徐錫麟
麟は養ふ女黨員
秋瑾も其の一人に
英語を學び新學を
革命の芽は柔肌に。

四十一年春徐豪傑
巡撫恩銘暗殺し
悲壯の最期遂ぐる時
秋瑾健氣の振舞の
芳齡正に二十歲。

爆彈運ぶ女役

北京政府は捕へんと
四方に求む果さヾり
女史の行衞の杳として
美しき影雲霞。

嗚呼道暗く蹈迷ふ
黨員よそふ間諜に
誘出されて傷ましく
花の姿は捕はれぬ
上海の春恨みあり。

一輪咲きし革命の
優しき花の秋瑾女
刑場の露と散うせぬ
憐れ聞く者敵味方
四百餘州の土泣きぬ。

洋服つけし男裝は

詩人シエレーが見る如く
日本服着し艶姿
右手に劔持ち胸に擬す
花貌凛たり女丈夫の。

中華の國の土硬く
四千年來嘗て無く
偶ま咲きし革命花
日本の國を踏みし足
蓮歩の跡を弔はむ。

娘子軍

支那の女服も勇ましき
柔しき纖手突立ちて
サーベルを持つ娘子軍
此の圖を見ては古の
西の歴史の偲ばるゝ。

邦艱難の曉は
山河も花も情を帶ぶ
支那は武の國慷慨の
あゝ娘子軍白き腕
劔を把りていざ舞へよ。

女子の纏足見し時よ
支那の國歩の危さに
我は憐人感傷す
あゝ娘子軍足健に
新文明に往進め。

今より弱き兒を産みそ
新空氣をば呼吸して
國に富生む母たれよ
あゝ娘子軍紅熱子
劔を抜きていざ舞へよ。

社宅生活の一日

梨花子

かすかに、かすかに、ボー……段々はつきりと
ボーッボーッ。
それは、五時半の會社の汽笛、私はツト起き上がつた、寢不足の頭が重い、それでも手早く帶を締めて、戸を明ける、座敷の電氣が暗い庭へサッと流れた、外の冷たい空氣は内へは入る。
五時五十分、夫は出勤、夜業の人は歸るのだらう、表に靴の音がする。
掃除と御飯の仕度で七時半まで、夫は朝飯に歸られる、再び八時半出勤。
お勝手を片づけて髪を結ふと、九時半、洗濯を終ると十時が過ぎる、すぐに御辨當の用意、十一時に小使がとりに來る。
朝の仕事もすつかりすんだので、縫ひさしの羽織を出す、膝の抜けた着物を、繼ぎ合せて、やつと羽織にした、之でも黄八丈ですもの、常着には惜しいやうになつた、里に居る時なら、「お母樣こんなもの面倒臭いから厭ですよ」つてほうり出したものが、よくも好んでするやうになつたと、可笑しくなる。
ドンが鳴つた、時計を巻いて、一人で御飯にする、すませると三十分新聞を讀む。
又縫ひ始めると、田舍の百合さんから葉書が來た、私より一つ年下だけれど、もう三ッになる坊ちやんがある、其坊ちやんが病氣だつてお可哀さうに。

○

百合さんはねー田舍の資産家の一人娘、御祖父樣の御秘藏つ子で、伊香保や四萬の温泉に、百合さん一人伴れては遊ぶのを何より樂しみにして居らつしやいましたの。
私とは小學校の親友、少女世界に、和歌をよく投書してましたのよ、御祖父樣も此道がお好きで。
けれどもね、百合さんが十八の時、お母樣が亡くな

りましたの、今まで我儘いつぱいに育つた百合さんはお母樣の監視がなくなつてから、持つて生れた美しい顔が身を誤まる因となつて、八方から迫る誘惑の手に、とう／＼捉へられて仕舞ひましたの。

其頃でした、私は何も知らずに、幾度手紙を上げても返事がないのでせう、人に聞くと、小學校の先生と手をとつて走つて、東京、江の島と遊び暮してるつて其時の私の驚きやうは、一通りぢや御座いませんでしたわ、あゝ小學校の先生！其双肩に負ふ責任は重いでせうに、良家の庭に咲き出でたる、白い美しい花、それを手折つて外の荒い波風に晒らさうとは！あまりに慘酷ぢや御座いませんか。

間もなくお祖父樣は重い御病氣、今日か明日かといふ際になつて、人々も心配して、せめて死水だけでもとらせて上げたいと云ひましても、「もうあんな孫には逢ひたくない、どうか家へは入れてくれるな」とおつしやつたさうな、けれども御詫びして、やつと家へ入れて貰ひましたの、そしてお祖父樣の枕邊に坐ると、すぐに泣きながら逝かれましたつて。

それから半年も經つと赤ちやんが生れましたの、それは／＼可愛らしい坊ちやん。

今まで怒つてらしつたお父樣も、無心な坊ちやんのお顔を見ると、さすがにお情も出て、赤ちやんのお父樣を御養子として入れるやうになりましたの、けれども、お父樣との折合がよくなくつてすぐに出て仕舞ひました。

坊ちやんが三つになつた今日、百合さんはつく／＼後悔してますのよ、まだ二十一の若い母樣は、草深い田舎に、淋しく坊ちやんを守つてゐらつしやいます。

あゝ靑春の花の折、謹しむべきですわね、ほんとうに。

○

百合さんの事を思ひながら羽織も出來上つた。

反のものを、ドシ／＼切つてこしらへるより、かうして骨を折つたものは、出來上つてから、一層うれし

い、お正月國へ歸つたら、母樣に賞めて頂かう、なんて思つて見る。

「小母ちやん遊びませう」つて、をや文子さんホヽヽ、可愛らしい事云つて入らつしやるわ、「えゝ遊びませうおは入りなさいな」といふと「ハイ」とやさしく答へて上つて來た、夕の仕度には、まだ少し早いので、丁度いいからハンドオルガンを鳴して上げる。

四時半、座敷を片づけて御飯の仕度にかゝる、今日は土曜日で、お酒をつける。

會社の爺やが汲み込んでくれたお湯を、いゝ加減にうめて置く。



六時十分、夫のお歸り、すぐにお風呂。

御飯がすむとすぐに玉突きに行かれる、私は後片づけしてお湯には入り、今夜は裁縫をやめて、女學世界を讀む、夜業の響は絶えず聞こえるけれど、兩隣りは壁一重だけれど、私の心は淋しい！

○

「梨花子さん！」ハッと思つて玄關へかけ出すと、まあ井上さん！「ようこそ！早く〳〵お上り遊ばせよ」つて手をとつて引き上げた「こちらに用事があつて來たのですけれどね、大變忙

がしいのよ、今は歸りがけなのだけれど、どうしても寄らずに居られないのでせう、だからお顏だけ見たらもういゝの、：歸るわ」だつて隨分ひどい、でもやつとお座敷へ坐らせてしまつた。

お土產にといつて御自分で造つた白と赤との美しい薔薇！　私はすぐに籠に盛つて本箱の上に置いた。

お菓子のバナゝと林檎を食べながら、話しはそれからそれと果てしもない。

お歸りには「のへ」までお送りする、細い〳〵川に傳つて田の中を、此頃めつたに歌つた事のない、露營の夢や、離れ小島を、聲を合せながら歩るくと、いつの間にか、京阪電車の停留所。

「ぢやさよなら、又ゆつくり來るわ」「えさよならきつとね」電車は遠慮もなく京都へ走つてしまつた。

私は氣拔けがしたやうになつて歸つて來た。

秋の野の景色は眼に映らないで、井上さんの姿が、消えない。

お召縮緬の二枚重ね、私には名も知らないやうな、立派な帶、指に輝く三つのリング、小さな金の時計、細い〳〵鎖、寶石入りの櫛、何よりもあの美しいお顏！　心の底で羨ましいと叫んだ。

同じ寄宿に居た頃、井上さんは私より年上なので、お姉樣〳〵つて慕つて居たけれど、卒業してからは西と東に遠く離れて、もう二度と逢へると思はなかつたのに、運命つて不思議なもの、私はこゝに住むやうになりましたの、

井上さんは、學校にゐらしつた頃から洋行してらしつた御良人が病死なすつて、今でも立派に一人で立つてゐらつしやる。美しい京都で、二つの女學校を受持つて、幾百の生徒に、先生〳〵と敬まはれ、上流の家庭に出は入りして華な生活！　あゝほんとに羨ましい。

まあ私つては、つひ惡るい事を思つてしまつた。

おゝさう〳〵あのお祖母樣の敎へ、決して忘れたのぢやない、お祖母樣すみませぬ、どうぞ赦して下さい私は狹い社宅へ喜んで歸ります、そして近所の奥樣方

の氣がねもします、何の井上さんの身を飾る凡てのものが私にはなくとも！　私は幸福です。

○

澤様！　お察し申します、男ですもの、自暴も起りませう、御理もです！

女子大學の附屬高等女學校の出身、都に時めき給ふ父君持てる美しき新妻として、誇り給ひしも半年の夢、人は皆あなたの幸福を羨んで居りましたに。

御離縁になつた理由は存じませぬ、けれども、春江樣があなたに嫁ぐだけの覺悟を持つて居らつしやらなかつたのぢやないかしらと思はれます、それは今までお孃樣育ちの春江樣、まだ世に出たばかりのあなたですもの、帝國劇場の、三越のと、春江樣のお心のまゝにならないのは當前です。

「僕はワイフと云ふ者を貰ふて、極めて苦しき經驗を致し候……小生は玄人よりも素人の女の御し難きには閉口仕り候。以來頗る呑氣に相成り、お膝下の品川は申に及ばず、新橋、赤坂、日本橋、到る所に物云ふ花を手折る、又愉快ならざるにあらず候」

あゝお母様はどんなにお嘆き遊ばしてゐらつしやるでせう、私はお母様がおいたはしい。

傷ついたお胸を癒すには、新橋はよい所で御座いませう、けれども、醒めた後あなたは、より以上の苦痛をお感じになりませんか。年老いて、あなた一人を賴りにしてゐらつしやる、お母様の事をお思ひ遊ばしたら、どうぞ冷靜にかへつて下さい、樂しかつた事も、苦しかつた事も、半年の夢と思つて下さい。

春江樣への面當なら、もつと／＼、立派な奥様をお貰ひ遊ばせ、まだ三十には幾つも足らぬ御身を、持ちくづしてどう遊ばします、お母様への御孝養を返らぬ後になつて、お悔ひ遊ばしませんやうに。

年若き女の癖に、と心憎くゝも思し召ませう、けれども私は只お母様がおいたはしくつて！　つひ思ひのまゝを認めました、失禮の罪は幾重にもお詫び致します、どうぞ御赦し下さいませ。

豆まけば踞ふむ鳩や梅日和



成尋法師の母



△濁り江の名花

宮木は播州室の津の遊君にして容儀尤も勝れたり、書寫山の性空上人結縁經を供養したまふ時、宮木布施をおくりしに遊女は罪ふかきものと思ぼしけん、とり入れたまはねばこの歌をよめり、心は諸行實相皆佛法なり、遊女なりともいとひたまふなといふ也、この歌名高くて後拾遺集に入る、彼女中納言顯基卿に愛せられ都に住けるが後捨てられ、室の津に歸りけるその途中にて顯基卿の家の侍にあひければ、宮木黒髪を切りて紙に包み

つきもせぬうきをみるまの悲しさに尼となりても袖はかはされ

とよみてこれを贈り世を遁れ尼となりぬ、卿もあはれと覺しけん終に出家となりたまひぬ。

△老母の哀別

成尋法師は石藏文慶上人に仕へて、學問に長じ、行堅固の僧なりけり、修行の爲めに唐土に渡らんと思ひけれども、年老たる母ありてためらひけるが、母此の由を聞いて、今汝を出家さするは衆生を濟はしめんが爲めなり、御法の事につきて母に氣をおく勿れとて、強ひて發足を促がしこの歌をはなむけとなしぬ

きえかへり露の命はながらへて涙の玉ぞとじめ兼ねぬる

もろこしへ行く人よりもとゞまりてからき思ひは我ぞ増れる

斯くて成尋は名殘を惜しみつゝ、船出をなしける折一封の文を母に送りけるに、母これを見て歎息し、この時この歌をよみけるとなん。

室の宮木



手越の千壽



△佳人才子の哀別

千壽は手越の長者の娘なり、容貌すぐれて美はしく諸藝に秀でたりければ、源右府賴朝召して侍女となしたまふ、然るに平家の一門源かたぶきて重衡中將捕虜となり鎌倉に下り狩野茂光にあづけられるゝ賴朝哀れに感じ重衡が心をなぐさめんとて酒宴の酌をとらしめぬ、されど重衡あへて色情を動かさず、只糸竹朗詠の相手となして月を送りける。千壽も一樹の陰、一河の流れ、皆これ他生の緣なりとてこの歌をよみける、後重衡南都へ赴きけるに別れをなしみ慕ひて病を生じ、鎌倉の營中にて逝りぬ、芳紀まさに二十四、關東の人皆その心ざしを感じ哀を催しぬ。

△孝女の感吟

千枝は日吉神社の禰宜祝部成仲の娘なり、成仲身貧にして、妻も亦病に臥し。家道悲しき中に逝りぬ、さればにや千枝も年ごろになりても宮つかへの事もなりがたく、世の中おもふに任せざりければ成仲これをかなしみ一首の歌をつられける。

もろともに越ましものを死出の山またおもふ人なき身なりせば

千枝これをきゝ涙を流してこの歌をよみける、その孝心神もみそなはしたまひけん、つひによき人に迎へとられて末つひに富貴の身となりしとなん、この歌また新拾遺集に入れられたり。

祝部千枝



△霰の歌人

梶女は京都祇園の茶店の婦なり。いとけなきより和歌を好み、風雅に世を遁せり。家の集を梶の葉と名付て其の名遠く知らる。折々やんごとなき方の歌の會にて詠みいでゝ賞せられし歌あまたあり。十四歳の暮に歳暮の戀といふ題にて

こひ〳〵と今年もあだに暮にけり涙の氷あすやとけなん

又立春のうたに

のどけしな豐葦原の今朝の春水の心も風の姿も

などあり。よみ歌多き中に霰のは歌とりわけ秀逸なりとて、堂上方にてことにほめられしとぞ。

祇園梶女



横笛



△千鳥が淵の美談

瀧口入道時頼横笛と妹脊の約をなせしが、瀧口親の不興をうけゝれば遁世して法輪寺に住めり。横笛これを聞いて怨みにたへず、或る夜經讀む聲をたよりに扉を叩きて訪れしに、人出で來りて、此の深夜に誰ぞと問ふ。横笛瀧口を訪れ來りし由を告げけるに、此庵にはさる方いまさずといふ。瀧口もの〻かげにて之を聞きつけ、流石に言葉を交さんと思ひけれど、悟道の迷ひとさはせざりき。横笛せん方なく、涙を流してこの歌を詠み、桂川に行きて千鳥が淵に身を投て死にたりといふ。年十七歳なりき。瀧口これを聞きて哀れに思ひ、亡骸を上て茶毘にし、厚く弔らひしとぞ。

祇王



△美人の遺跡

彼女が佛御前に寵をうばはれしとき此の歌を障子に書殘して、發心せしなり。祇王は江州中比の里の產れなり。此里 水利の便あしかりしが、祇王が、清盛の寵を得居る頃、堰を掘らせければ、水は此邊一帶を潤し、餘りは湖へ流れ入るやうになりしといふ。今に此の堰あり。されば此里にてはことに祇王と妹の祇女を寺に葬りて追善 供養を行ひ、人によりては忌日に精 進をするもありといふ。祇王の發心は廿一歲祇女は十九歲、母の刀自四十三歲なりといふ。これもまた源平時代の艶史なかざりし美女の一人なり

下蕨の久女



△深山のうもれ木

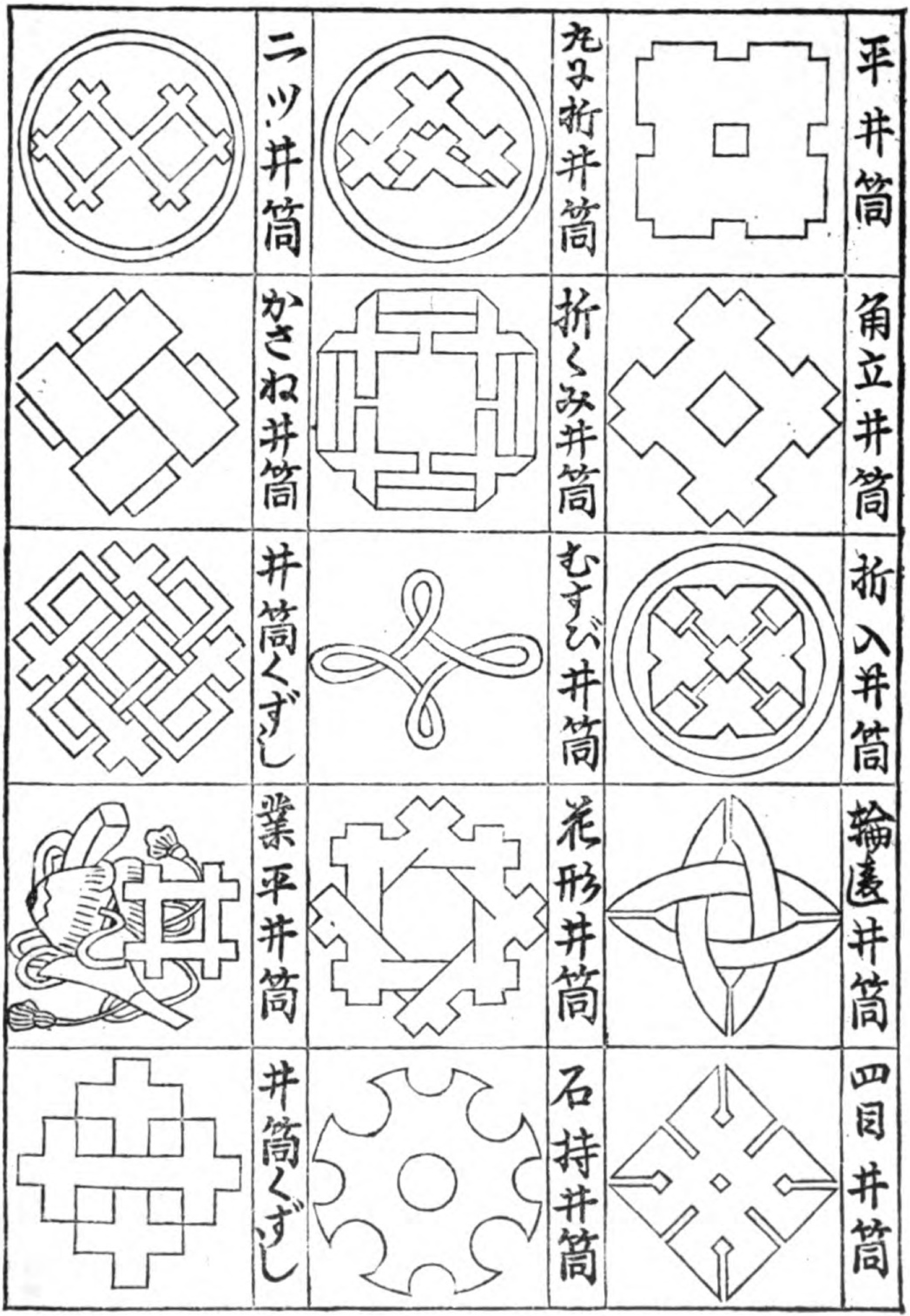
ひさ女は伊奈家の士、川村藤兵衛の妻なりしが、故ありて離緣になりければ、

かりそめのことの葉草に風立て露の此身のおき所なき

と詠みけり。其頃旦那寺の僧なりし人、冷泉爲村卿へお伽に出で、此の物語をかたり出でけるに、左程やさしき心ばへならば、はしたなきことはあらじと宣ひければ、かの僧是を夫に傳へ、短慮をたしなめて又呼戻さしめぬ。妻は爲村卿の德に感じ、又和歌は好める道ゆゑ、門入せんと願ひたれど、弟子にはしがたし、猶は見てとらすべしとありしかば、女は弟子になられざるを歎き、この歌を詠みて亡せぬ、かの僧上京して此の由を冷泉家へ傳へければ、卿は左の一首に香奠を添へて贈られしとぞ

今は世になき深山木の下蕨もえし烟の行衛知らずも

井筒の意匠


平井筒
丸に折井筒
二ツ井筒
角立井筒
折くみ井筒
かさね井筒
折入井筒
むすび井筒
井筒くずし
輪違井筒
花形井筒
業平井筒
四目井筒
石持井筒
井筒くずし

陶宮と精神修養

渡邊てる子

てる子女史は、嘗て漢詩人として名高かつた風流辯護士渡邊輝之助氏の未亡人です。今は牛込神樂坂のほとりに、目下工科大學在學の養嗣子佛治氏と共に靜かな月日を送つて居られます。

◎譬へやうなき心細さ

突然夫に死なれましたので、其の當座は隨分困りました。子供は一人も居ないし、之れぞと云つて力になるやうなものは居ませんでしたし、何とも譬へやうのない程心細う御座いました。然し、幸ひに多少の蓄ひもありましたので、皆樣に御損もかけずにすみました。

人の命は露のやうに果敢いものだとは聞いて居ましたが、夫れを沁み〲と感じたのは此の時でした。而して自分も何時死ぬか分らぬと云ふ氣になりました。當分の間は佛事や、遺稿の出版や、其他書生の世話などで、却々忙しかつたので、氣も紛れ勝ちでしたが、二百ヶ日迄に遺稿も出版して了ひ、書生共も都合よく片づけて了ひ。又夫の死んだのと前後して親近の者に不幸があつたので其方へも心を遣つて居ましたが之れも一先づ片付きまして、爲すべき事は何も彼も爲し終へると、全くたよりが無くなりました。

之れ迄忙しいのに紛れて、心の奥に潜んで居た悲しさ心細さが、一時に胸に迫つて參つて、夫の死を悲しむと共に、我身の上が味氣なく、延いては天地が恨めしく、人の世が果敢まれ、云はふやうなき煩悶に苦しめられました。もう世の中がつく〲厭になりました。

◎陶宮の修養を志す

其の内、ふと、斯う云ふ時嘗て聞いて居た陶宮でも修養して見てはどうかと考へました。以前から私に精神

問題には心を動され易いので、嘗て法華經の註釋本を讀んで深く感じ、夫の存命中にも佛經に現はるゝ親子の情合と云ふやうなものを主にして脚本を作つてはどうかと勸めた事がありました程ですから、其後陶宮の達人と云はれる本鄕三組町の佐野陽月さんの處へ入門致しました。

　陽月さんは八十二歳のお婆さんです。其の人から種種と話を聞きますと、僅か許りの事に泣いたり喚いたりした事が、つくづく耻かしくなつて參りました。自分では隨分波瀾の多い生涯であると思つて居ましたが、陽月さんの閲歷に比ぶれば、實にお話にもならぬ程でした。



　そして徒らに懊惱を重ねて居た私の胸に、一道の光明を投げ込まれたやうな氣になりました。人は唯だウカ〳〵と無爲に暮すべきものでない。成る程死は悲しいものであるが、然し悲しんで痛まずと云ふ事もある。殘つた者は逝つた者を追窮しないで更らに一生面を開かねばならぬ、と浮世の經驗を嘗め盡し、世の中の酸いも辛いも知り拔いて居る陽

月さんの話を度々聞くうちに、久しく鎖された私の心にチラ〳〵と新しきもの丶影が射すやうになりました。

◎綺羅美やかな集會

陶宮の集會は、毎月八日、九日、十八日、十九日の午後一時から四時迄と、三の日（三日、十三日、廿三日）の夜分とにあります。一席の人數は男女半々位で五十名許り、來る方は三四十歳から五六十歳の中年から老年の人が多くて、若いかたは餘り見かけません。而して其の階級は華族、大町人の主人奥樣達が多くて、官吏は少いやうです。

大廣間の中央に一段高い座が設けてあつて、集會者は一人宛交る〳〵其の上に坐して懺悔をするとか、其他修養談をするので、その高座を中にして、五十人許りの人がギツシリ坐つてお話を聞きます。身分の良い方許りの集會ですから、お召物など隨分立派です。

集會者のお話は五分間位ですが、最後に先生が一時間ばかり話されます。お師匠樣だけあつて、其のお話は成程と頷かれる節が多うございます。然し、會衆のお話は一向詰らない事ばかり、初めの程は、聞くに堪へないで、先生から「も少し骨のある話が出來さうなものではありませんか。」と云はれる位です。處が、二度が三度と度重るにつれ、最初下らぬと思つた話が、だん〳〵身に沁みて聞かれるやうになつて行きます。

◎柳の風に於ける如くせよ。

陶宮は秘傳となつて居て、初めて弟子入りする時には、固く口外せぬと誓を立てさせられます。若し秘密を守らなかつたならば、神罰が當ると云つて居ます。ことに昔は血判までして誓つたと云ふ事です。何故そんなに秘密にするのか私には分りません。

とにかく孔子の教へとか釋迦の教へとかを匹夫匹婦の俗耳にも入り易いやうに、やさしく碎いて聞かすものと思へば間違ひありません。多少學問ある方には、

初の程は随分馬鹿々々しく詰らぬもの丶やうにも見えませうが、噛みしめて見ると、だん／＼味が出て來ます。

未來を説かず五十年なり八十年なりの一生を、愉快に面白く笑つて過すと云ふのが此の陶宮の主眼です。たとへば柳の風に於けるが如く、世に逆はず腹を立てず、スラ／＼となだらかに氣持よく世に處すると云ふのが陶宮の説く處です。一面には禪學なども加味されて居ます。從つて萬事を大概にして諦める事、ものに拘泥執着しない事なども主要な條件であります。

耶蘇は博愛を説き、孔子は仁を説いて、何れも着眼點が遠大ですが、陶宮は着眼點が極く卑近であります。腹を立てるなとか、惡い癖を直せとか、クヨ／＼するなとか、總て匹夫匹婦にも早分りのする敎へであります。之れを修業すれば運勢が開けると云ふやうに信じて通ふ方も多いやうです。

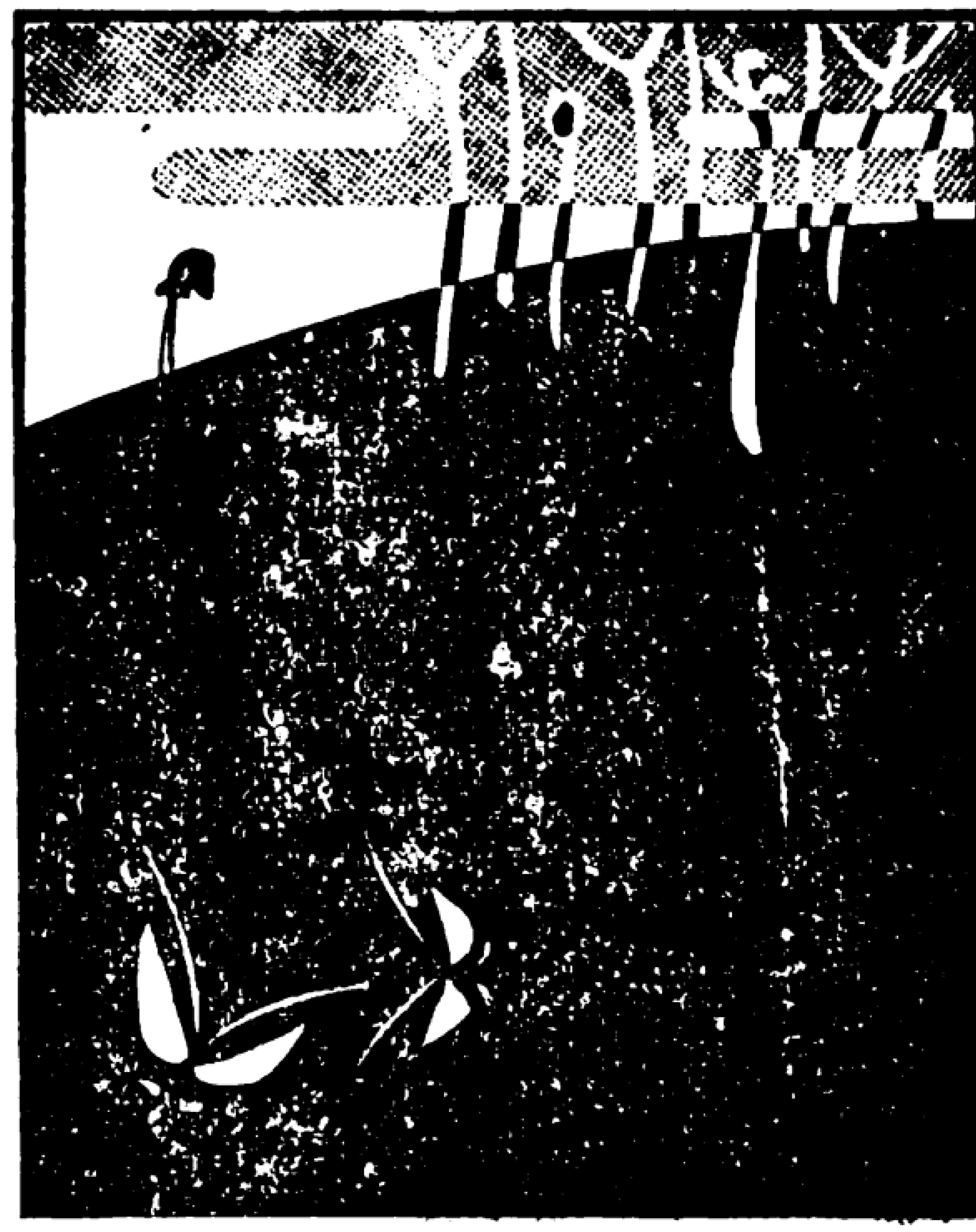
『貴方も之れから運がよくなるでせう。』と言はれましたので、

『いゝえ、私は運がよくなるやうにと思つて修業するのではありません。唯だ鬱々した氣分が紛れて、世の中が愉快に暮されるやうにと、つまり精神修養の爲めなんです。』と私が申すと、

『いけません、人間は運がよくならねば何事も出來るものではありません。運が開け、壽命が長く、而して些細の事に齷齪せず、快活に暮すやうにせねば、世の中の爲めになる事は出來ません。』と先生から訓されました。陶宮の説く處は凡て斯う云つた調子です。

山里は萬歳おそし梅の花　芭蕉
神々の掌ものや梅のはな　碧梧桐
田も畑も構へのうちや赤椿　蘇州
春はもの丶句になりやすし古短册　漱石
初鮎や裏柳も葉に見えて　紅葉











△春の野
△鴻の鳥
△美人草
△松上の鶴



うたものがたり

白桃

目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、たけき武士の心を和げるとやら、實に和歌は優しき尊きものではありませんか、しかしこゝに物するのはさる高尚なのではありません唯初春のお笑草にもと思ひ出るまゝを三つ四つ書きましたので。

◎百姓男の戀歌

お山のお孃さんといふのは或會社の重役の令孃で山の上の別莊へ來てゐる人でしたすぐれた美人ではありませんが花の顏月の眉、すべてがひなには稀れな風俗なので別莊住の徒然なまゝに暖い日などは女中をお供に散歩などして村人の目を引いて居ました。此村に一人の美少年がありました至て身分は卑しいのですが、貴公子と云つても恥かしからぬ風情がありますので是も噂の種の一つでした、お山の孃さんはいつしかそれを見染めて戀に陷りまして悶々の末、一首の歌に心の丈を云はせて女中に持せてやりました、それはかうでした。





君をのみ戀こがれつゝ手づさみに門田に出でゝ若菜をぞつむ

少年はこれを讀みましたが何だかさつぱり分りません、人に聞うにも見せてはいけないといふのですし、早く返歌をくれろと云はれるので、いろ〱考へた末、何でも反對ばかり書けば返事になるだらう「きみ」といふから「しろみ」「こひ」だから「ふな」と

我しろみ鮒あぶりこひ足もぢり裏の畑で午蒡ひんぬく

と書いてやりました、待ちこがれたお孃さんは、取る手もおそしと開きますと是ですから思はず、ふき出してしまつて、それより此戀は忘れられてしまひました。

戀病ひに滑稽ほど好い藥はないさうです。

◎幽靈の連歌

或旅僧が諸國行脚の道すがら山道に行き暮れて、とある山寺に宿りました、勿論住む人もない荒れ寺のこと物すごさも一入でしたが、さういふ事にはなれてゐますから是れ屈竟と本堂の眞中に手足をのばして寢てしまひました、夜中頃ふと人聲が耳に入つて目を開けて見ますと、こは如何に向の部屋に痩せさらばつた人が四五人團欒して口々に「今宵の月は空にこそあれ」と、打案じてはわつと泣きます、旅僧はこれはきつと此上の句になやんで死んだ人の靈だらうと思つたので早速「宿るべき水も氷にとぢられて」と上の句をつけてやりますとありがたうございます……と云ふ聲と共に姿



は掻き消す様にきえましたとさ。

◎盗人の歌合

或武士の妻が子供に添乳しながら夫の留守をして居ますと深夜脊戸に人の氣配がして内をうかゞふ様子ですから、そつと起きて戸の隙間から見ますと盗人がしきりに戸をこぢて居る所でした、妻は早速座敷にかけ上り、なげしに掛けたる薙刀おつとり、戸の内より、

　どろぼうが脊から壁をきり〳〵す亭主の留守をきつとまつむし

と聲かけました。

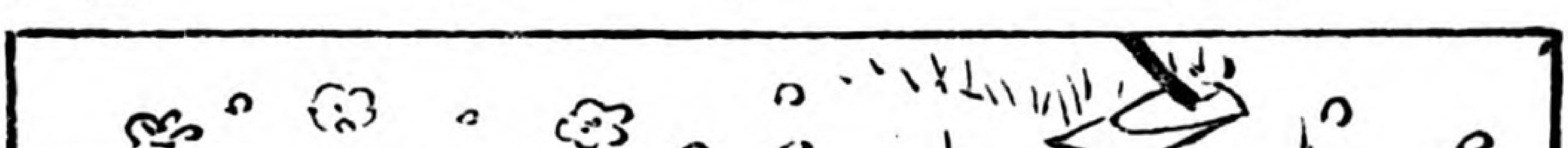
盗人は驚いて内の様子をうかゞひますと後鉢巻に玉だすき、凛々しい女房が薙刀小脇につゝ立てゐますので、

　おゝこはやすんでに首をきり〳〵す御縁もあらば又もこほろぎ

といつて逃げ去りました、是は薙刀に恐れたのではなく、とつさの場合によく名吟を詠む其度胸に恐れたのでありませう。

◎妻妾の歌

愛妾に魂奪はれて内を外に浮かれ歩るく男がありました、妻は愼み深い従順な性質ですからよく、忍んで少しも嫉妬がましい事をいたしませんのに妾は寵をたのんで





如何かして本妻を退けて己れ取て替らん下心があるものですからある事ない事告口して疎ませる様にはかりました。

或日いつもの通り酒宴の最中、今日こそ難題をふきかけて困らせやうと、兼て本妻が秘藏の三味線と琴とをかりにやりました、妻は何も夫のためと、心よく貸してやりました、妾は案に相違して、此度は一番大切にして居るものは何かと探つて見ますと此頃丹精の白菊が滿開したのであけ暮ながめて樂んで居ると云ふ事を知つたので、其菊をくれろと申してやりました、此方では重ね〴〵の難題によい心地もいたしませんが爰が辛抱ぞと、がまんして白菊の枝に歌を添へて持せてやりました。

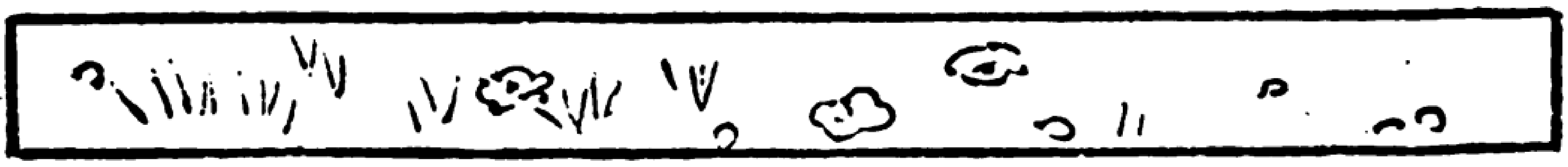
　三味をかし琴にだいじな殿をかし何のおしかろ白菊の花

これを見た男はその健氣な心を喜び流石にあはれと思ひました、で妾にも返歌をせよと申しますと大變に困つて返歌〳〵と云つてゐる中ふつと放屁しました、すると、

　返歌へか〳〵屁の玉が障子の骨にへた〳〵〳〵

とやりましたので流石の男も呆れてしまつて、三年の戀も一時にさめて、ほう〳〵の體でにげ歸りそれからは本妻を大切にしました。

變なお話ではありますが、妻妾二人の人格をよく盡してゐると思ひます、外貌の美は時來れば衰へます内容の美は時を經るまゝに益々光り輝いて最後の勝利は必ず後者のものでなければなりません。





◎似而非連歌

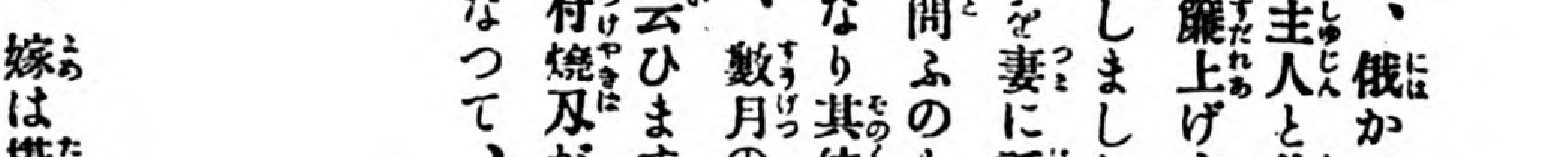
これもよく似たお話ですが、或人役所よりの歸路朋友の家へ立寄ました、俄かの事ですから臺所は隨分忙がしい筈ですのに、奥樣は少しもさわぐ色もなく、主人と共にゆる〳〵相手をしてゐました、すると女中が出て參りまして、そつと「玉簾上げず下さず如何ばかり」と申しますと、奥樣が「君が心でみますばかりよ」と申しました、やがて、かず〳〵の御馳走が出まして、客は歡を盡して歸りまして其の事を妻に話して奥樣の平生の躾方がよいから女中迄が優美だ御飯をいくら炊きませうと問ふのも歌なれば三升と答へるのも歌、實に感心だと賞めますと、細君もまけぬ氣になり其位のこと私でも出來る何かあつたらと下女にもよく〳〵云ひ含めて置きました、數月の後友の會合がありました時下女は今日こそはと細君の前に出て「玉簾……と云ひますと肝心の細君ふとど忘れして、どうしても「君が心に」が出ないのです、付燒刃がどうしてはげずに居りませう、あせればあせる程出なくなる、遂にはやけになつて、

米の三升もぶつたきやがれ

と申しましたとさ。

◎和尚の諷刺

非常に强慾非道な姑がありまして、毎日々々何だかだと嫁をいぢります、嫁は堪へ





かねてはお寺へ行て和尚樣に說諭方を賴みます、和尚は其都度よい樣に慰めては歸へしてゐました、或時其姑が和尚樣永々のお馴染甲斐に何か心得になる事をかいて頂きたいと申します、和尚は愛ぞと早速筆をとつて、

此婆は唐の書物に似たる婆、讀む度ごとによめにくきかな

と書いて與へました。

所がいつとはなしに其意味が分りまして婆さんも恥かしくなつたものと見えまして其後は大さうよいお婆さんになりました。

◎丁稚の機智

長吉が臺所に居眠つて居ますと奧樣が「これ長吉もうお客樣はお歸りになつた、奧にあるお酒や肴を臺所へ運んでお出で、長吉は目をこすり〳〵不性々々に返事しながら、奧へ行て見ますと、硯蓋や小鉢やらがちらかつてゐて、お甘しさうな物ばかりありますので、眠い目も一時にさめて卵の卷燒や、蒲鉾や、手當り次第に口にほゝばりながら、横を見ますと飯蛸が七つ八つ、南京の丼に座禪してゐる、これも一つとつまむ所へ人の足音、南無三寶とあはてゝ袂へ押込み、銚子を取らうとうつむく拍子に、飯蛸はおかまひなし、ころ〳〵と轉げて出ました、奧樣は目早く「それは何か」と云ひますと、長吉はぬからぬ顏疊をたゝいて「お前はお客のさきぶれぢやないか、もう皆お歸りぢやに、何所を途迷ふて今頃に出て來居る、おとつひ來い〳〵」と申し

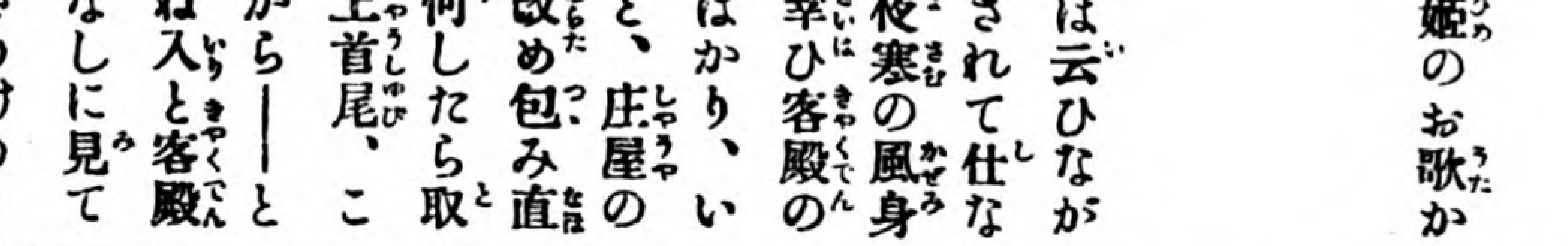


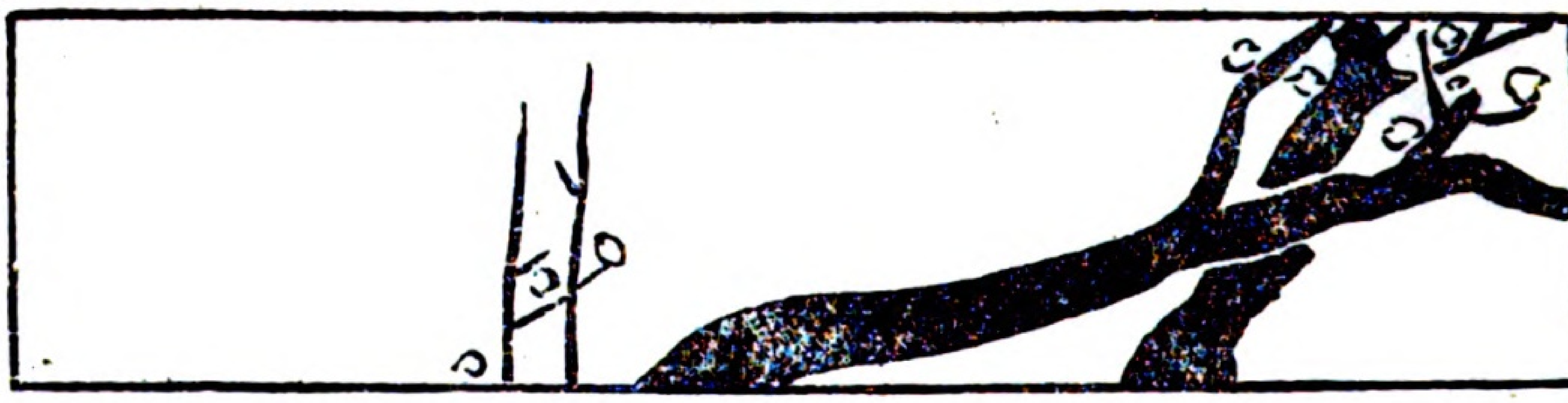
ました。

「我脊子が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふまひかねて知るしも」と衣通姫のお歌から思ひついて飯蛸を蜘蛛あしらひしてごまかさうとしたのでした。

和歌の德

若氣の過から三百石を棒にふり寺男となつた士がありました、心からとは云ひながら毎日〳〵、和尚の食殘した水くさい茶粥をすゝつて猿つかふ樣に追ひ廻されて仕なれもせぬはき掃除に身は綿の樣、是ではつまらぬ〳〵と思ふ中、秋も去り夜寒の風身にしむ頃となつても、國から着て來た浴衣一枚仕方なさに、和尚の留守を幸ひ客殿の縁にねころんで日向ぼつこしながら、つく〴〵行末を考へると、心細い事ばかり、いつそ腹切らうか首くゝらうかと考へ最中、見るともなしに下の方を見渡すと、庄屋の家が目の下に見える、庄屋は人の見て居るともしらず、村方の集金の數を改め包み直して引出へ入れるのを士はきつと見て、忽ちそれが欲しくなりました、如何したら取れるかとねころびながらの胸算用、今日は九月十五日月は有明逃げるには上首尾、こんな古寺に一生を終らうより、一か八かの勝負分け、何でも今夜はあすこから――と決心すると、今の内よく寝て置きたいと思ふ程ねむられません、どうぞ一ね入と客殿の方を向くと、座敷の隅に百人一首の六枚屏風がたてゝあつた、見るとはなしに見て居る内、ふと目についたのは「逢見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」





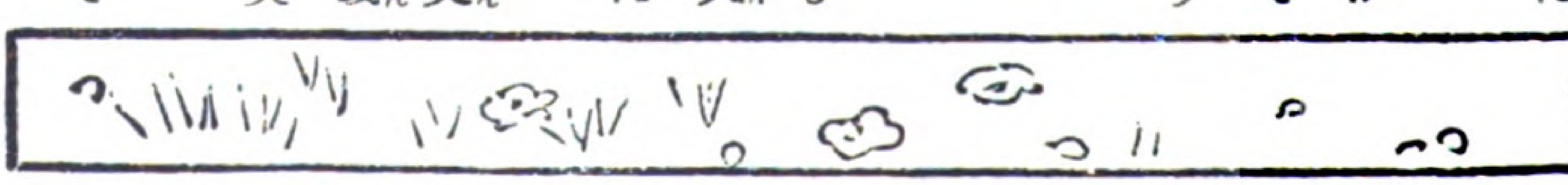
何と思たか士は二三度吟じて居ます中、俄に心が變つて來て、今夜の仕事を止る氣になつて全く善心に立歸りました。

御承知の通り是れは戀歌ではありますが、眞意は何れの方面にも應用ができますから、此士は學問があつたが爲め、戀を遂げで後物思のますといふ意を、惡事をとげての後の苦痛に思ひくらべて、遂に善心に立ちかへる事が出來たので全く歌の德だらうとおもひます。　（了）

よしなし言

宣教師某孃生れは太平洋の蒼波遠くへだつる英領カナダの人なり、日本に渡りてもはや二十年、房々と額にたれにし金髪もすがれて薔薇の頬も色あせぬ、さりながら天に在す神父に身を捧げ、異郷の空に寂寞たる童貞を以て生涯を終ふる君なれば溫乎たる風貌の、物心得ぬ我等にさへしるく慕はしと思ふ君なりけり、ある春の朝なりき、教會の集會、終へてかへるさ、道の邊に女乞食の子を携へたるが、例のきまりたる文句、「右や左の旦那樣何卒御惠みを」と、あはれげにいひつゝ立てるあり孃は即ち一錢を彼女に投じ、さて又我等にむかひていへらく、「あの奥さん、いつも家に來て何か呉れ呉れ云ひます、ユックさん喰物遣る、いやだ金くれ〳〵云ひます。」

蓋し孃の言葉を以てすれば、上はやんごとなき邊の御簾中より下は乞食の女房まで奥さんなり、かくなりては餘り難有き奥樣とはえ申すまじけれ。



煖爐の會話

深雪女

△珍談

東京名物の空っ風は、今日も盛んに灰色の街を吹いて、如何やら白い物でもちらつきさうな空模樣。例によつて教室のストーブのまはりは頗る賑はしい。先づ百舌倶樂部の御大將で多血質の標本と云はれて居る氷川さんを筆頭に劇通で有名な稲子さん、皮肉屋で早耳の延子さん、曰く誰さん、曰く彼さん、何れも一騎當千の强か者が、鼻の先を赧め乍ら、盛んに各自勝手な氣焔に花を咲かせて居る。

突然延子さんは。

「私昨日外出して珍談を仕入れて來てよ、ほんとにお腹の皮のよれる程笑つたわ」と一人で興がる。

「あら御自分で許り面白がつて居ないで、早くこちらへも分けて頂だいな、一體何の話なの?」と、好奇心に驅られた一同の眼は、云ひ合したやうに。延子さんに集まる延子さんは此處ぞと云はぬ許りにいやに落ち付いて、

「どうして却々さう問屋卸しなみ十把一とからげの出來合ひ物ぢやないんですもの」

「何でせう、そんなに思はせ振りなんかなさらなくつてもいゝわ、早く仰いよ」、

「まあ今話すから待つていらつしやいよ。恐らく天下一品の珍談つてこの事だらうと思ふわ。あのモルモットの君れ」、

「えゝそれがどうしたの?」、

「あの人がれ、山本とか何とか云ふ赤門出の辯護士に熱中してれ、目下少々逆上の氣味ですつて手紙位ぢや追付かないつて、一週に二三度づつ事務所へ推しかけて行くんですとさ」。

「オヤ〳〵まあ……」、

「初めの中は、先の人も迷惑ながら會つたんですけれど、近頃は玄關拂ひさ、それがれ、寄生に斷らせても却々動かないので、仕方なしに御當人が玄關まで出張して、『今日は事務が大變忙しいから、お目にかゝつてお話してる譯に行きません、失禮ですけれど、これでお歸り下さい』、つて至極丁寧に眞面目くさつて斷ると、そ





れでもとは云ひ兼れて、しほ〳〵としてかへるんですとさ、やう〳〵家へたどり着いたかと思ふと、今度は疊二丈もあるやうな長い〳〵手紙をよこす……」

「何處から……」

「モルモツトの君からなのよ、それが又た實に振つてゝの『ほんとにあなたは御親切な方だ、私はどれ程あなたの御親切に感謝してゐるかわかりません。御承知の通り、私は學生です勉強せればならない身です、そこをあなたはお察し下さつて、私に暇をつぶさせないと云ふお考へから、いつも歸れと仰しやるのかと思ふとしみじみあなたの御親切がうれしくつて、一層お慕ばしうございます』ですつて……」、



「へえ、何處迄お目出度出來上つてゐるんでせう、それから……」、

「それからね、先の人は一々讀むのも面倒臭いつて、その儘紙屑かごへ投り込んで仕舞ふんですつてさ」、

「可哀さうに、それぢや折角の志が通じない譯ね、だけれどモルモツトも隨分うぬぼれが強いわね、あの御面相ぢや誰だつて恐れ入るからね」、

「でも近頃大分ハイカツて來てよ、ローマだかギリシヤだか、チヨコレートだか、マガレツトだか名の分らないやうな髮に結ひ込んで、金縁の眼鏡に紫の被布、セピヤの袴を一着に及んだ所は何處迄もモルモツト式ね」、

「あなたもお口がわるいのね」、

「口はわるくつても腹はいゝのよ」と、稻子さんは澄してゐる。

「どうせあなたにはかなはないわ」と、氷川さんもつんとする。



「あなた方けんかすれば、その先を話さない事よ」、

「あらまだあるの？」、

「それぢや伺ひませう？」

「それからモルモツトの君ね、何處からかその人の寫眞を持つてきてね、暇さへあればそれを眺めて、一生懸命木像を刻んでゐるんですつて、あの人そんな事が出來て？」

「さあ、ちつともそんな話は聞かないけれどねえ」と稻子さんは小首をかしげる。



「あゝさう云へばあの無器用な人が、近頃栞をつくつたり、肘突をこしらへたりし出したわ」

「矢張りそこら邊のプレセントなんでせう」、

「まあさう、だつていくら此方ばかりやきもきしたつて、先がそんなぢや仕方がないわね」、

「誰か忠告してやればいゝ事ね、あら噂をすればかげがさすつて、モルモツトが來たわ……」

と、

噂はぴたり止る。

△卒業後

「寒いわねえ、ちつとお仲間入りにして頂だい」と、走つて來た幸子さんは、氷のやうな手を園子さんの襟首にそつと推し付ける。

「アツ冷たい、化物みたいな手は誰れ……」と首をひつこます。

今來た幸子さんは、少しあたゝまるとすぐ、

「今日の話題は何？」と尋ねた。

「今日、今日はね眞劍よ、卒業後の方針さ、もう「三十日とまとまつた月はないんですものね、一月はもう末、二月は廿九日限り、三月は廿日から休み、四月にはいやでも應でも追ひ出されるんだわ、百舌倶樂部の命もいま暫らくよ」、

「さうね、何だか急に心細くなつて來たわ、皆さん一體學校出たらどうなさるの？」

「處が皆な極らないのよ、併し幸子さんなんかそんな心配しなくつたつていゝわ、すぐにマダムぢやありませんか」、

「あらさうよ、隨分ひどいのね、覺えていらつしやい」と睨む。

「まあ笑談は措いて、伸子さんあなたは如何なさるの？」

「私？私は田舍へ行つて女學校の先生するわ」、

「ほんとに偉い發心したものね、一と月も續けば大したものだけれど……」

「なんぼ私だつて先生位にはなれてよ、鹿野さんはこゝには居らつしやらないの」、

「此處に居りますよ」、

「あら、あんまりお靜かで分らなかつたわ」、一體あなたは何をなさるの？」

「私、卒業するとね、小間物屋になるわ、皆さん宜敷お引き立てを願ひます、リボンでも何でも外國直輸入の上等な、元値切つて差上げま





すから、澤山買つて頂戴、御婚禮の櫛笄でも、ブローチでも、指環でも、精々勉强いたしますと丁寧にお辭儀をする。

「まあいやな鹿野さん、もうちやんと商賣人になつた氣かなんかで、併しうまいものね、今の口上なんか、あの調子ぢや本當に小間物屋になれてよ、一つ白牡丹の向ふを張つて御覧なさいよ、そしたら學校は皆な御得意になつて上るわ」、

「えゝさうよ、その代りにね、お中元やお歳暮には、夏冬一年中買はなくつてもいゝ雜店の代物なぐださらなけりやあ駄目よ」、

「オホゝゝ、驚くわねえ慾の深い、そんな御得意ばかりだつたら、いくら資本かけたつて三年もこたへないで破產だわ」、

「でも鹿野さんは奇拔ね」、

「私よりもつと奇拔な人がありますよ、杉山さんね、あの方勞働者を澤山引卒して、巴西へ行くんですつて、そして殖民や開墾をするんですとさ」、

「へえ、あの羽子板さんが」、

「羽子板さんッ」と幸子さんは大きく云つて、「羽子板はよく付けたのね、ほんとにあの方のお顔は長方形で、全で羽子板のやうね」

「羽子板も適切だけれど、河豚提灯なんと云ふのも隨分的中してるでせう、自分ながら感心してるのよ」、

「河豚提灯つて誰？」、

「三島さんさ、江之島へ行つた時考へ付いたんだわ、あの河豚提灯ね、誰によく似てると思つたら、三島さんそつくりなんですもの」、

「併し適評ですね、あれで突飛なものを頭に挿したり付けたりしてる樣子は、全きり猿芝居のやうだわ」、

「まあ惡口はやめて、家業的の方針に引き戻しませうよ」、

「あなたはいやに家業々々つて氣にするのね、それぢや私知つてる丈話して上げるわ、廣田さんは鈴木さんと改姓して米國へ新婚旅行、川井さんはお國の女學校で敎師になる、石山さんは藝術硏究の爲に坪內さんの文藝協會へお入りになる、君子さんはライブラリアン、道子さんは某新聞のタイピスト、あとはまだ五里霧中の連





中よ」、
「あなたは却々詳しいのね、でも私のだけは御承知ないでせう」、
「知らなくつてさ、岩村ドクトルのマダム、そんな事は前世紀から知つてますよ、當つたでせう。
「お氣の毒樣、少々方角が違ひましたよ」、
「嘘仰しやい、違ふものですか、そんなら今なぜ赤い顏をなすつた」、と伏目になつた。顏を覗き込んだ。
「あら私赤くなんかなりもしないのに、何とでも仰いよ、どうせあなたのお口にはかなはないんですからね」、と赤くならないと云ひながら眞赤になつて辯解する。とたんに時間の鐘がなる。皆な俄かにあはてゝ、
「あら私まだ漢文の下讀みしてないわ、當てられたらどうしませう」、と大急ぎで席につく。

△コンパニー

お晝のお辨當は大急ぎで濟まして、皆なストーブニ集る。
「私、あまいものが欲しいわ」、となほ子さんが口を切ると、
「私も」とかず子さん、
「コンパニーしませうか?」
「皆さん如何?」
「私贊成」
「淸子さんは?」、
「オフコース」
六七人のお辨當連は、即座に協議が一決する。
「私くじを作るわ」、と黑板へ行つて白墨で筋ひく。下だけ匿して、なほ子さんは、
「さあ宜うございますよ、仰しやいな」
「私一番右の端」、
「私は中央」、
「私 左の端から二番目」、
「君子さんは?」、
「えゝ私 殘つたのでいゝわ」、
「さあ御覽なさいな、淸子さんとかず子さんがお使ひよ。御苦勞さま」、
「オヤ〳〵貧乏くじを引いたわ、それぢやお金を頂だいと、白墨の箱を持つて來て、皆なの前に出した。



「何がよくつて」、

「おいしいものがいゝ事よ」、

「私は撰定の權利を一任します、その代り責任をもつて願ひますよ」となほ子さん、

「成るべく早くれ」と云ふ聲を後にきゝ流して、三十幾錢を手にしたかず子さんと清子さんは、ぢき筋向ふの菓子屋へかけつける。

待つて居た一人の君子さんは。

「石炭が乏しくなつたわれえ、少し徴發して來ろわ」と云つた。

「難有う、まだ世の中は澆季ぢやないわれ、あなたの樣な仁者が稀にはあるんですもの……」、

「よくつてよ、そんなお世辭を云はなくつてもと出て行つた君子さんは、暫らくしてからふくれた顏して入つて來た。そして、

「駄目よ、モンキーが喧ましい事を云つて、あんな者と爭つたつて馬鹿らしいからかへつて來たの、もう少したつたら行きませうよ」、

「あの小使だめれ、私も先日喧嘩したわ、生徒の云ふ事なんかちつとも聞かないんですものれ」、

「自分のものぢやあるまいしれえ」と云へば誰かゞ、

「職務に忠實なんですよ」とまぜつかへすそこへ、

「お待遠樣」と使者がかへつた。

「御苦勞さま」と一度に聲をかけて、今ひらきつゝある所の皮包みを見ながら、

「おいしさうれ」と云ふ人もある。

「頂きませう」と三方四方から忙しく手が出るまたゝくひまに征伐して仕舞つた。

「御馳走さま」、と竹の皮はすぐストーブの中へ投り込まれた。





庭に一株の老李あり、春四月の頃ともなれば青白き花ちら〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす、隣家に花樹多し、風に從ひて飛花吾庭に落つ、紅雨霏々、白雪紛々、見ろが内に滿庭花の衣を着く、仔細に見れば、桃の花あり、櫻あり椿の花瓣あり、山吹の花、李の花あり（蘆花）



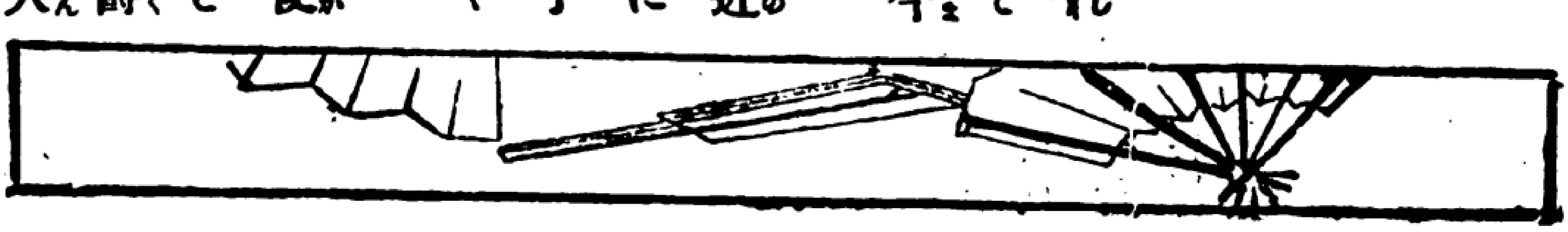
想ひ起すさまぐ＼の婦人

坪谷水哉

○子の年の正月は、他人は多く鼠に就て種々な感想を書ける中に、余は鼠と聞ても身震ひするほど嫌ひで嫁ケ君といふ優し相な名をも呼ばずに過した。是には大いに理由がある

余が母君は、或る夏の夜に、枕邊に騒ぐ一疋の鼠を、暗がりの手探りに不圖捕へたまひしに、鼠は困しさの餘り、右の無名指に嚙み着きしも、母は屈せずして終に握みたるまゝに締め殺し給ひしが、其時嚙まれたる疵口は腫れあがり、醫療の手を盡ししかど、毒は次第に全身に傳はり、終に其の年の秋の夕の露と消え給ひき。其れは明治十二年の事、裘葛最早三十四年を經ても、余は鼠の憎さと其の毒の怖ろしさとは今も忘るゝことが出來ぬのだ。

○十年ばかり前の新年に、時の貴族院議長近衞篤麿公を日比谷の官邸に訪ひまゐらせしに應接室の煖爐の前に、一人の妙な人物が椅子に腰かけて手を火の上にかざして居た。痩ぎスの色黒く、髪は茶筌に束ねて、袴を穿き、公爵に對しても朋友の如な慣々しい言語を使ふ。男か女か、若いのか年老いたのか、殆ど判斷が附かぬ。會たま他にも客ありて、公爵は其の方に話頭を向けらるゝと、彼の妙な人





物は『貴方は今御忙し相だから向側の鳩山の宅へ行て來ます』と、輕く會釋して去り、是も其頃衆議院議長で、公爵の官邸の向側に居る鳩山和夫氏の方へ行た。余は傍の人に、『彼れは何方です』と尋ねると、彼人こそは現今愛國婦人會設立の爲に、朝野の間に活動する稀世の女丈夫奥村五百子女史だと敎へられ、始めて成程と首肯いたが、其後近衞公も逝かれ、女史も逝かれ去年は鳩山和夫氏もまた世を去て、今は當時の思出の人は一人も無くなつた。

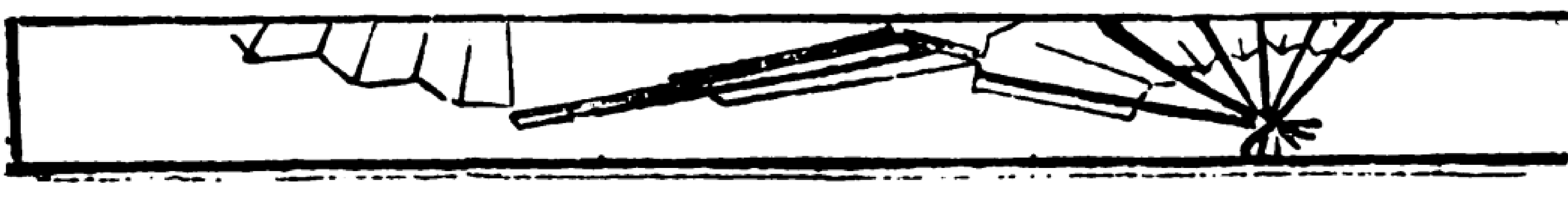
○一と夏伊豆の下田に遊ばんと、沼津から汽船に乘ると、風浪の爲に西海岸の石室崎の沖を通りかね、仲木といふ村へ上陸り、山を越すのに携へたる寫眞機械が荷厄介で、茶屋に囑んで人夫一人雇はせると、頓て來たのが五十歳餘りの老婆、隻眼眇の怖い樣な顏で、草履を穿き日傘を持つた。余は此の老婆では旨く機械が持てるかしらんと危ぶんだが、彼女は茶屋から大きな風呂敷を借りて機械を包み無造作に肩へ懸けて、直ぐに坂路を登り始めると、脚の達者なことは天狗の牝かと疑はるゝばかりで、空身の余は蝙蝠傘を搾つて杖とし、洋服の脊を汗に濡らしつゝ、喘ぎ〱背後に隨ひ、後方から聲かけて慰める積りで、『お婆さん豪い達者だが全體幾つだえ』と尋ねても、彼女は聾か一向答へない。暫らく經てから今度は『お神さんお前幾歲?』と問ふと、クルリと背後へ振り向いて『まだ五十三よ』と云ふ。彼女は聾では無つた。五十三歲で阿婆さんと呼ばれたが不滿らしいのだ。其の達者なのも無理はない。

○明治三十六年の秋、南淸に遊んで香港に行





くとき、日本郵船會社支店詰の一友人に伴はれて、其地の野村樓といふ日本人の料理店に登り、坐蒲團に胡坐かいて、酒も出で肴を運ばれ、宛がら日本内地に居る様な氣になり、興正に酣はなる頃、襖を開いて現はれたる一美人が、鶯の様な聲で、友人に向ひ『オヤ是は○さん入らつしやい暫らくネー』と挨拶するを見れば、年齢三十ばかりで、髮は英吉利巻とかに結び、衣服も帶も驚くべく立派だが、殊に驚いたのは其の左右の手の中指と無名指に、花火筒の箍の如に幾つも箝めた指環で、何れも山吹色の黄なるは勿論、中で輝やくダイヤの光りが、先づ著しく眼を射る。其の全身の裝飾には、夥多しい費用が附着るのでトテも外國出稼の藝妓なんどの企て及ぶところでない。而かも席上斡旋にも素人離れがして、海に千年山に千年の功を積である。抑ゝ彼女は何者であらうか。余は少なからず其の人物に不審を抱いたが、後に聞けば彼女は野村樓の主婦である。單に一酒樓の主婦では、多寡の知れた者だが、彼女の本業は別にある。凡そ日本から南淸、南洋、マレー半島、印度等の各地へ渡りて、出稼ぎする婦人の數は三四千人で、彼等は出稼とは言ひ、實は人身賣買の如な境遇に在るのだが、其の出稼婦人の集散を指揮する大元帥は、野村樓の主人夫婦であると聞て、彼女の服裝に豪奢を極むることも首肯かれた。またドウやら見覺のある様な顔だと思ふたが、即時には思ひ出せなんだが、見覺あるも道理なり、後に聞けば、彼女の前身は、立花屋蝶之助とて、娘手品の名人として、一時は東京の寄席で、滿都の書生社會に天女の如く持て





囃された者だ。

○余がまだ少年で越後の田舍に居る頃、淸客王治本といふ詩人の書家が巡廻して來て、余が鄕里の加茂町に數日間滯在した。其の隨行者は三十ばかりの日本婦人で、揮毫依賴に對する交涉や、金錢の出納や、鵞箋紙を展べるのも、墨を摺るのも、一切擔任する上に、自分でも何某女史と號して、拙いながら少しく書も書いた。また主人の言語を解して、衣服や飮食の始末もするのだから、無論多少の淸語にも通ずるので、余は其の多能に驚いたが、一夕土地の有志が、先生と女史とを招待して小宴を開くと、酒間に女史は興を幇けて、障子を座敷の中央に横たへ、自身は其の蔭に入り、他の藝妓が彈く三味線に和せて、手指の先へ盃を冠せ、箸を指の間へ挿んで、端唄の『夕暮』を歌ひながら、影繪で踊らせるのが、頗る巧いので、もう一つと注文すると、今度は中指の根節に盃を載せて上には、五指を下に向けて左右に搖かし、大津繪の『雨の夜』を矢張り影畫で踊らせた。田舍では奇らしい手際なので、非常な喝采で、其の評判が高くなつて、王治本の揮毫を請ふ者も意外に多くなつた事がある。兎角景物次第で賣れるのは商品ばかりでない。

◎家庭劇協會の公演

家庭劇協會にては、來る二月十日、十一日、十二日の三日間、本鄕座に於て第四回の公演を催す由なり、其演題は、生田葵山作の「爺と孫」、巖谷小波作の「爲朝の子」、小山內薰作の「人形」、巖谷小波作の「喜劇」等にて、天野雉彥石川木舟の諸氏も出場すといへば、定めし面白きことならん。





松井須磨子孃と語る

婦人記者

△想像の須磨子孃

帝劇の舞臺に見たオフヒリヤが第一印象で、第二印象は遂先頃のノラ。まだ一度も直接その人に接する機會を得なかつた私は定めてハイカラな、けれども何處か可憐な、そのくせ何となく世にすれた樣な、そしていやに自覺呼はりでもしさうなとそれからそれへとりとめもない想像を小さな胸に往來させ乍ら大久保余丁町の假住居を訪れたのです。

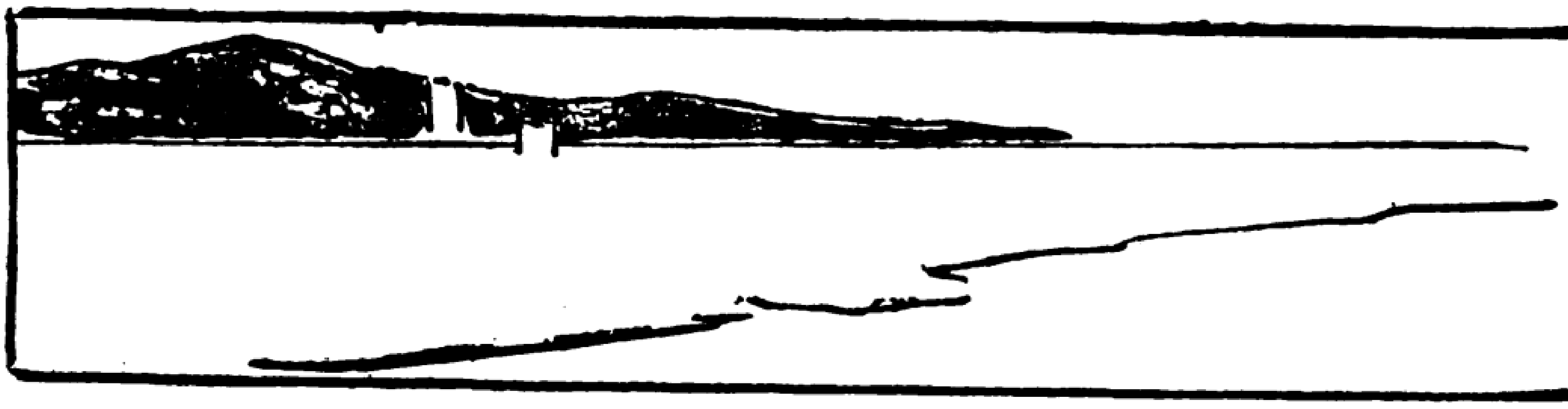
「どうぞ二階へお通り下さい」と云ふ取り次ぎの言葉にコートを脱ぎかけると「そのまゝどうぞ」と美しい顔が梯子段から半分程現れる。

△直接會ふた須磨子孃

通されたのは十疊敷の一間、そこが當時文藝協會での花形、松井須磨子女史の居間で、床の間には三味線が一挺立てかけてある許り、反對の壁には新らしい簞笥が並べられた鼠入らずが際立つて目に着く。それから本箱と机が一脚、讀みさしの雜誌はたしか早稲田文學、書棚には背革物が六七册、外には鏡臺と針箱裁板などが夫れ〳〵整然と置かれてある。そこで初對面の挨拶を濟ませて相手の女史と對座した瞬間、今の今迄頭の中全體を占領して居つた樣々の想像は朝日の前の泡雪と消え去つてその後へ奥床しい、懷かしい且つ一種の意外の感じが入れ代つたのであります。

淸楚なそして何となく引きしまつた容貌の須磨子孃は油氣のない束髮も温和しやかに手織かとも見える黑つぽい銘仙の着物に矢絣り質素な銘仙の羽織を重ねてメリンスの帶に荒い縞の前掛、紅入り友禪の半襟だけが色白の顔を一層美しく見せて居る。これがあの華やかな帝國劇場で見たオフヒリヤやノラとは……「私、貴女にお目にかゝつて今迄の想像があまりに外れたのに自分乍ら意外に感じましたわ」と云はざるを得なかつた。

聞けば忙しい中から炊事のわざも一手一つでされるのださうで、着物も自分のだけは縫はれるとか「どうせ立派には出來ませんけれど昔氣質の母でしたか



ら女一と通りは出來なければつて嘗はせられましたので……それに私も亦細かい事が好きでして時々暇があると細工物なんか致します、さうすると皆さんが不思議のやうに仰いますが、でも矢つ張り女ですものね……」と美しく微笑まれる。

△女優生活の努力

それはもう目明き千人盲千人の世の中ですもの隨分腹の立つやうな事も御座います、俳優と云へば直ぐ河原乞食と云ふ風に考へる人がまだ〳〵澤山にありますし、殊に女優と聞けば藝者と同じやうに人の機嫌をとるもの、顔を賣るものと合點して居る人が七分なのですから、自分許りいくら高尚な研究だと考へて居りましても、世間でさう思つては呉れません、比較的東京などでは分つて居られる人々も多いのですが、田舎へなど參りますと、隨分辛らいと思ふ事がございます。しかしそんな事は小さな愚痴で、今の時代では寧ろ當然の事だらうと存じます姉妹親戚の間でさへもその通りなのですもの。私も東京に親戚がありますから、以前はよく行きましたけれど、かう云ふ事をする様になつてからは、一度も參りません、軍人ではありますし、先方の思はくも如何かと此方から遠慮して居るのです。舞臺へ出る事になつてから。先達て初めて郷里へ歸りましたが、帝劇へ出るなどと聞いて居つた國の人々の間には、大きな話題になつて居るらしうございます。そんなですから家へ歸りましてもうつかり女中などの居る前で舞臺の話や芝居の事など申しますと姉がちよい〳〵と傍で袖を引くのです。私には何が惡いんだか分りやしないつてこぼしますと「自分許り何とも思はないでもまだ世間の人は分つては居ないのだから氣を付けなくなつちやいけない」つてかうなんです。母なども早く世間が分つて呉れなければ困るつて許り申して居ります。田舎でなくつてもこゝから協會へ參ります途にもそこらに遊んで居る子供などが「あれは俳優だよ」なんて云ふのを聞くと妙に嬉しい氣がしないのです。けれども一旦堅く決心して周圍の反對を退けてかうなつたのですから例へどんな辛らい事があらうとも一人前にならなければ止まない考で居ります。坪内先生などもあんなに熱心にお盡しになつて居られるのですしその中には世間も漸々分つて來る事と樂しんで居ります。まあ何





にしても眞面目に熱心に研究を續けて行く事が何よりも大切だと思つて居ります。

△後進者に

藝術に趣味を持つて居られる方で自分も一つ女優になつて見たいなど丶考へられる人も、大分ある事と思ひますが、華美な生活をし度い爲とか何とか云ふ薄弱な考へならば先づ見合せた方がよいと思ひます女優になつて虚榮心を滿足させるなどと云ふ事は却々覺束ないのです、何誰にしろ最初は立派な決心を持つてお入りになるに違ひありませんがそれが止むを得ない事情とは申しながら中途で止めるものが隨分多いのです、私共一所に入りましたものも一人減り二人出て卒業する中には只だ二人になりましてその一人も今は協會の方は止めて居ますから私が一人法師になつたのです、途中で止める位なら、世間で兎や角云はれる丈損ですし、協會の方でも折角骨を折つて物にならないんですからつまり兩損です。

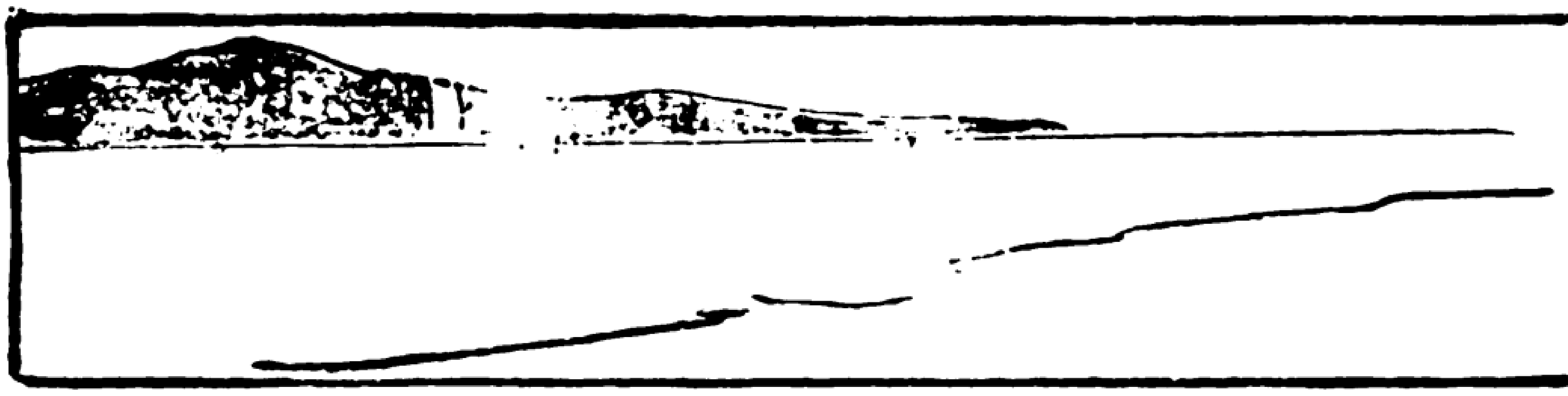
それに何と云つても他からの誘惑があり勝のものですからそれ等に對しても充分打克つ丈けの意志がなければなりませむ。今一つはいくら自分が趣味を持つて居ても柄があまり小さくつては如何かと思はれます、姫などに許りなつて居れば差支へないのですが何でも演ると云ふ事が出來ません

要するに身體と調子と確固たる決心とこの三つが何よりも大切かと思ひます、これで眞面目に研究さへ怠らなかつたら必ず或る程度迄は發達すると云つて宜しいでせう。

又卒業は致しましても初めからよい役などが付くと云ふのは到底望まれない事で、十年や十五年は一生懸命研究する事が必要です、私が先達ノラの樣な大役を付けて頂いたのは普通ではありません、實に破格な事なので自分でも十年も先へよつてからでなければと思つて居りましたから あまりの事に出來るか知らと懸念いたしました、併し先生方のお蔭でどうやらお茶を濁して濟ましましたが皆から云ふものと考へては非常な誤解です。

△舞臺へ立つての心配

舞臺へ出る迄は如何かと懸念致しますが一足でも舞臺を踏めばもうすつかり落ち着いてその人その役

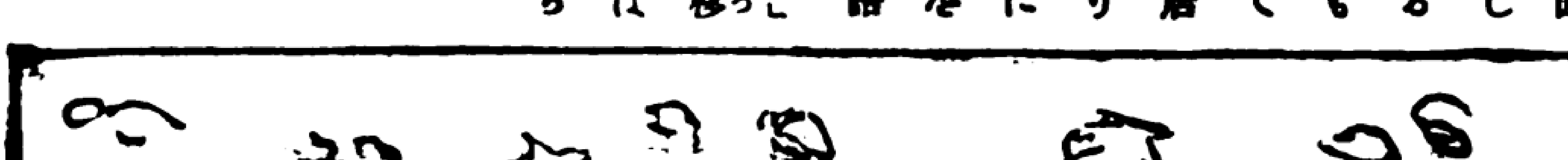


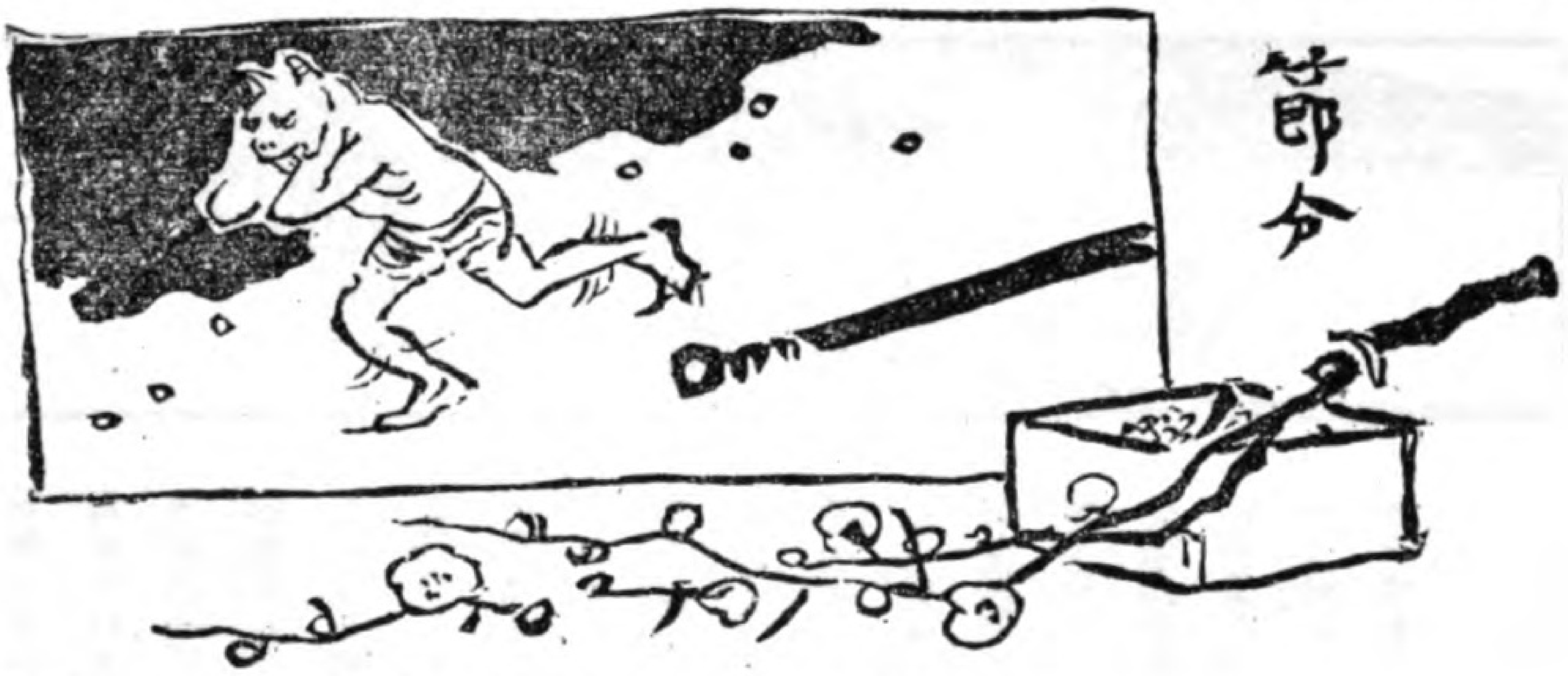
になり切つて仕舞ふものでありますから別に心配も苦勞もありません、たゞ時として道具方などが氣が付かないでちやんと調へてある筈の品がそろつて居らなかつたり、又は帶の結び方がうまく行かないで踊り乍らこはれる所が、その前に解けて仕舞ふなどと云ふ事が一番氣がゝりです。ノラの時にも乳母が持つて出た衣裳箱の中から、靴下を出してランク・に見せる、すると先きで「絹の靴下」と云ふ臺詞を云ふのですが、丁度その舞臺稽古の中には衣裳ばかりで、靴下はないのです、さあ如何しやうかと考へましたけれど、見物人の居る前でどう仕樣もありませんから、隙を見てそこらにあつた手袋を代りに入れて置きました、そして靴下に見えるやうにと指の方を握つて見せますと、先では正直に「絹の手袋」つて云つたんでせう、あとで先生から今日はランク・の臺詞が間違つたつて批評されましたが「でも本當に手袋だつたんですもの」つて云つて笑ひましたが、一つ狂ひますと臺詞まで代へればならないのですから一寸まご付きます。

△日々の仕事

公に演じたものはまだハムレツトとノラと二回よりありませんが、一つ濟みますとまた直ぐ後の出し物について稽古を致しますから、毎日協會へは出るのです、又歌ふものなどのあります中は、一日でも聲を休めて居ますと、もう翌日は出し工合が違つてきますから、毎日缺かさず大きな聲をして歌つて居るのです。降つても照つても協會へ出ない事はありませんから、稀に出ない事があると人々が不思議に思はれる位です、それから夜分は立廻りと踊りとを稽古して居りますので、少しは本も讀みたいし、語學も仕度と思ひ乍ら、却々暇がないので御座います」と云ふ調子で人を外らさぬ應對ぶりに思はず時を移したのであとは又この次にと辭して歸る、「願はくば松井女史幸ひに劇場の爲に健在なれ」とは途すがら私の心の底から私の耳に囁いた聲でした。

櫟林の一社松林の一寺哉　松露
鐘塞で群音の中の主かな　笑峰
青柳や水筋違ひに五大橋　不水





節分と初午の祝ひ

笹木幸子

△節分

節分は鬼やらひとも、又豆打とも申します。これは字の通り季節の分れ目即ち歳の終り立春の前夜を祝ふので、昔は大晦日即ち十二月三十一日を、年の分れ目として祝ひましたが、唯今では二月の三日を祝ふ樣になりました。此の日には夜、鬼が入つて來るのを防ぐのだと申して戸外に柊の葉や赤鰯の頭をさします。それから豆を炒つて升に入れ三寶にのせて床の間に飾りおき、年男と申して一家の主だつた男か、其年に當つた男が其豆をつかんで福は内鬼は外と言ひながら座敷中へまきちらします。すると家族の者は散つて居る豆を自分の年の數だけ拾つて紙につゝみ、身體中をなでゝ、之に錢を一錢二厘だけ入れて四辻に捨てます。かうすれば身體中の惡魔を拂ふと申します。一錢二厘は十二支にかたどり年中を意味して居るので御座います。又厄拂といふ者が其日に家々の門に參りますから、包んだものをそれに與へて、厄拂の祝歌を謡はせる事も御座います。何れにしても陰惡の氣を驅り、青陽を迎へるといふ意味でいたすのであります。唯今では此の式もあまりいたしませんが、やはり昨年の惡い心を去り清い心になつて初春を迎へるといふ意味の式は、私どもにとつては、あつて宜しいことゝ思ひます。子供等に鬼など申して こはがらせるのは宜しくはないでせうが、惡い行ひを鬼といふのだと申しきかせて、此の古式はなるべく殘しておき度い樣な氣がいたします。此夜は節供を作つて祝ひます、



節分の夜食献立

○椀
手づなかまぼこ
焼ふきのとう
白味噌汁

○小丼
豚肉
節分煮
生姜と独活（春と冬）

○皿
小鯛みぞれ揚
くわゐ松葉あげ
合せ醤油

○酢の物
なまこ
薄作り
二杯酢

○中皿
豚は内
（ぶどう豆）



△初午

初午と申すのは、二月の初めの午の日に稲荷大明神を祭るので御座います。昔は、家毎に稲荷明神を産土神として必ず屋敷の内に社を建てゝ祭つたものですが、だん〳〵人口が多くなり、從つて土地も狭くなつて参りましたから、唯今では餘程豪家で土地を廣くもつてゐる家でないと祭らない様になりました。稲荷は俗に狐を祭つたものだと申して居りますが、之れは間違で、本社は山城紀伊郡にあつて、倉稲魂神（一名保食神）を斷つたもので、五穀の神様で御座います。「保食神腹中生稲」といふ古い記錄があつて、之れが「稲生」となり「いなり」となり「稲荷」となつたのだらうといふことで御座います。其のお使が狐だつたといふ事で、それが轉じてお稲荷様を狐のことだと申すやうになつたものと見えます。それゆゑ五穀の豊作を祈るにしても、産土神として祭るにしても、子供などに狐を祭るなどいふ迷信をいだかせない方がよからうと思ひます。此日は社前に幟を立て、太鼓をたゝいて、子供は大變悦んで遊びます。また家々では御馳走を作つて、子供等を集めて祝ひます。

初午晝食献立

○椀
殻がき
しきのり
すまし

○中皿
短册かぶ
糸こんにやく
青豆
くろめ酢和

○煮しめ
たこ軟か煮
太鼓くわゐ
蓮根稲荷巻
糸こんぶ

○木皿
赤飯
胡麻鹽





胃癌全治の實驗談

旗野如水

旗野氏は、元陸軍將校で今は大分縣の北海部の在郷軍人團長ですが、一昨々年八月胃癌にかゝり、醫者には匙を投げられ、もうあの人も可愛さうにと、人からも言はれた位であつたのに、福岡大學の三宅博士の手術で命拾ひをせられ、今では發病前よりも立派な身體になられた方です。胃癌といへば全く不治の病と思はれて居るのに、これは珍しいことですから、こゝに病氣の徴候治療の有樣などに就てのお話を紹介いたします。（婦人記者）

▲胸のやけるのと口中の爛れが曲者

はじめ、發病の凡そ一ヶ年前ぐらゐから、胸が焼けてクヮッ〳〵とするやうな心持がして、大した痛みもないが何となく氣味がわるいので、臼杵市で二人の醫師に診てもらつて二ヶ月間ばかり服藥したが、癒りませんでした。

其後は手製の健胃劑位を用ゐて打捨つて置いたが、腹が空くと胸のクヮッ〳〵とする心持はます〳〵烈しいやうでしたから、何處へ往くにもビスケットなぞを懷中して、チョイチョイと食べては凌いで居ました。また二年ぐらゐ前から、口中にいつも豆粒や米粒ほどのものができて爛れて痛むので、鹽酸加里と硼酸を合せた水藥で斷えず含嗽して居ました。併し始めから胃の痛みは少しも覺えず、食慾も一向變りはなかつたのです。人によつて違ひませうが、私の胃癌の始まりの徴候は此のやうに極く平凡なものでしたが、あとで考へると、胸がやけてクヮッ〳〵としたのと口中の爛れたのが曲者であつたのです。

▲突然鴨の卵のやうな塊が現はる

こんな風で、輕い胃病位に思つて平氣で居ましたが、一昨昨年の八月、兵士の點呼に會して家へ歸ると、俄かに眩暈を覺え、脉搏も多少衰ろへ、脛も大部腫れたので驚きました。醫者は多分數日間演說したために、心臟が弱り、腦貧血を起





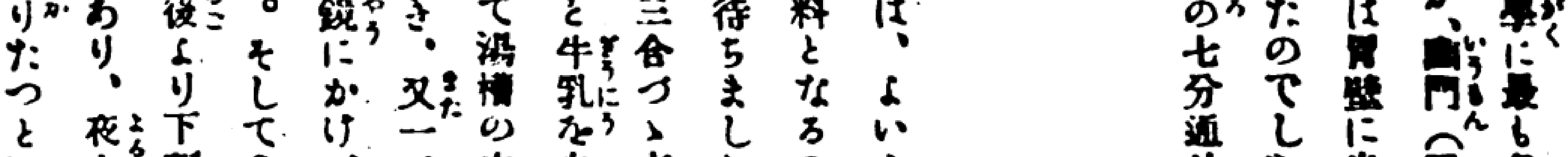
したのであらうと云つて手當を施こしましたが、三日ばかりで脛の腫も去り、一週間ばかりで心臓の動らきも出ましたが眩暈は直りませんでした。それに日々鷄卵十個、牛乳四合づゝも飲で居るのに、非常に衰弱して全身の皮膚が蒼黄色になりました。で醫師は若しやと疑を起して腸胃專門醫と相談の上、四五日の間、試驗的の投藥をしましたが、さうすると九月二日になつて突然家鴨の卵ぐらゐの塊りが、胃の左方、水落の下一寸ばかりの處に現はれて、立派な胃癌と定りました。しかも病毒の範圍が意外に大きいのに、二人の醫者は愕ろきました。そしてもう内科の療治では覺束ない、一日も早く大學の大手術を受る決心をなさいと勸めてくれました。塊りに手を觸ると能く分り、大抵水落の下にありましたが空腹の時は臍の上までおりることもあつて、始終動いて居ました。

▲不幸中の幸ひ

で決心してすぐ醫科大學へ往きました。すると學士や博士は毎日胃を洗つた液と兩便を檢査し、また肛門から挿藥なぞして試みて居りましたが、やがて大手術をしても成功の見込があると云つて、外科部へ廻はされました。外科部長の博士三宅速氏は日本一と云はれる胃癌手術の名家で、手術して助かつた實例はこの大學に最も多いのです。さて胃癌は多くは噴門(食物が入る口)か、幽門(腸に通ずる口)部へ出來るものださうですが、私のは胃壁に出來たので、痛も急に起らず、飲食にも差支なかつたのでした。併し病毒は兩方へ一時にひろがつたので、胃嚢の七分通りは切り取りました。

▲大手術の用意

軍人あがりの私でも、俎の上で料理されるのは、よい心持はしなかつたが、まかり間違つて醫學の研究材料となるのも愉快なことだと腹を据ゑて、手術臺に上る日を待ちました。で入院以來は毎日お湯四合、鷄卵六個、牛乳三合づゝ支給されましたが、腹が空いて堪らぬから、ソップと牛乳を自費で餘分に飲みました。診斷は晝夜二回裸體にして湯槽の中に入れ、叮嚀に患部を押し試ろみて塊りの圖を畫き、又一二回づゝゴム管で胃を洗らひ、その液と兩便を顯微鏡にかけ、尚耳たぶから血を取つて營養の多少を見たのです。そして愈ゝ手術の日が定ると、前日には朝から絶食して晝後より下劑を二回頓服させられて、翌朝までに二回の下痢があり、夜九時頃、右の胸に二針の皮下注射を受けて、十分許りたつと四十





度の發熱があつて、十二時頃さめました。これは施術後の發熱を豫防するのださうです。そして手術當日の午前五時頃、ゴム管を胃と腸へ差入れてすつかり不潔物を洗ひ出しました。若し不潔物があると後に痛を起すさうです。で八時に二名の看護婦に連れられて手術室へ往き、フランネルの病衣を着て臺の上へ仰向けに寢ると、看護婦は下腹部一面に石鹼水を塗り、剃刀で綺麗にそり、悉かり消毒をして、博士の來るのを待ちました。

▲氣後れした患者の不幸

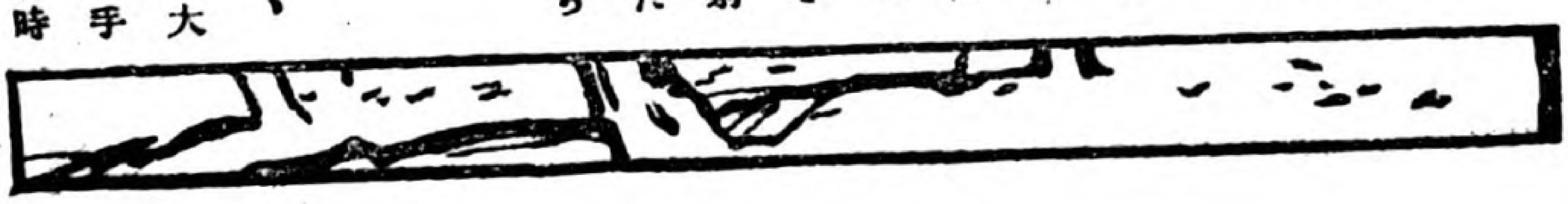
この日は胃癌の手術が三つあつて、第一番は病人らしくもない四十二三歳の男でしたが、イザとなると顏が蒼白くなり、唇は紫にかはり、聲音もふるえて恐怖の樣子如何にも氣の毒でしたから、私はいろ〳〵勵ましてやりましたが、後できけば、この人は私より輕症であつたのに、手術後直ぐ死亡したさうです。全く氣後れして悶死したものと見えます。こんな場合にはかの催眠の氣合術などを應用して、無念無想に入り、精神感動を鈍くすることが必要だと思ひました。

▲腹一ぱいで張りさけるやう

時刻が來ますと、二名の擔當醫が看護婦を相手に細紐で私の兩手と脚を臺に縛りつけ、膝と額へ拇指位の太さの鐵製器械をはめ、鐵棒二本を左右の口中へ入れて舌をガーゼで包んで痲酔を注射したのですが、私は酒飲ですから、痲酔注射が却々利かないで、十五まで數字を答へたのを覺えて居ります。さて大仕事は二時間餘の夢の内に了つて、眠から醒めたのは三時頃でしたが、頭痛はひどく、吐氣を催ほし、兩手と舌はしびれ、咽喉はひつつくやうに乾き、腹中が張つて裂けるやうな何とも譬へられぬ苦しさで、強情な私も時々うなり聲を出しました。心臟の丈夫な人は、手術後三日ばかり痲酔注射で安眠させるのださうですが、私は嘗て心臟衰弱にかゝつたことがあるので、大層心配して反對に興奮注射をなされたから並外れに苦しかつたやうです。

▲至れり盡せりの手當

手術の翌日は、朝夕二回、三日目に一回胃中を洗つたが、最初は血の混つた桃色の汁が出ました。そして三日目には大いに氣力がついたので、主治醫も稍〻安心の樣子でした。手術後一番苦しかつたのは腹の張つたことで、これは切開の時





に多少の瓦斯が入り、それが血管から自然に分離するためださうで、危險なるのは多くこの苦痛の時だと申します。それで看護婦二名附切で腹の張る時は肛門からゴム管で瓦斯を取り、少しでも樂になるやうに爲しくれ、三宅博士を始め掛りの醫者は晝夜代る〳〵[illegible]して臨機の處置をされました。

▲切開部は八寸ばかり

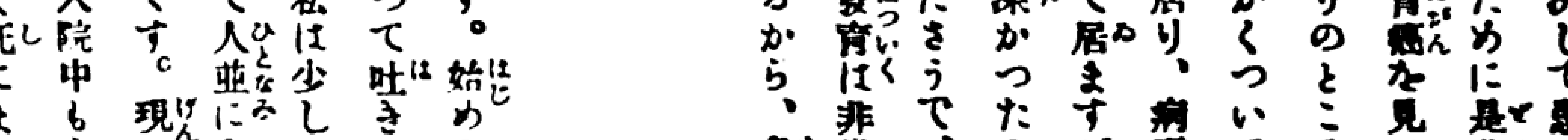
一週間目に三宅博士が始めて切開部の繃帶を解き、兩手で腹の波動を試みて、思つた通りついた、もう大丈夫だと言つて、直に傷處の縫糸を切りとつて貯齋膏を貼り、元のやうに繃帶されました。傷は水落の下から臍の下一寸位まで、大凡八寸程の長さです。普のやうに石炭酸で傷口を洗ふことは少しもせず、只貯齋膏を一面に貼つて外氣の入るを防ぎ、膿が出れば細いゴム管をさして排泄させ、癒るまでそつくりして置くのですが、少しも腐敗の心配はないさうです。

▲切取つた癌を見る

手術後の經過は至極順當で、廿六日目（丁度入院してから四十日目）に歸宅をゆるされました。病院では病後の神經作用を氣づかひ、切取つた癌は決して患者に見せぬ規則でありますが、私は退院の際後學のために是非見て貰たいと迫り、藥瓶につけてある七十三個の胃癌を見せてもらひました。私のは長さ四寸位で、三寸ばかりのところは輕石か齒並のやうなものがザラ〳〵と一面に堆かくついて、胃袋の口は中指二本がやつと入る位狹くなつて居り、病毒の廻らぬ部分は、湯がいた鷄のやうにぬら〳〵して居ますが、患部は堅くなつて伸縮しません。この癌毒は根深かつたので、毒のない部分を一寸ばかり餘分に切取つたのださうで、つまり胃の七分はなくなつたのでした。併し胃の發育は非常に早くて、一年乃至三年たらずの内に元通りになるから、多分に切取つても心配はないさうです。

▲當分人並に喰ては大變

手術後の一二ヶ月は食養生が非常に大切です。始めの一ヶ月位は、少しでも量が過ると、直に苦しくなつて吐きます、つまり胃が小さいから溢れるのです。それで私は少しづゝ晝夜何回にも食べました。大分良いからと言つて人並に食べやうものなら、拾つた命を又捨てる事になるのです。現に私と同じ頃に手術した某寺院の住職は、金滿家で入院中も大分贅澤をやつて居ましたが、退院の翌日、くひ過で死にました。





又もう一人は私より輕症でズン〳〵肥立ましたが、手術後十二日目に、かすを出さずに梨を三つ食べて腹膜炎を起し、切開部の縫目から出血して死にました。他の場所とちがつて、食べ過ぎたら冥罰覿面です。僅かの間辛抱しなければなりません。

▲五ケ月もたてば餅も喰べられる

九死に一生を得たのだから、生涯人並に食べないでも仕方がないが、凡夫の淺ましさ、正月が來れば雜煮一箸ぐらゐどうだらうかと云ふ慾も出て、三宅博士に尋ねたら「ソンナ氣の弱いことではいけない、もう九十日も我慢をしたらよからう、そしたら何でも構はぬ求めて不消化物を喰べては惡いが、大抵な物なら差支へない」と云ふ返事が來たので、翌年の元日には餅もたべ丁度五ケ月目から人間並の食事をとりましたが、別に障りもなく、三年目の今日は却つて發病前より丈夫になりました。

▲豆腐と乳素の効能

絹ごし豆腐は消化がよくて胃をふくらすので胃癌手術後には極良いと博士が云はれたから、私は毎食時に一ちやうづゝ喰べました。尙牛乳や玉子の代りに、高橋逸馬氏製造の乳素を今日まで絶えず飲んで居ますが、このお陰で脂肪や皮膚の光澤は發病前にも勝り、六十の齢にも不似合に身體が發育しました。乳素は小兒科專門、滝川博士の發明で、玄米、野菜の纖維、乳精、鐵質その他種々の營養素から成立ち、牛乳より二倍の滋養分があつて、風味も宜く、腐敗もせず、携帶にも便利です。それに價は牛乳の四分の一ですから、吾々のやうな貧乏人には恰好な飲料でせう。

胃癌の原因は今日でも未だ判然しないさうです。是れまでは遺傳だと云ふ定說でしたが、昨年の醫會では食物に原因するといふ說も出ました。私の鄕里では蚯蚓を食ふ魚類を多食するものに多いと云つて居ります。俗說は素より當になりませんが、私は生來鰻が好物で發病前にも始終之を多食して居たところから考へると、何か根據ある說かも知れません。何れにしろ、少しでも疑はしければ胃を洗つて試驗してもらひ胃癌と定まつたら、速かに決心して名醫の手術を賴むに限ります。米國には胃をのこらず切取つて生て居る者が二十餘名もあると云ふ位醫術の進步した世の中ですが、日本の醫術も日に月に精妙になるのですから、屆く療治なら大決心で一日も早く手術を受けて、百年の壽命を保ちたい者であります。

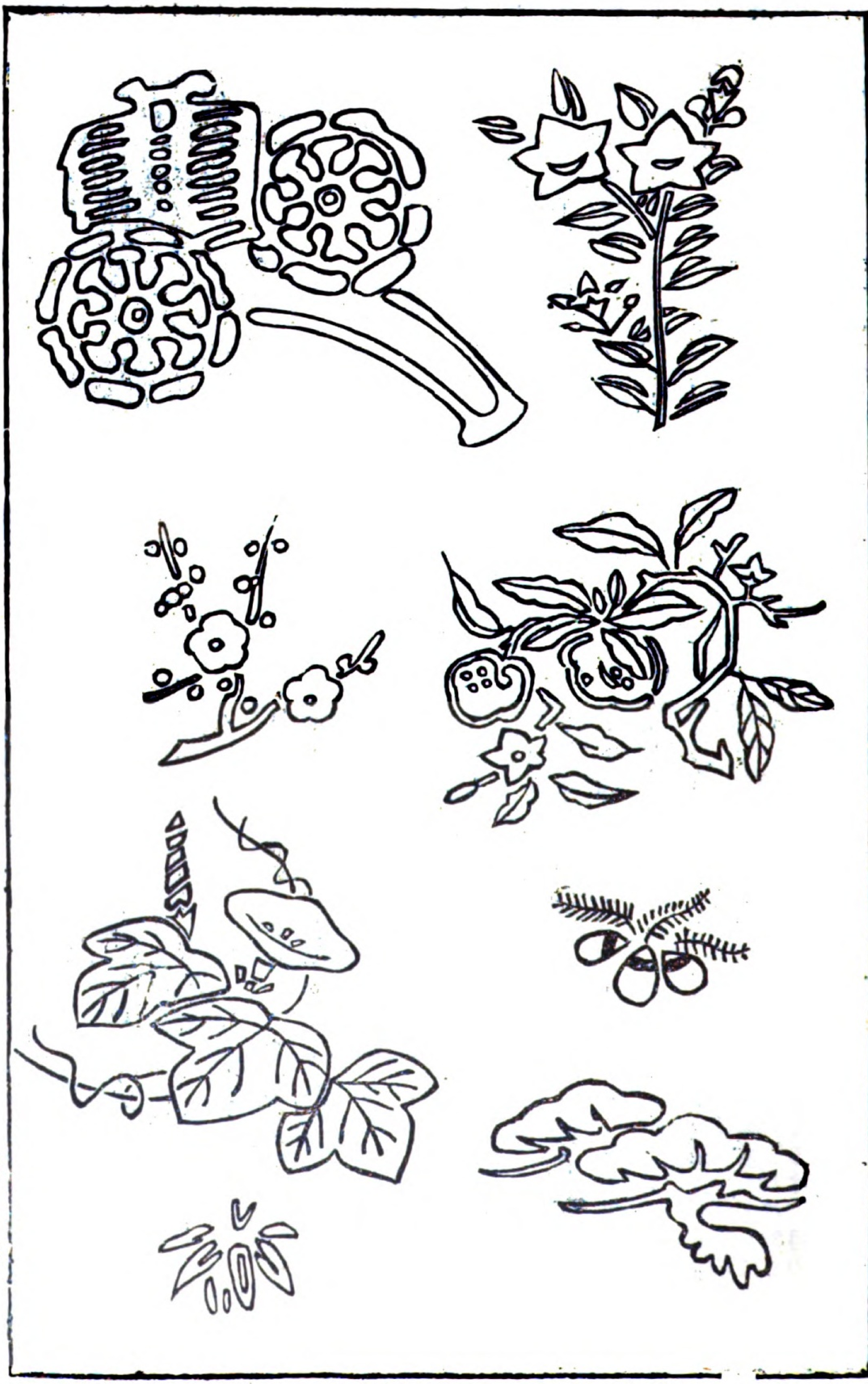


△花車

△梅

△牽子花

△蔦の葉



△桔梗

△柘榴

△桐

△松

女新聞記者の告白



捲簾女

尋常科の頃將來に汝は何になるの？よく聞かれたものでした、其時私は肩をそびやかして女辯護士と答へました。それが十五六になると、すつかり變つて沈鬱な少女となつて了ひましたが今は果して辯護士と迄ならずとも女新聞記者といふお轉婆者になりました。

初めの中は女權擴張位唱へ出す意氣込みがあつたのですが、どうして〳〵社會は私達にそんな自由を與へて呉れません。

自分の素養の足りない事を棚に上げて、逆まく濁流の渦中に飛び込んだのでございます。

今思ひ出すと、怖ろしさと恥かしさとに戰慄を覺えます。幾多の人の親切も誠意も年老いた父母の涙をも、只々自らの個性を葬る壓迫とのみ思ひました。

自由とか、解放とか、さうした世界に憧憬して、煙の如き、夢の如き天地を想見して、遂に溫い父母の膝下を去つたのです。果して自由の世界を發見する事が得られましたでせうか。

◎婦人記者となる

暗い社會に出てから、私に取つて其仕事は心外困難な事でも御座いませんでした、けれど自分の純白であつた感情を斯うまで損はれる事とは夢にも思ひませんでした。仕事と云ふのは名士や夫人を訪問する事で、餘り六ケ敷い事とも思はれませんが、却々然うでないのです。初めの二三日は小僧同樣編輯長や主幹に對しては、唯々滿身敬意の念を持つて、御意のまゝに働きました。而し想像した新聞社といふものは、目の廻はる程忙しい活氣の滿ちたものだと、思つて居りましたに

も係はらず、毎日凝つとしてゐるので苦痛で〳〵堪へられません、すると××主任も察して下すつて「さうして居ても何だから何處か訪問して御覽なさい」と喜こんで話しさうな人を、皆で列擧して下さいました。慥しか岡田八千代女史の御宅だと覺えて居ります。

◎訪問に困難

東京さへもよく知らず何で直ぐ解りませう、何でも澁谷の伊達といふ邸の跡ときいたので青山の終點で電車



を捨てました。そして種々尋ねましたが一向わかりません。其内また尋ねました。日あたりの悪るい茅葺屋根の家です、御免下さいとおとなへば、若い病み上りらしい妻君が出て來ました岡田さん――美術家――」暫らく考へて居りましたが「その奥樣でせう」小説をお書きになるのは、天現寺ばしの近所でせう」と其橋を敎へてくれました。漸うにして見付お玄關に辿りついた時は下駄を三時間も引摺つたのでしたから、足は

痛むもう遠足に行つて來た樣な心地になつて了ひました。

問ひたい事も口には出ず。思ひ切つて問題を提出すると「私共にはわかりませんで御座います」とお逃げ遊ばすそれを突つ込む勇氣もなければ、術もしらず、只話の途絶え〴〵を何處ともなくカンナの音が響いて來ます、その間の惡かつた事お話になりません。

談話はとても記事になりさうもありませんでした。それでも日頃尊敬してゐた人に見えた、一種の滿足を得て私は社へ歸つて參りました、初めての事で非常に印象強く、どうか斯うかまとめて書きました。

男の方を訪問するのは割合に樂で問題さへ提出すれば大抵のお方はお話し下さるので、別に呼吸も何にも要りませんが婦人で訪問記者に應ずる方は、餘程解つた方でせう。

それから櫻井ちか子女史を訪問した事がございましたが、それも大きに失敗談、女史がタイプライターをする間二十分ばかり應接間でお待ち申すと、やがて女史は這入つて來られた。

氷の樣に冷たい瞳の視線に、若い胸を射られて、ジロジロ見られるのが辛らくて、居堪たまられませんでしたが、自分は今訪問記者であるといふ自覺を强くして、問題を提出すると「自分の答ふべき問題ではない」とある、それでは何でもお考へ付の事をと云ふと「私は學校の長としても一家の主婦としても多忙な身で新聞の種子など考へてゐる暇はなかつた」と情ないお言葉、全く女史のおつしやる如く問題の適不適を考へて持つて行くべきでせう。この問題はあの人は熱を以つて話すだらうと思つても決してさうはゆかぬ場合もあるのですもの。

◎遂に服從

餘りの侮辱に堪へ兼ねて、一層こんな記者など、止めて再び父母の膝下へ歸つて服從の日を送らうと、まあ思つたのです、今になつて見れば女史に感謝すべき所が大いにあります。

初の程は虚榮心に驅らるゝ事もなく、極く眞面目に仕事の事にのみ追れて、一日の中に何物かを得なければ日刊新聞の事だから、後から後からと追はれますのみか、編輯上の都合が惡るくなるのですが、丁度留守の所へ行つたり、居ても逢へなかつたりして何時も茫然とした姿をして日本橋の宿に歸るのでした。

歸れば何を勉強する氣にもなれず。筆をとる氣にもなれず。唯疲れた身をなげ出して、快よい眠りに入る事より他に、何の欲望もありません、言へば勞働者！違ひない。終日パンを得る爲にのみ斯くして過します。社内の



事より何よりも、反抗するに感應のない、大自然の壓迫は、實に苦しく、家庭や長上の人より受くるものゝ樣に餘裕がありません、流石の我儘者の私も是には服從せざるを得ませんでした。

◎月給十貮圓

早稻田の出身のお方でさへ初の月給は廿圓から廿五圓と、相場の定つた新聞の事ですから、私は初め見習として拾貮圓を與へられました。拾貮圓の月給で何の滿足が出來ませう。毎月不足を出します。拾貮圓の中六圓食料

五拾錢　湯錢
參拾錢　郵便稅
二　圓　電車賃
壹圓貳拾錢　炭、油等
貳　圓　小遣

まだ此の中から英語の月謝を出さうと思つても出ません。貳圓のお小遣では下駄が惡くなつても買へません、仕方がありませんから薄ペラになるまではいて居ります、書物も買へず、雜誌等まるで見ません、それに半襟が汚れるとか、化粧品とか出ますものですから拾貳圓で足りる筈がございません。其後知人の許に同居をする身となりました。それからは多少殘るやうにもなり、社の方も馴れるに從つて昇給する樣になりました。

さうなつて來ますと、丁度空腹の人が食を得て眠くなるやうに、却つて身の爲になりません。其後遂々惰弱に流れ虛榮は募る、物質欲が增長して、安逸ばかりを求めて自分の修養等は、とんと忘すれて了ひました。洗濯物すら素人の手では氣持惡るく、月給の一割もするクリームが塗りたく、文士などゝお友達が出來たりして、一時、私は虛榮を夢見て、輕浮な日を送りました。新聞記者は今の婦人には困難な仕事でございますね。

私の初めの大理想は何處へやら元氣なく矢張り相變らずの日を送くつて居ります。



鶯のきもつぶしたる餘寒かな





驚くべき贅澤

米國の富豪が豪奢贅澤は今更の事ではないが、此の頃紐育の某富豪は、愛犬の誕生日に盛大なる賦宴を張り、來賓は燕尾服にて堂々と出席せしが、宴酣なる頃、主人は時價四萬圓の金剛石入の頸環を正式に愛犬の頸にはめ滿場の大喝采を博し、又當夜來賓に供したる葉卷莨は、普通のレッテルならで、百弗の紙幣にて卷き、當夜献立の初に出でたる牡蠣の中には、客一人につき一顆づゝの見事なる眞珠を入れ置き、是のみにても四萬圓を費したといふ。

又或富豪婦人は、頸にも胸にも腕にも指にも全身金剛石を飾り、最早飾る場處なきにぞ、齒醫者の許に往きて前齒に一對の孔を明け、之に一個一萬圓の金剛石をはめ入れたり、又同じ紐育の或富豪婦人は、一ヶ年一萬五千弗の費用にて一頭の猿を愛育し、之に立派なる特別室を與へ食堂を備へ、衣服は勿論、寢臺は象牙に金の象眼を施し、平生猿の御附に六人の召使をつけ、その食器は純銀製と云ふが如き馬鹿な話あり。又カンサス州の某富豪に生れたる小兒に、媬母四名、醫師四名を附し、其小兒の健康は、毎日四回診察して之を土地の新聞紙に發表せしむる抔の痴態ありと。

然し此の贅澤の半面には亦驚くべき發展あり。其就學兒童の如きも、倫敦の七十五萬人に對し七十萬人あり。街路の延長は、千六百六十九哩、電話の數は二十五萬個、公園は六十四箇所、新聞雜誌の種類は九百四十七種、メトロポリタン館は世界一の大建築として、面積二十英段、四十八階七百呎の高きに達し、ドソン、タイミナス停車場は、面積二十九英段、昇降機三十八臺を備へ、待合は一萬人を收容することを得べしといふ。一等ホテルの數は千八百七十四軒、其内最大の三ホテルの資金は、倫敦ホテル全部の半額に相當し、一等劇場九十四箇所は、觀客二十萬人を坐せしむるに足れり。斯の如き全盛を來せる紐育市も、昔蘭國東印度商會が其地所を印度人より購入せし價格は、僅に五十圓許りなりしに、目下の資産總額は百億圓に餘れりと。

大ホテルの設備の一例を示さんに、某ホテルにては地下室は地平より掘り下げたること四十呎以上にして、其面積は建物全部に渉り、此處に發電所、機關室、倉庫、冷藏機、上水濾過機止宿客及び館員合せて三萬人乃至四萬人の需要を滿すべき物資給供の本部あり。電燈の數は二萬三千個に及び、一日の給水量は五萬立方呎にして、水道の上水を尚一度濾過して供給し、廿六組の昇降器は絕えず上下し、一日の製氷高は二十噸に上り、冷藏庫は上層に三十箇所、下層に二十四箇所を設け、又十七階目には毛皮、掛毛氈、及び毛布の蟲害を豫防すべき特殊の冷藏庫あり。發電機及び機關を動かすべき蒸氣は、九個の汽罐により發生せられ、其動力三千五百馬力に達し、使ひ餘しの蒸氣は、之を蒸氣煖房器に利用す。

器具機械の破損せるものは、之を地下室なる修繕工場に於て總て修繕又は新造し、之が爲め備附けたる機械は二千六百種あり。又金銀細工の職人[illegible]十五名の職人を抱へ、銀器、匙茶瓶、水注等、金屬器の修繕製造を擔任し、電氣職工、器械職工、印刷人、裝飾師、其他の技手を合せて百五十名あり。錠鍵專門の技手ありて、館內幾百の鍵鑰を管掌し、ヘキウム掃除人も十數名あり、眞空吸器を用ゐて時々各室の塵埃を掃除す。次は消防隊にて、一分時と四分一

にて館の一端より他端に運動し得べき訓練をなして最も注意を凝し、八個の大電氣扇は、下層に向ひ常に新鮮の空氣を吹き送り、厨室の如きは毎分十萬立方呎の空氣を吹入れ、換氣法の完全なるが爲めに何等割烹の臭氣を感ぜしめず、厨房内の溫度も終年七十度を超えず、館内の敷物は三ヶ月目に、二百の窓掛は二週間目に之を改め、リンネル及び浴用タオルの洗濯、火熨斗、及裁縫も、總て電氣機を用ゐ居れりといふ。

毛皮の流行

△服裏に最も適する毛皮は黄貂、黒貂、臘虎、海狸、鼬鼠、栗鼠、獺、少し下つては穴熊、狸、黒猫、兎、土龍なども用ゐられるが、此中で一番良いのは黄貂で、是は露領の北部スカンヂナビヤなどに產し、其價格は一枚百五十圓乃至二百圓位までゝ、至つて小さい獸であるから、外套裏全部で一萬五千圓餘を要する。此の種屬のうちに、雪の降る頃には全身が眞白になつて尻尾のみが薄黒くなるのがある。一名白貂と云つて外套裏などには黒い尾を其儘に附けて置くと、白い處へ黒い一種の模樣が出來て、却々異なものです。貂は支那ではチヤオピーと云つて大官の大禮服には必ず用ゐられ、毛皮を表に用ゐて居る價格は何れも五千兩からのものです。

△之に次では臘虎、海狸、獺、栗鼠と云ふ順で、此等は總て露領を第一として、北海道、千島群島樺太、米領カムチヤツカ半島邊りで、獲れます。露領で獲れるものなどは一ヶ年三千萬枚に上り總て一度は倫敦に出て相場が定まるのです。北京の如きは小賣が最も盛んで、日本の吳服屋足袋屋のある如く到る處に毛皮屋が在る。殊に毛皮屋のみで街を成して居る處もあつて、丁度東京の柳原や日蔭町に古着が軒を竝べて居る樣な觀があります。

△外國の毛皮通の話などに依れば、露國では店商賣の所では外套の裏に毛皮を附て居ない人は紳士でないとして、鼻であしらつて見向きもしない、又毛皮が附けてあつても其の毛皮のよし惡しに依つて客種を判斷するといふ風ださうです。毛皮の裕かな露都では黄貂、黒貂位でなければ紳士の仲間入りが出來ぬさうです。此の流行は近來漸く日本にまでも及ぼして來たが。未だ毛皮屋は極めて尠なく、東京市中に十軒位しかありません。毛皮を附ける外套の表は極めて薄いもので、單に毛皮を綴り合せるに堪へるもので好い、厚いものだと、毛皮を附けるとブクブクして見にくゝなります。

△毛皮の相場は時に依つて變動があるが大抵左の通りです。

臘虎(外套裏全部約四枚)	五千圓位
海狸(約九枚)	五百圓位
河獺(約十五枚)	三百五十圓位
栗鼠	八十五圓位
鼬鼠	七十圓位
猫	六十圓位
黒猫	四十五圓位
兎	三四十圓位

珍らしい旅行法

此頃西洋では面白い旅行法が行はれる。それはキヤラヴアンと云つて、馬や牛などを積んで運ぶ箱のやうな車に乘つて馬に曳かして旅行するのである。或は特別に車を作つて旅行する者もある。之はキヤラヴアン型に特別に拵へさせるので、一頭の馬に曳かせるのだか何よりも車の重量が第一の問題である。で薄い板で强り詰めて餘り重くないやうにする。寫眞で見ると鐵道の貨車のやうな形で、前後左右に窓が開けてある。而して內側からカーハンを下げてある。

車の內部には生活の道具が何でも這入るやうになつてゐる、そこが最も自慢な點で、先づハンゲベツトと稱する汽船のキヤビンに在るやうな寢床が置かれてある。それから食卓と椅子、之は車の內部を化粧部屋や浴室に宛てる場合は取りはづして疊まれるやうになつてゐる。

その次に衣服を入れる箪笥が備へ付けてある。其の他鍋、釜、皿、茶碗、ナイフ、布巾の類を初めとして、日用品何一つ缺くる處なく設備せられてある。

普通三人又は四人だけ内側に寢られるやうになつてゐる。若し夫れ以上の人數であつたら、車の外に泊らればならぬ。其爲にテントが用意されてある。此の車は野でも山でも道さへよければ何處へでも行ける。而して好きな處に馬を留めて夜を明かすのである。車の中で谷川の音も聞く事が出來れば、波の響も枕にする事が出來る。又田舍の若い男女の愉快な踊りの聲をきゝながら眠る事も出來る。

英國では此種の車が借りられるやうになつて居るから、旅行者には頗る輕便である。貸賃は車の大さと時季に依つて相場が一定せぬが、二人乘りの小さい車なら、七月と九月は一ヶ月八ギニイ（約四十圓）、八月は十二ギニイ（約六十圓）。大きな車で二部屋もあるものになると、貸賃が殆ど倍近くなる。それに馬の貸賃が月二十圓と、別當が一週十二三圓の給金取る。尤も此別當は料理もすれば皿洗もする。それに時々の臨時の仕事も手傳はせる事が出來る。けれども四人以上の伴れで出かける時は、大抵別當は使はないで濟むことになつてゐるさうである」。

以上の計算で、先づ中位のキャラヴアンを借りる事にして、一ヶ月の見積高十九磅で上がるやうだ。日本だつたら今少し廉く出來るであらう。汽車や自働車の驅け去つた後の松原を、ゴトリ／＼一頭の馬に曳きずられて一日に五里行つたり三里行つたりして、所定めず車上の簡易生活をやつてるのも面白からう。

歐洲皇室の職業

平民政治の今の世には、貴族だとても昔の樣な潔癖は言つて居られないのか、色々な職務に携はる事になつた。英國の如き保守的な階級思想の失せ惡い處でも、今は滔々として四民平等の潮流に洗はれて、貴婦人にして隨分平民的な仕事に携はつて居る向がある。最近では、アンヂエラ夫人の如きは。花屋を創め、マイ、ショップと屋號を附けて、麗々しく入口にも記せば、電話帳にも載せて居る。が是は此夫人の新案ではなく、それより前に已にウエリントン公の親戚なるウエルスレー夫人が、グーツといふ名で花屋を創め、其花は又或る伯爵未亡人の處から仕入れたといふ事もあつた。

其外まだ英國貴婦人連中には、歐牌の專賣で儲ける。各種の運動競爭場に於ける流行の豫想で當てる。電力四輪車を倫敦で眞先に商ふ。小間物商をやる。出語にもなれば、役者にもなり、マリーヴエナントの藝名で、マリー、カムミングと自分の名を外題にして出演した事もある。何でも屋のジヤック、カムミング夫人の如きもある。其他まだ或は理爪師、或は婦人用品商、或は仕立物師等になつたものは、書き立てれば數多しくある。中にも最も振つたものには、まだ未婚の故フレデリック、ケル卿の令孃の口入業開始で、エセックス夫人の洗濯屋等があるが英國で此等の魁をなしたものは故グランヰル、ゴルドン卿夫人で、此夫人が公園街で帽子屋を始めた。其屋號のリーレは蔦を意味するが、蔦は即ちハントリー、ゴルドン卿の紋所なのだ。その以後名門の婦人でポツ／＼これに倣ふものが出て來た。今日では、歐羅巴の諸皇室でさへ諸種の營業に手を着けて居る。葡萄牙の前后（寡婦で居らるゝ）が、リスボンで自分の名を出して藥種屋を開いて居られ、自ら調劑もされる。が是は慈善事業として居られるのだから、世評の如何は頓と顧られぬ。次にはルーマニアの皇后だ。此皇后のカーメン、シルヴアの號の下に、ジヤーナリストたる事は今改めて云ふ必要なき程世に知れ渡つた事實だが、なほ同皇后が書籍店をブカレストに出して居る事は、まだ世間に知れて居ない。それからシシリーの大后は、バリ

ーの、サン、ロック街で、カラブリアのレースを商ひ、オー、サーブフージ、カラブレーの看板を掲げて居る。獨逸皇帝がカヂネンで陶器製造業をやつて居る事は、カーメンシルヴァの著書同樣已に隱れなき話だが、同じ陶器業を尙ほ墺太利皇帝とサキソン王とがやつて居る。又ウルテンブルグ王に、ウルテンブルグに二軒のホテルを持ち、每年ポケツトに一萬磅の收入がある相だ。就中最も舊慣を破つた者はセルヴィア王である。王には三つの職業がある。其一つは理髮業である。其他には特許機械の所有者であり、尙一つは自働者商會の支配人である。

女優の美貌自慢

一度南歐の地を踏んだ通人はその技藝に於てサラベルナル夫人をしり、その面貌に於てオテロ孃をしる。孃は西班牙生れの女優である。但し喜劇悲劇の技藝で觀客を魅すると云ふのではなく、お氣の毒ながらチト薄ノロの方で、只天眞の美貌を實物とする舞妓として喝采を博してゐる。

薄ノロとは言い條、貨殖の道には頗る達して居る三十歲餘の今日まで獨身で幾萬の富を擁するのみならず、舞臺に出ては踊兒渡世の足こそ我が身の財源なれと、某保險會社へ申込んで、片足十五萬圓、兩足合計三十萬圓の保險をつけた。それよりもえらいのは、此頃巴里裁判所に於ける大氣焔がある。事の由來は、孃が其の衣裳を新調せんため、二千四百圓を投じてレイス一卷を吳服屋から買取り、之を仕立屋に持參して仕立方を依賴した。その後數日孃は既う出來上つた頃と催促に行くと、意外！仕立屋は貴孃が直ぐそれを風呂敷に包んでお持歸りになつたではムらぬかとの挨拶である。孃と仕立屋とは裁判官の前で對審させられた。仕立屋は「レイスの織物は慥かに自分の弟子が風呂敷に包んだ、そしてオテロ孃が左の小脇に抱へて自分の宅を出て行つた出る時に他の弟子が入口でそれを實見した」と陳述した。オテロ孃は柳眉を逆立て、『自分は包みを抱いて町を歩いた事がない、そんな眞似は此の美しい容貌を傷ける、のみならず其の日は妹と今一人の婦人と同行したので、それから共に一料理店に晩餐した。自分は包物を持つて晩餐に行つた事は嘗てない』。孃は最後に聲張上げて曰く、『自分は熱心な信神者である、自分は神に誓つて噓を言はない、自分は包みを持つて歸らない』と。

花の贈物

花に貴ぶ所は其色と香とに在るが故に、造花を人に贈るは能く〳〵其場合の勘辨あるべきなり。本邦にては寺院の佛前に蓮の造花を飾る如きことはあれども床の間に造花を飾る如き習慣はなし。西洋にても此の心持は同じことなり。而るに近時慶事に造花を贈る實例を見受くが、造花は到底死花たるを免れざるが故に、慶意を表するには不適當なり。

花に最も貴ぶ所の色は純白なり。故に花を贈るには成る丈け白きものを主とすべし。西洋には黃色花は嫉妬を表すとの俗說あり。因て黃色は成る丈け之を避け、縱令他色と取雜ぜにしても、成る丈其分量を少くして、目立たぬ樣するを好しとす。又同じ俗說に赤色花は戀愛を意味すと云ふこともあれば、赤色花も黃色花同樣控へ目にするがよし。

花を贈るは元來優美の情を表するものなれば、場合に依りて戀愛の情を表すことになる。故に彼我相關の場合を勘考すること大切なり。隨て妙齡女子が花を青年男子に贈る如きは萬々避くべし。男子の婦人に對するは稍〻其趣きを異にすれども、是れとても場合と態度の注意肝要と知るべし。

青柳や一橋渡す淀の最　禾水

東天の薫西郊の柳かな　同



梅見ごろも

美和子



大島お召織出模樣
（一反二十一圓八十錢）

○

京子樣——

雪もよひの寒い晩、歌舞伎座から歸つて見ますと、お懷しい貴女のお手紙が來て居りましたので、急いで拜見致しました。實はね私はお芝居を見て歸りますとね、何にも眼に者を見ないで直ぐ夜着を引かついで寢る事にします。彼の華やかな色彩と、心の奥までそゝり立てゝ行くやうな音樂のイリユージヨンを、私は成るべく打ち壞さないで、少しの間でも永く頭に鐫り附けて置き度いんですから、それで甚麽に面白く讀みかけてある小說でも、お芝居から歸つた時だけは決して〳〵讀まないといふ事に極めてあります。

けれども——。貴女のお手紙ばかりは、見ないで朝まで置いとく事が出來ませんでした。

○

京子樣——

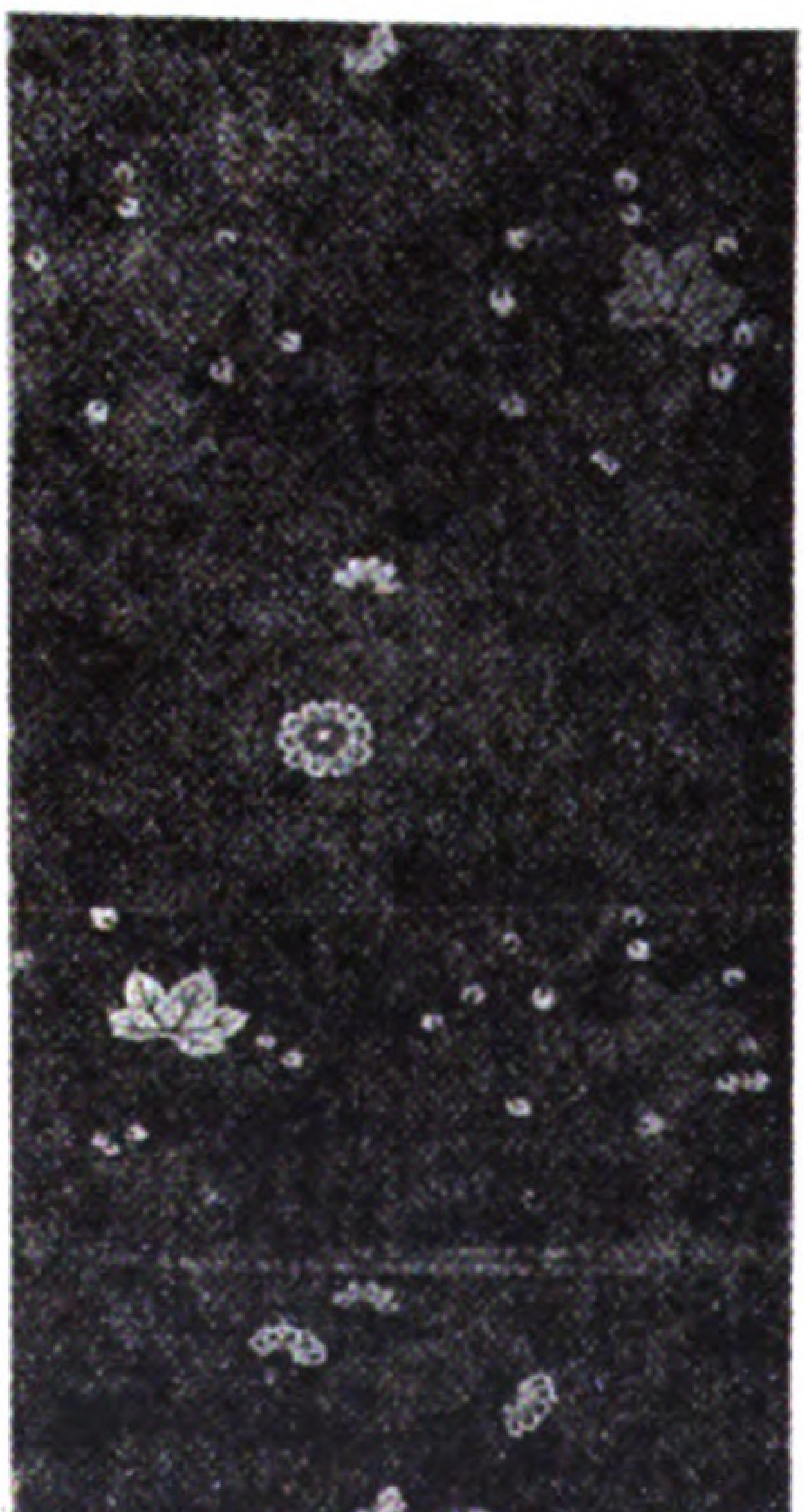
私は貴女のお手紙を拜見して貴女の暢氣な事に呆れました。貴女は私にお約束なすつたあの伊豆の伊東だより、私が夢の中にも忘れる事の出來ぬ伊東の山や河や海や、そして其中でお暮しなさる貴女の日常生活——那麼事は些も私に通信して下さらないで、貴女のお手紙は何でせう。梅見衣が拵へ度いから流行を調べて書き送つて吳れよですつて、そして日限までちやんと書いてありますのね、まあ隨分な方ね。併し私は立腹しては居りませんよ、御安心なさい。

暖い伊豆の國では、もう梅が諸開でせうね。其梅林を御散歩なさ

る貴女が、流行といふ事に一分一厘も遲れて居らぬお召物を着て居らつしやるといふ事は、親しい私に取つても甚麼に誇でせう、



大島紬　（一反二十七圓）



大島唐織丸帶　（五十圓）

○

京子樣——

私は歡んで之だけの事を三越や白木屋で調べて參りました。

お召物は何うしても大島お召でせう、何處の吳服屋へ行つても昨年の秋までは大島お召も餘り澤山の種類はありませんでしたが、今年の春になつては何處の吳服店の陳列も、また其柄を覗いて通る花のやうな今のお召物にも、もう七分通りは大島お召となつて終ひました、縞柄は申すまでもなく大島紬の絣を其儘應用しましたもので、大島紬程瞭然しないところに何とも言へぬ風趣があります。着尺としてずつと凝つた物となりますと織出し模樣もちらほら見受けました、之もかな〳〵上品で、貴女の樣に丈の婥婷とした色の白い方には大層配合が宜しからうと思はれます、中にはまた裾に餘り目立ぬ位に刺繡で模樣を現はした品も御座いました。之等は前の織出し模樣と共に一寸とした訪問服としても宜しからうと存じます、此値段は普通の大島お召が十八九圓なのに比して二三圓位高いやうで御座いました、普通の縞お召もまだなか〳〵流行つて居りますが、私は貴女に是非此大島お召をお勸め致しますわ、それから下着は大島紬と同樣、裾廻しは金紗縮緬が相變らず體裁も宜しく德用で御座いますさうです。

それから貴女のコートは何うしても月花お召で御座いませう黑地に茶と鼠の亂立格子を織り出した極めて面白いのがありました、裏は紋羽二重で、桐菱の地紋ある白地に利久、紫紺、海老色等にて雲鳥をしまして、其に蝶と千鳥の曾我兄弟の模樣を現はしたのが、配色も上品で何となく華やかですから、ぜひ之に致し度いものですれ。

京子樣——

お序ですから貴女のお母樣のお召物も私見立て置きました。昨年までは大島お召は若い婦人向きばかりで、お年を召した方に相應しい柄は餘り見當りませんでしたが、本年では丁度お母樣にお宜しいやうな柄が澤山出來て參りました。蚊飛白だとか十の字飛白だとかで、普通の大島紬よりもずつと面白いのが御座います。

併しお徳用といふ點から申せば大島お召は片面物ですから大島紬に比較して損で御座いませう、それに耐久力から言つても何うしても紬の方が勝れて居る譯であります。

○

京子樣——

目下大島の流行は大變なもので『大島を着ざる者は人に非ず』と言ひ度い位なんです、着尺はいふまでもなく、羽織コート地、帶までも大島式で御座います。



大島式友禪縮緬（一反二十二圓）

大島唐織丸帶などは昨年大阪から流行つて參つたもので、今では一寸した洒落着用としては最も流行して居ります、地は大島紬でそれを唐織風にしたので御座います、配色が何れも錆びた澁い色ですから、打見た所も極めて落付きがあつて、上品な中にも意氣に見えます。前の大島お召を締めたならば、先づ先づ何處へ出しても恥しくない流行の粋と言はれませう。茶地へ有職風の菊桐を金の利久、錆茶、藍鼠等で唐織風に織出したのが、私の見た中では一番貴女にお似合なさるだらうと存じました。

○

京子樣——

それでざつと着物と帶とが出來ましたから、這度は長襦袢です、之も大島式の流行ですが、餘りに何も彼も大島づくめといふよりはせめて長襦袢だけは、在來のたゞ美しい紅入りであつて欲しいと存じます、帶揚も亦大島式、之は私も好きです、長襦袢に大島絣を應用したもの

は餘り好いとは思ひませんけれど、かうした小い物には大變面白く又品も好いものです、黒地へ大島風の絣を焦茶で一面に現はして、其上に大きく藤の花なんぞを白で拔いたのなどは、實に眼醒めるやうな心持が致します。

半襟、之はぜひ勅題模様に成さい、之にも大島式を應用したので面白いのがあります。私は一體呉服店で何から何まで勅題模様を應用する事を一種の惡感を以て見て居りますが、半襟ばかりは勅題模様を賛成します、殊に今年のやうな勅題は自ら半襟圖案式と申し度い位ですもの、松を大島式に現はしそれに鶴をあしらつて、鶴を圖案風に刺繡か何ぞで現はしたのは上品で二つも三つも買つとき度いやうです、それにれ此大島式は色の白い首の細長い方には大變配合が好いんですよ。

お序に一寸申添て置きますがあの芳子様に是非お勧め致したい大島お召が御座います。それは黒地に藤の大模様を大島の龜甲絣で茶で現はしまして、其中へ薄藍で角形を現はしたのが三越にありましたが、縞柄が朧氣なところに何とも申されぬ妙味がありまして、極めて上品でしたから芳子様のコートに遊ばしたなら屹度好くお似合ひなさるだらうと存じます、私がもう少し若かつたならばと、ほと／＼姥櫻の身をかこちましたよ。



大島式紋縮緬帯揚（二圓十錢）



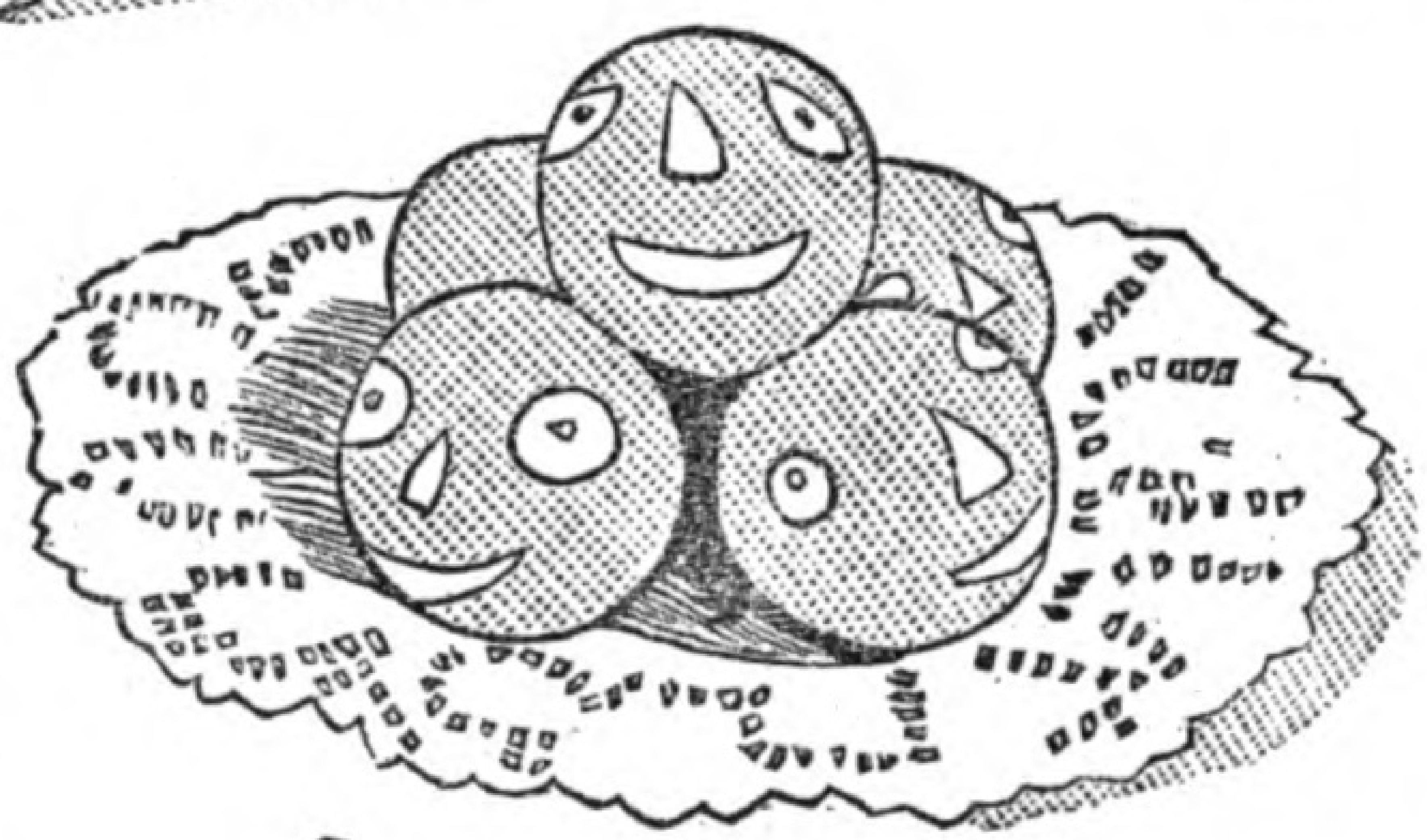
大島式半襟（一圓四十錢）

猶また貴女のお母様のお召物も私見立て置きました。縞お召に細い格子縞の丁度お似合の品が御座いましたけれども、縞お召はもう昨年が流行の絶頂で、本年も相變らず流行するか、或はまた次第に下火になつて行くのか、目下思案中といつたやうな傾向ですから、私は何うも無理にはお勧め致し兼れます、それよりも矢張り大島お召がよろしからうと存じます。



祝ひ日のつくり菓子と籠





此頃は、東京邊でも一寸した菓子屋には作つてもありますが、家で拵えて見るのも樂しみでせう。すべて西洋菓子仕立で、中圖の目鼻のやうなところをオレンヂの皮で作つたりします。

日本の雛菓子などもなか／＼可愛いゝので、子供は大變に喜びますが、西洋風のこんなのも、また子供達は好きさうです。



英雄美人
夫婦競べ

歴史人物評傳　二十四像



夫は堅忍不拔の大政治家
妻は辣腕の女丈夫

藤原鎌足は又の名を鎌子といふ、實に曠古の偉人であつた、專橫飽くことを知らず、殆ど皇室をも危うせんとした蘇我入鹿を、一擊の下に誅した其の功績に至つては、誠に千古の大快事である。

鎌足の性質は敏捷且つ緻密であつた、故にその事を爲すに當り、事の必行を期して、極めて輕擧を避けたのである、此くの如きは眞に國家の大事に任ずべき器量なのである。

當時入鹿と云へば、その權勢火よりも熾んであつたこの時に際して、卓然彼れの討滅を策することは、到底尋常人の企て及ぶ可からざるところである、而も鎌足は、早くも眞の大義に着目し、先づ中大兄皇子に說いて、ひそかに黨與をつくり、一擧に入鹿を大極殿に誅して仕舞つた、その堅忍なる意思といひ、その機敏なる動作といひ、誠に後世の人をして、等しく驚嘆せしむるのである。

而も鎌足は、兇暴なる蘇我氏を滅した後、更に中大兄皇子を說いて、皇兄輕皇子を立てゝ長幼の序を明かにし、力を盡して朝政を釐革したればこそ、こゝに天智中興の基礎を爲したのである、その施設の周到なこと、その處置の果斷なこと、眞に敬服に堪へぬのである、すなはち鎌足は、所謂國家棟梁の材として柱石の任を竭し、毫末も遺憾がなかつたのである。

春日局は、世人の知る如く、三代將軍家光の乳母で女性の偉大なるものであつた、その大なる抱負と、進取の氣象とは、稜々たる負けじ魂と相俟つて、彼女の一身を活動せしめたと共に、第三世德川をして、その

威嚴を九鼎大呂より重からしめたのである。

彼女はまた甚しく剛情の人であつた、苟くも自己の善と信せし上は、あらゆる手段を以て、滿腔の私情に克たんとした、是れ聽て彼れ春日局の偉大なりし所以であり、また能く家光を全うせしめた所以である、其の繼嗣竹千代を掩護し、伊勢參宮に託して、駿府に家康を訪ひ、縷々として繰返し〳〵繼嗣の事を說いたればこそ、家康の決心岩より固く、忽ち秀忠をして竹千代を世繼に定めしめたのである。

また春日局の嚴格にして克情であつたことは、自己の末子稻葉正利が、駿府宰相の臣にてありながら、その臣たる道を能く盡さなかつた爲めに、永く勘當して仕舞つたのを見てもわかる、斯く肉身に對してさへ犯しがたき嚴格であつたればこそ、世に權現樣と崇められた家康も謹んでその說く所を聽いたのであらう、又斯かる女丈夫に薰陶されたればこそ、竹千代の氣魄は三百諸侯を壓して、德川氏の鴻基を盤石の如く重からしめたのである。

斯くて春日局は、首尾よく竹千代を世繼とした後、大奥の實權を收めたのである、後世德川史を讀む者は、大奥の女中の陰然として勢力の偉大であつたことに驚かるゝのである、その根源を尋て見れば、皆な春日局あたりから胚胎してゐるのである。あゝ婦人の勢力も亦た實に偉大なものである。

つら〳〵この夫婦を案ずるに男性の常として、殊に鎌足のやうな明智の英雄は、存外意志の強い女丈夫を好まないものである、故に琴瑟相和すると見ゆるのは唯だ外觀のみで、家庭の內は互ひに敬意こそは表すれ、面白くないかも知れないのである。



夫は謹嚴誠直の學士
妻は溫良貞淑の閨秀作家

菅原道眞は、文筆の家から出て、右大臣の位に昇り文章經學をもつて、朝家に貢獻した人である、その該博なる學識と、深甚なる才藻とは天をも貫くべき赤誠と相俟つて、深く朝野の輿望をになひ、清和天皇より以後五朝に歷事して、能く匡輔の大任を竭し、天下後世をして、轉たその偉業を偲ばしむるのであつた。

道眞の名聲が、そも此くの如く隆々たりしと共に、その才識と榮達とを嫉むものが起つて、彼れのやうな誠士ですら、いはゆる讒者の舌鋒を避くることが出來ず、遂に藤原時平の爲めに陷擠せられ、その一生を流謫不遇の裡に終つたのは、眞に遺憾とすべきことである

實に道眞は、徹頭徹尾君子人であつた、その言論動作は悉く先聖の法に則り、決して權謀術數などは此の中に包むことなく、唯だ至誠の道のみ、辿つてゐたのである。

諺に水清ければ魚すまず、道眞は餘り潔白で、正直で、人も近寄りかねるほどであつた、茲を以て佞奸前に横り、讒者後に立ち、遂に不測の禍害を蒙るに至つたのである。



併し之れぞ道眞に於ける不幸であり、軈てまたその幸福なる點である。故に假令一時、天皇の御信任を失うたとはいへ、墓草未だ茂らざる中に、早くもその冤罪は雪がれ、名聲却つて大に擧つたのである、蘭麝の馨は猶臭に穢れずとやら、眞に道眞などの事を云ふのであらう。

そこで此の道眞に配するのは、古來聞えたる女性を以て充てれば、抑も誰れが最も適當であらうかといふに、讀者の高札は遂に紫式部に落ちたのであらう。

家庭の栞

立春の献立

二月

寒い〳〵で炬燵へ潜り込み熱い物でさいあれば喰物なんか何でもよいと云ふ大寒も過ぎそろ〳〵南窓の早梅蕾を破る頃となると贅澤が云ひたくなるこれは不味あれは美味と旦那樣のご機嫌が計りかねお臺所の面々庖丁持つて思案にくるゝ時

万上味淋は

是非お備になるべき唯一の調味料です、之を御使ひになれば、御趣向も御工夫もいりません、思ひのまゝにお好み通のおいしい御料理が直ちに出來ます

早稲田大學講師 文學士 高桑駒吉先生著

女子参考 日本れきし

菊判六百餘頁洋裝
總クロース金字入
定價金一圓四十錢
和裝美本全二冊
定價各金七十錢
郵稅を要せず

早稲田大學講師 文學士 高桑駒吉先生著

女子参考 西洋れきし

菊判三百餘頁洋裝
總クロース金字入
定價金八十錢
和裝美本
定價金八十錢
郵稅を要せず

右二書は史學に令名ある高桑文學士が　等女學校。女子師範學校等の生徒用參考書として編述せられしものにて左の特色を有せり

講話　體の文章を以て最も分り易く歷史の綱要を叙述す

其體裁は專ら高等女學校及び實科高等女學校の改正教授要目（四十四年七月文部省訓令十二號）に準據せり

毎章の終りに『摘要及び解說』の項を設けて著名なる人物（殊に女流に重きを置く）の事蹟。顯著なる史實に關係ある地名及び總ての事物を說明せり

日本西洋の地名、人名のむづかしき讀方には假名を附す人名は總て歐文と片假名にて書せり

鮮明なる歷史地圖數葉を挿入せり

東京市本鄕區本鄕一丁目七
振替貯金口座東京六貳四番
齋藤權右衞門

女ゑの一〇



ちゞれ毛直し（くせ）

（複法ペント）定價（大函九十錢 小函四十七錢）小包料（一個に付 八錢）

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛、くせ毛も立ち處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

毛はへ藥（エフ、ビコール）

定價（大壜一圓五十錢 小壜八十錢）小包料（一個に付 八錢）

本劑は頭髪は勿論眉、口鬚及び陰部に至るまで凡そ毛の生ずべき所に皮膚病其他の故障の爲め生毛せざる者又は發生せるも極めて微弱なるに塗抹すれば其効能頗る確實に現はる

生毛強壯劑（エフ、トニック）

定價（卅日分 二圓五十錢 十日分 一圓）小包料（十六錢 八錢）

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして根本的に毛髪を美化するにありされば身體強健血行良好となり皮膚腺の分泌を盛んにし毛根の營養を能くし從つて薄毛、細毛、赤毛、白髪等に連用せば奇効あり

發賣元 東京市本所區外手町八十七番地 振替貯金口座東京二〇八二五番 深澤國華堂

美髪法

右三製劑の内容を知り美髪の目的を達せんとするものは必ずこの『美髪法』を讀め。郵券二錢封入御申越あれば直ちに贈呈すべし

女るの三)

少女雜誌界で一番ご評判を受く

第七卷

（菊判百廿八頁 口繪澤山）

第三號……二月一日發行

（正價十錢 郵稅一錢）

少女世界

((口繪))

⊙讀書（三色版）……高村眞夫筆

⊙梅見（石版畫）……佐藤素洲筆

外に二色 寫眞版四頁

○カレンダーページ……武田櫻桃

○少女訓話 笑顏……東京第一高女教諭 市川源三

○ピアニスト……松井ゆり子

少女會館 學藝室な女學部と小學部とに分つ談話室
顧問室娛樂室等何れも春の喜びに滿づ

□冒險小說 人形の奇遇……押川春浪

□日本歷史談 弓弦の音……木村小舟

□梅咲く頃……

□お留守番……

□少女の勝利……あふひ

□少女小說 春着……三宅花圃

□星の影……はつよ子

□花枝さんの雪兎……

□梅見の朝……

□雜記錄……記者

□手帳の中より……沼田笠峰

○それ御覽（少女笑話）……黑田湖山

○今上天皇の御製……佐々木博士

○第二十五回筆蹟發表……

東京日本橋本町 □博文館□ 振替東京二四〇

醫學士古川榮校閲、藥學得業士金澤巖著

肺病の强敵

本書は著者自ら肺結核に苦しみ百方療養の結果全快したる實驗に基き最新の學理を參照し完全なる自宅療法を詳記したる物郵券二錢封入申込者に無代送本すべし

●東京市下谷區上根岸町 衞生書院●

男ちゞれ 女くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黑化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

美術

造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋 關口商店

電話下谷四〇五一番

振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノヿ

女(るのせ)

好評如湧修學の指鍼受驗の秘訣菊三四〇頁價六十五錢

天覽 台覽

普通 專門 試驗及第法

税八錢 東京四谷愛住町二 東京書院 振替東京七九八三番



東京神田區猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

生徒募集

ピアノ、オルガン。バイオリン。唱歌。其他管絃樂器及理論等

入學志願者ハ本校ヘ照會アレ

●本法は

女髮結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛 二大奇方劑 毛はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十八 濟世園

岡田虎次郎先生祖述

實行簡易 奏功偉大

理想的心身强健法

伊藤銀月編著(呼吸靜坐圖解寫眞入)

岡田式呼吸靜坐法と實驗

▲附錄 靜坐萬能篇

菊判總かな附二百五十頁頗美本定價金七十五錢郵税金八錢

忽五版

▲ヒステリーを治癒しお産を安くし血の道を治し日本婦人の習慣には最も適する體育法■單獨自修の型を顯示するもの只本書あるのみ

呼吸靜坐法は岡田先生の祖述唱道せらるゝ一大哲理にして實行簡易結果偉大、醫者の見捨てたる病人を治し精神を一新し健康を增進し記憶を良くし頭腦を明晰にし其他實績擧て數ふ可らず、今や社會の上下を風靡して華族博士實業大家學生其他貴婦人諸名士之が實行を爲さゞるものなし、本書は岡田式の原理、實驗、實行方法を縱に横に描寫し、更に强健法の歴史を叙述して之を大成したる岡田式の價値を論じ名士の實驗談を掲げ且近時流行の藤田式息心調和法の内容及び實行方法をも詳述す

改訂六版

實驗簡易强健術

川合春充著 二木博士序

■運動説明寫眞入十分間運動法 四六判定價金六十錢送料八錢

拾五版

先哲實験腹式呼吸篇

二木博士序 春秋社編

■二木博士の腹式呼吸の話を附錄とす 菊判頗美本定價金六十錢送料八錢

東京市神田區錦町二丁目五番地

春秋社書店(振替東京二〇七八九)

發兌

東京市京橋區ト・橋廣小路六番地

文榮閣書店(振替東京四一〇九)

文(その八)



紫式部は、その才藻の非凡なりしばかりでなく、亦た極めて謙遜なる女性としての美德を有して居たのである、源氏五十四帖を記せるにも拘らず、常には眼に一丁字をも解せぬが如く、書を見るにも、文字を書するにも、決して人に見られぬやうにしてゐたとやら。或人などは紫式部を評しその謙遜の德は、源氏物語を作つたより價値があるといつたさうである、且つその貞節なるはその夫の歿してより後は、一向浮いた噂もなく、よく上東門院に仕へ、他の女房達が如くに戀に憧憬れてゐたのを、餘所に見過しゐたのは、眞に女性の龜鑑ともいふべきものであつた。

紫式部が、道眞に妻として冊いたら何んなものであらうか、彼れの聰慧なる、早くも道眞が危殆なる地位に在るのを察して、一面には道眞の反省を促し、一面にはその富豐なる才藻を以て深く宮掖の信用を繋ぎ得たかも知れぬのである、否、彼女は尙ほ一層の怜悧であるから、早くも藤原氏の心を汲み取りて一日一刻も早く辭職するやうに夫に勸めたかも知れない、必ず斯くあつたに違ひない。

或は思ふ、道眞の謹嚴至誠と、紫式部の優美恭謙とは、相俟つて家門の內外に臨み、而も兩々相倚つて、その才識を縱にし、道眞は經學詩文をもつて進み、紫式部は和文國歌をもつて行けば、必ず一代の德望は更に菅家に傾き、たとひ藤氏の威權を以てしても、猶ほ道眞の一身に災することが出來なかつたかも知れないのである。

縱令また之等にして成らないとしても、兩者の美德は、合して車の雙輪となり、道眞と紫式部との名は、各〻別々になつてゐる今日の名に比して、更に層一層美をなしたかも知れない、且つ道眞においても、名利の術策を厭ふこと深く、紫式部もまた榮勢曲達を憶ふこと至て薄い故に、必ず關睢も啻ならぬ伉儷だつたらうと信せらるゝのである。



夫は多感熱烈の英才
妻は纖巧艶美の歌人
在原業平

は、その容貌が秀麗であつたといふので、美男子の標本とまで稱へられて居る、古記錄の傳ふるところに依れば、業平は極めて多情多恨の人で殊に藤氏の專横を憤つて慷慨悲憤した王朝の大詩人である。

業平の情的活躍は、實に藤原長良の息女高子の君に對するものであつた。末遂げぬ戀の破壞に物哀しい情話が傳へられて、千載の下、幾多のうら若い青春の血を湧かさしめたことであらうか。

凡そ戀愛といふ二字の上には、時の古今も、人の上下もないのである、日本一と稱せられた美男子の業平も、浮世の嵐には揉まれざるを得ない、身は皇族に生れたとは云へ、藤原氏の出でなかつたので、つひに其の驥足を伸ばすことが出來ないのみでなく、高子の君との相愛すらも、百方堰きに堰かれたのであつた。

斯くて業平は、一夕高子の君を誘ひ出して、敢果なき愛の成功をすら試みたのであるが、疾風一陣、掌中の珠は奪ひ去られ、且つは頭髪まで切落されたので、殆んど男子の面目も立ちがたく、涙を呑んで孤影漂零、都門を出でゝ遠く吾妻に下つたのである。而して再び都へ歸り來りて高子の消息を問へば、今は早や高根の花となり、再び昔の逢瀬を辿るべくもない、此に於て業平の胸は永久に悶へ苦しんだ、互ひに思ひ思はれた中さへ、無造作に打壞つた權勢の力こそ、まことや彼等の恨み佗ぶるところであつた。

要するに業平の一生は、情に泣き、情に悶へて、悲痛慘澹たるものであつたが、其の情の上に悶へ苦しんだのは、小野小町に酷似して居るのである。

小野小町の經歷については、勿論精しく判つて居な

いけれど、之れまた一世に卓絶したる美人であつた、業平を以て男性美人の標本とすれば、小野小町は亦た女性美人の標本である。

小町の生家は素より不分明ではあるが、餘り高い家柄ではなかつたらしいまづは國司か郡司位の人の女であつたことは推測かられるのである。

小町の靑春時代は非常に不幸なるものであつた、十七歳にして母を喪ひ十九歳にして父に別れ、二十一歳で兄を喪ひ、二十三歳で弟に死なれた、美人薄命の比喩は、餘すところなく證據だてられて、小町は苦しき悶々の中に空しく老いゆいたのである。



併し小町は自己の容色に非常に誇つて居た、己れは日本一の美人として、心窃かに后妃にでもならうと期したのである。然るに悲しい哉、門地餘りに卑きを以て、事志と違ひ、遂に其の志望を果す機なく、所謂る自惚的自信は、變じて不遇を喞つ身となり「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」　自己を捨てた哀れな歌を詠んだ時には、最早自己を拾つて呉れる人もなく、やがて死屍を原頭に曝すやうになつた、謂はゞ天に昇らうと思つて、却つて奈落の底に墜ちたのである。

こゝに於てか私かに思ふに、夫に擬せられた業平と云ひ、妻に配せられた小町と云ひ、共に古今の美男美女でありながら、怨みを千載に呑んで死んで了つた、これを以て見れば、容貌なぞは、先づ十人並位が無難で宜からうと思はれる。

とは云へ、業平と小町とは宛ら内裏雛を見るやうな美しさであり、且つは互ひに和歌に堪能である故、花の朝、月の夕べ、嘸ぞ夫唱婦和の名吟が出來る事であらう。



夫は戰場の花役者
妻は[illegible]勇絶
倫の娘子

鎭西八郎爲朝は武家棟梁の門から出たとはいふものゝその、年齒未だ弱冠なるに、早くも驍名を天下に馳せた、資性素より凡でない。

古史の傳ふるところに據れば、彼れは先天的武人とも謂べきものである、身體甚だ强捷であつた、夙に善く射 善く戰ひ、威を九州に振ひ、鎭西の諸豪傑をして虎の前の猫の如く慴伏せしめた其勇武は、宛ら天神の天降つたるか、若しくは仁王の歩み出たやうなものであらう。

彼の保元の亂に、爲朝は僅か二十八騎の從兵を率ゐて、白河殿に馳せ參じ、西河原門を守るや、快戰奮闘して彼我の眼を奪つた、而も其の武略はまた一個の見識を有して居り、高松殿に夜襲を試みんと獻策したる如きは、確かに孫呉の兵法にも通曉して、勝を咄嗟に決するの概があつたのである、而も悲しいかな、この獻策は不幸にも長袖子頼長に沮まれて、彼れが絢爛な戰ひ振りを見ることは出來なかつた、遺憾は獨り爲朝自身のみではない。

また爲朝の剛情我慢は、實に非常なるもので、渾身唯だ膽といふほどであつた。保元の亂終りて、再び九州に走らんとするや、中途に病氣を得て、空しく療養に時日を費してゐる中、端なく追兵に縛せられて、京師に送られたのであるが、朝廷もその驍勇なるを惜んで、死一等を減じ、再び弓を引けないやうに右手の筋を拔いて、伊豆の大島に配流した、然るに彼れはその傷口が癒るに從ひ、右手は少し短くなつたが、弓を引くには却つて此方が便利になつたとは、何處まで勇武なのか、方圖が知れない。

夫れかあらぬか、彼れは遂に起つて七島の頭領とな

り、惹いて伊豆にまでも其の威力を振ひ、追討の兵船の來たのを忽ち一矢に射沈めるなど、其の壯快なる擧動は、胸の溜飲も下るほどである。

更に爲朝は、たとひ島嶼でも、本國に近い所は面白くないと思つて、終に琉球に飛んで行つて仕舞つた、而して其子舜天丸を其地の王にしたとは、愈ゝ出でゝ愈愈奇に、恰もゴム毬のはづむやうな快男子である。

巴御前は我國に於ける勇婦の標本、毎時も板額と相並べて稱せられて居るが、而も巴は美人の上に、馬術にも達人なら、弓箭にも秀でゝゐたといへば、或は板額よりも一枚上の勇婦であつたらうと思はれる。

軍談師張扇を叩て曰く、『義仲戰ひ破れて粟津に到るや、敵兵之れを追ふこと急なり、武州の住人郷田八郎師重といふ音に聞えし剛の者、驀然に追ひすがつて巴を捕へやうとする、巴は之れを見て少しも動せず徐ろに師重を引摑んでその首を自分の鞍輪に押し當て、エイとばかり捩切つて棄てたりけり』とは何ぼう強いことなるかな、

そこで此の驚くべき勇婦は、如何しても鎭西八郎の妻となるのがよからう、然らば彼の保元の亂の後、爲朝九州に走るの際なども、巴は常に其の旅愁を慰めたであらう、而して其の病みて湯浴を取るや、彼女は忠實々しく其の看護に從ひ、三十騎五十騎の追兵迫り到ればとて、少しも騷ぐ色なく、庭の立木を根こぎにして、四角八方に薙ぎたて、夫の身を護り果せたに相違ない、殊に功名滿々たる彼女は、英氣渾身に横溢せる夫を說いて、琉球から臺灣に渡り、フヒリツピン以南の群島を征伐させたかも知れないまた爲朝としても若し巴の如き勇婦の後援があつたならば、其の壯圖、一層その大を加へて夫婦諸共ノッサ〱乘出し、際限もなく暴れ廻つたであらう





夫は驕傲不諱の快男兒
婦女は放縱不羈の虚榮家

日輪の既に沒したのを煽ぎ回したと稱せられた平相國入道淨海は、眞に當時の大權力家であつた、その始め爲義、義朝等の源家のチャキ〳〵が、互ひに相閲いだのに乘じて、巧みにその一族を殲し、また非凡の才幹を備へて居たに相違ない、而して彼れの經策と云へば偏へに他の諸族を壓抑して、自家の繁榮を藤原氏の昔に模倣はうとしたのであるが、これに就ては彼れの性質は餘り情的であつた、餘りに我儘であつた、而して又餘りに殘酷であつた。故に世に鑑み、己れに省みるなどいふ道德上の觀念は微塵もなく、唯だ〳〵目先のことばかり考へて、隨所に恩惠を播き子孫百年の計を立てることを爲なかつたのである、こゝを以てその隆盛なる權威を嫉むものは、獨り源氏の一流のみでなく、諸國の豪族の中でも、平氏の一族にあらざるものは、悉くその蹉躓くことを望みつゝあつた、而も清盛は恬として眼を自己の周圍より離さなかつたのは、やがて晩かれ早かれ滅亡を來した最大原因であつた。

殊に又怪しからぬのは、普通出來星の英雄と同じやうに、清盛もまた頗る容色を愛したことである、これも當り障りのない婦人を愛するなら兎も角も、敵將の妾を容れて、自分のなぐさみ者にするなどゝは、隨分放埒の男である。常盤が割合に從順の婦人だつたから可いやうなものゝ、若しも韓信の妻のやうだつたら、忽ち閃く懷劍の電光に、あはれ紅閨裡の鬼とならぬとも限らぬ、併し清盛はよく常盤の爲すなきを知つてゐたからこんな放縱を敢てしたのである。

世人はこの放埒なる我儘者に配するに、より以上大なる我儘者の淀君を拉し來つて配した、能くも似た者

を見付け出したものである。
抑も淀君と云へば、美人にして虚榮心の強い我儘者である、自分が此の天賦の恩惠を受けたればこそ、曠世の英雄たる秀吉の室になり得たのであるがその不用意なところを家康に乘せられて、終に豐家の覇業を轉覆して了つた、この點大に清盛の放縱に似てゐる、清盛對淀君を夫婦としてこれを聊か滑稽的に解釋して見やう。



清盛が祇王や佛などを寵愛すれば、淀君もまた斯る所業に出でぬとも限らない、さあ斯うなつては、情に燃え易い清盛のことゝて、何うして默つて居られやう、夫婦の間に大衝突が起るのは必定、維盛などは双方の仲を調停しやうと試み、敎經などは矢鱈に憤慨し、宗盛などは呆然として自失するであらう。
是れを見て時機こそ宜けれと源氏の諸族が兵を擧げて、都へ攻め入つた頃には、何時しか平氏の一門は、宛ら五重塔でも崩れるやうに瓦落々々と自分自身に滅びて了ひ、切角意氣込んで攻めて來た源氏の兵士どもは、口あんぐりで、オヤ〳〵と拍子拔の大滑稽を演じたかも知れないのである。
彼の屋島や壇の浦の戰ひと云へば、我が國でも滅多に見られない大悲劇なのに、斯うなつては大悲劇變じて大滑稽劇となり、その爲めに安德天皇にも御入水遊ばさるゝことも無ければ、建禮門院も擒となることもなく、却つて御國の爲めに慶賀すべきであつたかも知れないのである。併しこれは清盛が唯情にもろい一方面のみを見て說いた滑稽論である。眞面目に解すればそこに又いろ〳〵の議論が出て來るであらう。呵々



夫は金鞍白馬の貴公子
妻は翠帳紅閨の佳人

見るからに女にも爲まほしき優姿、烏帽子の影さへ冴えて、艶々して眉目に映り、颯と薄化粧したる平家の公達、別けても敦盛こそ、露含む一門の花であつた。

想ひ起せば文治の昔、平族擧つて花洛を逃れ、遠く西海に漂泊ふる時、松青く沙白き屋島の磯邊は、金鞍白馬に彩られて、萌黄緋縅燦として輝き、時ならぬ春の野を現じたのであつた。

凡そ世に源平の戰ほど、美しくも悲慘なものはないのである、折から平家の一門は、漸く文弱に流れかゝつて、詩歌管絃に藤氏の夢を繰返さんとしてゐた。時に俄然として、戰塵は東方の空に起つた、唯だアレヨ〱と立騷いでゐる中に、忽ち都近くまで押寄せて來たのである。

此に於て、如何に文弱な平家の一門も、何時まで詩歌管絃の樂みに耽つてゐることもならず、一家の爲め一門の爲め、餘儀なく朝冕を抛つて奮戰せねばならぬさりながら半ば文華に魅せられた京軍の、いかで坂東武者の馬蹄に勝つことを得やうぞ、一戰地に塗れて、平家の一門は琵琶を抛ち、直垂を捨て、我れ先にと沖に浮べる舟を目蒐けて逃れんとしたのであつた。

彼の熊谷次郎直實に、扇を揚げて呼戻された無官太夫敦盛は、實にこの可憐なる戰劇の花形役者であつた風にも得堪へぬ嫋々として容姿に、細作りの太刀さへ優しく、眉黛のあたりは無限の嬌愁を湛えてゐたと云へば、その如何にも貴公子の狀が見えるのである。

かく優にやさしき敦盛にこそは、そも何人を以て妻あはすべきぞといふに、多數の讀者は殆ど等しく小督局を以て之に配したのである。

この小督局の事蹟に就ては、嵯峨野の奥の妻琴の音に、何人もすでに之を知つてゐるのである、彼女は始め高倉の宮に仕へてゐたのであるが、不圖したことから清盛の爲めに忌まれて、端なくも懷しき宮居を遁れて、露深き嵯峨野に走つたのである。

名にし負ふ小督局は、その容姿の美しき、春の花とも、秋の月とも、譬へやうがなかつたのである、而してその都を出づる時、厚き君王の恩愛に感泣しながら去り難き身を去り、捨て難き心を棄てゝ、奮つて宮居を辭したのである、而して月に泣き、露に咽び、草に歎き、蟲に喞ちて、截つに難き情緒の纏綿に哀んだのである、始め彼女は、一たび戀の寵兒となつたが、端なくも權威の嫉むところとなつて、生木を劈かるゝの悲境に陷つたのである、而も此の時に於ける彼女は、早くも人生の無常を觀ずると同時に、全く自己の一身を諦めて、泣いて〳〵、泣き明かしたる果ては、一切の情念を脫し去りて、全く無垢童貞の昔に復つて仕舞つた、手馴れの琴さへ、今は空しく物を思はせる種であるとて、彼女は再び彈くことを思はなかつた、また君王綢繆の相思をさへ、再び歸つて承けやうとは思はなかつた、何といふ優しくも、またしをらしい心がけであつたらうか。

要するに、小督局は、眞に女らしき女であつた、而も其の情緒は、失戀の爲めに却つて多感の域を超脫したのであつた、風寒く月白き嵯峨野の里に、今も尙ほ千古を想うて泣かしむるは、素より偶然のことではない。

而して今や敎盛に配せられ、其の妻として立つた彼女は、家門の運勢俄かに衰頽して、盛んなりし榮華の夢破るゝを歎き、一門沒落の前つ方、早くも人里遠き山家に隱れて良人と共に過ぎし世を語り出でゝは、時折良人の笛に合はせて、うら悲しき妻琴など奏で、雨暗き日毎、月明かき夕ごと、泣いて〳〵、四つの袖を絞つたであらう。



男は蠻勇無比の奇嬌男兒

女は大膂力の勇婦

辨慶は驍勇無雙の怪僧である、その力は山を拔き、その勇また一隊に將たるに足りて、眞に我が國の樊噲とも稱すべきものである、古來傳ふるところの說に依れば、銅面鐵身、善く飛び、善く走り、手に大薙刀を持ち、脊に七兵具を負ひ、一喝して當面の敵を粉韲すること、枯木を摧くよりも容易しと稱せられて居る。

世の人の多くは、辨慶を以て一個の蠻勇者とし、その智慮の點に就ては、稍足らぬものゝやうに許してゐるけれど、彼れ辨慶こそ、慥かに堂々たる立派の勇者である、その初めに僧として山門に腕力を弄したのは、たま〳〵以てその英氣の橫溢したゝめであらう、であるからその後、五條の橋の上で、御曹司牛若丸に戰を挑んだのは、當時の武人の勇氣を見るためである、併し惡戰苦鬪して力玆に盡くるや、飜然長刀を拋り出して降參し、自からその家來となつたのである。而も彼れの性質は、眞に武人の粹を集め、率直寡慾にして、何等の飾るところもなければ、また物事に拘泥するところもなかつたと云つて一旦結んだ主從の緣は、之れを見ること泰山よりも重く、よく不遇の義經に隨從して、いろ〳〵とその庇護に任じ、權謀縱橫、幾度か主君の危難を救つたことは、洵に忠にして且つ智なるものと謂ふべきである。



併し玆に特筆大書すべきは、辨慶の女嫌ひのことである、凡そ世に生きとし生けるもので、異性に對する愛のないものがあらうか、是れは實に不思議である、思ふに、辨慶には辨慶の理想の婦人がありながら、而もこれを事實に求めることが出來なかつたのではある

まいか、果して然りとすれば、誠にハヤ辨慶の爲めにお氣の毒であり、何とかして理想の婦人をお取持しなければなるまいと思つてゐたところが、いよ〳〵此度夫婦合せの御緣に勇婦板額が當選せられたのである。
辨慶と板額、あゝ實に鬼に鐵棒の好配偶ではあるまいか、板額、巾幗者といへども、勇武越後の一黨を壓し、弓矢無雙の譽れありて、膂力世の常に超ゆ、今配せられて辨慶に事へるとすれば、その閨門の堅きこと殆ど鐵壁の如しであらう。



更に繰返して云ふ板額にして辨慶の室であつたとしたらば、その忠勤は勿論、鳥坂城の比のみではない、土佐坊昌俊が堀川の夜討には、女ながらも甲冑に身を固め館の塀に半身を乗り出し、我れこそは辨慶の妻板額と名乘つて、群がる敵を射殪し薙倒し、大頭將軍の荒膽を冷さしめたるに相違ない、また吉野の奥の悲劇にも、板額はさしづめ靜の御供にて、逃る不忠の郞黨が首根つ子を引き拔くは物かは、犇めく山法師原の向うを張つて、美ン事蹴散して通つたであらう、斯くて靜を送り返してよりは、夜を日に繼いで主君と夫の後を追ひ、道々の危難にも、夫と共に勇を揮ひ、彼の龜井片岡等と共にその名を齊しく稱せられたに違ひないのである。
また奥州に入りてから後も、女だけに注意頗る周到で直ちに泰衡の心中も察せしなるべく、決してやみやみ敵に裏をかゝれるやうの事はなかつたであらう。
縱令それでなくとも、衣川の一戰には、まづ夫辨慶を口說き、主君にも納得させて、越後界隈までも落ち延びさせ、その身は六十四差たる征矢を負ひて、夫の薙刀リウ〳〵と振り廻し、追ひ來る敵を薙ぎ伏せ射留め、心靜かに後を慕うて、義經の奥州再興でも爲さしめたかも計られぬ。



男は悲憤慷慨の少年
女は純潔無垢の少女

孝女白菊！何といふ美しい名であらう、いや實際彼女はその名の如く、孝思一點張の、純潔無垢の少女であつた。

白菊は熊本の人であつた、父を本田昭利といひ、母をお竹と呼んだのである、時恰も明治十年西南の役に際し、熊本は西郷黨の蹂躙するところとなつた、白菊は兵燹の間に母諸とも阿蘇山中に遁れ、樣々の艱苦を嘗めたのであるが、一度相別れた父や義兄に廻り會はぬ中に、無殘や母は不歸の鬼となつて終つた、是れ白菊が十二歳の時である、其後間もなく父に再會して、一二年が程は山間に暮してゐたけれど、一日、又もや父は行方不明となつたので、白菊は端なく山を出て、父の行衛を尋ねやうとした時、忽ち山賊に脅されて、限りもない悲慘な目に逢はされた、折から測らずも義兄たる許嫁の夫昭英に助けられた、蓋し昭英は昭利の實子であつて、白菊は棄兒として昭利夫婦に拾ひ上げられたのである。

扨て白菊は測らず義兄に逢ふて、心の喜び喩ふるに物もなかつたが、其れも束の間である、山賊の同類が自分達を追擊すること急な爲めに、再び義兄と相別れて仕舞つた、彼女は或る老夫婦の家に厄介になつてゐたけれど、茲にも亦辛き風が吹いたので、遂に溪河に身を投げやうとした、すると端なくも復び昭英に救はれ、相伴うて熊本に歸つた、而して其の故室に入るや何ぞ測らん寤寐にも忘れざる父の昭利は、白菊等より先きに家に歸つてゐたのである、白菊の此時の喜びは、果して如何ばかりであつたらうか、想像するさへ

餘りがある。

白菊は漂泊の時に於てすらも、毫も父を忘るゝことがなかつた、また亡き母の遺言を守つて、義兄昭英を懷ふことも、亦た尋常一樣ではなかつた、風寒く月青きの夜、雨冷かに花落つるの夕べ、此れを思ひ彼れを憶ふて、空しく小さき胸を碎いたことの抑も幾度であつたらうか、就中も不遇流離の中に、敢果なくなりし母を懷ふ時は、熱腸寸斷の情に堪へなかつたのである白菊の如きは眞に父戀し母戀しの境涯を經盡したもので、人をして轉た同情の涙に咽ばしむるのである。

此の同情すべき可憐の少女は、今や我が夫婦合せに於いて、阿新丸に向つて配合せられた、眞に絢爛の伉儷ではあるまいか。

阿新丸とは日野中納言資朝の一子である、父資朝が鎌倉幕府の忌諱に觸れて、遠く佐渡の島に謫せらるゝや、彼れは朝に夕べに父の行方を慕つて、何うかして今一度父に逢ひたいと、千々に心を碎いてゐたのである。

佐渡と云へば、今でこそ譯もなく往來はすれ、その當時は限りもなく遠い、地獄の底のやうに思はれてゐた、而も父戀しの一念の前には、千山萬里の雲もなく山もなく、彼れは遂に遙々と父の配所に赴いたのである、所が悲しい哉、本間入道の無情き所爲に、父の顏さへ拜むことが出來なかつた、そして彼れの血はむらむらと湧き返り、孝子の一念凝つて金鐵の如くなり、遂に入道の館に忍び込んで、一氣に其の頭を刎ねて仕舞つた、噫何といふ壯烈なことであらうか。

白菊は今や阿新丸に妻された、兩者は恐くは千載の一遇であらう、



夫は度量寛大の奸雄
婦は古今無双の大政治家

足利尊氏は一代の奸雄であつた、その智は楠正成に及ばず、その勇は新田義貞に若かざりしにせよ、部下の將士を操縱し、武人の人望を得た事は、たしかに一代に傑出してゐて、そゞろに曹孟德の昔をも思ひ合はさるゝのである。

尊氏初め北條氏の一部將として轡を中原に馳するや、機敏なる彼れは、早くも北條氏の末運になつたことを悟り、その一身を全うし一門を興さんとて、飜然王師に降り、轡を返して北條氏を討つたのは、既にその志望の一身一家に在るを知るに足るのである、その勤王は大義の上より行はれたのではなく、全く自家存亡の打算から餘儀なくせられたのである。

彼れは利害の爲に故主を討つ、故に天皇にも二心あることは、素より然るべき筈である、さて北條氏は玆に滅亡し、世は王政の古へにかへつて、彼れは參議の榮職を受くるに至つた、すると果せるかな、彼れは平生の野心をあらはし初め、宮掖に媚びるやら、武人を懐けるやら、また同時に武門と公卿との間に惡辣なる離間策を施して、一擧に風雲に乘ずるの準備をなしながら、私かに士心の朝廷を去るをば、心地よげに打眺めて居た、實に一世の横着ものである。



尊氏は機會を捉ふることが上手である、當時の寵貴を餌として、巧みに不平滿々たる將士を慰撫したので楠正成や新田義貞等數人の勤王家を除いては、その志皆な朝家を去つて尊氏に歸した、蓋し人は何うしても利欲の動物であるので、利欲の好餌には、何人も釣られざるを得ぬ、尊氏は實に此の秘策を行つたので

ある。

建武二年北條の餘黨が鎌倉に起つた時彼れは征夷大將軍の職を請うて得ざりしを口實とし、一呼して平生恩顧の將士を招けば、天下の武人雲の如く集り來つて、終に彼れの大をなさしめたとは、確によく奸雄の面目を發揮したものである。

此の點に於いて觀察するのに、尊氏は尼將軍の故智を學んで、而もその長所をのみ吸收してゐる、世人が尼將軍を拉し來つて、尊氏に妻あはせたのは、夫妻共に第一流の人物蓋し至妙である。

尼將軍は、自家防衞の策を講ずるために、政權の全部を自家の出たる北條氏の手に收めたのである、此の計略を成就せしむるには有らゆる手段を取り、深刻なる女性の權謀を發揮して、隨分際どい策略まで敢てし、己れの骨肉をも殘戕うたのであるが、その機智は善くその素志を遂げしめ、賴朝以來の元老功臣を自滅せしめ、源家の正統をすら斷たしめたる手際に至つては、眞に女流の爲業とは思付れぬ程である。

要するに政子は、其の處女時代からして、既に自家の榮達を期し、その機會を覘ひつゝあつたので、その機智と辣腕とは、まづ妹の夢を買ふの時に始まつて、其の第一鋒鋩を現したのである、彼女は情の人にあらずして、意の人である。

雖然も尊氏の度量並びに資本は賴朝の夫れよりも大である、殊に英雄を御するの點に於て賴朝よりも遙かに大なる處があつた又尊氏の興つたのは、全く自分の巨腕に依つたもので、決して舅家の力などは藉りなかつたこゝに於て尊氏の室に擬せられた政子は、何れの點に自家立脚の要地を求むるであらうか、けれども尊氏の度量を以てせば、この悍婦を操縦するに綽々の餘裕あること賴朝の比にあらず隨つて自家の骨肉を殘戕するが如くならんや。



男は超俗嘲世の緇徒女は遯世の有髮尼

一休和尚と祇王、一は超俗の僧、一は世を儚なんだ、可憐の死屍、兩々相對して是れを見れば、そこに云ふべからざる面白味がある。

そも一休と云へば、洒々落々の和尚である、物事更に拘泥するところなく、さながら水の流れるやうなものである、酒も呑めば、魚も食ひ、時に依れば美人の横顔を眺めて恍然することもある。

併し其處には云はれぬ一種の趣きが含まれてゐるので、少しも俗惡なところがない、或日のこと、一休が弟子を伴れてブラリ／＼と往來を歩いてゐた、すると先方から一人の美人がやつて來たので、一休は何とも云へぬ嬉しさうな顔して、その美人の姿を見送つた、弟子は寺に歸つて後、出家の分際として除りのことであると詰問つたところが、一休は暫時して卒と思ひ出した如く、なるほど左樣いふこともあつたやうだが、おれは忘れてしまつたに、お前は能く覺えてゐたと云つたさうである、是が即ち一休の一休たる所で、物に拘泥しない狀が能く顯はれてゐる、凡そ何事に依らず、人間には執着といふものがあつて、それの爲めに種々の苦勞をしたり、罪惡を犯したりするが、その執着さへ無くなつて仕舞へば、一切無差別界の立派な佛さまになれるである、一休は極めて執着心に薄かつた故に、酒も飲んだり、魚を食つたり、又美人を見たりしてもそれが爲めに己れが心を囚へられるやうなことは無かつた、然ればこそ當時の人々は、一休のことを活佛と云つて尊崇してゐたのである。



併し此の悟入は、全體如何にして得たものであらうか、一部分は時代の反動から生じたものではあらうが何にしても生れが良かつたので、大部分は先天的に賦與されたものであらうと思はれる、故に、彼れの爲た跡には少しも無理が見えず、如何にも自然のまゝで、彫琢や粉飾などの、少しも厭味氣がない、諺にも味噌の味噌臭きは何とやら云ふが、彼れは僧侶にして少しも僧侶の臭味がない、是れぞ普く人の尊崇する所以である。

　これに比べれば、祇王は餘程趣きを異にしてゐる、彼女は最初、當時の最大權威者淨海入道の寵愛を擅ままにした、その折の光榮こそ、言葉にも譬へられぬほどであつた。



と云ふのは、當時清盛は夕日を煽ぎかへしたほどの勢ひであり、その寵愛を擅まゝにした祇王は、唯だ一個の白拍子に過ぎない、それが一躍して光榮ある境涯に這入つたのであるから、女としての矜は先づ此れ以上のものは無からうと思はれる。

　然るに俄然として光榮ある地を踏みはづした、それは佛御前に淸盛の寵愛を奪はれたのであるが、是れぞ又頓悟の入門であつたのである、彼女は深く浮世の味氣なきに感じ、轉じて更に男女兩性の欲望が如何にも馬鹿げてゐることを悟つたのである。

　併し是れは果して眞の悟りといふものであらうか、由來女の悟りほど怪しいものはない、その執着たるや千筋の髮の蛇になる譬さへあるのに、一朝如何なることがあつたればとて、何で忽ち佛さまになることとが出來やうぞ、思ふに祇王なども、失望落膽の餘り何とか自分を慰める道を求めた結果、寧そ此世を見限つて仕舞へば、切めては人に侮られる苦痛を避けることが出來るであらうと、猶且一種の虚榮心に驅られたものではあるまいか。



男は封建武士の模範第一人　女は平々凡々の一名婦

大石良雄は淺野内匠頭の老臣である、偶ゝ主家が吉良上野介のことよりして滅ぶるや、さま〴〵に苦心慘澹して首尾よくその仇を報じたことは、恰度常盤御前が貞操を破つて源氏の再興を計つたのと、能くその趣きを一にしてゐる、多分こんな似寄の點を以て、端なくも此縁組が結ばれたのであらう。

然りながら、此れは極めて皮相の觀である、若し一歩進んで、良雄と常盤との內心に立入つて見たなら。必ず思ひ半ばに過ぎぬであらう。

大石良雄は能くその分を知り、人の臣と爲つて實に申分のない人である、孔子の言を借りて云へば、六尺の孤託すべく、百里の命を寄すべく、若しその匹を支那に求めれば、藺相如、孔明にさへ決して劣つてはゐないのである、又更に心理學の方面から云へば、智情意悉く發達して居り、殊に意思の强かつたことは、能く男性美を發揮した所以である、之に比べれば、扨て常盤は何と說いたら可からうか。

世に、常盤御前を論ずるほど難しいものはない、義朝の遺兒を全うして、再び源家の世をなした點から云へば、彼女は絕大の賢母ともなり、又女丈夫ともなる併し己が夫を滅した仇敵、女子第一の貞操を汚した方面から云へば、是れ實に許すべからざる不貞の女である、この難しい兩面の事實が、每時も常盤を上下する標的となつてゐるのである。

彼女は源家を興さんが爲に、操を破つて操を立てた。

彼女は凛平たる貞操といふことを知つてゐない。

惟ふに、この兩つの論者は、共にその的を外れてゐるやうである、常磐は今平家の盛んな世の中に、源家の再興を豫期するほどの、そんな遠大な考へのある筈もなく、また自から好んで清盛に從ふほどの不貞な婦人でもない、その當時夫は亡ぼされ、一族は離れて、何處を頼りにする所もなく、心細さは譬ふる物もない折柄、切めてもの心を勵ますは、唯だ三人の小兒があるからである、若し其れを殺されて仕舞へば、最早や生きる甲斐もないのである、乃で已むなく小兒等の生命に代る爲めに、心ならずも清盛の意に從つたといふ存外平凡な婦人なのを、他日その小兒等が源家を再興した爲めに、つひ問題が八釜しくなつたのではあるまいか。

要するに、常磐は決して先見の明もなければ、稱嘆すべき隱忍の力もなく、唯だ能く我が子を愛する他、別段取立てゝ云ふほどの婦人でもない、故に假令良雄の妻になつても、何も左樣に目醒しい働きもせず、夫が一力あたりで遊興して居れば、大に憂ひて少しく意見はするであらうが、迚も良雄の眞意は窺ふことは出來ない、併し良雄の方から見れば、石女のやうな妻よりは、却つて常磐のやうな平凡な婦人を、結局可愛いと思ふであらう。

されば、此縁組は、好逑とも言へず又不釣合とも言はれない、元來良雄と云ふ人が、智情意の三つが、圓滿に發達して居て、殊に男らしい人であるから、面喰ひの女の他には、何んな女でも必ず御して、ゆくことが出來る、常磐は又、平凡な婦人の代りに如何なる夫にも能く仕へる故家庭に波風などの起らう筈がないからである。





男は多情多感の學者詩人　女は高才逸足の博學才媛

炬の如き史眼を有し、殊に文藻にさへ富んでゐたのは、蓋し近世に於ける賴山陽であらう、且つその稜々たりし氣骨と、物に屈托せざりし性質とは、眞に一代の豪の物とも稱すべきものである。

凡そ山陽の作物が、活社會の盛衰を以て眞髓とした丈け、山陽その人の性格のほども窺ふことが出來る、彼れは大義名分を以て經緯として居たので、苟も彼れの言動は毅然としてゐた、殊に山陽としての特色は、其の何れにも腰を屈することなく、飽くまで所學の精力を傾注して、帷を清貧に下したる一事である。

世には腐れ儒者が隨分多い、唯だ徒らに一字一句の辭義にのみ拘泥して、經世の法も知らねば、大義の道も知らぬのである、然るに山陽は、始めて書を學ぶに當り、毫も瑣々たる經義文字に拘泥せず、勉めて古今の盛衰に留意し、所謂る人道大義の伏藏するところを究めたのである、其の尋常一樣の儒者に比ぶれば、元より同日の談ではない。

また學者が經義を講ずることは、素より其の本分であれば、古來學者の之れが爲めに必死に力を盡したことは、屋上更に屋を架する爲めに費すを忍びず、すなはち烱眼を一轉して、所謂る經義人道の迸發する活社會の眞髓を明かにし、經學の根本意義を樹立せんと試みたのである、言ひかへれば、彼れは議論の敷衍よりもその實行に重きを置いたのである、故に彼れが峻嚴なりと稱せられたのは、畢竟社會格に處する人格の抱負に外ならなかつたのである。

實に山陽の學は、社會の上下に貫通した、故に其の所學も多方面に亘つたのである、隨つてその才藻は隨所に多樣に發揮せられ、史筆詩賦に堪能であつたのみ

ならず、凡曲俗謠の類に至るまで、隨分精通して居た是れ軈て山陽の偉大なる所で、その該博なる所見が史上の出來事を批判する上に、多大の裨益を與へたのを想像するに足るのである。

更に又茲に特筆すべきものがある、それは山陽が孝心深かつた事である、彼れが莊子の講義中、父の訃音に接したので、終身つひに莊子を講せなかつたさうである、而して彼れは、唯一人の老母に奉ずること頗る慇懃を極め、安養慰藉の至れること、平生の豪宕にも似なかつたさうである、山陽は何處までも眞に大義名分の人であつた。



此の人に配するに、今や清少納言を以てせられた、大詩人と大才媛との結合、雷鳴り電光閃く底のものではあるまいか。

清少納言が平安朝に於ける大立物たりしは言ふまでもなく、その才思の縱横なるの點に於いては、眞に後世をして欽仰せしむるに足るのである。

清少納言の書いた枕草紙を繙けば、彼女の觀察眼の凡庸でないことは直ちに認められるのである、但しその性行に於いては、多少云爲すべきものがあつたとは言へ、そはその時代の通弊として、大いに恕すべく、是れを以て彼女が文學上の功勞を奪ふことは出來ない

清少納言は實に稀れなる博學であつた、和文に巧みなことは云はずもがな、漢文學の造詣さへも極めて深かつたのである、日頃座右の伴侶には、白氏文集や文選などが置かれてあつたといへば、和文修辭の巧妙なこと、素より怪むに足らない。

而して山陽の妻としての清女は、犀利なる社會的觀察眼を縱にして、流麗婉雅なる國文を書し、濶達精緻なる良人の詩才に追從して、優に學門の雙璧を爲すであらう、而して東山に、鴨河に、將たまた天下の耶馬溪に、盛んに良人の詩文に唱和し、幾多の文人墨客をして、垂涎三尺たらしむるものがあつたであらう。

懸賞 夫婦合せ當選者發表

新年號にて募集せし夫婦合せの應募端書は非常の盛況にて、總數貳萬二千七百八十六通の多數に及び、〆切前數日間は毎日約二千通に及び、これに從事せる調査員三名三日間殆んど徹夜にて調査したるほどなりしが、多數を標準として審査せし結果は別項の如く十二組の理想夫婦を得たる譯なり、俟て右合格當選者八十名ありしを以て、右人數を募集規定により抽籤を行ひ賞與等級を定むること左の如し。

一等（拾圓）
東京市日本橋區馬喰町一ノ十佐々木方　早川八重子

二等（五圓）
新潟縣柏崎浦町　桑山たけ子

三等（貳圓）
東京市小石川區水道端町二ノ一　田阪すゞ子
東京市牛込區市ヶ谷谷町二十二田邊方　岡部はる子
福岡縣三井郡善導寺村　秋山さき子

四等（壹圓）
本所　木村柳子、天滿　畑都子、本鄕　堀池わか子、長野　畑山とし子、愛媛　田中恭子、群馬　藤美うめ子、高崎　鹿野さわ子、愛知　早川小花子、大阪　松本いく子、熊本　上原よし子、

五等（五十錢圖書）
牛込　金木靜子、靜岡　松島まつ子、栃木　三井和子、和歌山　小瀨田富美子、函館　一谷はる子、長野　大森かめ子、島根　柴田秀子、大阪　三宅倚子、熊本　岡崎とし子、岡山　井上靜代子、福島　舟生とくよ子、小石川　西柏光子、福島　兒島一男、愛媛　白石恒子、横濱　平沼乙女子、熊本　武藤やよ子、新潟　菅屋勉、熊本　工藤ひさ子、大分　安原春江子、福岡　廣かすみ子、朝鮮　比留間靜子、奉天　玉野すみ子、信濃　瀧澤久子、岡山　藤木芳子、牛込　田邊よれ子、備後　高野とし子、岡山　榊のぶ子、千葉　遠藤喜久子、茨城　木村かれ子、小石川　藤井つたへ子、秋田　堀米子、福岡　富延久子、名古屋　成田丈子、肥後　竹下きゞ子、熊本　東やす子、山口　吉富銀子、群馬　天利たつ子、京都　東枝文子、岡山　大崎文子、神奈川　久保田菊子、福岡　濱口房江子、新潟　佐藤なか子、新潟　會田さよ子、新潟　會田げん子、大阪　近藤せつ子、新潟　畑野眞咲子、新潟　本田さよ子、新潟　大倉きみ子、芝　三浦はま子、靜岡　佐野みさ子　神奈川　宇都りつ子、德島　牛山來巳、兵庫　藤井りえ子、廣島　小田實枝子、弘前　金子しのぶ子、栃木　飯島せん子、山梨　關場春子　山梨　小林繁子、陸前　秋山俊子、埼玉　飯野八重穗子、熊本　日高みち子、仙臺　杼臨きよ子、大分　小玉かく子、滋賀　村岡益野子、宮城　高橋かつよ子、京都　武部歆子、伊豫　能田勝惠子、東京　小杉てつ子、根室　甲坂はる子、伊豫　能田春子、三重　小龜せつ子、京都　奥三千子、名古屋　築井よし子、東京　堀今子、

（藤原鎌足 春日局）	（鎮西八郎 巴御前）	（武藏坊辨慶 板額）	（一休和尚 祇王）
（菅原道眞 紫式部）	（平清盛 淀君）	（岡新丸 白菊）	（大石良雄 常盤御前）
（在原業平 小野小町）	（平敦盛 小督局）	（足利尊氏 尼將軍政子）	（頼山陽 清少納言）



和歌

一等　○

羽子板をかゝへて白き指さきにこぼれてにほふ春のともしび　浅草　内田紋子

評、可憐なる少女が、松の内を遊び暮して歸り來りたる時の樣など歌ひしもの歟。美はしとも美はし。白き指先の語に少女の容姿想はれ、かゝへての語に少女の少女らしき心情を偲ふべし。殊に灯の指す影を形容してこぼれて匂ふとせしなど、啻に用詞の清新を見るのならず、灯影の片破れがあどけなき少女を照す光景を狀するには、最も恰當したる詞なるを見る。

二等　○

あそび屋の灯うつる大川の町の夜更を淡雪ぞ降る　米子　安藤まつの

評、對岸の遊び屋に明るき灯影は、一面の歡樂境を表し、屋外の夜更を降る淡雪は、一面の悲愴界を意味す。淨瑠璃氏等の好で歌へる人世の情態也。歌ひ得て痕跡なく、言外餘哀あり。

二等　○

少女子がふりのたもとに新らしきゑみほころばす松の内かな　函館　藤木鳥羽

評、詞美の好妙を極むるもの。振りの袂、新らしき微笑、綻ばす等の語、斷じて換ゆべからず。

三等　○

けふの日も靜に暮れぬ桐の芽の紫匂ふ春の夕空　羽後　幻の女

評、平和の氣象を見る。ひとり用詞の美はしきのみにあらず。　中

三等　○

からたちのとげにも霜のおく見えてはださすばかり寒き朝かな　奈良　中川とき子

評、からたちのとげに置く霜を取りて、肌を刺すの寒氣を歌ふべき資材に供したる著想、奇也。

三等　○

むづかる子やう〳〵れかせ針とりて今宵も足袋のつくろひをする　秋田　澤木きくの

評、人生の苦寒を歌ひて、何ぞ其れ慘凄なる。

秀逸

○

わたつみの豐旗雲に茜さし今出づらむか初日子若子　神田　松平扇子

○　越後　横村みれ子

朱に塗りし御寺の門に佇みて美しく降る雪の舞見る

○　横濱　小豆澤しげ子

霜ばしらくづれて寒き井戸ばたにこぞめ花咲く如月の村

○　北海道　岡田はる子

ひとすじの落髮にだにもつなぐべき秋を細りし我玉の緒よ

○　讃岐　水島露子

夕日かげ入りにし後の波寒く屋島を出でし片破れの月

○　信濃　前澤節子

おもふ事なかば語りて別れ來しあした露けきふるさとの道

○　南洋　月女

ものはみならしくありたき斷腸の我は何とて嫉らしきや

○　播磨　山田鳴子

手折にしこの梅の花いかにせむこひしき君は道遠くして

○　小石川　下田有野子

名も榮も宮も願はぬ我れなれど品物足らで淋しさに泣く

○　京橋　稲島直

さやくと枯穗枯芦音たてゝ中洲寒げき宇治の河風

○　大阪　水谷きぬ子

はなやかに我世の春を誇れども二十と知りてうら悲しかり

○　金澤　相川富貴子

夕闇に白き花をば見るがごとかすかに君がむれの謎解く

○　石見　端枝

乳母か宿昔語りに夜はふけて隙洩る風の灯を斜に吹く

○　宇都宮　保多家壽子

わきたらぬ心地のみして別れにし停車場出れば風の吹く

○　大津　玉墨

九重の雲にそびえし松が枝に君が代祝ふ雛鶴の聲

○　廣島　元山かなる

ロンテニス遊ぶ少女の笑む毎に見ゆる齒の間に春立つらしも

○　石川　井津宮士子

千代八千代かはらぬ御代を松ヶ枝にうれしくぞきく鶴の一聲

○　横濱　山内小夜衣

小雨降る春の夜更にたれこめし圈粥の夢の甘き波れよ

○　千葉　立川りう

ながし終へて老母に書など讀みてけり湯槽に梅の影のする夜半

○　靜岡　北川かつ子

春の日や紅梅活けて人待てば窓のぞきけり鶯の來て

○　大阪　中村數榮

そと開けて手函の中に涙しぬ思を秘めて嫁ぎ行く身は

○　大阪　春江

うけられぬ人のみ文なさきすてゝくちびるかみぬわれ人妻は

○　横濱　加藤花丸

戀しさの思にもゆる胸の火を君か情にけす夜半もがな

○　京都　白桔梗

若菜つみわかな摘みて夕くれて春雨けぶる深草の里

○　陸前　江倉孝子

痛示なること思はれて今宵また一人なげきぬ明方の夢

○　河内　緑若柳野子

破つゞき獄解す君が門にくれば紅梅咲きて鶯の鳴く



俳句

天

竹垣に見ゆ里風や冬構え　紀伊　中島まさ子

評　地味なところ趣ふかし

地

旅帖にも春心の句や返り花　肥前　隈部信代

評　伏見山科晴れてあり

人

沼埋めてより奇ある里吹雪かな　豊後　冬住可太子

評　想は古し

秀逸

深草や土器ほす庭の冬牡丹　越後　東樹初子

評　閑寂

花枇杷や不漁前凪く海の癖　淀橋　原喜代子

評　好ましき句なり

梅もひらく驛路草紙や縣召　長崎　牛島文子

評　歌帖にのほる月清し

うとましや靑饅に洲色あさる君　茨城　岩田淸香子

評　後世おそろしき人や

落葉焚て沒書供養もしたりけり　土佐　北村美佐夫

評　いども情あり

佳作

梨花歸り咲く草の戸や誕生日　肥前　隈部芳子

雪掻きて若菜など田家行事かな　宇都宮　白露

御下向ある日とよ返り花晴れに　肥前　隈部藤代

初日の出や濱邊の一戸鷄も居て　難波　白梅

北風や砂溜りたる船の底　埼玉　萩野さく子

嫁が君ちらづくや歌客侍つ灯　小石川　越沼㝵子

凩や淋景も吉野千本木　愛知　早川あさ子

瀨田あれに唐崎それよ浮寢鳥　京都　上田ぬい子

水仙の香氷る詩句に夜寒し　赤坂　鈴木高子

猫の背の灰泥れ見るも春寒し　出雲　長崎百合子

傘干されあるも趣き麗さ　府下　黑須敏子

物に忌みて縫ふ衣もうし春淺き　芝　大和田みつゑ

草の戸や臼ふむ窓の實南天　高知　近森雪子

日本晴れの春や浦の戸山の家　芝　篠崎キミ子

草の戸や田螺の籠軒の雨　香川　大井久子

鑛山蜚語を放つ里荒き雉子の聲　香川　富岡粧子

雲を飼ふて老たり俳諧師　小石川　星野　絹子
俳人なしてあればほとと落つ椿　京都　恭　子
香初や書院に炭のはねる音　旅順　山本やすゑ
雲に灯をやる背や春寒し　京都　大前日枯穂
雪解て参四五すの鷺かな　靜町　川越せい子
春昔や柴戸を叩く歌使　滋賀　信　子
草も萌えて東風に賣まる入江かな　宇都宮　保多家壽子
きさらぎや細雨しと〳〵と草もゆる　宮城　霞　子
初風呂にや若ひたて髪に浮ぶ霞　兵庫　横田ふさ子
母が念佛老爺とこそ夜中の冬　越後　吉田たき子
何事もなくて過ぬる睦月哉　芝　菅岡　麗子
若水や姉妹すでに覚めてあり　芝　遠田　知子
芹つむや野人が唄に戀もあり　本郷　高畑靜代子
羽衣の白きに舞殿冴返る　香川　大井　久子
繪筆洗ふ女あり春の川柳　越後　東樹　来子
歌かるた灯も更けぬ窓に雪や來ん　埼玉　伊藤　睦子
句になづむ彼れ訪はゞやな夜半の春　丹後　山添　米治
夜や雪様あれば家句あるらし　能登　向井きみ枝
座右の歌書師に贈る吉書かな　東京　梅野紫津子
磯千鳥飛ぶや遠村火ごとらし　越後　横村みれ子
登校に左行の軒や冬の立つ　尾張　勝　香
籠鳥の小籠上座に侍りけり　神田　伊藤　雪子
全界に梅影冴ふる化粧哉　京都　中野ふみ子
日記もこひし過寒の母が玉章に　香川　猪熊　榮子
匿名な君とは知れり山茶花に　尾張　美　代　女

秋寒く白衣をたつ鋏かな　牛込　畑中まつ子
乾鮭や遺民となりて食に處す　島根　青柳　薫子
鳴く灯につきぬ話柄や檜の宿　習志野　み　つ　子
痩馬に鹽積でゆく枯野かな　巣鴨　田中　仙子
崖の土崩るゝ冬の日射し哉　瀧の川　山田　試子
山の端の地星寒う今朝の霜　瀧の川　山内　雛子
山茶花や米蒔けば小鶏こゝと來る　習志野　みどり子
獣湖の窓に舞ひ込む落葉かな　新潟　勝　英
鵜すくむ足袋や看板今朝の冬　小石川　中川喜の子
過寒先生を勞すことに山路徒歩で來し　神戸　中山　信子
俳風に飛鳥に芭蕉叩く雨　大阪　本山須磨子
冬薔の香も高き賢婦哉　豐多摩　小林　きよ
瀨江の雲ちぎれ飛ぶや今朝の秋　清國　森　悦　子
雪之日を大先達の墓參かな　香川　田中名香子
眠り友の猫と親しむ炬燵かな　巣鴨　田中　仙子
戸節穴くゞりて佗し吹雪かな　朝鮮　花　子
春寒や捨つる佛花も爽に明けて　大阪　角畑きく女
山茶花や叢打ち吠り子守唄　根室　土岐孤琳子
嫁子なしや寝覚め淋しき絹衾　紀伊　阪田　よし
千町田の有ふるき老か頭巾哉　小石川　中川喜の子
供俱して落つ人のあり城趾　岩手　大和田ふみ
年玉や寝顔可愛き枕元　熊本　濱崎ちよ子
鳥丸歌留多の集ひ果にけり　福島　木村つれよ
春雨や神灯にそれと人の影　天鹽　矢萩　常子
春草や鶏飼ふ圃のあふれ水　羽後　灯　の　女



誌友俱樂部

▲上海の葉山靜子様、いよ〳〵昨年暮れより當地の人となりました、土地不案内のみならず、萬事なれませんので、まだ一人で外出も出來ませず、寂しく暮して居ります、私宅は北四川路參奔里卅八號でございます、あの日本小學校の傍でございます、お暇の節には何卒お遊びにお出で下さいまし下女と二人でございますから、私も何れ少し土地になれましたらお尋れいたします(清國上海丸山琴聲)

▲京都の露野様、私長らく京都に居りましたの、そしてローマにばかり結つて居りましのに、何故貴女と御目にかゝる事が出來なかつたでせうれ、京都に居りました頃は、土手町の植木屋の次家に居りましたの、只今家の都合上此の福井に歸つて居ります者です、若しお差しつかへなくば、御住所御本名をお知らせ下さい、(福井眞宗寺院内奈加登龍子)

▲皆様、明けましておめでたう存じます、當年中は皆々様方よりお玉章や繪はがきをお送り被下まして、色々とお心をわづらはしました、尚今年も相變らずお交際をお願ひ申します、元は長府町でございましたが、只今は(和歌山市雜賀屋町三番返里内伊藤光子)

▲北米にお住ひの諸姉さま、私は製鐵所の側で淋しく暮す賤が身でございます、色々お尋れ致したいと思ひますが、お差支がなくば下名迄御住所くはしくお玉章下さいませんか、必ず繪葉書と寫眞と一緒に御送付申します、尚永久に御交際をお願ひします誌友の皆様お玉章の御交換お願ひします、(福岡縣遠賀郡八幡町尾倉西出町三丁目山下武平方山下みつの)

▲愛讀者様は釜山にたくさんいらつしやいますのれ、誌友會お贊成の方は誌上にてお返事を待つて居ます(釜山秋岡龍子)

▲十一月號にて御同情くだされました伊豫の御方、御許様も知火海のほとりにお暮しなされました由、知火海つて申しましても廣うございますが、どのあたりにゐらつしやいましたの、私は温泉で名のある日奈久の先きの方に居ります、日奈久から六里離れて居りますが、海の景色がほんとうに好うございますのよ、御住所とお名前お明しくだされますなら、繪葉書お送りいたします、末永く清いお交り願ます、(知火のほとり野の露)

▲皆々様のお中にて、地方から東京に出てらつしやる方、もしくば東京のお方でも、或る一箇の職業に就ておられる眞面目な女の方と、御交際を希望いたします、委細は書面にて(越後刈羽郡下宿村圓王寺内千代香)

▲生意氣とのお叱りを受けるかも知れませんが增刊の御創作のうちで、鏡子様のおやさしい中にしつかり遊して犯すべからざる氣品の高いお作誠にうれしうございました、千代子様のいつも〳〵結構に拜見して居ります、お二方とも前途に光明のみち〳〵た御身、何卒御自愛下さいませ(鈴音)

▲諸姉様、明けましてお目出度うございます、私は片田舍に女學世界を友として其日を暮らして居る者でございます、以後よろしくお導きを願ひます「順境と逆境」ほんとうに面白く讀みました、其の内で「女繪師」なんとなく人事とは思へず、幾度も〳〵讀みかへして泣きました、あゝ鏡子様ます〳〵御振ひあそばせ。(片田舍の路草)

▲千代子様は大へん文才のある方ですれ、然し千代さんの文は皆目のさがつた文句ばかり、千代さん自身はどんなに目がさがつて居るでせうれ、皆さんはさう思はなくて?、私はいつもさう思つてよ、こんな惡口言ふ私を誰れだと思つて、私は四十四年に東洋女學校を出たのよ、東女の方はきつと知つてゝよ、今はカントリーに居るの。(越後行方かれ)

▲松平さんはほんとにお達筆れえ、本屋の小僧が持つて來る女學世界取るが早いか、ハラ〳〵と頁を繰つて、先づあさるのは千代子様と鏡子様の御名、どうぞ此後共にます〳〵本誌の上に彩華あらしめて下さいましな、然し此頃はどう遊ばしたんでせう、花散里様のあの氣韻の高いお筆は、少しも見えない様でございますれ、私は何だか物足らなくて〳〵……、花散里様！あ

なたを望み待つ幾多の誌友のためにどうぞおふろひ遊ばして……、淡き月光を半身にあびて、リンヶ閃くま白き指先、キイの上にをどつて、かなづる曲はヴエトーヴエンのムーンライトソナタ？頭高にあげたルイザに匂ふ白薔薇の一輪もふさはしい氣品高い人の姿が、髣髴としてうかぶ、あゝ花散里様がおなつかしい。（野末の慶催璃）

▲明けましてお目出度う、誌友の皆様も初春をお迎へなさいましてお互に樂もしう喜びます、君が代の千代萬代に池の畔の鶴にも、太平の御世を壽ぐように見えます、皆様の上に限りなき平安なる幸を祈り、併せて今年も相變らず御玉章をお惠み下さいませ。（東京市小石區金富町龍閑寺内雪枝子）

▲新年お芽出度う祝ひ納め參らせ候昨年中は諸姉様方には玉づさエハガキの御交際下され改てお禮申上候尙今年も御交際を願上候（北水熊谷常子）

▲誌友の皆樣、お目出たうございます、又一つ年がふえましたれ、お目出たくもありお目出たくないお正月……、年毎に衰へゆく人生の春の我が胸の血、今年はもう全く冷えましたの、大阪の疋田鼎葉様、如何あそばして、四十四年はほんとに變化の烈しい年でしたのね、でも貴女は溫き血が通つて居るだけお幸福よ、何卒おきげんよく。（葉水仙女）

▲妾の友人に、昨春某縣立高女卒業生があります、猶上へ進まれる筈でしたが、不幸父君を失はれ、多年の希望も今更水泡に歸した有樣、就ては猶高等教育を施さるゝ（本人の嗜好は文學と音樂）慈愛家へ養女として行きたいとの事、愛讀皆様の內で、お心當りのお方は、下名まで封書で御一報願ひます。（ひろしま西引堂町杉山榮子）

▲門司の安藤君子様、あなたはカトリツク教の學校にいらしつたさうですが、どこの學校ですか、私も仙臺に十年居りました、年が明けましたから私も仙臺と別れなければならぬ身なので御座います、よしや身は仙臺を離れても、私しは第二の故鄕たる仙臺ですもの……、仙臺の愛讀者諸姉の益々熱心ならん事を祈ります、北米のみなさま、御かはりございませんか、千葉縣木更津の梅廼葉子様、御懐かしうございます、私も木更津附近が故鄕なのです、どうぞ不束な妹ですが、御交際をお願ひいたします（仙臺北里の美詩香）

▲アゝ又お仕事が出來ないつて筆あげて、母様に笑はれました、なぜつて女學界世が來たから一寸一頁だけつて思ふ間にずん／＼先きへ先きへ、なぜかう迄讀みたいのかしら、どれだけ讀んだつて書けないのに……しかし又書けないだけに作者の君達がお羨しうございます、方々から色々御批評もございますが、目次を見た時、千代様のがないと何だか氣ぬけしたやうな感じが致しますの、皆様は如何御思召すか、私はやはり數ある中の明星は千代様と思はれますが、私は始めての投書ですのに、此んな事申上げて失禮の程恐しからず、以後皆様何卒よろしくお交り下さいまし、誌友の皆様御自愛遊ばしませ。（紀伊の里にてもゆる女）

▲私は度々投書は致しますが、未だ一度ものりませんの、お恥かしい事ながら、投書は二十字詰二十行でなくつてはいけぬですか、又小說の樣な物は特別寄書へは入られませんか、お敎へ下さい、次に誌友の皆樣、お親しくお交り下さい、御文通も致します、外國に住する皆樣とは一層親密に致します。（茨城縣那珂郡神崎村大字米澤武藤亮子）投書は二十字詰で結構です、また特別寄書は小說のやうなものでも歡迎いたします。

▲十一月に「人生の春」お書になつたさみどり様へ御同情致します、私はだん／＼讀むにつけ、我身に引くらべ、戀しく淚がとめどなく、流れてなんとなくなつかしく存じました、私の友達も、皆お嫁に行かれて友とてはなく、毎日々々淋しく戀しく暮して居ます、貴女あまり悔まぬやうなさい、まだ他家に行かぬ前が花ですよさう云ふもの〻女ですから、一度は樂しき家庭をつくりたきものですね、嗚呼樂しかりし學生時代が思ひ出さる、さみどり様御住所姓名お知せ下さい拙いながらも、手紙差上げますから是非願ます（谷野すみれ。）

▲第十一卷第十六號に、北アメリカの嘉友よりつてお書き遊ばした方に申上げます、あなた様が、嘉友をお戀ひなさるお心根深く御同情申し上げます、私は同じ日本中ではありますけれど友と別れた川なんかを戀ひ出しますと、なつかしうございますの、まして四千餘哩もはなれてますもの誠に／＼御同情申します、何卒御交際を、匆々から失禮ですけれど御住所を。（ちとせ川のほとりにて如月より）

▲新年號面白く拜見いたしました、「新綿衣」を

おかきなすつた暗内侍樣は、濱千鳥さまの御變名ではありませんか、併しどうやら男の方のやうなおかき振は、怪しうございます。「世に拗れた女の噂」は、本當に左樣だらうと思ひます。（お茶水橋畔忍草）

▲千代子樣、あなたは隨分お口の惡い方だこと、おそろひの皆樣のお顔の御批評なんかは、恐れ入りますれ、オホヽヽヽ、お年の御辯解!!よく分りました、丁度私も廿五年十二月生れなのです、おたがひにオールドミスになるのが嫌ですわれ、而し心は十八に變らず、ます〳〵お振ひ遊ばして頂戴よ。（福岡後藤文子）

▲紅梅さまの燈火のもと、愈〻出でゝ愈〻面白く拜見いたしましてよ、よんで居て思はず知らずほゝ笑みます、宅では妹たちが皆大さわぎやつて愛讀して居ります。（埼玉芳子）

▲巴港なる百合子樣、わざ〳〵のお尋れ、嬉しう存じます、あのう聖保祿にいらしつた百合樣づて、どなたでいらつしやいましたかしら、私つひ……、おさしつかへなくば何卒次號で御姓名を……、ほんとうにおなつかしう存じます、よどみなく流れし月日の、もうあれからは春秋五度、私只今は此の湖畔に寂しい月日を數へて居ります、函館の方へも昨年の夏歸つてより一度も參りませんが、函館行き上り列車の汽笛をきゝましたつて、別に胸の血じほそゝられるようにも感じませんし、寂しさも、なれましてはねえ、そんなにも思ひませんけれど、逝く秋の湖は實に泣き度い程淋しうございます、彼方の空にはろ〴〵とそびゆる駒嶽も雪白のかんむり、枯木立淋しき島々によする水のひや〳〵と、行く舟人のかちも絶えなむ風情、さらば百合子樣、これを緣にいつまでも（北海道大沼湖畔岡田谷子）

▲私は生れながらに、人一倍高い情操を要求する心を、神樣に與へて頂きました、ものむづく頃から、野と親しみ山を懐かしみ、周圍の事々物々を戀ひ慕ひつゝ、漸々華やかな十八の乙女となりました、だけど從來は戀へど心に足る人なく、叫べど胸に反響する聲がなかつたので、師を求め友を集め、都に憧憬する切なる心故に狂せんとしました、かゝるせつな、神樣は私に求める或ものを與へて下さいました、それは心もさむき年の暮、書店に參じてフット見つかつた小雜誌です、私は衝動りして買つて歸つて讀みました、「無我愛」てふ僅三錢の雜誌です、讀み了るや忽ちにして胸々ははれ、求める處の確信を得て、溫かき靈光に浴しながら、光りと望みの充ちた新玉の年を迎ふることができました、慕はしき天下の諸兄姉樣方よ、日蔭にかくれたる此の妹の喜びをお察し下さいますか、もし同じ涙に咽ばるゝ人もおはせば、お足を千駄ヶ谷の我生活社に運ばれよ、そこの主人公は、にこにこと「人を戀ふる切なり」の眼をもつて、迎へられるでせう、おすゝめ申上ます、もし私の懷かしい感想でもおきゝ下さるとならば、下名までお手紙下さいませ。（山口縣都濃郡久保村久保市木村方岩崎衣）

▲「女の噂」拜見して、記者樣が羨はしうございます、私も「拗れた女」の一人、ずゐぶん悲しい身の上でございますが、同情して下さる方なんぞ一人もございませんの、みんな變り者だの、拗ね者だのといつて、ばかにばかりして……、それにつけても記者樣が相羨はしうございます（牛込にてりよ子）

▲記者樣にお伺ひ申します、本誌の古い增刊の「嫁に行く人」、「書く手紙」、「心の日記」などはもうございませんか、是非見たいのでございます、もし賣切れでしたら、外でどんなにか御都合下さること出來ませんか。（阿波しぐれ女）——もうすつかり賣切れて、何とも致方がありません。

▲君子樣、私も紅梅さまのお筆ぶりを慕つて居る一人ですのよ、一號の、丹塗りの枕かへして……から、手を動かせば白い泡かわれかへつて床の立琴も柱かけの結び柳も、蘇生のやうになつてゆら〳〵となびきさうだ……のあたり、實際に好いのね、文にちつとも厭味がなくつて、おなつかしいわ。（高柳歌子）

▲芝區森初枝樣、米國の末子樣から郵便が屆いて居ますから、當誌友倶樂部掛まで御住所御氏名をお知らせ下さい、郵便物をお送り致しますから。（本欄擔當記者）

▲紅梅さま、いつも〳〵艷麗なお筆のあと、おなつかしう拜見いたして居ります、私ども同窓のうちでは、是非お目にかゝりたいつて渴仰つてる方も澤山ありますの、私、お寫眞だけはごらんに入れてありますけれど……、ほゝゝゝ私を誰とおぼし召して？（跡見にて秋子）

▲新年號大變面白うございました、中でもあの「社會教育新鶏衣」は、幾度も〳〵よみかへしたほどでした。「女優の日記」をお出し遊ばした川上葉子樣、私は女優志望者でございますけ

れど、親々にゆるされず、日々はかない月日を送てゐるものでございます、あれを拜見して、一度をさまつた胸の血汐が、また湧き立つて!!、あゝ私は富も名譽もいりませぬ、弱い乙女の身には、親の心には背かれません、たゞ要々として居りまする、願くばまたあの樣なのをお出し遊ばして下さい、どうぞ切に〳〵。(埼玉濱路子)

▲皆々樣、私し女學世界定期數だけ四十册ばかりあります、名所繪葉書と御交換下さいませんか、又増刊は種々ありますから、御覧に成たい方は、お貸して上げます、どうぞお遠慮なくお知らせ下さい。(茨城縣水戸市上市櫓町三十二太谷松雪女)

▲誌友の皆樣、私も愛讀者の一人です、伊豫の宇和島ではるかに女學世界を友として誌友皆樣の御消息をまつてゐる者です、何卒お見捨なくお交り下さい。(伊豫宇和島露子)

▲内藤樣の「スヰートホリム」に「ホネームーン」は、大變に面白く拜見しました・どうぞこの後もいろ〳〵なのをどし〳〵御發行願ひます。(芝のなでしこ)

▲いよ〳〵櫻花も咲き初める時候となりましたた私は多年本誌を手にして居る者ですが、相變らず御交際を希ひます、又在外の皆々樣も、お懷かしうございます、何卒御靑面なりと下さい。(茨城縣那珂郡神崎村武藤政齋子)

▲記者樣、お尋ね致します、十二月號にて美顏術の御主人のお話し拜見いたしましたが、御住所お知らせ下さい。(長谷にて愛讀者よし子)—京橋區新橋竹川町理容館主遠藤波津子樣です

▲拜啓、亂筆ながら婦人記者樣に一寸お伺ひ致します、扨て十二月一日御發行の女學世界にて拜見致しますれば、禿はげと毛生藥の事が記載されて居ましたが、只今其の藥を頂戴致す事は出來ないでせうか、倘くはしき事を紙上にて御紹介下されば此の上もなき幸福に存じます。(静岡縣榮上郡下城井村原田ゆか子)——右の遠藤樣へお問合下さい

▲繪葉書の交換をお願ひ致します、(高知縣幡多郡宿毛町野村喜久子)

▲在米の西本靜樣や、辻樣、先日中は新聞や美しき繪葉書をお送り下さいまして、厚くお禮申上げます、以後もどうぞよろしく、それから萬村北子樣、御多忙中御手數を お掛け申しまして、何ともお禮の申し樣もございません、當欄にてお禮申上げます、倘ほ本 誌愛 讀の 諸姉樣方、名所繪葉書の御交換をお願ひ致します、絲りに本誌の益々隆盛にならんことを祈り上げます。(函館S N子)

▲東京の諸姉樣にお願ひ致します、私は淺間山麓の、今年十八歳、小學卒業したのみの田舍少女であります、東京に出て行儀見習致したく思ふが手蔓がなくてこまります故、このあはれなる少女を、市内の頁家に小間使なりとお世話下さいまし、お願ひ致します(お世話下さる方は手紙にして下さい)。(長野縣北佐久郡北御牧村四六九番田中さい)

▲昨年某女學校を卒業いたしてから家庭になりますが、何も爲す事がなくつて困つてをります誌友の皆樣のうち、何か適當の内職がございましたら、御紹介下さいませんか。(稍貴)

▲たび〳〵誌友倶樂部へお出じになる後藤文子樣、おなつかしうございます、私も同郡ですわ、どうぞ末長くお交りを願ひます(本郷金光光子)

▲諸姉樣、昨年はいろ〳〵美しき繪葉書を御交換下さいまして、難有うございました、倘今年も相かはらずます〳〵文通繪端書交換を願ひます。(京都市押小路鉄屋町西入安居内船木夢子)

▲諸姉樣、繪葉書の御交換をお願ひ致します、お禮には當市の繪葉書を差上げます、そして横濱市の皆々樣よ、おかはりはございませんか、私の故郷も横濱です。(在米田中千代子、Miss Chiyo Tanaka. 922 Main St. Seattle. Wash. U. S. A.)

▲膽振の女樣、何やらおなつかしうございます、山川農里、膽振の空、此頃は寒むさもきびしうございませう、名にしおうこゝ北海の冬の風、そゞろにあたゝかき都路をば偲ればゝする、貴女は私の住居せる此辺は御存じていらつしやいますの、渡島路……と膽振、同じ北海道の内でございますにれえ、さらば寒むき北風、ずゐ分おいとひなさいまし。(北海道渡島大内はる子)

▲皆樣昨年中はお手紙ありがたうムいました、本年も宜しくお交り願ひます、倘本多みと子樣は、大阪のどちらにお住ひですか、須磨浦、松島、淸見潟、江の島、其他名所地に詩的な御生活遊すお方、又は逆境の樂天家のお文拜見致したう存じます、湖畔、河畔、海濱、山里等、私は繪葉書で見るよりは、歌や文を見て想像するのが樂みなのです。(山形富の奥にて夢鄉露子)

▲皆樣の中に短册に和歌をかいてお惠み下さる方はありませんか(淡路國野島村入七國分光枝)



懸賞組み繪 正解者

高崎　戸田和歌子
大阪　井上しま子
大阪　宮川　高子
福岡　泉　ふく子
福島　金成りつ子
青森　柿崎きさ子
長崎　山本　守七
札幌　西野ゆき子
京都　淺野　晴子
京都　大八木紫名子
宮城　佐藤てる子
北海道　田中たい子
三重　和田のぶ子
高知　小野千鶴子
大阪　湯本千代子

福島　山本美禰子
小石川　井　草子
備後　北村　秀子
山形　富樫よし子
高岡　大菅　幸子
鳥取　寺島　信子
鹿兒島　萩野光　子
長崎　谷口　綾子
鹿兒島　岡田みさを子
京都　山本　敬子
鹿兒島　水間よれ子
群馬　内川きわ子
熊谷　小川君代子
佐世保　矢内とく子
愛媛　高木やす子

島根　福田　嗣子
香川　德永雅枝子
兵庫　肥田鮎以子
東京　岡田ふみよ子
大阪　阪上乙女子
熊本　高向たよ子
山形　神田やう子
富山　堀　うた子
本所　小林　香子
東京　中村しげ子
京都　石本みれ子
近江　市川てつ子
大阪　芝本千壽子
新潟　井上みれ子
牛込　久代あき子

埼玉　青木はま子
豐多摩　乙幡こう子
北海道　村井しゅん子
備後　今谷かよ子
和歌山　柏木　絹子
芝　淺田　錢子
青森　高橋みつゑ子
岐阜　今井こう子
熊本　日高みゑ子
山形　日野利惠子
熊本　金崎もり子
新潟　古澤ふさ子
新潟　小林　靜子
山形　齋藤なみ子
大阪　竹中春江子
石川　芝田つれ子
島根　長井　花子
京都　由良すゑ子
鹿兒島　木下　敏子
佐渡　角坂かつ子
山梨　早川久代子
伊豫　天野とし子
大阪　伊藤　謙子
大阪　松原須惠子
長崎　稻毛登喜子
大阪　吉田はる子
大阪　中谷芳太郎
上道　福田登代子
神戸　大熊きみ子
越後　小出とみ子
鹿兒島　松本喜美子

鹿兒島　青山　澄子
新潟　佐々木みと子
兵庫　宿南　恒子
茨城　栗山千枝子
愛知　津田　愛子
福井　坂田　花子
京都　小菅喜代子
越中　青木　錢子
東京　山本ひで子
水戸　玉川うめ子
鹿兒島　佐々木好子
下谷　今井　藤子
栃木　影山たみ子
山口　鈴木なほ子
相州　和志武喜代子
大分　工藤　綾子
秋田　中村すゑ子
芝　谷本たれ子
宮城　櫻井とく子
山口　津田　鈴子
富山　田中　敏子
上州　桑原その子
橫濱　田島　常一
久留米　國武菊枝子
小樽　坂下粂太郎
福島　齋藤さゝの子
筑前　服部普仁王
但馬　山本まさ子
千葉　小高きよ子
熊本　岡本しげ子
朝鮮　中澤たま子

府下　高橋　孝子
佐賀　吉武　貞子
靜岡　加藤しん子
越後　遠藤ひさ子
山梨　宮野のぶ子
香川　佐野美津枝子
朝鮮　清水もと子
朝鮮　長野ひさ子
山形　阿部　梅子
新潟　岡崎　禎一
福岡　黒岩みち子
長野　黒澤　花子
島根　門脇　菊子
山梨　小松　絫子
新潟　鈴木みち子
山形　松本まつ子
德島　岡島一枝子
鐵嶺　石渡ふじ子
大阪　田中　房子
札幌　松岡　光子
北海道　逢崎　明子
山口　小田あや子
東京　大藪　花子
宮城　工藤ちよの子
淺草　片山　榮子
三池　古町てい子
山口　佐伯よしの子
越後　柳澤とし子
兵庫　難波きくゑ子
大分　石田　秀子
備後　武内　和子

福島　大瀬伊喜子
朝鮮　甲田かつ子
熊本　古田　幸子
栃木　柴山てる子
紀州　島田　吟子
伊豫　宮本　武子
奈良　泉井美沙子
鳥取　萬井八重子
富山　北川よれ子
京都　小田多喜江子
北海道　竹川　定子
青森　鹽澤やゑ子
豐多摩　齋藤やす子
岩代　原澤　孝子
新潟　小柳　篤子
牛込　土屋　久子
青森　泉山　文子
千葉　美神すみれ子
千葉　岡野りやう子
奈良　岩本ます子
福岡　榎本たつゑ子
埼玉　深井さだ子
佐賀　島松とも子
北海道　鈴木こう子
京都　山本とも子
兵庫　野村ひで子
磐城　鈴樹きみ子
千葉　富塚　君子
山口　秋本　朝子
滋賀　野瀬きぬ子
神田　櫻井　綱子

廣島 鏡原きくゑ子
大阪 澁谷 富子
香川 今田 茂子
青森 小野ふみ子
長野 岩下まさよ子
岡山 赤木松枝子
神戸 長谷川澄子
堺 丹波ちえ子
大分 鵜澤とめ子
神奈川 吉原千代子
東京 佐藤そよ子
舞鶴 松田 満子
石川 吉田 鋼
日本橋 早川八重子
土佐 竹田千鶴子
北海道 小田美登子
廣島 八田みわ子
德島 岡しげの子
新潟 不動院克子
東京 大澤 仙子
神奈川 三浦あい子
京都 小西たみ子
山梨 桐林しづ子
神戸須 床たかの子
廣島馬場 うめよ子
熊本 山口よか子
福島 水野きみ子
仙臺 草刈 澈子
京橋 梅澤さだ子
新潟 齋藤きよ子
栃木 齋藤てる子

茨城 茅根きく子
茨城 荒木しづ子
富山 土肥あや子
長野 小穴山まつ子
相模 小菅 種子
靜岡 吉川さゝつ子
金澤 下平 秀子
神戸 平田 清子
京都 藤山ます子
岡山 尾島幾野子
山口 福田 久子
秋田 村上ちあき子
石川 荒尾 近子
長野 南あさを子
福岡 徹 ちよ子
香川 筒井 咲子
岡山 小川 廣
青森 松原千せ子
神田 伊原つる子
長野 古家むら子
本郷 桑田八重子
越前 四本 美子
神戸 吉田 芳子
陸中 八重樫とみ子
靜岡 佐野たれ子
南多摩 今井 澤子
大阪 常見 陸子
廣島 平田たま子
横須賀 飯塚 廷子
東京 鈴木芳江子
山口 岡安きわ子

新潟 石井まゞ一
大阪 藤田とし子
鹿兒島 原口 輝子
德島 宮崎 梅子
福岡 名倉古登子
靜岡 永井 瀧子
山形 寺島かれ子
山形 山口 郁子
兵庫 竹一 靜子
大阪 野村こいの子
大阪 米尾 柳子
神奈川 古西はな子
山形 齋藤みよし子
大阪 中島みさを子
大阪 小山 政子
三重 東 親子
三重 山下ふみ子
奈良 澤邊さわ子
和歌山 久保龜枝子
廣島 岩崎喜代子
京都 松井 花子
新潟 坂井 元子
埼玉 關口靜枝子
埼玉 田實幸枝子
福岡 吉川つる子
愛知 坂部はる子
岐阜 石尾 寧子
大阪 谷 とく子
香川 津本くに子
秋田 楢崎登貴子
兵庫 松村登代子

大阪 赤川よしゑ子
高知 島田 英子
長野 茅野のぶよ子
福島 渡部さく子
下野 石井かず子
京都 鳥田いそ子
横須賀 秋山すゞ子
東京 山田 倉
岡山 渡邊まつ子
靜岡 原崎ふじ江子
長野 青木一枝子
福島 小林つな子
福島 佐藤ゑつ子
京橋 浦島すゑ子
宮城 熊谷まつの子
和歌山 田中 松子
大阪 中 よし子
京都 竹上たま子
宮城 及川ともゑ子
北海道 本田りつ子
千葉 吉岡 安藏
福井 島山まさ子
丹波 藤原すま子
神奈川 大角てる子
前橋 茂木たか子
東京 平林こま子
豐橋 小笠原しも子
廣島 上田靜江子
大阪 柳田 歌子
京橋 岡野屋壽子
兵庫 宇野としゑ子

東京 直塩 弘子
臺灣 藏田つれと子
三重 箕田きみ子
名古屋 水谷照代子
福井 志川たつ子
佐賀 浮須さとみ子
山形 高橋ゑつ子
伊豫 金澤しげ子
牛込 畑 春子
新潟 相原はる子
山形 小貫みつ子
福島 石井なを子
石川 神田すゑ子
茨城 森山はな子
茨城 大谷貴美子
靜岡 山内淑江子
大阪 岡澤 龍子
栃木 天生目千代子
大阪 安井菊江子
麹町 阿久津米子
福井 小林よし子
下谷 寺崎きく子
奈良 坂本 幾子
芝 岡田千枝子
東京 島原 瀧子
東京 小出さい子
青森 野坂しげ子
宮城 神戸はるみ子
前橋 高村藤枝子
越後 大澤しのぶ子
相州 村田 幾子

和歌山 佐武しげ子
名古屋 鈴木 俊子
新潟 池田のぶ子
埼玉 內田かど子
京都 廣瀬とよ子
横濱 岡村さと子
仙臺 本郷 青蘭
但馬 東 いく子
越後 櫻井こと子
尾道 小林 雪子
京都 山本 操子
新潟 瀧見小春子
東京 大石きく子
北海道 度山よしゑ子
東京 星野 照子
新潟 菅屋 寧子
丹波 大辻あい子
石川 保田初榮子
大阪 永田 柳子
大津 西原浜江子
伊勢 水谷たま子
京都 村上小枝子
大阪 三井とよ子
岐阜 阿部 秀子
京都 糸井しな子
西白河 大谷ろく子
兵庫 水田 秀子
本郷 櫻井 綾子
靜岡 太田わか子
岩手 齋藤もと子
仙臺 芳賀次代子

福井 刀根ぬい子
横濱 伊東はる子
奈良 高橋はつゑ子
長野 戸田しげ子
兵庫 西本ゆき子
仙臺 宮城千代子
岐阜 山本さわ子
三重 岡永つぎ子
奈良 五條幼稚園
新潟 吉澤貞忠子
小倉 藤本つる子
越後 森 靜代子
府下 江頭せい子
神奈川 高松 良子
横濱 二宮 正次
大阪 下 糸子
大阪 佐藤 幸子
千葉 沼田 敬子
京橋 高石千代子
山形 西野 龍子
京都 町田 照子
奈良 村尾とみ子
滋賀 岸野千代子
駿河 篠山幹枝子
福井 宮崎 清
京都 田附とみ子
大坂 奥戸米枝子
岐阜 長谷川菊子
東京 眞平ふみ子
東京 大木よね子
深川 波多野松子

下谷　神山とみ子
京橋　向井つれ子
麻布　辻　貞子
横濱　田中政香子
東京　秋田文子
東京　杉浦この子
日本橋　赤井はつ子
本郷　金光みつ子
東京　入田とく子
東京　辻井さゑ子
横濱　宮田鶴子
東京　袴田　榮
東京　垂井英子
伊豫　増田はつ子
泉北郡　山崎美代子
長野　宮澤[illegible]
長野　中島ゑつ子
埼玉　岩田たま子
芝　宮内ひな子
長崎　島谷ゑい子
佐世保　古川しま子
山口　熊野きくよ子
大分　高橋いの子
麻布　松本利子
京都　前田ひで子
茨城　飯島[illegible]子
信州　小川くめ子
山口　高林よれ子
廣島　山崎友代子
佐賀　古賀きん子
靜岡　中山その子
神戸　松岡年子
岩手　庄司乙女子
熊本　有田みどり子
盛岡　高橋かつ子
岩手　上林星子
宮城　杉沼梅子
群馬　原澤美津子
茨城　西島とく子
新潟　植平しん子
廣島　元山まつ子
佐世保　吉川秀子
鹿兒島　内山文子
本郷　大橋雨月
山口　岡崎しの子
福岡　金川時子
熊本　有働丸子
東京　藤井みつ子
大阪　小西うた子
兵庫　馬島太郎
栃木　石橋くに子
長野　飯田ひさじ子
山形　遠藤きち子
信濃　田中みち子
牛込　根本千代子
福島　阿部こま子
朝鮮　岡本文子
本郷　田代貞子
金澤　竹田せん子
近江　安井靜枝子
信州　藤田すい子
奈良　河合一子
熊本　吉村まさめ子
島根　遠藤春代子
群馬　藤倉うめ子
長崎　佐藤わき子
奈良　島田きよ子
函館　小野まさ子
新潟　佐藤よれ子
千葉　陸山千代子
大分　木村咲子
三河　植谷もとえ子
秋田　稲井たき子
大阪　橋本信子
宮城　片倉かげ子
大阪　水越巳作
大阪　[illegible]のぶ子
宮城　阿部ゑい子
久留米　飯沼千鶴子
長野　矢島喜子
愛媛　越智しげよ子
大阪　井原しげ子
仙臺　村上千代子
栃木　金戸君代子
群馬　今泉糸子
岡山　鹽田英子
大阪　森岡よれ子
徳島　今田照美子
岡山　山本たに子
香川　眞鍋たれ子
青森　竹内しづ江子
近江　圓内いと子
青森　角鹿はな子
山口　中村まつ子
東京　島澤八重子
兵庫　野村久子
廣島　丸山美代子
大阪　中西登久江子
伊豫　松河春子
靜岡　田坂智興子
大阪　三根あやめ子
愛知　山田歌滿子
三重　多田すみ子
香川　大川とよ子
神奈川　齋藤靜子
長野　關口芳枝子
長野　小池せい子
三重　世古ちづ子
富山　松原一枝子
小石川　川雨綱太郎
三重　小田みさ子
埼玉　細井さか子
東京　林　きく子
牛込　岩重正人
千葉　尾野喜久子
府下　龜井香子
近江　備前壽枝子
横濱　山本秀子
栃木　荒井ます子
富山　中居みよ子
甲府　福井花子
大阪　佐納房子
米澤　梅村みゑ子
三重　山中春水
埼玉　坂田恒子
長野　武居絢子
京橋　川村里子
越後　服部ひさ子
新潟　宮　てる子
福島　水野せい子
京都　小林民子
長野　平林おとめ子
栃木　丸山鍵子
越後　清水靜子
愛知　鈴木うら子
東京　野田花子
長野　宮坂はる子
愛知　平岡まち子
東京　稲田登代子
横須賀　塚部清子
府下　川島くに子
靜岡　は　な子
日本橋　山木こう子
下谷　長谷川うめ子
芝　長井靜子
相州　鎌田みつ子
東京　近藤　眞
横濱　福田みほ子
靜岡　矢部とみ子
濱松　松本ひろ子
東京　細谷もゝよ子
東京　鹽野きみ子
長野　小口壽榮惠子
横濱　磯田　保
東京　市川あい子
芝　上林はま子
横濱　三浦いく子
栃木　中島まさ子
東京　清水松枝子
横濱　加藤よれ子
東京　小田川まつ子
小石川　山口千咲子
横濱　波多野禮子
靜岡　志田てい子
芝　星野きん子
横濱　淀川しま子
東京　阿部はな子
東京　井出　菜
横濱　三宅晴子
靜岡　武光勇子
三重　二宮照子
神奈川　松元愛子
東京　大原勢支子
東京　杉村妙子
千葉　吉野濟子
磐城　水町とく子
靜岡　[illegible]さと子
大阪　谷口靜子
大阪　山田利治
福島　渡邊しづ子
長野　州澤千代江子
東京　弓削義子
京都　松井鶴年
岐阜　渡邊きた子
兵庫　いわ子
名古屋　原　芳子
宇都宮　石川さた子
東京　藤井千鶴子
津市　田野春子
大阪　木原よれ子
麻布　八谷文子
愛知　平石矢枝子
東京　工藤かつよ子
大阪　瀬川とみ子
東京　神翁春子
京橋　横田隆子
伊勢　松技ひさへ子
靜岡　甲賀みれ子
名古屋　杉本たづ子
松本　淺川ますみ子
埼玉　野口せい子
群馬　清水かなへ子
越後　中村きん子
同　中村警部
日本橋　龜川ひさ子
大阪　向井愛子
群馬　阿部いせ子
仙臺　綿引綾子
岡山　高田育枝子
靜岡　鈴木咲江子
大阪　田中きくゑ子
清國　岡口すゞ子
大和　豐田むめ子
北海道　菊池きよ子
埼玉　飯野八重穂子
東京　山田その子
福島　五十嵐保つ子

青森 佐藤てる子
大阪 中井みい子
東京 篠崎八重子
秋田 虻川とみ子
芝 多女朝常子
北海道 加藤とも子
島根 渡邊ゆき子
福岡 濱生すゞ子
丹後 濱見 芳子
大阪 伴 幹子
京都 青山美代子
兵庫 岡本いく子
朝鮮 佐野千代乃子
島根 伊藤 貞子
横濱 三島てる子
神戸 西石よれ子
石狩 仲倉芳野子
長野 森下きぬ子
茨城 金成多仁子
栃木 楡井とき子
德島 坂口あさ子
愛媛 津野 芳子
大阪 鹿島 信子
小倉 岡本靜江子
兵庫 横田ふさ子
對州 石渡千代子
福岡 吉田かす子
門司 松尾のぶ子
岡山 藤巻 穎子
岡山 楠原 光子
山形 酒井 淑子

千葉 猪狩みつ子
山口 國本よし子
愛媛 上田きみ子
群馬 林あぐり子
東京 淺沼みつ子
福島 冠木 悦子
東京 森川美代子
愛媛 入東 濱子
岡山 中塚吉惠子
小樽 原田たま子
新潟 青木 重子
三重 平原かず子
宮崎 長友すなを子
靜岡 川村すて子
靜岡 石井つる子
愛知 水野 宋子
富山 増田 睦子
靜岡 多賀谷艶子
東京 神尾きたえ子
東京 中尾いと子
北海道 新田 政子
横濱 藤本ます子
兵庫 福島久代子
福島 鈴木 光子
佐賀 山下しず子
愛知 岡田兵太郎
山形 上田 實
大阪 青山ため子
千葉 前島久眞子
岡山 赤澤 輝子
滋賀 水江いち子

神奈川 須原とし子
京都 稲波八重子
茨城 小池ため子
京都 前川てい子
廣島 井上樺代子
群馬 浦野あい子
神戸 藤田 雄子
長崎 ミツスタリベ
神田 稲井すゞ子
名古屋 鵜飼 華子
東京 田那村きく子
名古屋 萬茂内店 宗治
金澤 小杉みどり子
香川 中納 明子
京都 北澤くに子
小石川 土田八重子
大阪 南條 君子
千葉 薦田なか子
群馬 石坂 絹子
栃木 島田いう子
保土ヶ谷 木下眞子
熊本 右田松枝子
麴町 井門すえ子
東京 田村せん子
東京 湯川 富子
大阪 淺井 敏子
岐阜 今村きん子
鹿兒島 伊福かをる子
千葉 藤平喜代子
新潟 村山きた子
新潟 村山しい子

兵庫 高井喜代子
朝鮮 藤波 肇
長野 市川たか子
佐賀 曾我ふみ子
神奈川 奥村 都子
廣島 野津 傳
山梨 角田しちの子
廣島 柴原かず子
新潟 小柳きよの子
北海道 石岡りよ子
姬路 竹峰 信子
長野 宮崎なりか子
越後 石川しのぶ子
字山田 富澤しか子
秋田 竹内きよえ子
山形 服部 正子
茨城 木村まわ子
神戸 井上 [illegible]
備後 笠井 恒子
神戸 金谷 愛子
鳥取 石井 松子
埼玉 鈴木とら子
武州 佐藤さだ子
信州 小林いく子
山口 林 てる子
大阪 西田菊江子
滋賀 北川 峰子
秋田 鷲谷はるえ子
東京 松本きわ子
濱松 河村しの子
岐阜 [illegible] 寛子

福岡 柴崎千代子
宮城 齋藤ふみの子
横須賀 氏家 清子
大阪 中埜 清子
山形 白崎八重子
滋賀 布村くに子
名古屋 早川その子
函館 藤本鳥羽子
山形 平澤つる子
北品川 守田 實子
京都 奥野ふで子
兵庫 上原安代子
東京 美馬いさの子
金澤 鷲島くれは
奈良 井岡 初子
高知 山本 文子
京都 丸岡つる子
和歌山 朝岡とみ子
福島 栃木 國子
福島 山口つい子
三重 永口れい子
青森 今井のぶ子
神戸 西本 信子
福島 一條せつ子
東京 長屋 米子
東京 市丸なを子
埼玉 村松くに子
兵庫 木原ふみ子
埼玉 細沼ひで子
和歌山 榎本香鶴子
小倉 香坂惠美子

岡山 立石午房智子
大阪 杉本 立子
大阪 中山 嘉子
神戸 眞殿 房子
長野 平島 邦子
茨城 鈴木しと子
新潟 新井 惠子
鳥取 喜多村きく子
富山 黒崎よし子
山口 實船 君子
鳥取 森 つる子
群馬 高平ます子
山口 吉田かれ子
佐賀 塘 ます子
鹿兒島 西村 孝子
長野 井出たけ子
兵庫 龜井靜江子
伊豫 渡邊 梅子
愛媛 日野もり子
富山 佐々木きく子
門司 司城 鶴松
埼玉 竹越まつ子
長野 加納 初子
宮崎 柴田つれ子
長崎 福田とら子
宮崎 新藤 靜子
朝鮮 湯澤きくの子
朝鮮 丸山 榮子
朝鮮 栗林不老子
富山 奥田 宣子
廣島 清水 濱子

富山 齋藤つと子
石川 鹽林 榮
朝鮮 岸田 直子
山梨 一之瀬登茂代
豐多摩 吉井 桂子
神奈川 磯部とよ子
熊本 日高みき子
青森 永井ひさ子
朝鮮 佐藤千代子
福岡 澤田しげ子
佐賀 東島さだ子
近江 柴田ゆきえ
福島 宮澤みち子
大阪 佐野 幸子
三河 磯村 錠子
赤坂 梅田たつ子
宇都宮 中塚たけ子
府下 小倉よれ子
大阪 小林 鈴子
佐賀 陣内すま子
朝鮮 河内なつ子
福井 梅田 貞子
德島 佐藤よしの子
富山 油谷しげ子
越後 東樹 誉子
靜岡 村上とみ子
福岡 石橋はぎの子
靜岡 諸富しな子
門司 唯岡 峰子
秋田 渡邊登美子
高松 岩永まさ子

名古屋縣宮　國子
栃木　加藤　梅子
秋田小野崎ふみ子
廣島　井關　國子
山口　島田ふじ子
大分　大森すゞむ
石川　松下菊枝子
東京　津田　慶子
石川　竿谷　花子
和歌山篠原しげ子
福岡　神崎　秀子
大分　伊東　友子
茨城　篠原　美子
横須賀松田ふみ子
仙臺南條ときえ子
信州　小澤　富子
清國　横田喜枝子
東京　鈴木　はつ
淺草　岸　すゑ子
横濱　平澤　花子
荏原郡森島久仁子
神田　　　　靜子
山口　風井いわ子
新潟　志賀まつ子
大分　門多　春子
廣島　井上ちせ子
宇治山田森山　房子
高田　伊勢智惠子
弘前　小林とし子
新潟　山本うた子
佐世保花木いの子

新潟　外山いつ子
茨城　高島しん子
愛媛　桑折　鶴子
高知　森本　榮子
大阪　泉本とく子
仙臺　青木　澤子
東京　小林　鶴子
福島　鈴木ゆう子
山口　柳屋あい子
和歌山金崎久枝子
山梨古屋かのえ子
神奈川渡邊久野子
長崎　白山　政子
岡山　中塚時代子
山形　高橋みな子
廣島　西原　糸子
神戸　瀬合きよ子
佐賀　山中不美子
牛込　高木登代子
大阪　山崎とよ子
福井　神野きく子
愛媛　川合つれ子
富山　藤原田鶴子
兵庫　小林　玉子
北海道遠藤　秀子
朝鮮　牛坂　君子
鳥取　手島　定子
赤坂　靜　知代子
本郷　中野しげ子
福島　山田　梅子
茨城　倭　たみ子

北海道三上きわ子
愛知　前野　房子
北海道出口その子
東京　伊藤ます子
芝區　水橋　梅子
和歌山西野　蕭子
麹町　内海喜代子
青山　清原とみ子
佐賀　大石ゆき子
山形　今野きよ子
甲府　野中ふみ子
福島　石岡喜代子
山口　小林　梅子
朝鮮　鹿野　若子
芝　久保春枝子
京都　小原たみ子
姫路　柴田初枝子
茨城　山上まつ子
福岡　森　松代子
山形　中野　靜子
栃木　山中みよ子
福岡　前田千代子
滋賀　横田きい子
徳島　櫻原サト子
北海道寺田みつ子
越後　和泉のぶ子
青森齋藤まつの子
金澤　金子とめ子
岩手　和田すま子
伊豫　渡邊はな子
栃木　吉澤ふで子

神戸　伽　　若子
大阪　濱崎ちえ子
神奈川原田　幸子
青森松本富士野子
長野大塚みよし子
愛知加藤すゑの子
福岡　若山　卯月
長野　小出　保中
岡山　森　龜代子
岡山　能登喜代子
長崎西國ひでよ子
大阪　矢上てる子
新潟　赤沼　節子
赤坂　鈴木眞咲子
栃木　石川富貴子
青森　中尾　弘子
岡山森本千代野子
山梨　樋口安枝子
和歌山津村いその子
奈良　笹岡りえ子
石川　赤瀬あや子
神戸　辻山　靜子
本郷　木村きく子
山口　山城のぶ子
横濱　一圓　都子
神戸清水ゆたか子
福井柴田ときゑ子
高松　筒井たか子
山口　吉賀とし子
靜岡　前野美代子
富山　桑島喜代子

大阪　原　靜代子
滋賀　高橋　房子
福井　坪川　貞子
長野濱口たかの子
京都　矢野松枝子
青森　菊池かつ子
大阪有澤いさみ子
栃木　大澤　貞子
兵庫　中安小寧子
千葉　織田　靜子
福島　吉田しげ子
麻布　井管きよ子
新潟　高井　幸子
靜岡　本木たけ子
滋賀　木村ます子
越前　岩崎つれ子
函館　村上千代子
大阪　清水　朝子
愛知　平賀のぶ子
岡山出雲井たつ子
奈良　神田きく子
大阪　仲谷たれ子
香川　蓮井　靜子
奈良十楚はるゑ子
靜岡　駒形せん子
神戸　石田ふみ子
茨城　櫻村　義子
播磨　沼田瀧久子
山口　國司　儀子
久留米濱江たつゑ子
愛媛　林はるか子

大阪　長尾　龍子
茨城　大里　時一
秋田　吉田つぎ子
山形　杉浦きつ子
岐阜　安江たゞ子
京都大槻しげの子
青森　三橋しげ子
愛知　津金　文子
熊本川添まつゑ子
愛知　吉田千代子
宮崎長谷川佐田子
北海道保苅いし子
函館　田本　靜子
福岡　永添すみ子
茨城　石井八重子
宮城　黒澤きく子
香川　森重　信子
新潟　稲田のぶ子
東京　小松ます子
兵庫　米盛　久子
三重縣黒川こむら子
新潟　鷲澤せつ子
北海道長部須賀子
茨城　綿引道江子
清國　板谷たが子
岡山　西山春野子
東京　阿部　晴子
大阪　小林けい子
朝鮮宇都宮喜代子
福井　牧野　榮子
岐阜　平松　秀子

宮崎　野崎　光子
廣島　佐藤まし子
福岡　神崎はな子
山形　加藤ちよ子
靜岡　手塚千佐子
長野　中山しげる
北海道高橋千代子
青森　太田千代子
奈良　名井　幸子
京都　丸岡　文子
福島　安齋ひろ子
京都　三宅　俊子
山口　横山岩代子
福岡青木まつゑ子
徳島　西岡　滋子
東京　石田てい子
東京　瀧澤千代子
千葉　飯倉あい子
滋賀　馬場千代子
岐阜　可兒てる子
東京　貸井はる子
三重日紫喜たづゑ子
赤坂　田中辰江子
京都　中澤あい子
相州　金子竹代子
神戸　神谷富美子
鳥取　蒔田熙喜子
佐賀　古賀わか子
千葉　岩田けい子
大阪　並木けい子
愛媛　棚橋　民子

伊勢 瀬田しげ子
神戸 野尻眞佐子
山形 西川 津子
新潟佐久間やす子
下野 宇津木玉子
小樽 拓植とき子
函館來往野せい子
香川藤村すがゑ子
福井 桑原くに子
福岡 池田こと子
佐賀 片田きよ子
青森 齋藤あい子
北海道西村 恭子
岩手 新沼けい子
兵庫釜田あさの子
岡山 玉井ゆき子
大阪 佐治しう子
麻布 加納夏江子
富山 石尾しづ子
岐阜 日置ちよ子
石見 八島きみ子
岩手 牧野文江子
宮城島山としの子
愛知 森 とめ子
東京 森 英子
牛込 品川 傳子
仙臺佐藤とくゑ子
横濱 秋田 富子
北海道長谷川太郎
大分 小坂いち子
秋田 梶川 正

北海道長尾いれ子
茨城 塚田そう子
陸中 濟野こう子
陸前 關 よし子
新潟 竹前百合子
新潟 會田ちゆ子
長野 關 篤子
山形 足立みれ子
福島大河原ふくよ子
東京 大木たま子
金澤 越野菊枝子
北海道田中ひえい子
大分 岩田 文子
京都山本ひさゑひ
下谷 岩本敬太郎
京都 楢崎松枝子
赤坂 小幡 柳子
東京 鶴岡その子
福岡 武藤しげ子
島根 吉岡 薫子
京都 横山喜代子
香川 冬野 雪子
埼玉 田島つれ子
新潟田中ことみ子
石川 西澤久乃子
東京上野よしの子
神田 田中はろ子
和歌山伊藤 靜子
山形 中井 靜子
伊豫 竹本晴代子
岡山 中島熊野子

兵庫 田澤 易子
滋賀片山きくの子
滋賀 吉田ゆき子
靜岡 鈴木やす子
岩手 萩谷 松子
北海道濱野 竹子
青森長谷川のり子
長野 青木たつ子
北海道眞田添壽子
青森 秋元紅葉子
鹿兒島山下とよ子
大阪 桐山てい子
長野羽生きの枝子
大分高木ますみ子
千葉渡邊りやう子
大阪野村ふみゑ子
舞鶴 土井かず子
伊豫 三浦 若葉
新潟 金子いと子
新潟 林 きわ子
横濱 大川ちか子
長岡 佐久目雪子
大阪 奥田萩乃子
鹿兒島折田あい子
宮崎 宮内ふく子
朝鮮 堀口智惠子
山梨 木村美代子
福島佐々木ばん子
山梨神宮司りいの子
愛知 青山はつ子
新潟 たかれ

豊後 林 綠子
福島 山口せい子
石川 佐々木直子
東京 須田はる子
富山 渡邊千代子
兵庫 桑田 輝の
名古屋小島ますの子
長野松井いそじ子
岐阜 石田はつ子
秋田 石田せつ子
新潟 中澤よし子
山形 阿部よし子
奈良 中野玉枝子
兵庫 村田せつ子
埼玉 長島ふみ子
東京竹中ふたみ子
青森 藤田政枝子
福島 三橋ふさ子
福島 佐藤ふき子
大分 織田市三郎
愛媛 佐賀 逸子
京都 栗野ゆく子
埼玉 齋藤はる子
三重 安藤 芳子
大阪 小林とみ子
上毛淵本はぎの子
新潟 飯原はつ子
朝鮮 淺田ちか子
大阪 矢上 君子
群馬 須東美知野
石川 井津富士子

麻布 天野 露子
京都 金田德久子
兵庫 大川つや子
釜山 森田すみ子
但馬 淀とみゑ子
山口 吉富むれ子
大阪 神山 妙子
茨城 金塚千代子
神奈川島本うた子
芝 時田 廣治
愛媛 高橋 愛子
北海道細谷こと子
山梨丸茂よそじ子
北豐島久保 菊子
丹後 片山森榮子
愛知 野口 露子
丹波 柏原とき子
山口山本みさを子
山口 都築 濱子
山口 原田きよ子
新潟 關 溪文子
新潟 風間 秀子
近江 小泉 眞子
石川 上濱とき子
長野 田中よし子
長崎 村川ます子
鹿兒島中原靜枝子
朝鮮 中西すゑ子
東京 兒島 德子
福井 木下 道子
秋田 高橋松枝子

兵庫王子としえ子
函館 中村しづ子
宮城 若生しげ子
長野 宮澤ゑい子
新潟 林 まさ子
丹波 吉田たれ子
山形 酒井せい子
岐阜 樋口てふ子
埼玉 中野きみ子
福島 澁谷啓之助
大分 加島はる子
千葉 伊東兼代子
下關 高橋きし子
山口 岩倉 律子
東京 坂入 敏子
名古屋瀨尾 秋子
京都 中島小鶴子
府下 市原 敏子
靜岡太田までを子
和歌山市來 瑠子
北海道花里十夜子
德島 中村かつ子
四日市島井ひさ子
新潟阿部ふさほ子
茨城 今川 圓子
秋田 小貫まつ子
淺草 天野 秀子
新潟 村田りい子
埼玉 森田その子
北豐島八木 靜子
東京 前代 英子

市谷大河野きみ子
群馬 根岸はる子
清國 淺野八重子
德島 池田とよ子
備後 安原 辰子
門司 權藤 仙子
牛込 近藤 錠子
和歌山諏訪 玉子
廣島 福田 克子
朝鮮 薗田 常子
埼玉 新井 惠子
群馬 宮崎さと子
信州 藤森かる子
臺灣 櫻井ぬい子
茨城 吉濱ふみ子
鳥取 原 すか子
大阪 片山たり子
山梨笹本いその子
越後 江口ふじ子
宮城長野千代世子
仙臺 井澤つれ子
北海道宇部 肇子
新潟 宮村きく子
京都 伊東 芳子
神戸 鎌田すみ子
仙臺 岡澤つれ子
函館 五十嵐三郎
佐賀 辻 とも子
鹿兒島川邊しの子
群馬井田やすの子
大阪 寶作 歌子

島根　柴田千代子
香川　坂東つるえ子
石川　徳久多津子
京都　藤村さき子
兵庫　山門ひさゑ子
赤坂　河原　町子
山口　森田なつ子
赤坂　石原いつ子
日向　伊東美代子
北海道　中野ぬい子
越後　柳橋いう子
新潟　渡邊やす子
兵庫　鈴木しなり子
木更津　竹内たか子
長野　伊藤とらじ子
秋田　須貝やす子
三重　田中うめ子
神田　角田　愛子
山口　前田　椿子
岡山　綠堀　花子
長野　原野つまゑ子
京都　横田みつゑ子
佐賀　香田まき子
朝鮮　村井　貞子
福岡　新枝　鏈子
石川　桑山　里子
伊勢　田鶴浦かなゑ子
長崎　福田けん子
東京　小野澤道子
廣島　野瀬　政子
群馬　新井いさ子

埼玉　椎名みき子
陸中　高橋ときゞ子
牛込　鍋島　満子
千葉　茌桐いと子
島根　佐々木たせ子
長崎　山口　綾子
山梨　内田　重子
埼玉　中村はる子
大阪　三木たれ子
大阪　塚口つた子
徳島　前田　國光
但馬　藤尾　倩子
福島　佐藤きよ子
函館　若山てる子
岐阜　早瀬しづ子
福井　加藤　愛子
宮城　馬場たま子
金澤　柚田兎久子
徳島　沖　つる子
徳島　小出　内子
福島　大塚きくい子
小樽　三輪崎貞子
愛知　松本ひろし
徳島　伊丹　春子
北海道　小林じょう子
京都　和田とく子
滋賀　立岩とみ子
北海道　日下愛枝子
駿河　松本ます子
金澤　西尾千枝子
函館　北守　濱子

金澤　井上　悌子
甲府　龜山きよ子
東京　江田なみ子
京都　藤田　咲子
伊勢　一柳　冬子
山形　今野はなゑ子
愛知　山内　敏子
長崎　小西さと子
尾張　丸井ひで子
愛知　水谷靜枝子
門司　豐島てか子
青森　柿崎靜枝子
長野　稻生さよ子
長崎　菊池由紀子
大阪　橋本貞枝子
神戸　播井　秋子
佐賀　岩楢ちゑ子
長崎　白須すゑの子
能登　若山外美子
大分　深草　敏子
佐賀　金崎　春子
千葉　石塚　照子
小倉　上田その子
兵庫　久代とわ子
和歌山　出雄千代子
埼玉　齋藤かつ子
廣島　岩瀬しげ子
福島　古生　撰子
大阪　眞西千代子
鳥取　加藤　絹子
福井　大橋こまつ子

新潟　佐々木ゑつ子
茨城　和田穂乃子
熊本　伊津野はな子
北海道　木塚みち子
大阪　黒田、武夫
越後　西澤りよ子
靜岡　清水あい子
大阪　鷲見、品子
新潟　鈴木喜代子
山形　林　黃金子
福岡　西見よしよ子
東京　望月はる子
兵庫　久下八重子
靜岡　鈴木　袖子
長野　瀧澤まさ子
滋賀　吉岡　榮子
靜岡　安達　鶴子
岐阜　加藤きん子
陸中　横川　律子
備後　猪原あつ子
京都　吉永　敏子
愛媛　森田こと子
福島　三宅　晴子
秋田　藤井もよ子
山口　秋田きみ子
鹿兒島　坂本みや子
山口　松浦　雪子
横濱　山本　久子
茨城　秋田　仁郎
山形　相馬とくえ子
岩手　鈴木いせ子

北海道　金子すみゑ子
東京　増田よれ子
愛媛　矢野　靜子
下谷　鈴木きぬ子
石見　中村八千代子
鳥取　岩谷ふみ子
相州　相川てる子
長野　川井うめ子
和歌山　川口　時子
陸奥　佐藤てつ子
臺灣　萬羽りえ子
徳島　天野その子
栃木　瀬尾とき子
福岡　調ちよの子
兵庫　妹尾かめの子
島根　大島　友子
三重　猪野ひで子
山形　佐藤　繁子
敦賀　小名よれ子
臺灣　國生富枝子
新潟　濱口みれ子
盛岡　中河原きん子
名古屋　加藤　寅吉
芝　鷲山りん子
福島　平川春野子
北海道　中川のぶ子
埼玉　松島とみ子
大連　利田ちよ子
三重　長崎みさを子
下谷　松岡ちよ子
京都　岩崎きみ子

清國一河嶋まつ子
京都　大木すえ子
大津　鈴木みさを子
尾張　大野たまゑ子
越後　茂原　愛子
北海道　山浦とき子
島根　河野　茂子
群馬　依田しげ子
岡山　東原美晴子
臺北　伊藤　輝子
臺灣　今村つる子
備中　山本春江子
東京　上野けい子
北豐島　海寶屋壽子
府下　車谷とれ子
臺灣　庭井日出子
沖繩　岡崎すま子
東京　鈴木くに子
福岡　樋口ひろ子
東京　大庭まつ子
群馬　藤巻きく子
臺北　堀内　裕子
島根　板木よし子
尾張　磯村きむ子
後志　永山とよ子
北海道　志摩ふじの子
京都　藤本きく子
山形　中川　顯子
兵庫　小林すえ子
山梨　長坂まさ子
東京　市口きよ子

東京　青山、政子
神田　奥平　一子
清國　富永はん子
清國　芦田まつえ子
神戸　熊澤きぬ子
佐賀　木塚なつ子
東京　有田　和吉
岩手　國分たか子
遼陽　増谷千代子
神戸　杉谷喜代子
長野　中山靜代子
隱岐　田口文世子
臺北　矢野　春子
沖繩　與那原かみ子
鳥取　海津　幸子
神戸　白井たづ子
北海道　井口元枝子
前橋　田原、誠
長野　金子えつ子
山梨　土屋　俊子
千葉　小笠原とし子
朝鮮　瀧下とよ子
新潟　猪　寅
濱松　太田よしえ子
北海道　坂下　春子
千葉　堀　さだ子
栃木　釜井かい子
山口　尾儀まつ代子
鹿兒島　若松いと子
越後　野澤　濱子
福岡　中根多賀子

北海道 畑 都子
日向 南村 光子
静岡 水多たま子
長崎 中原喜久子
本郷 森 こま子
赤坂 大隅 孝子
鳥取 伊藤 光子
熊本 志賀よしえ子
石川 西田りつ子
長野 原 瀧枝子
金澤 岡野つれ子
麹町 持田おと子
東京 藤澤菊枝子
能登 森 やえ子
愛媛 竹田靜枝子
兵庫 松葉 芳子
日向 小田いま子
鳥取 牧野 恭子
千葉 鈴木 品子
徳島 阿部まさえ子
名古屋 安藤きぬ子
静岡 池谷 一郎
小石川 津村八重子
京都 渡邊くにえ子
東京 谷 秀野子
静岡 小花りん子
臺灣 芳澤あやめ子
山形 堀 千代子
愛媛 和田 淑子
富山 澤泉 英子
杉本 內川てる子

岡山 牧野 幸子
山形 海沼とめ子
京都 小杉しげ子
秋田 菅生いよ子
新潟 倉田文枝子
千駄谷 山本 鈴子
富山 飯島こと子
静岡 鈴木なを子
横須賀 玉 子
福岡 金子いま子
新潟 佐々木東子
廣島 立石 順子
北海道 蘇養 ゆき
静岡 中川ふく子
石川 瀨戸みか子
石川 多島下枝子
山梨 佐野とし子
山口 嘉納さと子
常盤 安藤 政子
東京 河邊 初子
神戸 平瀬つる子
山梨 平井たか子
京都 藤安とめ子
滋賀 山村たつ子
京都 林 まさ子
京都 岡村とめ子
和歌山 伊野かれ子
朝鮮 大久保冬子
廣島 小川 幾子
大阪 平尾 眞子
愛媛 淑上きく子

前橋 栗原なを子
臺灣 宮崎すて子
大阪 守柚 琴子
兵庫笠原 あやめ子
島根 山根垣衣子
兵庫 天方美智子
愛媛 菊池 芳子
宮崎 有川 欽子
朝鮮 濱田とき子
福岡 佐野かく子
愛媛 田中あいよ子
岡山 高田まさを子
本郷 下田みつ子
福岡・北崎 安子
福岡 坂本佐香松
廣島 佐々木高子
山口 木村 花子
愛知 上野かく子
宮城 佐藤さだよ子
群馬 近藤のぶ子
大阪 山田 政孔
奈良 吉田康代子
千葉 岡田たみ子
愛知 酒井 愛子
姫路 水川すぎ子
日本橋 大津賀 稲
廣島 横山まき子
横濱 宇佐美貞子
兵庫 豐島きよ子
新潟 川崎きく子
群馬 廣瀬壽美子

富山 桑田規矩子
福岡 水野なか子
大阪 川邊 芳子
石川 龍澤富野子
奈良 池澤 文子
豐多摩 藤野 正子
長野 濱口賀千代子
但馬 西村菊枝子
高田村 山まこと子
千葉 島田つね子
大阪 鹽川つる子
長野刈 岡ちとせ子
島根 勝部まつの子
熊本 小山 竹子
山梨 富田富司子
宮城 結城せい子
佐賀 長尾ひさ子
長野 小峰やす子
東京 高橋治枝子
大阪 岩佐千代子
大阪 摩 花
山口 內藤 秀子
熊本 宮崎しな子
大阪 龜岡やす子
長野 岡部さい子
埼玉 淵 みす子
秋田 鈴見ひさ子
横濱 青木きん子
千葉 吉田又次郎
千葉 伊藤 忠子
神奈川 古川たみ子

日向 川名ひで子
北海道 宮永喜代子
廣島 安藤とみよ子
神田 細田けい子
甲府 雨宮かくの子
大分 黒木しづ子
三重 正司ゆき子
青山 和田 睦子
岐阜 日野 豐子
大分 笠置しか子
近江 樹下喜久枝子
大阪 岸本美加子
福井 大崎きみ子
山口 岡崎 米子
山口 吉光千代子
府下 高居 信子
三重 山本きん子
高知 吉松みつ子
新潟 上杉きく子
大分 山下晴江子
長野 小島喜代吉
和歌山 橋本ぬい子
東京 齋藤 恒子
横濱 渡邊とら子
福岡 田中美喜子
群馬 栗原うめ子
岡山惣 津登美代子
朝鮮 岡山 濱子
小石川 今泉 松子
横濱 岡崎かく子
新潟 金子まき子

福岡 和田れん子
和歌山 岡本登美子
淺草 石崎まつ子
埼玉 岡部ひさ子
埼玉 貫井 辰子
神戸 佐藤 鐵次
大分 高瀬たつ子
臺灣 吉川みゆき子
牛込 綾部 桂子
石川 池田千代子
横須賀 相川すゞ子
山口 金子あい子
徳島 神田かつみ子
岩手 佐藤 耐子
島根 小倉 仙子
石川 寺島みゆき子
朝鮮 谷口とよゑ子
愛媛 伊藤つや子
神奈川 矢島謙次郎
和歌山 玉井小千代
四谷 吉田 信子
長野 五味はつの子
朝鮮 吹拔觀四郎
熊本 佐久間秀子
岐阜 原 かす子
福岡 今成くま子
静岡 鈴木えい子
神戸 田丸ちゑ子
長崎 永見しづ子
朝鮮 石川直代子
山口 田村きよ子

麹町 片田とよ子
茨城 白勢ふみ子
廣島 村上 幾子
廣島 原田 實
小石川 槙木 英子
富山 板谷千代子
臺灣 伊藤 花子
佐賀 印具 鈺子
京橋 成井みつ子
羽後 加藤みよゑ子
京都 渡邊とめ子
山口 浦きくゑ子
佐賀 副島美登子
島根 山本 寅子
福岡 織田きよの子
陸中 伊藤たか子
山口 友廣きぬ子
新潟 菅ちまつ子
福岡 牧野 織子
新潟 酒井 柳子
栃木 佐藤ふみ子
兵庫 田中千代子
廣島 村上ふみ子
日本橋 岡島かれ子
大阪 神田のぶを子
奈良 駒井とみ子
丹波 渡邊はな子
福井 木下いし子
山梨 丸茂八代子
奈良 森本八重子
愛媛 久米春野子

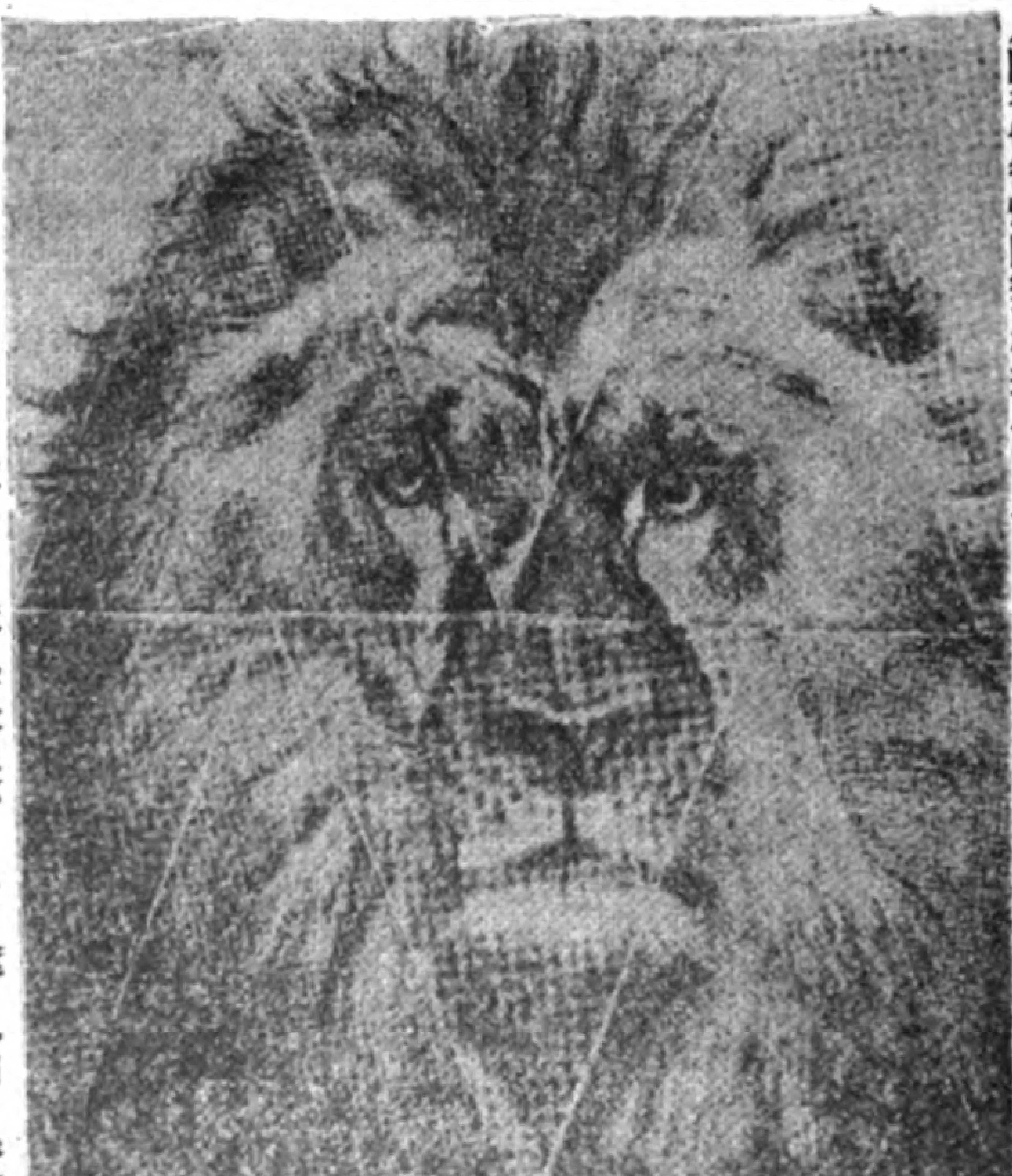
牛込 黒川しづ子
茨城 木村わい子
山形 高橋ちよ子
埼玉 村野まさ子
大和 福谷せい子
栃木 國井 芳子
長崎 中島とみ子
新潟 神谷とも子
山形 伊藤えう子
府下 近野こと子
下關 杉山 愛子
山形 佐藤いわ子
淸國山田はじめ子
播州 廣野ゑつ子
廣島 川口 [illegible]子
新潟 高橋きみ子
大阪 加藤都兵衛
秋田 大坂兼代子
下野 吉岡つれ子
熊本 中原きゆ子
大阪 才木 倚子
本郷 近藤はま子
米澤金澤みよし子
石川 岩城ちよ子
新潟 蕪木 靜子
佐世保幡野 秀子
東京 熊田てる子
岡山 森 茂子
島根 永松 榮子
岡山難波はるよ子
千葉 中川 君子

岩代 櫻木とみ子
門司 宮本ぬい子
愛媛 玉井 操子
伊豫 村尾しげ子
石川 鈴中初枝子
佐世保荒木 雪子
東京 富村うた子
越後 鈴木 操子
長崎 寺井むら子
奈良 永長櫻野子
山梨名取てるよ子
兵庫 田原ひさ子
鹿兒島小森ふぢ子
長野 内藤きく子
甲府 石川しげ子
東京 青柳 清子
熊本坂本まとか子
備後 小川菊枝子
茨城 諏訪きぬ子
東京 宍戸しき子
京都 木村 悦子
熊本河野みつゑ子
群馬 喜多 清子
筑後 中野貞代子
横濱 細田 花子
山口 永澤ひさ子
愛媛 久保彌生子
石川 高桑喜代子
山形 永井よし子
大阪 木村いき子
滋賀 今岡政尾子

山口阿曾沼れん子
山形 杉山まさ子
讃岐 辻 せつ子
新潟 青木よき子
山形 藤本はく子
東京 石崎美代子
長野菅沼さだゑ子
奈良長谷川よし子
肥前 潮田とく子
福岡 河田 常子
奈良 福谷 節子
伊豫 清水みつ子
岡山 村田 極子
神戸 堀家 武子
小石川馬場 乙菊
熊本 中島 公海
福岡 高木喜能子
福岡山口うめよ子
和歌山外山さく子
鳥取 米花 松子
兵庫 足立 初子
佐世保工藤ちよ子
丹後 川口 眞子
播磨 山本とめ子
越後八藤後かのを子
長野 武田 美子
富山 江尻比呂子
山形 丹 すみ子
廣島 多賀照代子
鹿兒島橋本ちよき子
鳥取 西川 芳子

懸賞組繪當選者

懸賞組繪は次の如き獅子の顔に組み合せたのが正當であります。正解者三千六百〇二名の内規定により抽籤の結果左の二十名を當選者と定め 賞品(圖書切符壹圓宛)を差上げます



三重 奥阪 絹子
茨城 三宅まつ子
鹿兒島 飯田千賀子
福島 根津 萩野
福岡 原口とみ子
福島 瀬谷まつ子
長崎 伴 まさ子

芝 渡邊喜三郎
本郷 大久保とし子
長野 牛田きよ子
大阪 藤本とく子
深川 秋山いれ子
兵庫 山根とみ子
福井 荻原ひさ子

千葉 小川 糸子
大阪 寺村たま子
北豐島 多喜造
北海道 朝山しげ子
北豐島 永野 榮子
千葉 上原けさ子

募集（三月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

內（定刊數…………十二冊
　　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一

郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十五年一月廿三日印刷納本　第拾貳卷第參號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　二千六百二十番　三千二百二十九番　三百三番　千十八番

女(後付の二)

農業世界 第七卷第三號 定期増刊

最近園藝案内

二月十五日發行

近時農家生計の一助として果樹栽培の隆昌を來し又都會附近に於て利益上並に娯樂上草花栽培、盆栽仕立等の流行を極むるの時、其の流行に伴ふべき最新の園藝法を敍述せる著書尠なし則ち本誌は爰に見る所あり、最新の學理と技術とにより、果樹觀賞用樹木、草花、盆栽、築庭等園藝に關する一切の事項を詳述せり、記事豐富廉價なる世定評なり

菊判紙數二百四十頁
口繪寫眞版六頁挿入
正價廿錢郵稅二錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(後付の三)

文章世界

第七卷第二號

二月一日發行

▼新著三種▲

□森田草平の『自叙傳』……田山花袋

□永井荷風の『紅茶の後』……安倍能成

□田山花袋の『花袋文話』……片上伸

菊判紙數二百四十頁
口繪寫眞版數葉挿入
正價二十錢
郵稅二錢

▼文界時事（十頁に涉つて文界の時事問題を批判す）……時評記者

▼東海の文人（四十五名の文人を縱橫に月旦して光彩陸離）孫悟空

▼イギリス文壇の現狀……內ヶ崎作三郎

▼無形の文章と有形の文章……法學博士 浮田和民

▼文章の極致——自我……廣津柳浪

▼日記……岩野泡鳴

▽短篇小說……森田草平

▽同……德田秋聲

▽文壇人國記……黑頭巾

▼脚本を書く時の經驗……山崎紫紅

▼火事の句評譯……內藤鳴雪

▼早稻田大學英文科の評判……主稅

▼研究と飜譯との十ヶ年……昇曙夢

▼義理と人情との葛藤の一つ……尾上紫舟

▲文範數項……

東京本町
博文館

女（後付の四）

女（後付の五）

女(後付の六)

キゲンセツ

幼年世界
第二巻第三號
臨時増刊

菊判紙數八〇頁口繪寫眞版豐富
正價八錢 郵稅一錢

口繪
紀元節の觀梅
（石版）……竹尾國觀筆
僕の紀元節
金鵄勳章
（寫眞版）

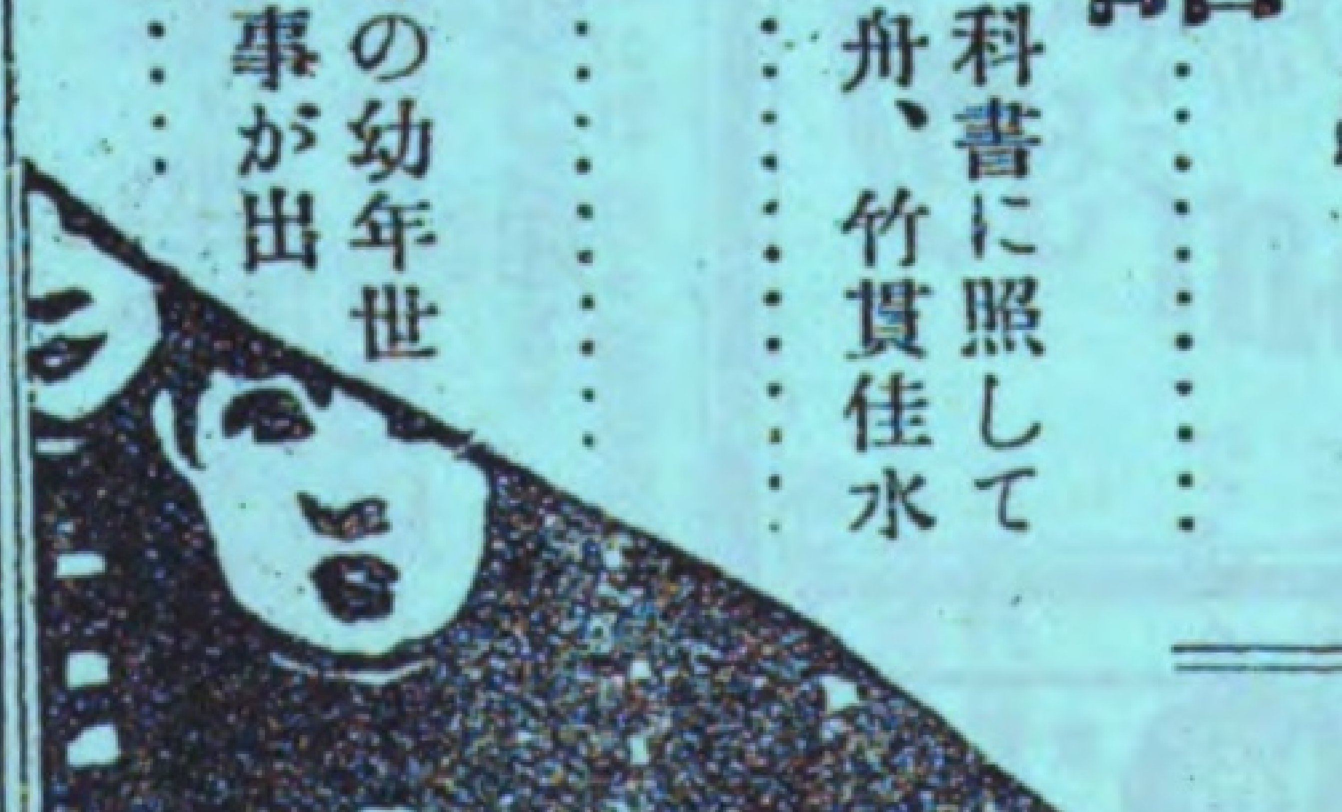
二月十日發行

□雪の竹ちゃん……巖谷小波口授 武田櫻桃筆記
益になつて面白いお伽噺まア讀んで見給へ！

□とんちき爺さん……武田櫻桃
面白い字ポンチ讀んでお腹の皮がよれる

□日本歷史物語……
我國開闢から現代までの歷史を敎科書に照して面白く書く筆者はお馴染の木村小舟、竹貫佳水、武田櫻桃三氏挿畫は多和永年氏……

□西洋童話集……
西洋各國の短かい童話を集めたもの幼年世界は坐ながら世界のお話の國遊ぶ事が出來る……





東京日本橋區本町
博文館

女（後付の七）

（後付の八）

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界 第拾貳卷第參號 (毎月一回廿三日印刷納本)
明治四十五年一月廿三日印刷納本
[illegible]郵便物認可

寒氣は婦人の讐

寒氣はたゞ婦女のみならず、あらゆる生物の敵である、赤道直下の熱帶地でも人類其他動植物は生存が出來る、出來る所ではない發育は却つて速く繁殖力は強い、併し北極地方では生物は生存が出來ない、人類は愚か青い物一つ見えないと云ふ始末、一寸の探檢でさへまだ完全に出來ずに居る位である、而して北極はさておいて寒帶地方では生存が出來るけれども其發育が遲い、現に熱帶地たる印度人は、寒帶地たるエスキーモー人に比較して發育も速く、且つ體格も大にして高いのは確に寒氣が生物の生殖を防止する例證である、故に人間生殖の大任務を有つて居る婦人が、寒氣と密接の關係を有つてゐる事は睹易き道理である。

(一) 女の腰は火にいけよ

といふ諺が出來て居る如く兎角腰か冷えるとか脚が冷めたいとかいふ、特に昨今のやうに寒氣が劇しくなると、夜床に就いてから腰脚が冷えて眠れず、其内に逆上が來て顔がほてつて愈々眼が冴える、さうこうする中に色々の妄想が胸に湧いて來て、眠らうと思ふと猶眠れない、こんな事が二晩も三晩も續いて睡眠不足の爲めに身體は甚だ衰弱する人もある、これは子宮に故障のある人に殊に多いので、つまり血液の循環が調はぬためである。

(二) 風を引くな

世の中は膳の上げ下げまで顎で女中を使ふ奥さんばかりでない、氷張り詰めた水で洗濯や拭掃除をせなければならない内儀もある、火の氣一つない部屋で一日齷齪く女事務員もある、寒風に曝されながら體操させられる女學生もあり、御座敷へ出れば冷めたいからつて蒲團の敷けぬ藝者稼業もある、こういふ婦人は冷込みの爲めに風邪に罹り易いから一段の注意が必要である、殊に月經中や姙娠中の風邪は往々子宮病を誘ふものでありますから、婦人は何人も風邪の豫防に注意が肝要であります。

(三) 寒氣は姙娠を妨ぐ

統計學者が出產屆に依つて其姙娠した月を調べて見ると姙娠は春に多く冬に少い、大寒は甚だ稀であるとのことである、鷄に例へて見ても寒卵を產む事は稀であるといふて居る、又寒地にて子なき婦人が溫かい地へ移り始めて姙娠した例もあり、溫かい土地の人が寒地に移つてから姙娠せぬやうになつた例もあるので、寒氣が姙娠の妨げとなる事は最早爭はれぬ事實である。

(四) 冷込豫防の最良方法

冷え性の婦人には火鉢もよからう、重ね着もよからうが、併し外部の防寒用意丈でいかぬ、殊に寒い〳〵此寒中夜寢てから腰部が冷えて寢心地あしき御婦人は御休みになる前一寸一服中將湯御召しなさい、それこそ手から足まで溫まつて甚だ心地よく寢られます、又冷え性でなくとも、此寒空に無理な仕事をする人などは、風邪を引かぬ用心に、何か藥を飲んでおかうと思ふなら、朝仕事を始める前、晩仕事の終つた後、一寸一服中將湯を御上りなさい、最後に寒氣は姙娠を妨げることは上述の通りでありますが、御子樣無くて御困りの人は特別此寒中身體を溫めて置く樣いつも中將湯を御召上りなるが肝心です、猶は中將湯の定價は五週間分二圓五十錢、三週間分一圓六十錢、二週間分一圓十錢、一週間分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢、本舖は東京日本橋區通四丁目津村順天堂で取次は全國到る處にあります